NYONINTAISHŪ

女人藝術

六月號

附録

女人大衆

長篇三人全集

■全十二卷・一冊壹圓・申込金不要■

三人全集は中村加藤三上の三氏の傑作を網羅するもの
非常なる歡迎を受け發行部數は最近全集界新記錄たり

三上於菟吉二大傑作!!

情火・美玉

■情火

光耀! 色彩! 騷音! 首都東京は今や正視すれば盲ひ、傾聽すれば聾ひるであらうやうな騷擾の大渦卷に包まれてゐる。そしてその間を、若い男女の官能の刺戟に突き進まされて、走る! 走る 速度時代だ! この突進の誘惑はしづかな郊外に夢ましく營まれた愛の棲家へもはひつて來た。彼女は古い戀の巣の眠りから呼びさまされ、たゞ一人いづくへかさまよひ行く! 彼女は生き甲斐ある生を求めて何を得たか? 現代女性心理の最も暗黒なものを摑んで叩きつけたのがこれだ!

■美玉

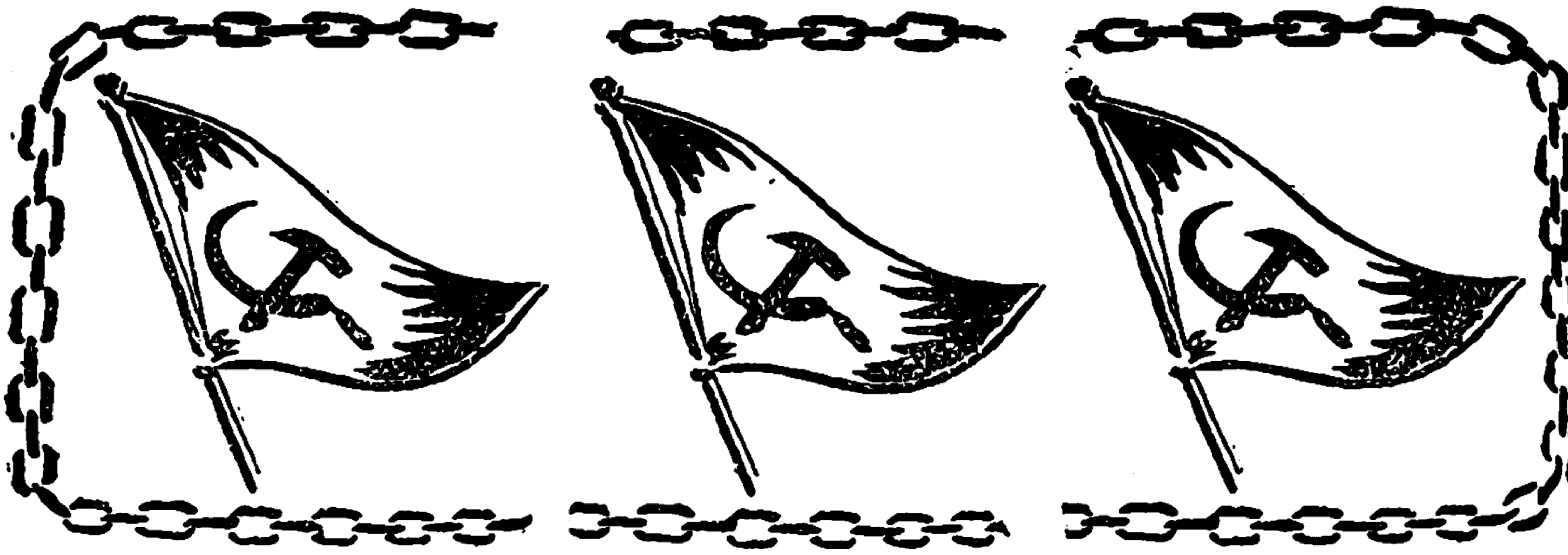
五彩にきらめく寶玉はあらゆる人目を魅了しつくさずには措かぬ。美くしく汚れなき處女はあらゆる男性を蠱惑せずには措かぬ。かくて複雜な運命は、塵埃と化學的作用とが、きらびやかな寶石を曇らせ變質せしめるやうに、彼女の魂と裸體とに言ふに忍びざる汚辱を與へんとする。こゝに美婦のみが味はふ宿命の苦惱がある。作者は最も現代的な惡靈が女主人公にいかに怖るべき誘惑を試みたかを描出した。美と惡との最大悲劇!

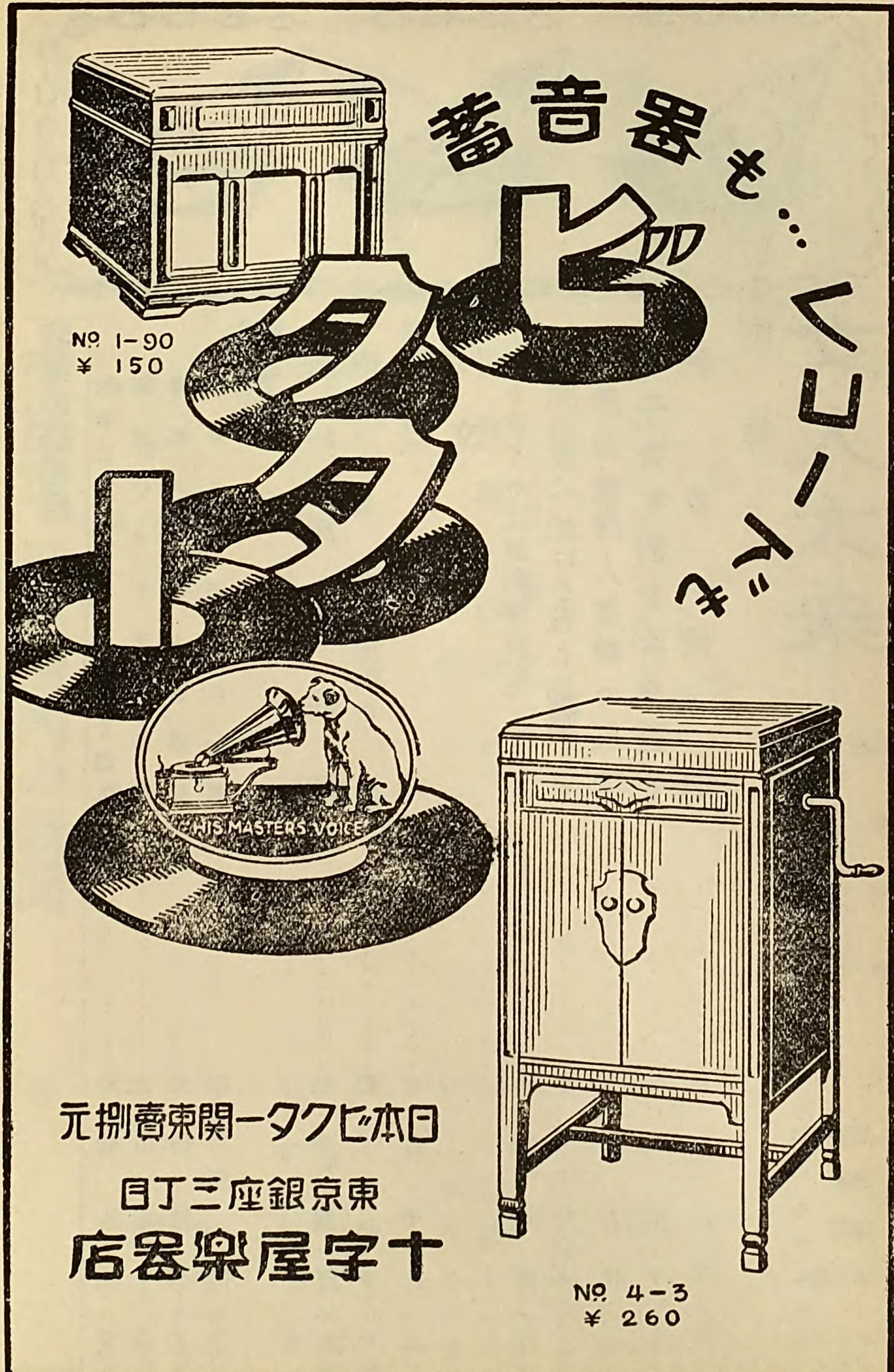
東京牛込矢來 新潮社


へちまの水から發明した化粧水
ヘチマコロン
御化粧下に――キメを細かに艶やかにし
白粉のとき水に――白粉ののびつきをよくし
お髭剃のあとに――あれ・剃刀まけを防ぎ
蒸しタオルに――お肌を爽快にする化粧水
夏のお化粧に
ふさはしい爽やかさ
大瓶 .50
小瓶 .30
ヘチマコロン
TOWEL GOURD COLOGNE
EAU DE TOILETTE
MANUFACTURED BY G. AMANO & CO.
本舗 東京 天野源七

女人藝術第三卷六月號目次

――禁轉載――

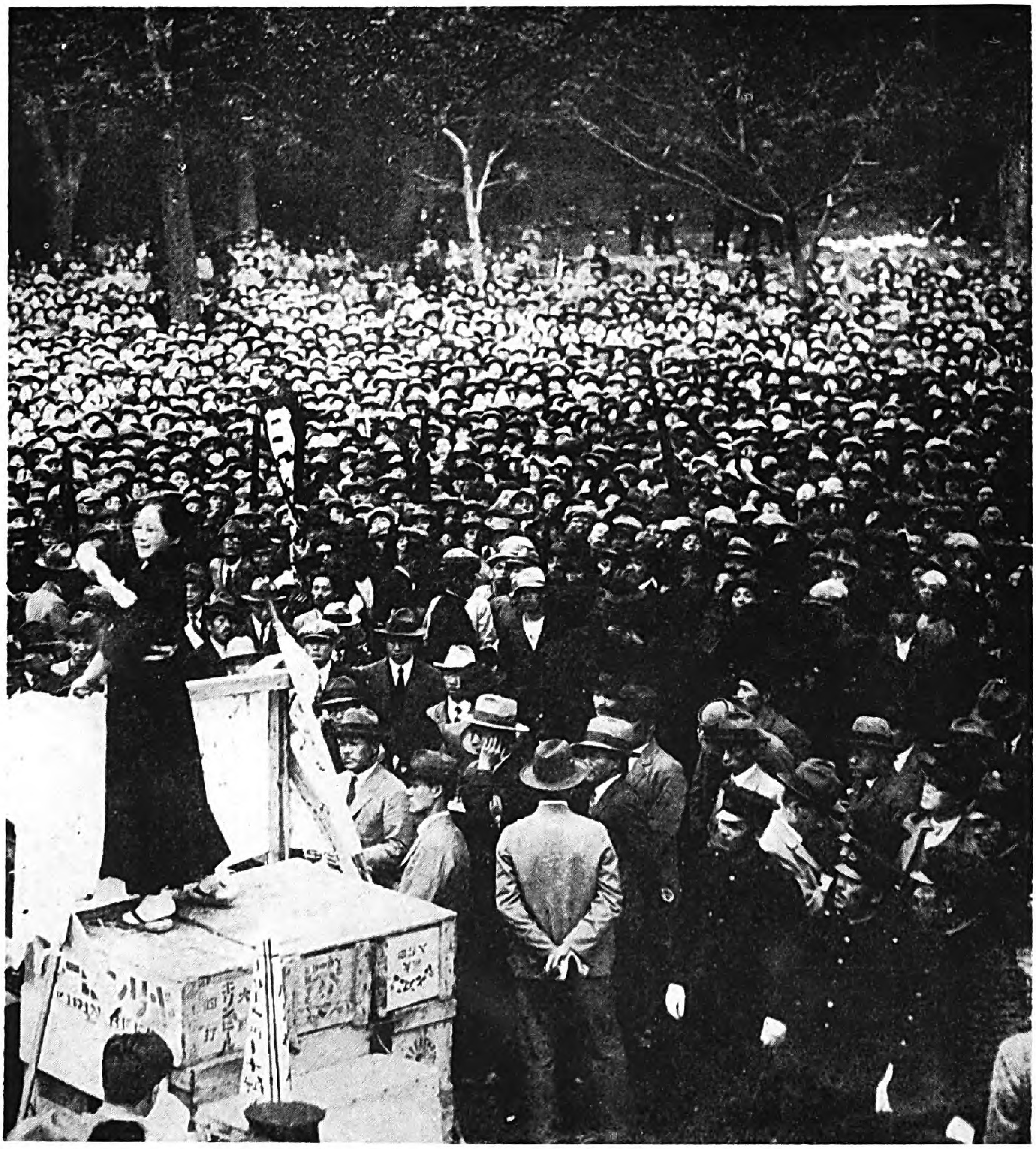




蓄音器も…
ビクター
レコードも
No. 1-90
¥ 150
HIS MASTERS VOICE
No. 4-3
¥ 260
日本ビクター関東賣捌元
東京銀座三丁目
十字屋樂器店



伯林の勞働者はレーニン―リープクネヒト―ローザ週間を行ひ盛んな示威運動をして市街を占領した。



東京第十一回メーデー

上、芝公園に參集した各組合勞働者と、五分間アジ演說に起つた紡織組合の女闘士。

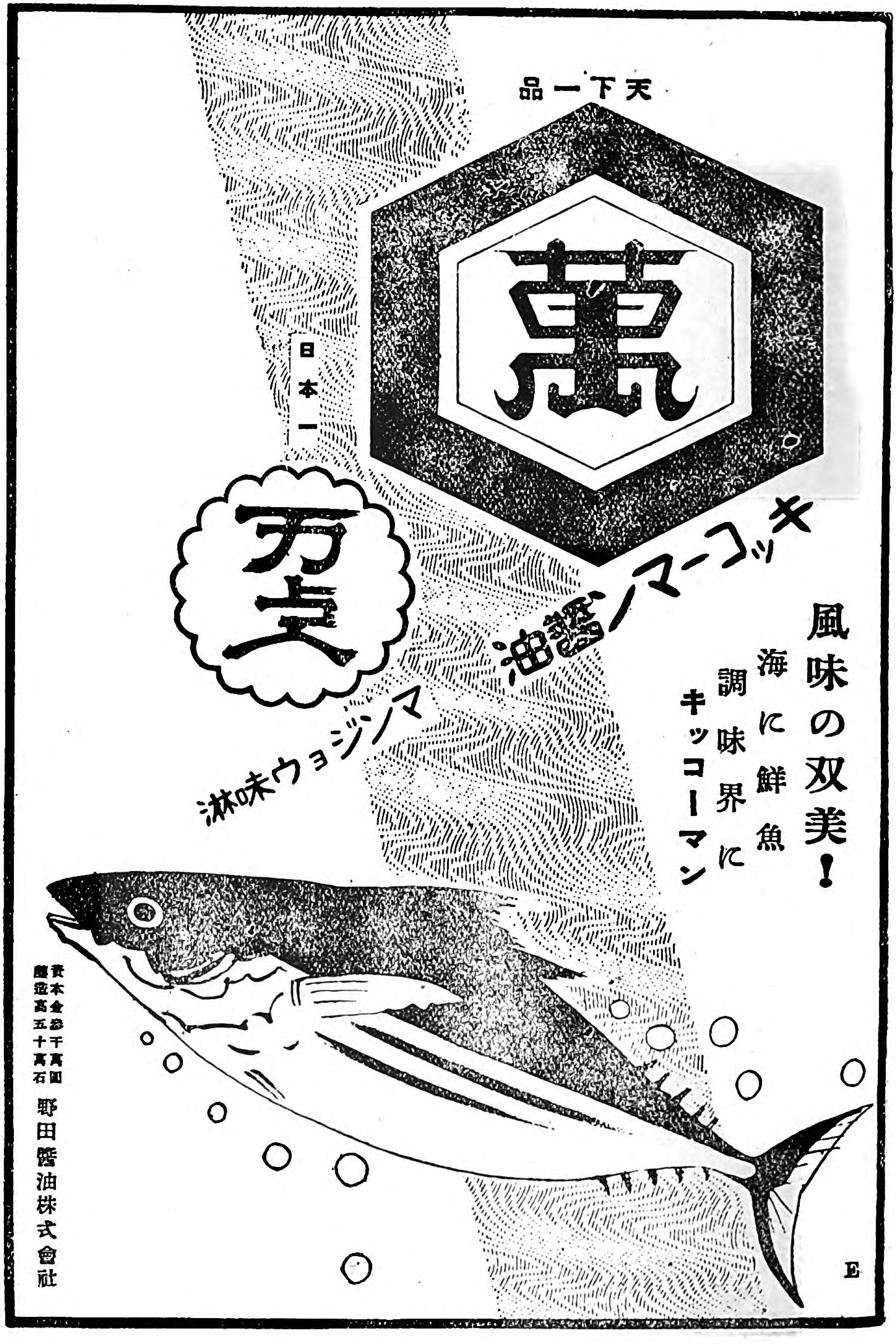
左、紡績の女工さん達が警官を尻目にかけて示威行列にメーデー歌を高唱してゐるところ。





女車掌さんの兵糧係り

賞與一割減に反對して東京市電の從業員は再び結束して起つたが、スキヤツプとダラ幹のために一週間の總罷業は慘敗に終つた、寫眞は罷業團本部に兵糧係を引きうけた市バスの女車掌さん達。


天下一品
キッコーマン醤油
日本一
マンジョウ味淋
風味の双美！
海に鮮魚
調味界にキッコーマン
資本金参千萬圓
醸造高五十萬石
野田醤油株式會社
E

女人藝術



六月號

女人藝術三週年記念號豫告!!!

女性の件はぬ文化は不具で、平等を認めねば歪んだ人生だ。重き使命をになつて生れた本誌は早くもここに三週年記念號を迎えつつある。記念號内容には何を盛るか、ただ盛んなる意圖ありと告げておかう、刮目して待たれたい。

「女人大衆」は市場不況時代のため今期も獨立せず附錄であるが、愛讀者諸氏の支持は熱烈である。



各地の「女人聯盟」また目覺しき向上心に燃上つてゐる。自ら養ひつつある人々よ、古き殻を粉碎せよ、目を明らかにせよ、心を深くせよ、我々も人だ、青き空の下に生きる一員である、強くなれ！

同志よ、學まねばならぬ汝の明日を、本誌によりて學べ！

女人藝術社

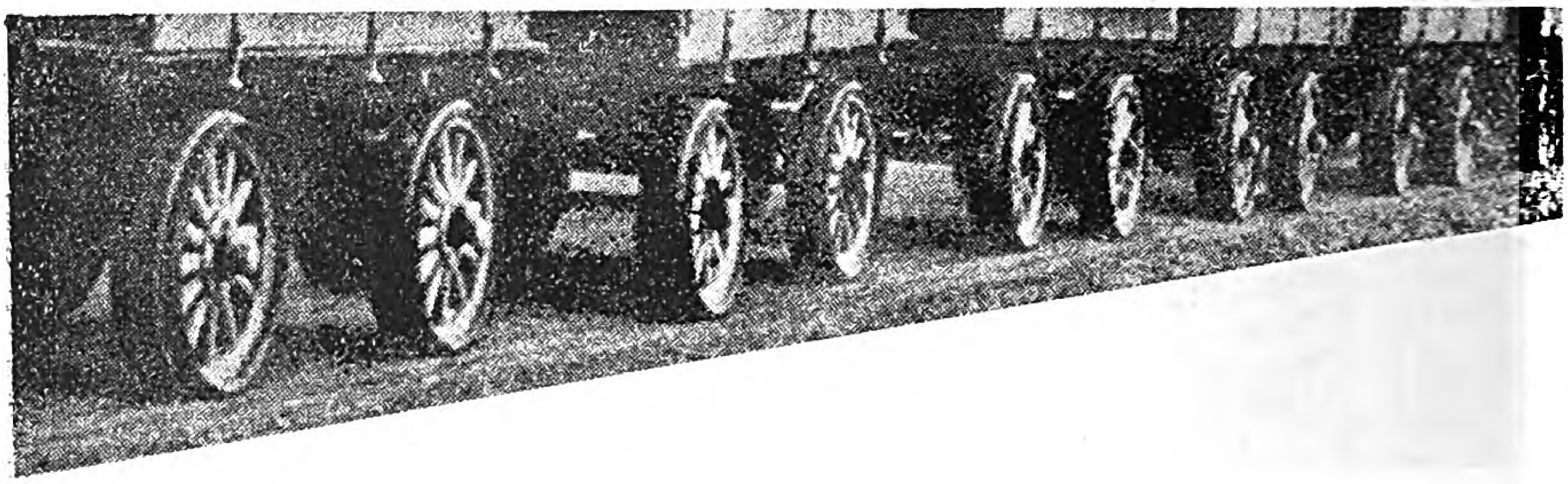
市電ストライキ

深町瑠美子

貧しさを突破した人間の顔は
初號活字の様にドッカリと
頑張つてくる
その强さは何處から來たか！
弱肉强食・優勝劣敗・自然淘汰・
生活は超特急でふり落していく

皆かたまつていけ！
何處に行くのか！
如何うして生きねばならないのか！
考へる　考へる
――何故だ――
人間なのか機械の一部なのか私は訊きたい

スカイ・スクレーパーから飛び降りた
トロウメライも
ツアラトウストラも
死の沈默へ還つていつた



戰場と墓場を抱いて
わたしは小さな潔癖と輕蔑と笑を噛んだ
お米が一分で麥が三分の食事だ
それでもわたしは平然といく
にがり切つた現實の顏をおしのけて——

市電のストライキが
强硬な角度を投げた三日目だ
日給七圓とは素晴しい
急場ごしらへの運轉手がセビロ型・靑年團・
ナッパ服
空中線をバリ〳〵に切つて
ポールをはずしたまゝ
氣狂の樣に驀進する異狀電車がある
移動本部の策動を追求する××
一つの偉大な力の勝利を待つ人達よ！
靑空ばかりは新綠と詩人の空想に
一つぱい晴れてゐるではないか——

欺されるな！

女子青年團を取り返せ

松田解子

市電ストライキの最初の朝、××車庫前に通りかゝると、停留場を挾んで両側に、女や子供等が物珍らしげに立つてキヤツ〱云つてゐる。成る程、背廣に中折の紳士や、立派な八の字ひげを蓄へた御仁が、電車のハンドルをギシ〱やつてるのだ。乗客は普段の半分位しか居ない。青年團が、物々しい團服で右往左往する。巡査が駈け廻る。よく見るとどの電車にも前後に一人宛、中折運轉手や背廣車掌の護衛巡査がついてゐる。

二三日經つと、暴力團のステツキみたいな太筆で、國粹會のビラが同じ通りの両側に貼り廻されてゐる。曰く『亡國無産黨の激煽動に依つて不當の要求を……云々。即時罷業禁止法令を制定せよ！』

二十四日、調停云々の「悲壯」な場面がブル新聞を飾つてゐる。

以上はだが、市電罷業の單なる上皮、ゆがめられたる單なる上皮に過ぎない。

『青年團の立場』及び『罷業團に云ふ。』……二十四日の朝日新聞鐵箒欄を讀む『青年團はかゝる時に活動してこそ、其の存在を有意義にするものだ。』『吾が青年團は將來も、電車のストライキの樣な小さな問題でなくもつと大きい種々な出來事に正面衝突をする事と思ふ。』更に曰く『右傾の吾々と左傾の諸君と、將來も餘り圓滿なるを得ないであらう。』云々だから要するに青年團は、ストライキ破り的存在として、常にブルジョアの手先となつて無産階級の敵の側に立つものだ、と云ふ譯だ。吾々は既にそのよい手本を見てゐる。關東大震災の時、東京の青年團は勿論、一道一府十二縣から「救助」を目的に馳せ參じた延人員五千二百八十の團員等は、のぼせ上つたおかみの命に依り、竹槍、日本刀其の他を以て××、××、××と共に、數知れぬ鮮人、主義者、さては何でもない人

々をも××した事を。此の樣な働きと意圖を目指して進んでゐる男子青年團の、立派な配偶者を育て樣として、近頃おかみ自ら熱心に力を注ぎつゝあるものに『女子青年團』のある事を、私共は思ひ出さねばならない。青年團員の大部分が私共の兄弟である樣に、女子團員の大部分が私共の姉妹、云はゞ同じ無產階級の子女である以上彼女達をば彼等の勝手な目的の前に放つて置く事は出來ない、ばかりではなく、一日も早く、一人でも多く吾々の側に引戾し、吾々の仲間としなければならない。彼女達は正しく『第二の愛國婦人會』(神近市子氏、戰旗二月號)として、成育の途上に置かれてゐる。

青年團が、內務文部兩大臣の連署を以て公認されたのは、大正四年九月であつた。其の頃は現在の樣な女子青年團は勿論、其の芽生えとしての處女會も一般的には普及されてなかつた。其の後大正七年五月、政府は青年團に對して內容充實に關し、次で大正九年一月には組織改善に關して再度の訓令を發し、又同年十一月には、東宮殿下より令旨を賜はる等の事があつた爲め、これ等の刺戟も手傳つて次第に處女會の創設を見、大正八年頃から會數も會員數も漸次增加の傾向をとつたのである。地方小學校卒業後、高女其他に入學出來る極小數を除いた大半の娘達の前に開けた唯一の、而も一番入り易い團體は處女會だつたのである。

	會數	會員數
大正八年	六、二三七	五三五、七九二
同　九年	六、三六九	五九六、六三一
同　十年	七、六四五	八二八、五六五
同十一年	八、二五二	八四五、〇〇〇
同十二年	八、八六〇	一、四七〇、〇〇〇

右表中大正十一年から十二年に亘つて、會數の漸增に對し、會員數が、六十二萬五千の飛躍を示してゐるのは、政府當局の奬勵と、團體間の合同及び聯合の結果で、特に大正十二年三月には、內務、文部兩大臣の連署を以て、全國青年團及び處女會中、優良青年團二十九團體、優良處女會七團體が選奬された爲め、各地方の當局者をして、一層競爭的に、創設又は發展に注目、努力せしめたものである。猶、ここで是非考へて見たい事は、大正七八年頃(一九一八、九年)から、大正十一、二年頃(一九二二、三年)までは、恰度吾が國プロレタリアートが『資本に對する一つの階級』として始めて結成し、鬪爭し出した所の時代であつたと云はれる點である。世界大戰後の好景氣の反動が、やがて物價騰貴となり實質賃銀の下落となつて勞働者を苦しめ、自然發生的なものではあつたが、そのストライキ件數及び人員に於て、一方極度に貧困化されつゝあつた農民の小作爭議に於て、左表の如き勢力を見たのである。

	ストライキ件數	人員
大正五年	一〇八	八、四一三
同　六年	三九八	五七、三〇九
同　七年	四一七	六六、四五七
同　八年	四九七	六二、一三七
同　九年	二八二	三六、三七一
同一〇年	二四六	五八、二二五
同一一年	二五〇	四一、五〇三

同一二年	二七〇	三六	二五九

小作爭議	件數
大正八年	三二六
同　九年	四〇八
同　十年	一、六八〇
同十一年	一、五七八
同十二年	一、九一七

この様に大正七八年の勞働攻勢、大正十、十一年の農民鬪爭激化の間を潜つて、當時の支配階級が如何に熱心に自分達の將來を考へ、ブルジョア思想培養に腐心したかゞ覗はれる。大正十二年四月、岡山縣輕部婦人會が、納税札、徵税書類配付を引受け、貧農に對する執達吏的役割を演じた等は、今日の反動的な女子青年團の一つの芽生えと見られるであらう。

近頃、いよ〳〵足元の危くなつて來たブルジョアジーは、自分達を衞る必要から、青年團、在鄕軍人會、青年訓練所は勿論、處女會までも拔け目なく組織立て、利用し様として多くの機關を動員し、美辭麗句を連ねての獎勵、煽動、へつらひをすら惜まない。そして從來の封建的な響きを持つた處女會を、今や『女子青年團』としての全國的組織へまで高めて了つたのである。左に『女子青年團設置に關する東京市長訓辭』(昭和二年十一月二十二日)及び東京市××區女子青年團々則並に其の一分團の規約を摘出して、此の組織が持つてゐる本性を見究める事にし様。

女子青年團設置に關する市長訓辭

青年期ニ於ケル女子ノ教養ノ極メテ重要ナル事ハ申スマデモナイノデアリマスガ之ヲ本市ノ實際ニ徵スルト男子ノ修養機關トシテハ各位ノ御承知ノ通リ漸次健實ナル發達ヲ示シ其ノ成績モ見ルベキモノガアリ又昨年各位ノ御盡力ヲ煩ハシタ青年訓練所モ日猶淺イノデアリマスガ青年男子ノ道場トシテ漸次其ノ効果ヲ收メツツアルノハ洵ニ喜ブベキ所デアリマス

然ルニ一方青年女子ノ修養ニ對シテハ未ダ其ノ施設ガ殆ド無イト云フテモヨイ程デアリマス

此ノ時ニ當リ女子青年團振興ニ關スル訓令及通牒ニ基キ女子修養團體ヲ組織シ婦徳ノ向上ヲ圖リ互ニ相勵マシ相戒ムルノ機關トスルコトハ本市青年女子教養の實情ニ鑑ミ極メテ緊要ナルモノト信ジマス

併シナガラ本市ノ如キ大都市ニ於ケル青年女子ノ團體タルヤ是ヲ作ルニ當リ幾多ノ考究ヲ要スベキ點ガアラウト考ヘマシテ本日茲ニ各位ノ會同ヲ煩シ意見ヲ求メ盡力ヲ乞ハントスル次第デアリマス

尙本市ノ考究シタルトコロニ依ルト女子青年團ハ一面現下ノ情勢ヨリ是又他面各小學校ニ施シタル女子教育的効果ヲシテ一層確實ナラシメ之ヲ社會的實生活ニ順應セシムル上ヨリシテ小學校ノ通學區域ヲ單位トシ主トシテ之ガ組織並ニ指導ノ任ニ小學校長ガ當リ各區長ニ於テ之ガ連絡統一ヲ圖リ市全體トシテハ社會教育ノ體系ニ置キ市長之レヲ連絡統一シテ進歩發達ヲ圖ルト云フコトガ最モ適切デアルト信ズルノデアリマス

素ヨリ各區長ノ職務タルヤ日ニ月ニ繁劇ヲ加ヘツツアルコトハ本職ノ深ク諒トスルトコロデアリマスガ如上ノ理由ヨリシテ特

ニ各位ヲ煩ハス次第デアリマス
特ニ本團ノ設置ニ關シテハ區ニ依リテ夫々事情モアリ種々ナル困難モアルコトト信ズルガ各位ハ區内小學校長ヲ集メラレ訓令並ニ通牒ノ趣旨ニ基キ各區ノ實情ニ鑑ミ堅實ナル女子青年團設立ノ爲メニ格段ノ努力ヲ望ムノデアリマス(以下略)

××區女子青年團々則

第一章　總則

第一條　本團は本區居住の女子青年をして健實なる思想の養成と婦德の涵養に努め大日本帝國女子の本分を發揮せしむるを以て目的とす

第二——三條(略)

第二章　團員及組織

第四條　團員は本區内に居住するものにして義務教育終了後滿二十五歳迄の女子とす
但し二十五歳以上の女子と雖も特別團員として入團を妨げざるものとす

第五條　本團は本區内に於ける左の諸團體を以て其の分團とす
一、各小學校を中心として組織せる團體
二、各女子學校を中心として組織せる團體
三、其他本團に於いて適當と認めたる諸團體但し各分團の加入は理事會の承認を經るものとす

第三章　事業

第六條　本團は本區各分團の事業を援助又は指導し相互の聯絡を圖り聯合事業を主宰する各分團の事業概ね左の如し
一、現代日本女子として必要なる智德の修養
一、藝術趣味社交等に關する研究
一、適當なる社會奉仕事業
其の他日本帝國女子として實行すべき諸般事項

第四章　役員

第七條　本團に左の役員を置く
團長　一名
副團長　二名
理事　若干名
評議員　若干名
顧問　若干名
團長は賛助員其の他を推薦することを得

第八條　團長は區長を推戴し副團長は團長之は推薦す

第九、十、十一條(略)

第十二條　評議員は其の半數は總會に於て之を選擧し半數は團長之を推薦するものとして其任期を二ヶ年とす

第十三條　評議員會は本團の重要事項を協議す

第十四條　(略)

第十五條　本團に指導員を置くことを得

第十六條　指導員は團長之を選任す
指導員は團長の命を受け團員の指導啓發に關する總ての團務に從事す

第十七條(略)

第五章　會議

第十八條　總會は毎年一回乃至二回之を開く
但し必要ある場合は臨時開會する事を得

第十九條(略)
第二十條　評議員會は毎年二回之を開く
但し必要ある場合は臨時開會するものとす
第二十一條　評議員會に於て協議すべき事項左の如し
一、財産の處理並に處分に關する事項
二、豫算並に決算に關する事項
三、重要事項に關する事項
四、其他團長に於て必要と認むる事項
第二十二條(略)

第六章　經費

第二十三條　本團の經費は補助金寄附金及其他の收入を以て之に充つ(以下略)

××區女子青年團××分團規約

第一章　總則

第一條　本團は東京市聯合女子青年團綱領の趣旨を體し女子青年相互の親睦を厚うし智德の修養に努め身體の鍛錬を圖り健全なる國民善良なる市民の實質を涵養するを以て目的とす
第二條(略)
第三條　本團の事務所は×區××小學校內に置く

第二章　團員及組織

第四條　本團は東京市××小學校通學區域內に居住する女子青年を以て組織し團員を分けて正團員賛助團員特別團員の三種とす
一、正團員は滿十二歳以上二十五歳未滿の女子青年とす
二、賛助團員は二十五歳以上の女子にして本團員たることを希望する者とす
三、特別團員は本團の趣旨を賛助する者にして團長之を推薦す

第三章　事業

第五條　本團規約第一條の目的を達成せんが爲めに左の事業を行ふものとす
一、智德の修養又は職業に關し女子として必要なる講習會並に講演會の開催
二、簡易圖書館又は巡回文庫の設置
三、見學旅行、競技會、演奏會、娛樂會、等の開催
四、社會的公共的施設事業又は其の援助協力奉仕
五、其の他女子青年團の目的を達するに適當なる事業

第四章　役員

第六條　本團に左の役員を置く
團長一名、××小學校長を推戴す
副團長一名、團長之を推薦す
幹事若干名、總會に於て團員の互選とす
評議員若干名、評議員は其半數は總會に於て選擧し半數は團長之を推薦す
前項の外顧問を置く事を得
第七條(略)

第五章　會議

第八條　總會は毎年一回之を開く
但し必要に應じ臨時開會する事あるべし幹事會並に評議員會

は必要に應じ團長之を召集す

會議の議事は出席者の過半數を以て決す

第六章　會計

第九條　本團の經費は團員の醵金寄附金並に補助金を以て之に充つ

第七章　附則（略）

以上に依つて、其の組織と目的に就ても氣付く事は先づそれは小學校卒業程度の無産階級子女を重なる對象として、市區町村長が政府の指示を遵奉し、直接には小學校長をして統率指導せしめつゝある組織であること。つまり、支配階級の手に依つて支配階級の爲めに勝手に献立され喰はれ樣としてゐる無産階級子女の悲慘な料理であるといふ點と、それの一番大切な目的が『大日本帝國女子の本分を發揮せしむる』との名の下にブルジョア『智德の修養』に依つて階級的芽生えを引き拔き、日常訓練としては『社會奉仕』に動員して『もつと大きな問題』の起つた場合に備えておくといふ點にある事、等。此の重要な（ブルジョアにとつて）目的の爲めに、其の後今日に至つて女子青年團は如何なる發展を示してゐるだらうか。文部省調査に依れば

大正十五年七月現在（一道三府四十三縣）

團數	團員外	團員	團員數	年齡制限
團長種類				
一三、六三九	二、六一九	一、八一九	一、三三四、四六〇、一三	一〇乃至―四〇

昭和三年四月現在（一道三府四十三縣）

團數	團員外	團員	團員數	年齡制限
團長種類				
一三、九六三	二、六六〇	一、九四四	一、六六四、七九三、一四	一〇乃至―二五

これを所謂『吾國無産階級運動前史』の終末である大正元年、勞働組合としての友愛會誕生以來二十年を經て尚、婦人勞働者總數一、五七七、四五一（昭和三年産業勞働時報）の中、僅かに一三、三四〇だけしか組織されてゐない（〇、八％）現狀と比較する時、如何に婦人勞働者組織が困難な仕事であり、其の爲めの努力が要求されてゐるか、之に反して支配階級は、澤山の反動組織の中のたつた一つに過ぎない女子青年團だけでも、恰度百倍の數を擁してゐる事を思ふと、既に持つてゐる機關を動員して彼等が、如何につその計畫を實現しつゝあるかを知る事が出來る、されば死物狂ひにそこそ、此の重大な任務が、常に第二の國民を相手にブルジョア意識注入を本職としてゐる其の道の玄人、小學校長に降下されたのだ。では、彼等の組織對象としてゐる靑年子女數はどれ位あるか之を大正十四年の國勢調査後、一千世帶每の抽出方法で示された數字一千世帶に付

一〇歲――一四歲	三、三二四人
一五歲――一九歲	二、八九七人
二〇歲――二四歲	二、四八六人
二五歲――二九歲	二、一三七人
計	一〇、八四四人

を基にして全國總世帶數一六四九萬から割出せば一七八六萬といふ驚くべき數に打突かるのだ。即ち此一七八六萬人の中のプロレタリア及貧農層婦人を狙つてゐると云ふ事になる。

最近のこと、或貧乏村に唯一つしかないお寺の本堂である。眞

四角に膝を打つて娘達が二十餘人、新らしい疊の上に半圓を作つてゐる。その中央、佛壇の少し手前から、僧衣にジュヅの坊さんが、靜かに彼女達に呼びかけてゐる『信仰のない人生は舵のない舟の樣なものだ、永久に幸福の彼岸に達する事が出來ない。信仰の芽は若い時からフキ出さねばならない。皆さんの信仰の力無くして何が、此の疲弊した村を興せよう。皆さんがしつかりしたならば、靑年全體が目ざめる。靑年全體が目ざめたならば村の人全體が目ざめる……。』眞鍮の燭臺で大ローソクが眠さうに瞬き續けてゐる。娘達は何よりも足のしびれが身に滲みてくる。一日の疲れでコクリとやる者もある——と、和服の中でギゴチなく固まつてゐた村のおまわりさんが、坊さんに代つて登壇する。最近の靑年達の風紀が亂れて來た事や靑年訓練所の不振を嘆く。そして最後に『皆さんは未だ純眞である、皆さんは心の底までけがれない大和魂を湛えてゐるに相違ない。此の頃のかうした惡風、惡思想をわが××村から取除く爲めにどうか骨折つて貰ひたい。その第一歩としては、靑年訓練所に行かない樣な靑年、酒を呑んでだら〱してる樣な靑年には決して近よらないと云ふ約束をお互ひの間で守つて頂きたい。男子にとつてこれ程恐ろしい刑罰はないのです………。』やがて眞暗な途を歸る彼女達の赤い燈灯が、しば〱手持無沙汰な靑年達に別の自覺を呼び起させる。で、派出所は考へる。校長は惱む。眞白い晝間、おしかけた男女靑年が左右に相對して陣取つてゐる。大ローソクは燃えてゐる。けれど輝やかない、おしる粉や大根なますを運び、草津節や藤原義江をかけて、平和な新年會、兼、男女靑年懇親會である。校長即ち團長は人の好いしうとの樣に滿足し切つて笑顏を振まいてゐるし、坊さんも今日は俗姿でうろついてゐるし、福引の用意は出來てゐるし。そこへ、三人組の萬歲が入つて來る。古めかしいコキウ、斬々な限語が、佛像の金屬までも揺ぶり出す中で、若い男女は全く醉はされて了つて、キャッ〱と喜び合つてゐる。やがて一時、靜まりかけたなと、團長が改まつた樣子で演壇に立ち上る『……靑年團員は一村の主、女子團員は一村の妻、そして、村を盛んにするのも國家を隆盛に導くのも一に此の團體的主人と主婦の忠誠そのものにかゝるのだ。』熱心に拍手が續く。福引が始まる。『賣國奴は』と讀んでクヂ札を差出すと、『人間の屑』と云ひ乍ら、十錢の片栗粉を呉れる。萬事此の調子だが滿腹してる間は不平も無い。が、借金の爲めに家屋敷、山田畠をとられて、牛小屋と隣合せの小屋に引移る者や『どうも不景氣でな。』と云つて、東京等から引上げて歸る者が段々と殖えて來た。稅金が恐ろしく滯ると、村當局が泣き面をする。そこで春の運動會には、女子靑年團に『納稅競爭』と云ふのを一つやらせ樣と、校長が提案する。

　この女子靑年團も、最近は全國的な組織に編み込まれて、一層よく活動し始めたとかかうした手練手管の中では、階級意識も、むざんに朽ち果てるより外はない。縣別統計に依れば、農村の多い土地が、大工業地よりも多くの女子靑年團を持つてゐるが、此の樣に無自覺に、反動的に敎育された娘達が、自家の貧窮を救ふ爲めに町の工場へと流れ出すのだから。資本家にとつての女子靑年團は、或意味で、階級意識發生の豫防注射たる役目をする。資本家政府が力こぶを入れるのも尤もな話だ。

　産業合理化だ。賃銀値下げだ。クビだ。牢屋だと勞働者農民の苦しみは二重三重になつて來てゐる。かゝる際、吾々は同じ貧乏

人の子女がまんまとブルジョアのゴマカシに乘せられて反動軍に組織されて行くのをホツては置けない。これら百六十萬の若い女性を彼等の手から引き戻し、吾々の味方にする爲めには先づ何をなさねばならないか。此の點に就てお互ひに關心を深め、よい方法を見出したいものである。

(イ)村の自覺した分子は女子青年團を放棄しないで、或場合にはその組織に入り、他の團員との間に親しみを深め、會合等には必ず出席して、講演、訓話等に對し、又手近に起つた色々な問題に對し、階級的な立場から手際よく、然も目立たない樣に『生意氣な』といふ反感を起さない樣に解決してやる事。

(ロ)團員の間に或程度の尊敬をかち取る樣に。『あの人なら信用がおける』と云はれる樣になると、家庭訪問も容易になり、團とは別の仲間を形作る事も段々と出來る樣になる。それ等を一つの適當なテキスト(何か。啓蒙的な出版物でも)を中心として研究會等を持ち具體的な生活問題から入つて階級意識の種蒔を始める事。

(ハ)天降り團長、副團長、役員等の日常行爲指導方針、さては實際の事業に對して、常に批判の目を持つ樣にし向ける漠然とした不平を意識化せしめる事。例へば『何故青年訓練所に行かない青年とは結婚するな等と巡査は云ふんだらう。』『役員の誰々は金を貯めてるといふ噂なのに、酒びたりだが、そんな金は何處から出るんだらう。』『何故吾々は男に勝る勞働に驅り立てられ乍ら廢物利用をしなければならず、それでゐて飯の代りにさつま芋まで食はねば暮されないと云ふんだらう。』『この際どうすれば生活が樂になるだらうか。』と云ふ風に、生活の飢餓から科學的飢餓まで十分に感得せしめる事。

(ニ)此の樣に、例へ漠然ながらも反當局者的氣概、稀薄ながらも無產階級的意識が萠出たならば、團の自主化を目指しての第一步を踏み出すこと。修養會、講演會の講師等も、天降り團長、幹事等に放任せず、平團員間で大體の希望要求を捲き起し、從來の反動的講師を驅逐して、自分等の求める人を頼む樣に努め、何の參觀だとか、何の奉仕だとか云ふ計畫は、平團員の不平不滿を束ねて、投票に向ふ樣に仕向ける事。平團員の自覺と團結の如何に依つては、必ず現在の樣な小數高級役員の獨裁を覆す事が出來るのだといふ自信を、問題の起る度に深めて行かねばならない。

(ホ)村の××氏等が中心になつてゐる農民組合との結び付き、及び青年團、訓練所の意識分子との接觸を圖る事。又××市の勞働組合婦人部との提携を計り其處からの影響を取り入れて、絕えず適切な戰術を求め、お互ひの意見交換、對策協議等を頻繁に持つ樣にする事。

大體以上の樣なプランが、前述のある農村女子青年團の、極僅かの人達に考へられた事もあり、又、實行の緒に付いたものもあつたので、參考迄に附け加へて見たけれども、より良い方法を知る機會ともなれば仕合せである。

『未來は青年のものである。』然り、本來は今日よく鬪ふところの無產階級者青年男女のものとなるのだ。私達は、同じ血肉を分けたプロレタリア、貧農の子女のたつ一人をもオメ〳〵と彼等の手に渡してはならない。一つの大切な組織の仕事として、この『女子青年團』奪還の日を近からしめるため、もつともつとつきつめて考へたいものである。

應接室——市ケ谷通信

刑務所内の新聞

西X雄

刑務所には囚人によませるための新聞がある事は、御承知のことゝ思ふが、今日はこれについて少し詳しくお話ししやう。

刑務所新聞は刑務協會の發行で「人」と題する四六四倍八頁の旬刊（月三回）だ。刑務協會については詳しい事は知らないが、刑事被告人、受刑者及び釋放者の保護と指導とを目的とする半官的社會事業團體だとしておけば、大した誤りはないだらうと思ふ。「人」はかういふ團體によつて、刑務所收容者の教化（並に部分的には慰安）のために發行せられる小新聞だから、內容は大體想像がつくと思ふ。宗教論や修養談が重要な部分を占め、時事問題の報道は極めて制限せられたものである事は云ふまでもない。しかし制限せられたものにもせよ、政治、外交、經濟等に關する記事は收容者にとつてはいさゝかでも社會情勢を窺ふ資料として貴重なものだ。その他文學、通俗科學、映畫、音樂、スポーツ等の記事は荒凉たる刑務所の生活をなぐさめる種となる事も少くない。かういふ新聞に似合はず「人」の編輯はすこぶる凝つたもので、寫眞版が澤山挿入せられ、見出しの組方、活字の大小等にも苦心の跡が見られる。そしてある部分においては、いやといふほど流行の外來語を用ひたジャナリスチックな書方をみる。いつか編輯者は、編輯上において少からず制限せられるが、許される範圍において出來るだけ自由な編輯をしたい方針だと云ふやうな言葉をもらしてゐたが、編輯者のかう云ふ努力と良心とは認めてやらなければなるまい。しかしその事は、決してこの新聞が一つの立派なブルジョア教化機關たる事を少しも妨げるものではない。

この新聞における著しき特色は一つは皇室及び皇族に關する記事の多い事だ。毎號少くとも一頁はそれでうめられてゐる上に、何か大きな事件のある度毎に、殊にそれが直接關接收容者に關係を有する場合には、特別號が發行せられる。例

へば一昨年の御大典に際しては半グラフイック的な超特別號が發行せられ、又同年十月一日陪審法實施記念の裁判所御行幸、本年一月下旬における高松宮殿下の刑務所御巡察の際にも特別號が發行せられた等の類だ。皇室と國民との關係を今一層親密にしやうと云ふ當局者の努力は、共産黨事件などの後更に意識的になつたやうに見える。これについて時々面白い記事が發見せられる。一昨年の御大典當時、「人」の記者は京都における大饗宴に參列した無產黨代議士の感想談に感激せしめられたと言つて、鈴木文治、西尾末廣兩君の言葉を引用してゐたが、僕もそれを讀んで、殊に勞働者出身の最初の無產黨代議士の西尾君が、この御盛典に參列する光榮に浴し、饗宴の御馳走をお土産にもつて一刻も速く老母の報告に歸らうとしてゐる光景を想像し、自らほゝ笑まずにはゐられなかつた。しかし類似の事でいやな記事もある。それは一日高松宮殿下の刑務所御巡察の特別號に、小田原少年刑務所の收容者などに書かせた感想文が澤山のせてあつた事だ。かう云ふ感想文の内容がいかなるものであるべきかは、最初から豫想せられ得る事だ。有田商會が患者の禮狀を賣藥の廣告に使ふのは商賣だからいゝが、かう云ふ純朴な小國民の感想文などをみだりに政治的目的に利用すると云ふこと――特にそれが全國民の崇敬する皇室又は皇族の方々に關するやうな場合――は少々つゝしんで貰ひたいものだと思ふ。

國内政治については内閣の更迭、選擧の結果、議會の召集と云つたやうな大事件の略報しか見られないが、外交については、かなりくわしい報道が掲載せられる。對支出兵、國際軍縮會議等について、さうである。それはかう云ふ問題は國家主義の鼓吹に役立つからだ。同じことは部分的に掲載せられる經濟記事、例へば貿易や國際貸借に關する記事についても言ひ得るであらう。しかし編輯者の意圖の如何にかゝはらず、かう云ふ記事にふくまれてゐる事實が僕たちにとつて興味あり有意義である事は勿論だ。

最近の失業問題に關聯して、「人」がしきりに勞働者の歸農を宣傳してゐる事は、注意に値する。これは政府の宣傳の受賣なのであらう。昨年末頃の新聞には、これが社說として取扱はれ、錦をきて故鄕に歸ると云ふやうな事はもう過去の夢だと云ふやうな言葉も見えてゐた。しかしそのかたはらで、新聞はたへず政治家、實業家などの立志成功談を掲げてゐるのだ。また最近における科學の發達（ラヂオ、トーキー、テレヴイジョン、飛行機等々）音樂、スポーツ等々のブルジョア文化に關する記事と田園生活の讃美との矛盾を、記者は如何に考へてゐるのであらうか。現に、「人」の最近號は先月末の帝都復興祭のバカ騷ぎを詳報し、復興帝都の名所案内を極めてジャナリスト的筆致で書きながら、同一紙上にやはり歸農宣傳の文章を掲げてゐる。その一節に曰く、「農村は疲弊してゐる。それは事實だ。けれど、都會の失業苦、人口過剩に比すれば、まだ／＼めぐまれた世界であらねばならぬ。それは未開であるからのみではない。そこには自然に即する美しい人情があふれてゐるからだ。不正を許さないからだ。村が

一の調和を保つてゐるからだ。協調――さう云ふ言葉を用ひらるほど意識的な隔離はない。

「人は自分の努力次第で金持になれる」といふ思想はすてさせるわけには行かぬ。（さうでないとブルジョアの經歷を合理的に說明し難い）。しかしそれが一片の空想にすぎないことは、もはや現實によつて證明せられてゐる。働かうにも働く場所のない人々、多年自宅の如くに親しんでゐた工場や事務所から無慈悲にもはじき出された人々が、幾百千となく街上には渦いてゐる。帝都の偉觀は常に讃美せられなければならぬ。しかも近代的大都會が「好ましからぬ」諸傾向を有し、その暗黑面を有する事は否定する事が出來ぬ。（收容者の大部分はもと都市居住者であつた）。どうしたらいゝか。

光は農村より來る、農村は未だに半中世的世界だ。そこには永遠の平和と幸福とがあるやうに見える。綠の野と森、黑き土と淸き流とは、昔ながらの姿で吾々にほゝえみかけてるやうに見える。土を離れた都市人は一般に感傷的なノスタルジヤを持つてゐる。身の不遇は一層それを强めるだらう。そこが眼のつけどころだ。

村で生計がむづかしいからこそ村を離れたのだ。都市の失業者がおいそれと歸農など出來るものでない事は分りきつてゐる。偶々の歸村者は更に新らしい離村者を伴つて戻つて來るであらう。だが、この事はさしあたり忘れられなければならぬ、「失業問題の解決」のためには。

かくして前述の如き矛盾が無意識的に紙面に現はれることになる。これは支配階級によつては克服せられ難い現代社會の矛盾の一つなのであらう。

立志談と似て非なるものに下層階級の努力美談、社會哀話ともいふべきものがある。先年の關東震災はかう云ふ哀話を多く作り出した。「人」にはこの種類の物語、貧しい老人、寡婦、少年少女等の哀話が每號のやうに揭げられてゐる。これは家族の生活難をまのあたり見てゐる收容者は、身につまされて感激なしには讀まれない記事だ。しかしかう云ふ記事は下層社會の事情を知る材料として、社會制度の缺陷を思はせる資料として、吾々には貴重だ。一例をあげれば、（これは「人」の記事ではなくて、刑務所備付の本だが）先年一般新聞紙にも揭げられた、佐賀縣の保少年物語の如きがこれだ。僕は右の小册子を見て落磐のために盲目になつたこの少年の父たる後備役步兵の炭坑夫の哀れな境遇、これに對する炭坑資本家の態度、麗々しく自分の寫眞などをかゝげて名を賣らうとする小學校長、かう云ふ事件を軍國主義の宣傳に利用する陸軍當局者などについて、色々考へさせられた。

「人」には時々粗食奬勵の記事が見える。これは僕たちのひがみかも知れないが、何だか現在のひどい刑務所の食物の辯解のやうにも讀まれる。またたとへそれが一般國民に對する敎訓であるとしても、日本人について言へばもつと粗食した方がいゝのは、少數のブルジョアの事で、一般の國民、殊に農民などについては反對でなければなるまい。農民の營養については云ふべき事が多いが、こゝでは略しておく。

文學上の記事においては、良寛、曙覽、芭蕉、一茶等の自然詩人、貧乏詩人の物語が特に多い。それと同時に季節々々に從つて雪月花の自然美が禮讃せられてゐる事は云ふまでもない。かう云ふ記事の意義については今更云ふまでもない事だが、僕としてはたゞかういふ記事によつて美的情操を養ふ事が出來る事を感謝しておかう。しかしかういふ自然美と刑務所の設備の不完全との對立は注意を要する。いくら紙上で月や星の美觀をとかれても高い小さな窓にすり硝子の障子がはまつてゐて、それが三十度ばかり廻轉するのみでは、收容者にとつては、たゞ憾みのたねとなるばかりだと言はねばならぬ。

最後に、宗教記事について。これについては簡單に、宗教の本質は刑務所において、又刑務所を通じて最もよく認識せられ得るとのみ云つておく。その實例として富井隆信といふお坊さんによつて書かれた「人」紙上の「唯物論と宗教」の一節を引用しておかう。

「我々は社會や世間を觀察するのに、どこまでも實相を蔽つてはならぬが、一番近い自己を何よりも先きに觀察しなければならぬ。もとよりそれにも聊かでも實相を曲げてはならぬ。食ふ事も必要、寢る事も大切、しかし器械でない。綜合的なる、生きた我々を事實のまゝにみる事は尙更に必要大切である。

「自己の眞相を内觀すればどうなる。階級鬪爭ですむか。搾取奪還ですむか。」

「社會制度の改善はもちろん必要である。」

「が、それよりもこの自分の醜悪をどうする。」

「他を糺彈する前に、糺彈せられなければならぬ自分。」

「他を改良する前に、改良せられなければならぬ自分。」

「他に對向する前に、棚に上げつぱなしにされぬ自分。」

「人」は僕達に些かながらも社會の情勢を窺はせてくれる小さな窓だ。科學の進歩を知らせてくれ、情操を養はせる精神的な糧だ。そしてそれと同時に、支配階級が何を欲してゐるかを語る「小新聞」――一般新聞紙の縮刷版だ。

西×雄氏は三・一五事件で檢擧された一人で、最近の新聞はやうやく豫審調書の終了を報じてゐますが、二ケ年にわたる刑務所生活から、刑務所新聞に對する感想を寄せられました、通信は勿論檢閲を經なくてはなりませんから充分な事は云へないやうですが、言葉の影に在るものをくんでお讀み下さい。(編輯者)



職場からの叫び!!!

鐘紡減給問題
――並に兵庫工場――

松本艶子

駘蕩の春を外に、第一流中の一流をもつて、自他共に許す、大鐘ヶ淵紡績會社が、全無產者階級の生活を脅すものとして、何故に、一般世人の耳目を衝動せしめた、此度の樣な手當の削減（實質的に於いては、俸給賃銀の値下げ）を斷行なしたか？

鐘紡の言を借りて言へば營業狀態の不振による爲である。その原因を尋ねれば

一、金解禁による打擊（利潤率の低下）
一、世界的不況による海外需要の不振
一、印度關稅の引上げ
一、生糸及び銀の暴落

等、等、右等の條項が、最大原因たる事は、論をまたない。次に從業員の給料を見れば

減額前　單位錢

	本給	手當共	一月間（二十六日）
最低	四七	八〇	二〇八〇
最高	一七〇	二八九	七五一四

減額による給料

最低	四七	六一	一五八六
最高	一七〇	二二一	五七四六

平均一月間の給料三六圓六六錢となる。資本家の息子の小遣ひにも足りない位の金で、ある者は、父母を又妻を、子を養つて、行かなければならない。吾々勞働者は、岩をかじり、土を喰べて、生きてゐる者と思つてゐるのだらうか!?

物價下落は何人も點頭し得る所なれど一錢低下しても十圓低下しても、それは下落と云ふ。三六圓六六錢にて生活安定が、出來ると思つてゐる事からして、その減給の矛盾を見出し得るであらう。

それにしても鐘紡が今日迄、三割五分乃至四割の高配を行つたり、前社長武藤山治氏に三百萬圓の退職慰勞金を出した大會社が、僅か金解禁後三ヶ月で、しかも金解禁に對しては準備とゝのへりと見得を切つた鐘紡が、職工の手當を四割も削減しなくてはならない程窮狀に陷つてゐるとは思はれない。

十年以上も支給されてゐた手當が今日に於いて經常的性質を持つてゐることは說明するまでもないその意味から言つても、それが戰時手當と云ふ辯解に首肯し得ない事である。尙吾々がその意を介せざるは、過般の官吏減俸案に對し、「言語同斷、抱腹絕倒」と、言下に痛罵を浴せた武藤前社長に、つい此間三百萬圓の退職慰勞金を贈つた會社だから。――では、鐘紡は溫情、大家族主義の名のもとに、吾々を瞞欺してゐたのだ。

操短においては、間接に吾等の汗と油の、血の出る樣な結晶をして、彼等の高配に給した、資本家の所謂產業合理化の名のもとに、行はんとする、暴擧の序曲

で、吾々一般勞働者階級の生活苦を、益々苛酷ならしめる導火線である。

狼の道德は羊の肉を食ふにあつて、羊のイデオロギーは、狼の食を奪ひ狼をして餓死させるにある。なれど今日の羊は、徒らに狼の牙にかゝり、狼をして益々その慾望を大ならしめつゝある。

何を以つて溫情家族主義といふ哉!! 狼は羊に、羊は狼に、各々食を與へ、油と水が相互に相入れるならば、鐘紡の溫情?家族主義?なるものも成立する。併し、狼の利己的慾望は、あく事なく伸びてくる。その結果として弱き羊は必然的に、おのれの生を得べく一致團結以つて戰はなければならない。

勞働組合を必要とせず勞働者の待遇を善し得ると豪語した資本家の、常にもて遊ぶ、言語に過ぎないではないか!! 溫情主義の美名に自負してゐた鐘紡が、僞善的假面をはいで、吾々の面に向つてきた資本家の、眞の姿を見たか。

武藤氏は「若し大淘汰を行ひて、多くの失業者を、勞働市場に送り出して了へば、減給の必要はない。たゞ鐘紡の溫情的即ち家族主義ではそれは出來ない。」

賃銀の高低が溫情主義、家族主義とは全然沒交渉たる事を如實に示した。賃銀は下げても、馘首しない主義で、これを家族主義、溫情主義と云ふ!!

金解禁による利潤率の低下した事によつて職工の賃銀を削減する。此れ以上利潤率の低下した場合に於いては、馘首する事になる。

故に、利潤率低下の前には、溫情的、家族主義も、屁の如きものである。即ち實際的に於いて、吾々勞働者を、高率配當の剩餘物とし、溫情的家族主義?の名に包んできたのである。

四月十一日午前八時半、大阪淀川工場及び京都工場に相次ぎ、模範工場と言はれ、大本山格たる神戸市御崎町同社神戸支店に、溫情主義?鐘紡王國の牙城に、初めて、爭議の火の手は擧げられた。參考として人員並に工場の內容を示せば、

男工　六百九十餘名
女工　二千百六十餘名
精紡　九六、八四〇錘
織機　一、五三七臺
撚絲　二、六〇〇錘
ガス線　六〇手――八〇手

思ひ出せば大正十年、戰時手當の七割步廻しを本給に繰入れを、全職工一致して、嘆願せんと試みて、失敗して以來は多少にかゝはらず、勞働運動的傾向ある者は、容赦なく、根こそぎ解雇し、勞働組合加入者の一人もゐない事を誇りとしてゐたのだ。何故に加入者のゐないのが誇りか?、吾々はその解釋に苦しむ。

日本勞働組合聯合神戸聯合會支部のスローガン

「起て!! 鐘紡の男女職工諸兄!! 削減は食を奪ひ、餓死を與へるものだ!!! 諸兄!! 職場にて直に總會を開催し、糺彈せよ!! 我等も亦諸兄等兄弟と共に立たん!!!

一、手當削減絕對反對
一、手當を本給に繰入れる事
一、社宅料の値下げ
一、賣店三割値下げ
一、株の無配當
一、女工の奴隷的待遇撤廢
一、今後絕對に減給せぬ事
一、今回の事件に對して犧牲者を出さぬ事

事件の成り行きは、私が述べるまでもなく諸姉等の既に熟知せるところなれば省略して、ブル意識にことせられたる羊頭狗肉の溫情主義?の一端を示す。

食費		値下前	値下後
女工	朝	四錢	三錢
同	晝夕	六錢	五錢
男工	朝	六錢	四錢
同	晝夕	七錢	六錢

社宅料
一、一般男女工、三等附屬雇以下、純家賃の三割値下げ
一、首席工、一、二等附屬雇以下、純家賃の二割五分値下げ
一、三、四等擔任待遇、三、四等雇以下、純家賃の二割値下げ
一、本社雇、一、二等擔任、一、二等雇以下、純家賃の一割五分値下げ
一、疊、表裏替費半額負擔を四分三を會社負擔す
一、濱寄宿舍費、各等を通じ純家賃の三割引
一、その他入浴料、散髮料の値下げ

一割五分乃至三割の社宅料値下げと言へば可成りの英斷と見なければならない。併し純家賃なるものが電燈料、水道料、衞生費等を加算せざるものと知るとき、その微々たる値下げ並に、手當削減の穩和策として、姑息な手段を笑ふよりも、あはれなものだ。

電柱、壁、垣に、

「吾等は結束し、徹底的に鐘紡をやつつけろ!!」「全勞働者の爲めに、鐘紡兄弟!!奮起せよ!!」「鐘紡賃銀値下げに反對せよ!!」「惡資本家を倒せ!!!」等々のポスターの中を通つて行けば、朝の三十分を「戰ひは先ず健康より」と、雄々しくも、温情主義? に養はれてきた、世間知らずの諸姉達の掛聲が流れてくる。

工場及び社宅の門には、本家の頤使を受けて、嚴重な見張りの目をむいてゐる、吾々兄弟を見出す。彼等は鐘紡に使用せられる、小資本家に使雇されてゐる吾等の友の姿である。今日は鐘紡職工達に、餓死を迫り、明日は已れ自身の身にふりかゝる危險を知らで、餘りに無智な彼等を罵り、憎むより、彼等友の向上を計り、明日の百より、今日五十の缺陷を改更せねばならない。

手當削減問題は單に一鐘紡のみならず、これにならつて他の工場において、賃銀の値下げを斷行するやも計り難く(或る一部にてはすでに行つてゐる)、ひいては、全無產階級者の生活脅威となれば吾々は一致團結、以つて、鐘紡職工達と共に、吾々の生活安定を、確保しなくてはならない。產業合理化の名にかくれその責任を勞働者に轉嫁せんとする、所謂資本攻勢である。勿論、世間への義理合に、減配を行ふに相違ないが、減俸により、減配を暗示するといふやりかたは餘りにも株主偏重ではないか!!

紡績會社に於ける勞働組合は東洋紡、鐘淵紡、日本紡會社の一部工場に、それ〴〵地盤を有してゐるが、論ずる程もなく、その他は、二流、三流の會社に、喰ひ入つてゐるのみで、その勢力たるや、誠に微々たるものである。――併し、一度、鐘紡の苛酷な減俸をなすや各勞働組合、團體及び全無產黨の、合同運動となり「全無產階級生活戰線の防守を期す」の共同戰線の實現を、吾々は衷心より、嬉ばなければならない。

英國が、一九二五年の四月、金解禁をなし、同六月滿期の、炭坑夫との賃銀協定更改に際して、資本家側から、賃銀値下げを要求し、それが決裂し、翌二六年、五月の總同盟罷業となつた事はまだ耳新しい事だ。

吾々は吾々の、純潔な血潮を以つて、不斷の戰ひを續けてゐる諸兄姉に、最後の一人となるまでも、生活權確保の爲め、鬪ふだけの力を與へなくてはならない!!!

南京米と南京虫

京　芙美子

ちよつと御免下さい。私共は工場で働く女工でございます。

私共のをります工場の寄宿舍は南京虫とのみで、うい〳〵しております。

そしてもうそろ〳〵蚊が出ますが、去年の蚊帳は大變破れてをりまして、蚊がたくさん入つて來て、とても眠ることが出來ませんでした。電燈をつけておくと長起きをし朝起きないからと云ふて電燈をつけてもらふ事も出來ず、十一時になつてから廊下だけ電燈をつけてくれます。今年もあの古い蚊帳では、ほんとに眠れませんから、晝間でも眠くて困ると思ひます。

ふとんが、南京綿であるので、南京虫がなんぼうでも出て來ます。

せまい蚊帳の中にすしずめの樣になつてねるのでやりきれません。

病人がたえまなく出てきます。

やりきれないから他の工場に逃げて行きますと、早速工場の方から私共の親の所に行つて嘘ばかりつきます。親は工場の中の事を少しも知りませんから私達が我儘であつて云ふのだと工場に歸れと言ひます。どうしても歸らないと云ふと、三年契約の人、又五年契約の人、契約をして居ない人にも工場の方から申しますには、契約をしておつて其の年の間、つとめないものは、ホウリツの上からゆるすことは出來ないから警察にとどけて、しばり上げて、カンゴクに入れてやると言ひます。恐ろしくて仕方がないから、カンゴクに入るよりはと云ふ考へで又元の工場に歸ります。よその人から、きけば、カンゴクはきれいで南京虫もゐなければ、蚊もおらぬそうです。

賃金をもらふ時、その一割とはしたは積立金としなければならないと、さし引かれます。それと健康保險だと云ふて六十錢位取られます。そして積立金は十二月になるまで首がちぎれる樣なことがあつても出して下さいません。月に二十五圓もらひます月でも二十五圓八十錢位もらひます月でも二圓五十錢と、八十錢のはしたと、保險金とで三圓四十錢程さし引かれ、貰ふのは二十圓餘りになりますが、その金も月末には下さいません。都合が惡いとか、何とかいつて下さいません。

家は貧乏だし、ほんとうにこまります。少し金のことでもいゝますと、すぐ巡査に言ひつけてやると云はれますので私共は何も惡るい事はしませんのに恐ろしくて、なりません。

山十の工場の近所にある山十の借家に警察の×長さん、部長さんも、ただではいつて居られるので、なんでも山十の云ふことは、きかれます。

同じ工女で、山田花子と云ふ人は支店長樣のおめかけ樣でございます。

そして支店長樣の部屋で南京虫や蚊に喰れないで休んで居られます。

腹がへつて御飯のほしい時は、夜ねる前でも何時でも食堂で食べておられます。花子さんに、きげんを、とらないと私達のすべての成績が惡るくなつて損をする事があります。

縣廳の工務課にも、手紙を出しましたのに少しも、かまつて下さいません。

一年に、一ぺんか、二へんか工務課か

らおいで下さいますが、その時はただ健康保険の話をされただけで自分は工場から大變な御馳走をしてもらつて歸りは、汽車も上等で、歸られる樣にしてもらつて居られます。

此の手紙を、出したことが工場に分りましたら、ひどい目に合ひますから、どうぞヒミツにして下さいませ。

何卒私達を助けて下さいませ。

一女工より

工場課長樣

この手紙を私は社會局の工務課に送つたが社會局だつて、同じ資本家の持つ機關だ、眞實女工のために最善の努力をするとは思へない。女工さんよ、一日も早く、覺めて下さい。

發端

武藤千代

「監督さん!」「なんだね」

「私達が主任に叱られる前に監督さん私達に注意して下さるだけの、親切はあつてもゝいのではありませんか」この腹立たしさ　私は私の爲でなしに叫ばずにゐられなかつた。

縣立の産業調査所は蠶種の検査で忙しい。朝七時半から午後四時迄立ち續けの勞働だ。晝食の四十分の休みが私達二十人の女のたつた一つの樂しみである。

「親指が水ぶくれになつた」

「今朝はだるくて立てなかつた」

それが皆の口から吐く毎日の愚痴だ。

數日の雨降り續きで、下手に塗られたコンクリートの上に水がたまつた。草履ではとても仕事が出來ない、能率が上らないと又叱られるんだ、だから皆が下駄を履いてやつた、それを監督が主任に告げた、皆が主任に呼ばれて叱られた、

緊縮だ、皆んな氣を付けろ!　下駄で仕事をする馬鹿がどこにある。默つてゐりやあいゝ氣になつて、給料の値下げだぞ悪かつたら明日からお拂ひだ!!

すぐそれだから堪らない、弱い者いぢめをするのが彼等の階級政策の一條か?

「主任さんに叱られる前に私達に注意して下さる丈の親切は持合せてもいゝのではないでせうか、同じ樣に賃銀の奴隷になつてゐるんですもの――」私はもう一度叫んだ。

「なんだと　君達が監督の私に一言もなく、下駄をはくからだ一口云つて呉れゝばいゝのだ、云はないから主任に聞いたのだ、俺は手落ちはしてゐないつもりだ」顏を赤くして監督が云つた。

「監督さんが自分に注意しないで主任に直接私達を叱らせるのがいゝんですかそれで監監の役目が立つのでせうか」口の中に泡が一つぱいたまつた。

「なんだと、もう一度いつて見ろえ」

「え、何度だつて云ひますよ私の云ふのはみんなの心に違ひないのですから」

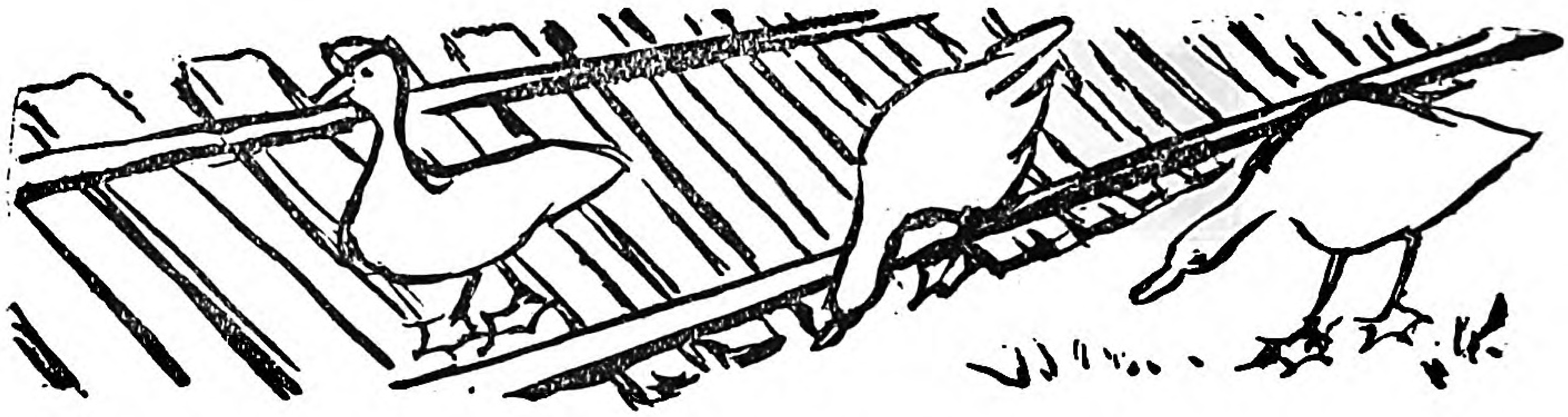
「やめろ　やかましい」

圓くなつた二十人の女達の眼光が靑くなつた。と給仕が立ての悪い戸を無理に開けて入つて來た。

「長田さん　一寸主任さんが來て下さいつて」監督はきまりの悪い顏をして出て行つた。私の心は笑ひ泣きをしてゐる。

私は首になつても仕方がない、又いゝ口を探がすんだ解雇退職ストライキ監督は何時迄も歸つて來ない。どうせ小使室で遊んでゐるのだらう。「さうだ」能率減退、だからまひをさせるんだ、スリチ丈かけて、「ようし――」私の心はむら〱と燃え上つた。

これがあのストライキの發端だつた。



お前の敵

山田よし

過勞の果の病氣だのに妊娠ぢやないかだなんて監督の面憎さに泪が出る。
不良女給ぢやあるまいし處女に小供が出來るものか監督だと思つて云ひたいことを云ふな。
笑談も向ふ見て云ふがいゝ未來の闘士を生まふと云ふ大望を持つた體なのだ。
階級戰に出澁る樣な小供は生まないのだ。そんな意氣地なしの子は育てないのだ。
生れたら菜ッ葉服着せて寢かすのだ、階級戰の旗ともなつた菜ッ葉服を。
金ぐさりの胸を突き出したお前の、敵を生む私だよく顔を見ておくがいゝ。
澤山の同志も封建的な親の爲に苦しんだけど今に〳〵苦しませぬ世に仕遂げよう同志よ。
階級戰で死ねと云つてもくれない母を持つた經驗によりよい母となりたい私だ
「働ける者は幸福です」そんな有閑婦人の空言見た樣な言葉はけちらして進まう
働ける者の幸福感を一歩乘り越えて階級意識を引き下げ工場へは入れ。
我まゝな男性と戰へ資本家と戰へこの蹂みにじられた姿を取り返せ。

淫賣婦と飯屋

―放浪記―

林芙美子



十二月×日

　さいはての驛に下り立ち
　雪あかり
　さびしき町にあゆみ入りにき

雪のシラシラ降つてゐる夕方、私は此啄木の歌をふつと思ひ浮べながら、郷愁を感じた。便所の窓を明けると門燈がボカリとついて、むかあし山國で見たしやくなげの紅い花のやうで、とても美しかつた。

「姉やアお孃ちやんおんぶしておくれッ！」

奥さんの聲がする。

あゝあの百合子と云ふ子供は私に苦手だ。よく泣くし先生に似て、シンケイが細々として、全く火の玉を背負つてゐるやうな感じだ。

せめてかうして便所にはいつてゐる時だけが、私の體のやうな氣がする。

―バナヽ、鰻、豚カツ、蜜柑、思ひきりこんなものが食べてみたいなア。

氣持が大變貧しくなると、落書したくなる氣持ち、豚カツにバナナ私は指で壁に書いてみた。

夕飯の仕度の出來るまで赤ん坊をおぶつて廊下を何度も行つたり來たり。

秋江氏の家へ來て一週間あまり、先のメドもなさそうだ。

こゝの先生は、日に幾度も梯子段を上つたり降りたり、まるで廿日鼠だ。あのシンケイにはやりきれない。

「チヤンチンコイチヤン！　よく眠つたかい！」

私の肩を覗いては、先生は安心したやうにぢんぢんばしよりして二階へ上つて行く。私は廊下の本箱から、今日はチエホフを引つぱり出して讀む。チエホフは心の古里だ。

チエホフの吐息は、姿は、みな生きて、たそがれの私の心に、何

かブツブツものを言ひかけて來る。
匂ほはしい手ざはり、こゝの先生の小說を讀んでゐると、もう一度チェホフを讀んでもいゝのになあと思ふ。京都のお女郎の事なんか、私には緣遠いねばねばした世界だ。

夜。

家政婦のお菊さんが、美味しそうなゴモク壽司をこしらえてゐるのを見て、嬉しくなつた。

赤ん坊を風呂に入れて、ひとしづまりすると、もう十一時だ。私は赤ん坊と云ふものが大嫌ひなんだが、不思議な事に、赤ん坊が私の脊におぶさると、すぐウトウト眠つてしまつて、家の人達が珍らしがつてゐた。

お蔭で本が讀めること——。

年を取つて子供が出來ると、仕事も手につかない程心配なのかも知れない。反感がおきる程、先生は赤ん坊にハラハラしてゐるのを見ると、女中なんて一生するもんぢやないと思つた。

うまごやしにだつて可憐な白い花が咲くつて事を、先生は知らないのかしら……。

奥さんは野育ちな人だけに、眠つた樣な女だつたが、この家では一番好きだつた。

十二月×日

ひまが出る。

行くところなし。

大きな風呂敷包みを持つて、汽車道の上に架つた陸橋の上で貰らつた紙をひらいてみたら、たつた貳圓はいつてゐた。二週間あまりゐて、金貳圓也、足の先から血があがるやうな思ひだつた。

ブラブラ大きな風呂敷包みをさげて步いてゐると、ザラザラした氣持ちで、何もかも投げ出したくなつた。間代も拂つて、やれやれと住み込むと、二週間でお拂ひばこだ。

蒼い瓦葺きの文化住宅の貸家があつた。庭が廣ろくて、ガラス窓が二月の風にキラキラ光つてゐた。休んでやらうかな。

勝手口をあけると、さびた鑵詰のかんからがゴロゴロして、座敷の疊がザクザク砂で汚れてゐた。

晝間の空家は淋しい、薄い人の影があそこにもこゝにもたゝづんでゐるやうで、寒さがビンビンこたえて來る。

どこへ行かうかしら、貳圓ではどうにもならないし、はばかりから出て來ると、荒れた緣側のそばえ、狐のやうな目のクリクリした犬がぢつと私を見てゐる。

「何でもないんだよ、何でもありやしないんだよ。」

言ひきかせるつもりで、私は屹とつゝたつてゐた。

どうしやうかなあ……。

夜。

新宿の旭町の木賃宿へ泊る。

石垣の下の、雪どけで、道がこねこねしてゐる通りの、旅人宿に、一泊參拾錢で私は泥のやうな體を横たえた。

三疊の部屋に、豆ランプのついた、まるで明治時代にだつてありはしない部屋の中に、明日の日の約束されてない私は、私を捨てた島の男へ、たよりにもならない長い手紙を書いた。

みんな嘘つぱちばかりの世界だ！
甲州行きの終列車が頭の上を突きさした
百貨店(マーケット)の屋上のやうに寥々とした
全生涯を振り捨てゝ私は
木賃宿の蒲團に靜脈を延ばした
列車にフンサイされた死骸を
私は他人のやうに抱きしめて
眞夜中煤けた障子をいつぱい明けると
こんなところにも月がおどけてゐた。

みんなさよなら
私は歪んだサイコロになつて逆もどり
こゝは木賃宿街の屋根裏
私は堆積された信念をつかむんで
ビヨウ　ビヨウと風に吹かれてゐた。

夜中になつても人がドタドタ出はいりしてゐる。

「濟みませんが……。」

ガクガクの障子をあけて、銀杏返へしに結つた女が、そう言つたきり、薄い私の蒲團にもぐり込んで來た。

ドタドタと大きい足音がすると、帽子もかぶらないうす汚れた男が細めに障子をあけて聲をかけた。

「オイ！　おきろ！」

女が、一言二言つぶやきながら、廊下へ出ると、パチンと頰を打つ音が續けざまに聞えて、無意味な、汚水のやうな寞々とした靜かさが續いて、女の亂して行つた空氣が、仲々しづまらなかつた。

「今まで何をしてゐたのだ、原籍は、どこへ行く、年は、兩親は……。」

あのうす汚れた男が、鉛筆をなめ乍ら、私の枕元に立つてゐる。どうにでもなれッ。

「あの女と知りあいか？」

「え、三分間ばかり……。」

クヌウト・ハムスンだつて、こんな行きがゝりは持たなかつただらう。刑事が去ると、私は仲々と手足を延ばして枕の下に入れてある財布をさはつてみた。壹圓六拾五錢殘つてゐる。

日がビユウビユウ風に吹かれてゐるのが、歪んだ高い窓から見える。ピエロは高いところから飛びおりる事は上手だが、上つて見せる藝當は用意ぢやない。

だが何とかなるだらう。──。

三月×日

青梅街道の入口の飯屋へ行く。熱いお茶を呑んでゐると、ドロドロに汚れた勞働者が馳け込むやうに這入つて來て、

「姉さん! 拾錢で何か食はしてくんないかな、拾錢玉一ッきりしかないんだよ。」

大聲で正直に立つてゐると、十五六の小娘が、

「御飯に肉豆腐でいゝですか。」

勞働者は急にニコニコしてバンコへ腰かけた。そして大きな丼の飯と、葱のはいつた肉豆腐と汁碗を前にして、天眞にたべてゐる。

一食拾錢よりと書いてあるのに、十錢玉一ッきりの此勞働者は、スナオに正直に、入口から念を押してゐる。

涙ぐましい氣持ちだつた。

御飯の盛りが私のヨリ多いやうな氣がしたけれど、あれで足りるかしら、足りなかつたら出してあげてもいゝけど、でも勞働者はいたつて朗らかだつた。

私の前には、御飯にごつた煮にお新香、まことに貧しき山海の珍味。合計拾貳錢也、のれんを出ると――どうもありがたう――お茶をたらふく呑んで、朝のあいさつをかはして、拾貳錢、どんづまりの世界は、光明と紙ひとえで、眞に朗らかだ。

だが、あの四十近い勞働者の事を思ふと、これは又、拾錢玉一ッで、失望、どんぞこ、墮落との紙ひとえだ――。

お母さんだけでも東京へ來てくれゝば、何とか働きやうもあるんだけど……沈むだけ沈んだ私は難破船、飛沫がかゝるどころではない、ザンブザンブ潮水を呑んで、結局私も昨夜の淫賣婦と、そう變つた考へも持つてゐやしない。

あの女は卅すぎてゐたかも知れない。私が男だつたら、あのまゝ一直線にあの夜に溺れて今朝はあの女と、もう死ぬ話でもしてゐたか知れない。荷物を宿にあづけて、神田の職業紹介所に行く。

何と云ふ冷たいこうまんちきな女だらう、私は、どこへ行つても砂つ原のやうに亮々とした思ひがするので、厭になつてしまつた。

お前さんに使つてもらうんぢやないんだよ。

おたんちん!

馬鹿野郎!

ひよつとこ!

そうくり返へしてゐる間に、私の番が來た。桃色の吸取紙みたいなカードを渡すと、月給參拾位ひ……受付女史はかうつぶやくと、私の體を見て、まづせゝら笑つて云つた。

「女中ぢやいけないの? 事務員なんて、學校出がウヨウヨゐるんだから……女中なら澤山あつてよ。」

後から後から美しい女の花束、眞にごもつともさまで私の敵ではない。疲れた彼女達の中にも、冬らしい仄かな香水の匂ひがする。

得るところなし。

紹介狀は、墨汁會社と、ガソリン孃。伊太利大使館の女中。

ふところには、もう九拾錢あまりしかない、夕方宿へ歸へると、街に働きに出る藝人達が、緣側の植木鉢みたいに並んで、キンキンした鼠色のお白粉を塗りたくつてゐる。

「昨夜は二分しかうれなかつた。」

「やぶにらみぢや買ひ手がねえや！」

「これだつて好きだつて人があるんだからね。」

「はい御苦勞樣か……。」

十四五の少女同志のはなし。

十二月×日

ワッハ　ワッハ　ワッハ　井戸つるべ、狂人になるやうな錯覺がおこる。マッチをすつて眉づみをつける。

午前十時。

麹町三年町の伊太利大使館へ行く。

笑つて暮らしませう。

顏がゆがみまする。

異人の子が馬に乘つて出て來た。門のそばにこはれた門番の小屋みたいなのがあつて、白と蒼と靑との風景、砂利が遠くまでつゞいて、所詮は私のやうな者の來るところでもなさそうだ。

地圖のある、赤いジュウタンの廣い室に通されると、白と黒のコスチウム、異人の妻君つて美しい、遠くで見るとなほ美しい。さつき馬で出て行つた男の子が鼻を鳴らしながら歸へつて來た。

男の異人さんも出て來たが、大使ではなく、書記官だとかつて事だ。夫婦共脊が高くてアッパクを感じる。

その白と黒のコスチウムをつけた夫人に、コック部屋を見せてもらふ。コンクリートの箱の中に玉葱がゴロゴロしてゐて、七輪が二ツ置いてあつた。此七輪で、女中が自分の食べるのだけ煮たきするのだと云ふ。まるで廢屋のやうな女中部屋、黒いよろい戸がおりてゐて、石鹼のやうな外國の臭ひがする。

結局ようりようを得ないで門を出る。ゴウソウな三年町の邸町を拔けて坂を降りると、吹き上げる十二月の風に、商店の赤い旗がヒラヒラ暮れ近かく瞳にしみた。

人種が違つては人情も判りかねる。どこか他を探して見樣かしら電車に乘らないで濠ばたを歩いてゐると、國へ歸りたくなつた。目當もないのにウロウロ東京で放浪したところで、結局どうにもならない。電車を見てゐると死ぬる事を考へる。

本鄕の前の家へ行く。叔母さんつめたし。

近松氏から郵便來てゐる。出る時に、十二社の吉井勇さんのところに女中がいるから、ひよつとしたら、あんたを世話してあげると云ふ、先生の言葉だつたが、薄ずみで書いた斷り狀だつた。

夕方新宿の街を歩いてゐると、妙に男の人にすがりたくなつた。誰か助けてくれる人はないかなァ……新宿驛の陸橋に紫色のシ

グナルがチカチカゆれてゐるのを見ると、涙で瞼がふくらんで、子供のやうにしやつくりが出た。

當つてくだけてみやう――。

宿の叔母さんに正直に話しする。仕事がみつかるまで、下で一緒にゐていゝと云つてくれた。

「あんた、青バスの車掌さんにならないかね、いゝのになると七拾圓位ひはいるそうだが……。」

どこかでハタハタでも燒いてゐるのか、とても臭いにほひが流れて來る。七拾圓もはいれば素的だ。ブラさがるところをこしらえなくては……。十燭の電氣のついた帳場の炬燵にあたつて、お母ァさんへ手紙を書く。

―ベウキシテ、コマツテ、イルカラ、三圓クメンシテ、オクッテクダサイ。

此間の淫賣婦が、ゐなりずしを頬ばりながらはいつて來る。

「おとついはひどいめに會つた! お前さんもだらしがないよ。」

「お父つあん怒つてた?」

電氣の下で見ると、もう四十位の女で、バクレン者らしい崩れた姿をしてゐた。

「私の方ぢやあんなのを梟と云つて、色んな男を夜中に連れこんで來るんだが、あんまり有りがたい客ぢやないんですよ。お父つあん油しぼられて、ブンブン怒つてますよ。」

人の好さそうな老いたお上さんは、茶を入れながら、あの女をのゝしつてゐた。

夜うどんたべる。

明日はこゝの叔父さんの口ぞへで青バスの車庫へ試驗うけに行つてみやう……。

電線が鳴つてゐる。

木賃宿街(ホテルガイ)の片隅に、此小さな女は汚れた蒲團に寢ころんで、壁に張つてある、大黒さんの顏を見ながら雲の上の御殿のやうな空想をする。

國へかへつてお嫁さんにでも行かうかしら。――

――放浪記を愛讀して下さいます方へ!私の放浪記が一冊にまとまつて、改造社から近刊されます。一人でも澤山の方が讀んで下さいましたら、うれしうございます。これは筆者からのお願ひ。――

實話・三篇

その縱斷面

麥屋もと子

永い沈默を破つて擡頭しやうとしてゐる者です。

芽を出さうとしてゐる種子に光りをあたえて下さい。

過去五六年間（少女時代）に棲息した天地に材を取つて見ました。人道主義作家のやうに頭の中で描いた架空ではなく、赤裸々の斷面です。

けれど社會機構の缺陷で、批判も、大衆を引きつける引力の鈍いのが殘念です。强い背景と光りをあたえて下さい。

氾濫する性慾

人肉の市場のK遊廓。雪催ひの空に蔽はれた底に、軒燈が瞬き、脂粉のかほりがゆるやかに軒下を流動し始め、眠つたやうな街は活氣に蘇つて來た。冷藏庫のやうに冷え切つた室の中に、紅と白粉とに加工された、人形のやうな顏が浮び上つてゐる。

が、時間の進行するに從つて、加工された彼女等の顏の奧から貧血性の赤紫の色素が覗き出して來た。

「今夜も亦お茶引かしら、かう毎晩お茶引ぢや營業税も上らない。」

茶の間から、女將の電光のやうな視線とヒステリックな雷鳴が彼女等の肩先を掠めた、彼女等は一齊に女將の視線から逍れる爲に、茶褐色の疊の上に視線を落した。

讀者通信

福岡　古賀富子

昨日レポ頂きました。父に封を開かれていろ／＼詰問されました。これで家へも檢閲制度が制かれた譯です、けれど私はこんな事でひしがれてはなりません、皆樣の樣に元氣に朗らかな氣持ちで、私達の自由を戰ひ取ることに務めます。

又女人大衆ですがあれは毎月入つて居ります、けれど讀者の人數を知りたいと思つて書店でたずねた時「あの本は赤いですからね」と變な顏をされたのには一寸嫌な氣持がしました。私はそれを否定するのでもなければはづかしいとも思ひませんけれど店員の理解のないのには閉口します。その他讀み物には不便です。

それから私お友達を一人得ました。申込書を出させますから聯盟員に加へて上げて下さい唯今聯盟員の方を一人存じて居ります。時々お會ひしてお話をうかゞつたり御相談したりして居りますけれどもつとお友達をふやして準備會の下地でも出來たならと思つて居り

「こんな商賣には、選擧が一番貧乏神だよ」

女將の甲高いあてつけを、年增の一人が彩色した唇の中から白い歯を見せて、笑つた。

「絕對無抵抗主義で行かなくつちや駄目よ、落雷しちや大變だからね」

一同は音聲のない微笑を、次から次へと感染させた。すべての自由を束縛されてゐる彼女達の唯一の望が、(一夜でもよいから開放されて安眠したい)である。どうやら昨夜と今夜も實現できると思ふと、自然に微笑が口元に流れた。僅な金錢で貞操を賣買する娼妓生活の、最後にのこされるものは、花柳病の病菌か××管で×子に命中した××かの內の一つ、彼女は每夜××の腕の中で、それを腦裡に蘇らせて戰慄した。

女將は、雷鳴を料理場のコンクリートの上に瀨戶物を投げ付た樣に、落雷させてゐる。

「桑原々々、商賣にならないつて、怒つたつて、お客が來ないものしやうがないわ」

彼女等は、冷え切つた空氣の中で、しんしんと寒さが骨の髓まで浸み込むのを、幾らか防ぐ爲に體の容積を狹めた。

——此のやうに何のために、身じまひをするのだらう、自分を弄びに來る嫌な男——自分の敵に媚びるために、自分の顏形を飾らなくてはならないとは——

——皆惡魔です。冷酷な鬼です、每晩その惡魔が來て恥かしい事を仕掛けるのですものそれが、みんな、×××のですもの。——

旅役者の群にゐたと云ふ關東から流れて來た女が、故意に憐つぽい聲色(こわいろ)で「出家とその弟子」の淺香とかへでの臺詞を、女將の鼓膜に振動させやうと、周圍の空氣を卷き上げた。

「……………」

が、それが彼女等の實感であるだけに、一同の神經に灰色の憂鬱が殺到した。灰色の憂鬱の中に×の執拗な本能と露骨な獸性を、貪慾に目の中に赤い血管を浮き上らせて、×をむさぼる態度が泳ぎ廻つて來る。(あれが男の通有性の本能だらうか?)彼女等が男子に××して感ずるものは快よい陶醉感ではなく、酒とアンモニアの醱酵したやうな體臭に包圍された中で、××からぐんぐんと這ひ上つて來る壘のやうな憎惡と、炎のやうに燃え上る反抗心である。が金でつながれた鐵鎖は反抗すればするほど筋肉に食ひ込み、男の冷笑が彼女等の網膜の底に擴大されて行くばかりで、鐵石のやうな壓制は、蛭の樣に吸ひついて離れない。

彼女等は脊骨の上へ、感電したやうに、冷

ます。終りに皆樣の御奮鬪を祈ります。

福島 古川 陽子

今日、何時もの本屋で、話してると、敎習所を出たばかりらしい、ニキビ面の若いのが二人來て、例の手帳を出して、「こちらには、戰旗と云ふ雜誌は來てませんかナ、ハーン。」そして二三の本を取り上げて、美人の寫眞を、のぞき乍ら、一人「あいつは、アナ系のだろ」「イヤ、共產主義なんだ」「近頃のプロレタリヤの、社會主義のつて皆別々なんか?」餘り聲が大きかつたので、側で本を讀んでた中學生七八人、思はずドット笑ふと、二人とも赤くなつて、尻を押しながら、出て行つてしまつた。

無智な彼等が、只わかりもしないのに、エバツてる以上、本を讀んだだけで、引張られたり、無賴漢と同一視されたりするんだと、考へさせられました。此處の本屋さんは、兄弟でやつて居て、大そう皆勉强家です。女人藝術や改造の類の宣傳をして居ます。ポスターが欲しいと云つてました。優子樣一筆お書き下さいませんか。ポスターの中の女王の樣なのを。御發展と、皆樣の御健康を祈ります。

たい惡寒の走るのを感じた。十燭電燈の光線が紫色に變色した四邊の壁に吸收されて、沈默がこゞえてゐる。

神の愛は、——神の存在は——「よわきものよ、われにすべてまかせよやと、主はのたまふ」と神の御子は歌ひ、「神様は常に、私達をお守り下さいます。」と牧師は云ふが、神は何處に存在するのか、「救の有難さ」それは單に精神的慰安であつて、暗澹とした泥濘の生活には微塵の救ひもない。彼女等の心は神にまで反抗心が延びて行く。

「まあ、お久し振りですこと」

沈默の背後に女將の嬌聲が風を呼んだ。

一同は沈默を津浪のやうに動搖させ、聽覺を集中して、腦に蜘蛛の巣のやうなアンテナを張つた。

「あまりいらつしやいませんので、御病氣かしらと、心配してゐましたわ」

「一寸旅行してゐたものだから」

男の聲は、低い濁聲である。

男の重い體量を二階へ運ぶ跫音が階段から消えると、女將はやさしい作り聲で云つた。

「しいちやん、お座敷よ」

靜香の腦に高く張られた、アンテナは、音をたてゝ倒れた。階段を昇る兩足は、ビタミンBの缺乏した脚氣病者のやうに重い。

山水の掛物の前に坐つてゐる客の顔は、人相判斷者に云はせると、三白眼で人情に薄く誠實性に缺けてゐると判斷する、眼の釣り上つて頰骨の高い惡相面である。こんな商賣は二三度侍つた男の顔も、霧の夜の街で擦違つた人のやうに印象が薄い。靜香はこの男を思ひ出さうと、頭の中に追懷の幕を張つた。

「何だか、今夜は顔色が惡いぢやないか」

「お前に玩弄されるのに、私の顔色がよいはずはありませんよ」惡魔に向つて、女將の敎へた嬌態も媚態も、芝居の濡場のやうな臺詞も、憎惡に壓殺されて了つて險惡な表情になつて行くばかりだ。

「もつと、召し上りなさいな」

男の手の盃の中に間斷なく、靜香は銚子の口を向けた。屠所に引かれて行く牛のやうに、故意に時間を浪費させやうと努力するのと、抑制することの出來ない××に、せい〱と×い呼吸をするものと——。

幾人かの×の撒き散らしていつた脂に、××は濕つて冷たい、×の全身に流れるアルコールに、體溫は熱病患者のやうに高かつた。腐つた生肴のやうに濁つた眼の中に、筋張つ

會津　芳賀　狂子

五月號の素晴らしい口繪、そして、うまさ、林さん平林様、中本さん、いつみてもいゝ、この人達のうんとのせて下さい。それから時雨先生のプロ作品何か御書きになるでせう。最少し廣告なさいましたら豫想外賣れると思ひます。なほ當市より五里位はなれたところに一萬人位の人が住んでる喜多方と云ふ町が有ります。其の町には本屋一軒切りですが女人藝術がありません。友人は殘念がつてどうして賣らんのかとプツ〱。この町には工場があり女工も多く御社の本なんか、うれるにきまつて居るのにどう云ふ理由かしら、私は御社の本を女人たる者みんなよむ事にしたいのです。それ故に女人藝術の爲にならよろこんでビラマキ位致します。

なほ女人聯盟も其内作らうと思つて居るがなにしろ當地は、白虎隊の出生地で懷古的で頭が古い故困つて居りますの、私の次兄なんか、この本は赤色だからよまん方がよいだと。シヤクにさわるからわざ〱兄の室に讀んだ本をおいておくと兄もやつぱりよむのよ。

新潟　青山　幸子

小作爭議の賑ふ私の縣では今ま

た血管を浮かせて、果實の前に坐つた子供のやうにニヤ〳〵と××微笑んでゐる。靜香は男の視線から遁れやうとした時、全身に重い壓力を感じた。石に敷れた雜草、鼬が鷄の血を吸ふやうな貪婪、甘露の滴りを吸ふやうな舌打ち——

「淫猷々々」靜香は體內の血管に憎惡を嘔きだした。

「莫迦々々」

×は昴奮から醒めると、ケロリとした顏で脂粉の香りに包まれて、深い眠りに落ちた。

一人の男に玩弄されたその代償に生れて來た罪の子、產褥中の母親の手から、貪慾な人手へ、幾枚かの十圓紙幣と一緒に引き離されて、一つの目的の爲に育て上げられ、十四の春を迎へると、市場で物品を賣却するやうに紹介人の手で三枚の百圓紙幣と交換された彼女。

「磨けば、ものになりますよ」

紹介人の言葉に左手に金の指環を光らせた樓主は、默つて彼女へ視線を吸ひつけて、ニヤリとした。

未知な環境で最初の一夜の夢を、柏餅のやうな薄い布團に身體を伊勢海老のやうに曲折させて包んだが、障子の隙間から流れ込んで來る風に夢は眞夜中に醒めて了つた。何時の間に這入つて來たのか。晝見た樓主の赤ら顏の脂で光つた顏が、側面を電燈に照らしてゐる。彼女が怪訝な視線を投げると、不意に視野が黑幕で蔽はれたやうに眞暗になつた。

「停電かしら？」

彼女は莫然とした驚愕と恐怖にガタ〳〵と戰慄した。

不可解な世界。樓主の腕の中でなにをされても、未知な世界に、人形師に操られた人形である。細かい戰慄に齒がギリ〳〵と音を立てた。樓主は耳元で云つた。

「このことを誰れにも、話しするのぢやないぞ。」

成熟しない彼女は、翌日は盛夏の眞晝の草花のやうに氣分が重かつた。が其の夜から化粧をさせられて、彼女は幾十圓かで優先權を握つた男の座敷にだされた。明るい電燈の下でニッケルの様に頭を反射させて、飢ゑた野犬のやうな客、馴々しく猫のやうに膝の上に上り、懷の中に這り込むやうにと、彼女に强制する女將。明けても暮れても、玩弄され何の抵抗もできない生活。

「自由廢業」

ではメーデーは許されてなかつたのです。本年初めてメーデー行列を五泉、見附の二ケ町に愈々許されました。私達はその意氣を期待してゐます。しかし許された處が全く女性の爲めに氣を吐く町なのです。五泉は御承知の通り五泉平五泉縞の產地で織機工が多いのは本縣下に一番です。見附町は夏縞が名物であつて木綿物工場で有名です。彼女等は嬉しいでせう。二十日の日曜日に加治川へ觀櫻に出掛けまして親しく新潟の名古屋紡績の女工さん達に逢つて內狀を聞きました。女工さんは五泉へメーデーに參加する樣な話をして居りました。だが警察の瞳は鋭いさうです。四、五年前に出來た日本農民學校を道で見ましたが實に貧弱な姿でした。全農民の爲めに淚が出て來ました。これから度々方々へ出掛けまして報知申上ますから御待ち下さい。

鳥取　岩崎二三子

あゝ貧乏はしたくないもの——まとまつた金さへあれば。いつも直接讀者になりたいなりたいともがいてゐますけれど…毎月二十三四日でないと書店へ來ないとは知りつゝも、もう十五日すぎになると毎日の樣に書店を訪ふ貧乏者

「束縛から開放へ」

一縷の光明點を見出した彼女は鐵條網のやうな警戒線を潛つて警察に縋つたが、——の存在は彼女の生存權を配慮して呉る爲の存在ではなく、樓主等の債權保護の爲の存在であつた。

「貸借關係は解決してゐないのぢやないか」と係の警官が訊問した。「借金の始末」娼妓名簿削除には何ら關係のない事だが、これは廢業を不可能にさせる爲の常習手段である。

「それぢや 樓主と相談して 圓滿に解決しなくつちや駄目だ」

係は 卓上電話の 受話機に 手をかけて 嗤つた。支配階級の財産保護を基礎にして作成した取締規則が、時代の潮流を恐れて幾分か緩和し、一部の改正を行つて無產者の眼を色盲にしてゐたが、裏面は××行政で廢業を公然と妨害してゐる。「いゝ手本だ」樓主は廢業を防止する爲に一同に其實例を示した。彼女の全身に浮き上つた赤紫色の斑點。

一日でも人間としての待遇を受けたことがあるだらうか？ 嗤はれ嘲られ憎まれ、何時人間として暖い愛を求め得られようか、眞黑な憎惡をはきつける以前に、何故何が自分等をそうさせたかと考へて呉れぬのか——

金でつながれた鐵鎖、男は君臨した、中には慈善事業に幾千圓かの金を撒いた篤志家、所謂る神の存在も、ここの一室に出現すれば情慾の獸となつて牙を立て、女の匂ひを嗅ぎ貪る厚顏無恥の神である。

悪馴れて、買つた時間の一分間の空費もおしむ男を、野犬のやうに罵倒しても、「これだけの刺戟の大きい女は滅多に捜しだせぬ」と得難い對照にして手放しかねた樓主、憎惡を吐き出して相手に接しても、××××× の沸騰點まで昂上させる目に見えぬ引力が呪はしい。

空色の朝が障子を染めると男は充血した眼を、枕元の選擧用のパンフレットの上に落した選擧運動員——靜香は直感した。こんな處で暗誦した主義政策を、無產民衆に目かくしゝて政權爭奪に奔走し、政權を掌中に獲得すれば、公器を黨利黨略の爲に利用する既成政黨の陣笠の爲に、お神輿にかついで壇上に立つて發聲をはり上げ、猛獸のやうに吼え立て喚き立てゝも、聽衆中に共鳴するものが何パーセントゐやう。

「どうだ上手だらう。」

得意がる男、政談演說は聲樂ではない、資

の悲しさ。

廣く唄の町と知られた私の住む安來町はあまりにも社會的にはめざめず、ともすれば因習のたづなにひきずられつゝあります。

所々に支部の出來ましたこゑをきく度にじつとしてゐられない衝動にこの小さい町に同人をさがしもとめる努力をしてゐます。

滋賀 野田 正子

鎖す雲、裂く陽よ！：：：

私は每日此歌を唄つてゐる。それこそドラ聲を張り上げて力一杯に、少し位節し廻しを遊へてるかもしれません。勝手にハーモニカで練習したのですから：：：此歌を女性全體があしぶみして力强く歌つたらどんなに素晴しいだらうと思つてゐます。

月每に支部の多くなつて行くのを喜びます。私もうんと之から讀者の倍加運動に力を盡し此大津といふ舊式な商人根性の旺盛な町にも女人聯盟の支部の設立を實現したいつもりです。

又東京、名古屋での講演會の記事を讀んで一度は聽きたいものと思つてゐますが、遠い所まで行く事も出來ず、一人でやきもきしてゐます。せめて京都であつたら、とんで行くのですが、昨秋でした

本主義本位の政策と、勞働の搾取者の候補者應援に、音聲と旬調が萬點であつても感動する者があるだらうか？　ましてこの男の蠻聲は會場の建物に反響交錯して破れ鍋のやうな騒音を渦きおこし、聽衆の鼓膜に騒音以外に何がのこらう（金で買はれてゐるのにまさか貴君の自負心に鋭いメスも刺されますまい）靜香の頬骨へ嘲笑が昇つて來た。

靜香は男の背後について足元のはつきりしない薄暗い階段を降りた。料理場の眞中に昨夜客の飲み乾した銚子が西洋將碁の駒のやうに對立してゐる、鼠が出たのか青いパセリがバラバラに散らばつてゐる。埃で白くなつた廊下の廻り角で、便所の歸りの樓主と男は視線を合せた。

「やァ」

樓主は男の背後の靜香に視線を流して、職業意識に支配された愛嬌笑ひと、自分と男の共通の趣味を始めて知つた微笑を混合させてニツコリした。戀でも愛でもなく只靜香の×××××××滿足してゐるだけに、樓主の眼の底に微塵の嫉妬もない。

靜香は亂雜に脱いである下駄の中から客の下駄を搜し出してならべたが、女將が九官鳥のやうに歸りがけの客にくりかへしてゐる——お近いうちに、またどうぞ——と云ふ言葉がどうしても出て來ない、格子戸の鴨居に目をそらせると、男は案外やわらかい表情で出て行つた。未だ戸の閉けない街を急いで行く男の下駄の音をきゝ乍ら、靜香は格子戸を閉めた。

不意に後から左手を握つた者がある、靜香はゴム人形のやうに振り返ると眼の平行に白い齒が並列してゐる、樓主だ。ぎゆつと握つた手は、彼女等の×の代を搾取して生活してゐるだけに脂の浮いた男に似合ぬ柔い手である。

「ね、いゝだらう」

聲は猫のやうにやさしいが、その裏にピストルのやうな命令が潛んでゐる。腹痛を口實にしてうまく云つて歸して見れば早や第二の狼が恐ろしい牙を立てゝ待つてゐるのだ。

靜香は樓主の影を踏んで狹い廊下を歩き乍ら人氣（ひとけ）のない冷えた空氣と、つめたい疊の感觸を×のあたりに描き乍ら身慄ひした。

分裂した權利と義務

金魚の糞のやうに幾臺かの自動車が、鼻腔を大きくした男を乘せて疾走して行く。

遊廓の建物は幔幕を張つたやうな砂烟の底

か京都で文藝戰線の人達が講演會をお開きになつた時、一人でのこ〳〵出かけて行きました。

今度大津の製麻會社が閉鎖致しました。五百人ばかりの方達があふれる譯です。社會民衆黨の支部が應援して會社に對抗するらしいですがはつきりした事はわかりません。

廣島　松村靜子

昨日の事でした。私宅附近の鮮人一家が盜人の嫌疑を受けて近所の方々から冷笑と痛罵を浴びてゐました。鮮人……金さんといふ人です……はアクセントの惡い日本語で盛んに辯解して居るのです。私其の姿を見ていたら胸が熱くなりました。其れは日本人がアメリカで、カナダで、白人から受ける侮辱と同じものなのです。最下級層に甚く多くの同胞の姿を思ふとたまらなくなります。白人と日本人の資本家に搾取されて、まるでヒモノにされて居る私達同胞人の慘めな姿を想ふ時、鮮人を侮辱する日本の人々に大きい聲で叫びたいと思ふ事があります。私など、貧しい一勞働者の子に生れ、滿洲—日本—アメリカ—カナダと轉々として生活してきたので、日本を戀ふ心が人より深いのです。それ

に沈み、青紫色のガソリンの色と香とサイレンが混沌として、街道にひろがつてゐる。
　××の充足を生活の基本に生きてゐる彼等は、幾日かの選擧事務所の鑵詰生活に、×囊を取り去られた兵馬のやうな、生氣のない灰色から蘇る爲に、直線の帶を流したやうな縣道を故意にさけて、蛇の脊のやうな遊廓の街道を迂回して行く。
　格子の內に女の裾がひら〱してゐる、彼等は腦の中で若い女の體の輪廓を想像した。自動車の震動にむづ〱した××が腰のあたり迄這ひ上つて來る。彼等はそれを抑制しやうとしたが、理性に本能が殺されて本能が露骨に駈け廻つて來るばかりだ。最後の一臺は進行を中止した。
「まあ、いらつしやいませ。」
　女將は嬌聲を吸取紙のやうにひろげた。やがて鏡の中に蒼白い五つの顏が浮び出した。靜香は鏡の中で昨夜の客の記憶を忘れやうと努力した、憂鬱から遁れる爲には記憶を忘れるより外に道のない生活だ。土面を這ひ廻つてゐた砂煙が向ひ側のクレオソートを塗つた塀に打ち上げられ、格子の間から怒濤のやうに渦卷いて來る。砂煙に曇る鏡、鏡は彼女等の表現だ。

　二階の座敷の支度を彼等は階下の十疊の一室で待つてゐる。彼等にはこの遊廓が食慾と同樣に金さへあれば何時でも充すことのできる實に有難い制度だ。靜香の相手は一昨夜の惡相面の所謂る顏なじみの男である。
　樓主の脂の浮いた顏も並んでゐる。
「…今夜組合の事務所で決定する事になつてゐるのです。」
「それぢや今のところ具體的の話になつてゐないのですね」
「輿論百出で昨夜は散會したのです」
「どうです、秋元君の爲に一つ盡力してくれませんか」
「さあ――」
　靜香は男と樓主へ視線を走らせた。
　樓主は先年の選擧時に握らせられた幾枚かの紙幣の生溫い手ざはりの記憶を掌中に蘇がへらせてゐる、男は百圓紙幣を一枚樓主の手に渡した。
　樓主の顏面の均齊が雪なだれのやうに崩れ始める。
（腐つた生肴と蛆との存在だ）靜香は苦笑を嚙んだ。がそれは默殺の苦笑ではない。
「そんなことが知れると、選擧違反で起訴されてよ」

だからこそ、なほあちらの同胞の慘めな姿をたまらなく感じるのだらうと思ひます。私の幼時―滿洲―に私の最大の希望は、キモノの八つかけに、赤や、黑でない色をつけて欲しい事でした。貧しい私はいつも慘めな姿で通學して居たので、若い緒方といふ先生から極度に憎まれ、
「林…私の舊性…は汚たないから土橋…ブルジョアの娘…とならんではいかん」と一番後に一人ぼつちでならばされました。其の頃、鳥目で黑板の字が見えなくてですから成績は中以下です。勝氣の母は不良の成績をとつてくる子供を口惜しがりました。五年の頃、裁縫のキレがなくて每日持つて行かなかつたら先生から右の頰をひどくなぐられて。買つてもらへなかつたのです。學校の歸途、公園の中で泣いて〱暗くなつて歸つた事もありました。母は結婚してから死ぬるまで、裁縫…內職をして生活した人、父は善良なが、無智な酒飲みです。母の實家は、村一か二のブルジョアですが母はちつとも苦しい生活を打ち明けなかつたらしいのです。母の最大希望は、私の女學校入學でした。私が十五の年に日本へ歸へつて、

やさしい言葉のかげから二人に投げた鋭いメス、二人の顔面に波のやうな動搖が走る。

「莫迦な、勘定のさき拂ひだよ」

荒い呼吸の中で男は脣を歪めて、曖昧な表情をした。無腦者視して、彼女の網膜を鼠色で蔽うとするずうずしさ（それぢや、何も狼狽へることがないぢやありませんか）靜香は腹の中でそんな事を云ひ乍ら、意志と反對に視線を男から離した。

「干渉がましいことを云ふものぢやない一時間一圓八十錢で賣却されてゐる身體だよ」

樓主の言葉はロップのやうな束縛だ。

風のまに〳〵隣の同輩の涙の潜んだ××が流れて來る。靜香には隣の客の動作がフイルムのやうに想像される。彼女は自分の體内に駈け廻つてゐる熱湯のやうな血液を感じた。

（心まで賣つてはゐないよ）

「金錢問題を除外しても違反行爲ですよ」

靜香は冷笑を室一杯に擴げた瞬間、男の巨軀が弓形の肋骨に向つて崩れ、呼吸が爆發した。同輩の愕聲が天井裏に渦卷いた。男の巨軀の下でくわつとした怒憤が壓し潰された肋骨の下から込上がつて來る。全身の力を男の兩腕に傾けたが、漸次それが苦痛の抵抗の藻搔になつて來るばかりだ、右鼻の柱横から左涙管にかけて錐で穴をあけられるやうな痛さが感電したやうに走る、靜香は男の耳元で警笛のやうな悲鳴をはり上げた。

翌日――

地方新聞社の社會部はその日の最大收獲として原稿紙とペンを飛ばした。輪轉機は間斷なく吐瀉を續けてゐる。

秋元派上古某、森田某、石井某、池上某、竹内某の五名は翌日午後一時頃××町K遊廓深水樓へ打ちつれて登樓、同樓抱娼妓靜香外四名をはべらせてメートルをあげた揚句、樓主覺治に金錢を渡し投票を賴むや、傍の靜香がそんなことをしては選擧違反に問はれると注意した爲、前記五名はすつかり激怒、上古某は矢庭に靜香をなぐつて三週間の裂傷を負はせ、殘りの四名も亂暴狼籍を働いたのであるが、靜香は憤懣押へ難く同夜前記五名を暴行選擧違反として告訴したので、關係者を召喚取調べ中である此取調べの進展につれて意外な方面に飛火する模様である。

（十五日夕刊記載）娼妓靜香の投じた一石の波紋は今底氣味惡くひろがつて來た。

母の實家から女學校の三年に入學した時、善良な祖母は佛壇で一人で泣いて居ました。女學校二年間の生活、其處でもやはり貧しい者は慘めです。四年の時、從弟の一人から社會問題等を教へられて、私は學校の本などちつとも讀まなくなりました。卒業して小學校教員、事務員、看護婦をやりました。十九の時結婚しました。ほんたうに幸福らしい生活はそれからでした。良人はブルジョアの子息ですが、家には居ないんです。二人の結婚から來る迫害……身分の相違……から逃れて、一九二五に渡米しました。放浪五ケ年、得たものは一人の愛兒だけです。然し五ケ年の生活は、無駄ではありませんでした。私達の女人藝術がどうかよくなるやうにと、いつも話して居ります。內容を低下する事なく、もう少し柔かい方面に、進出すると讀者になるけれど、とこんな意味の事もよく女性の方々から聞きます。高級勿論必要です。然し一面賣れる事も考へなくてはならないと思ひます。私のやうな下らない人間でも、アメリカで雜誌も出した事がありますので、色々と「女人藝術」の爲に、友人と話し合ふので御座ゐます。

廻らぬ蓄音機

一圓八十錢の花代の前には身體まで心よく捧げねばならぬ世の底、金の奴隷階級に屬してゐる彼女だ、譬へ毆られたとはいへ暴行から選擧違反の罪に大の男六名までも警察へ拘引させた腕前は氣持よいまで凄味をおび、彼女の投じた一石の爲に秋元派は如何に多くの傷持ちに氣をやましてゐるか、わからぬことも事實だ。

今、彼女は自らの權利である娼妓名簿削除を申請し、貸屋の狹い一室で氣焔をはいてゐる。――娼妓だつて人間でせう、一圓八十錢の花代を貰つてゐても主張する時には主張しますよ、公然と投票を買收してゐるあの厚顏、それを詰問すると毆つたのです。あんな保守黨の政友會の馬の足の蹄のやうなものや犬などに毆られて、腹のむしを押へ切れず懲してやる爲に思ひ切つてやりました。――自由廢業については、――××の仕事は民衆の保護、社會共同生活の確保なのに、事實は資本家擁護ですねえ、先にも一度廢業しやうとした時だめでした。今度は、告訴と同時に申請したのでどうやら目的通りにゆきました。――と彼女は叫んでゐる。生意氣な女、おもしろい女、侮辱、興味、聲援の渦卷の中に平然として自分の步む道を考へてゐる。

朝である――

空色の空氣の底に雜然と拉列した、犬小屋のやうな陋屋の屋根が崩れかゝつてゐる。債務決濟の請求の、機關銃の亂射のやうな恐喝を靜香はさけてゐるのである、が彼女の告訴によつて勃發した違反に、刑事の兩眼の、殺人光線のやうな放射に大恐慌を來して、彼等は機關銃の發射を昨日から停止して了つた。不安のどん底に沈んだ遊廓の一角が蜃氣樓のやうに、今、靜香の視野の中に浮び上つてゐる、嘲笑と一緒に或るものが電流のやうに靜香の全身に奔つた。

（貪慾な樓主の爲に十四才の春から靜香は無鑑札で××を××で賣却してゐたのであることを附記して置く）

新潟　澤山千代美

健やかな「女人藝術萬歲」を申します。私は小學校を卒へたきりの十九歲の女です。明けても暮れても年中田園に働く一勞働者です。ともすれば、紡績か女給でもして家內を養なはなくちやならないのです。こうした生活の中より五錢十錢と小使錢をためて、やうやく「女人藝術」を讀む事が出來ました讀むと云つても朝は四時起、夜は八時頃やつと、夕餉がすむのです。それから十時か十一時頃迄も、讀むともう眼　つかれて見えなくなる位です。村にはまだ書物一册讀む事の出來ない儚ない生活を續けて居る人々が、どれ程有るかしれません。

伯林　松下　文子

三月號の「女人藝術」頂きました。伯林片々を上せて頂きまして誠に嬉しゆうござゐます。破れたドイツから新しく建つたドイツは、今こそ行進のさい中と存じます。大戰後當時は、言葉だけの新ドイツであつたでせうけど、今こそほんとに立ち上つたといふ感がござゐます。色々な方面に於て、世界の明日を指示して居ります。殊にその道德といひませうか、日本では盛に風俗の事も關渉してゐますが

「ね郁子、豐公が蓄音機をきかしてくれつたから、俺らあ、今晩來いといつておいたよ」

兄の泉は、日焦のした、たくましい手で膝についた土を拂つて、緣の端に腰をかけた。

南向の病床に、七月の太陽が強く庭のブドーの葉に直射して、物憂く上げた郁子の顏にみどりの濃い影を落した。

郁子の細のやうに細つた二つの腕は、粘土細工みたいに無光澤だ。

ゴム風船のやうに彈力のある聲で、いつも食卓を賑していた健康だつた妹とくらべて、あんまり間隔のある今の姿をみて、憐憫の情が泉の顏面を横切つた。

灼熱の太陽が、遠く地平線下に沒して、涼風が、切り藁の所々に出た荒塗の壁にあたつてはねかへる、冷たくなつた襁褓がハタ〳〵と雨戸を打つてゐる。

蚊遣火の煙が、土蜘蛛みたいな地をはふ時余韻を孕んだハワイヤンギターのレコードが響いて來た。その强い音律が病的な彼女の聽覺に、甘い興奮を呼び起した。

大澤環

永遠に平行線を作つた二本のレール、アスファルト、キルク草履、プラタナス、オレンジエード、ビルディング、ダム、等々。

彼女の頭腦には、電話交換臺を焦點に、都會の交響樂が線香花火の如く燦然と開いた。

「オイ、交換手、聞えないのか」

森と呼ぶ職工上りの社員が、鷄のやうにはげ上つた頭髮をやけに振つて、幅の廣い濁つた聲で吐鳴り立てた。

「モシモシ、モシモシ」

感じない。

「モシモシ」

レシーバーを持つた手が、むれた空氣に汗ばんで無感覺だ。

突然、交換室の横の硝子戸が開いて、ふやけた顏がのぞき込んでゐる。

「何をボヤ〳〵してるんだい。――何に、感じないウソつけ、感じなけりや川北を呼んで修理してもらへばいゝぢやないか。何をしてるんだい。」

巻いた言葉が彼女の眞向から、打ち下された。やにくさい息が無遠慮に嗅覺をなぶる。

こちらは全く面白うございます。青年青女は好きな事をしてゐます然しその善惡の標準は、只健康を害するか、否かにのみおかれてゐるのですから、面白うございます従つて、スポーツが盛んで、一般向でございます。色々面白い生活を御知らせ申上げたく存じて居ります。明日の日本の生活でもありますから、是非書き度いと存じて居ります。先生の御言葉にならへば、あんぽんたんの生育ちを、面白く拜見させて頂いて居ります。

天津にて　笙千鳥

玄海を出る頃から雨となり朝鮮の島々を見る事も出來ないで霧の中を船は通る。プウ〳〵吹く警笛は五臓六腑へしみわたりエンヂンの音は小キザミに體内へ響く。澎海は大荒れ、ベッドにしがみついてベロナールと健胃散をチャンポンに口の中へ、ほうりこむ。獨り旅だから介抱してくれる人もなしつく〴〵情けなくなつた。一昨年のたのしさを思ひ出してゐます。それでも白河をさかのぼるやうに此頃はなつたので樂しみですが、フラ〳〵してゐるからカンペンに出る事が出來るかどうでせうか。それでも晩には家にかへれると思ふと樂しみです。

ジージー

本局からの感應が、直線となつた聽覺に突撃してくる。耳が引きつる樣に痛む。

白いランプが、暗夜の町を疾走する自動車のヘッドライトのやうに點滅する。

無表情な黃色い手が、左右にゆれると、コードが種々の對角線を描く。

「北の四〇五〇番ですか

獨特の鼻にかゝつた一列の音聲が、應答と共に踊り出す。

三越から十二時のサイレンが、不氣味な余韻をのこして、胃にしみこんでゆく。

遊戲室から、ピンポンの玉がはねかへる音が、審判官の濁聲と混同して流れる。充血した幾何もの目が重りあつて光つてゐる。

アルミニユームの辨當箱を開くと、昨夜市場で買つたイワシの味噌漬が、四つ奇麗に並んでいる。甘つたるいイワシ特有の香が、益々食慾をそゝる。

十二時から一時迄の正規の休み時間も、電話交換手には、何んの意味も持たない。

長方形にぎつしりつめた飯が、尖つた角から崩れかけ、皆無になるまでには幾度となく箸のかわりにコードを握つた。

「話中です」

切れ〴〵に尾を引く話中の信號が、心よい顎下をくすぐられる樣に、其の觸感は微笑を誘ふ。

「オイ、交換手、東の〇〇〇番はまだか。白粉ばかり塗らずに接げよ、

白粉を塗ることが、電話を接ぐことゝ何んの關係があらう。

「お話中でかゝりません」

グッと込み上げて來る、やり場のない憤怒を、唾液と一緒にのみこんだ。レシーバーを通つて無興味な言葉が、鋭く神經をさす。頭はます〳〵みだれて、劍銑をさしむけあつた戰場みたいだ。

二年ものこの長い生活で、彼女は彼女自身の姓をきかない、毎月二十五日の給料日には五二八號。工人番號で呼ばれた。

鐵柵の奧にうづくまつた囚人みたいだ。

一間外の世界でなんと呼ばれていたか、自分自身の名さへ、無意味だ。

そうしてやつと自分の體にとりもどした時何が報いられたか。

失業――劇しい神經衰弱――病床

線香花火は、はるかな大空に向つて、無感情にくつきりと弧を描いて散つた。(終り)

聯盟支部記

京都　岩田敏子

今回私たちは左の決議を致しました。

一、聯盟員の資格

眞實に婦人意識をもつて自發的に集る人のみの會にし度いのです。こう云ふ人はきつと聯盟員としての責任を感じてゐて呉れるでせうから、

一、例會の事

例會には必ず出席出來ると云ふ自信のある人。

一、聯盟の責任者

聯盟の責任は聯盟員一同が持つこと。例會樣式は主催者の趣味に依つて種々異る筈。

右の三事項に異議なき方は更めて入會希望をお申越下さい。

―(四月二十三日)

大阪女人聯盟支部

四月二十九日午後一時半、大丸呉服店六階會議室に集まつて、優生相談所、相談主任柴原浦子氏から「產兒制限」について色々お話を伺ひました。

戀のうた

日本で一番大きいといふ雜誌か

黒いDRESSの女

和田節子

ミスター・オホタが、私の兄に宛てた手紙を開くと――。

『ミスターF君。今日、しばらくでニッポンの空氣にふれて、皮膚が悶へてゐる。

俺の胸は、蒼空をとぶツエペリンよりも壯快だ。違ふ。北極探檢に出懸けたアムゼンの心臟よりも悲壯な鼓動が漂ふ。

それも、その筈だ。五十日目で、ジヤガイモ倉庫から解放されたからばかりぢやないのだ。

――素敵！　北歐五月の白夜。夜光蟲の黑い海。それをめぐるキヤフエーの灯。NG丸の乘組員が醉顏をほてらしてゐる時。

本船、アントワープ港。一週間臨時碇泊ガラス、鐵材、飛行材料を積む事。

と、事務長がボールドに書終るのを待つて、錨を下した。

俺達は一ヶ月目で、陸地にありついただけに、飢へきつてゐる臟腑よりも、女の臭ひがなつかしくて、ジンと來るのだといふ彼奴等……仲間は街に流れてゆく、その足取を、ちつと甲板で見てゐたが、ふところの淋しい下級船員達は「女を買ふ」ことに節度しなければならなかつたので俺は、大急ぎでベッドにもぐりこんでしまつた。

船尾では、起重機のチエインの切れる音がする。ひしがれた蛙のやうな聲で、テイテイナを、ふいてゐる内に寢入つたらしい――。

夜、十二時。

シエルト河口十三哩のカフエーの灯が、白夜の内に明滅する。

鹽漬になつた、俺の鄕愁は黃色い呼吸をしつづけてゐたのだが……行かふ！　街に、アントワープの街路に！だが、もう夜中だ。

灯はギラ〳〵きらめく。

ら餘技の歌か詩をよこせと懇望されて、一夜よみいでた、えせうた、翌日訪問された記者、モジ〳〵と、あんまり激情で……クスクスクァあちらもこちらもみんなが笑ふ。では「眞ごころ」といふ題にしたらどうでせうといふと、なるほど「眞心」は國粹です。では「戀」は不粋なんですかなんて――

白粉を
顔にぬればとて女とて
赤きこころは
赤き血は燃ゆ。

あざやかな
この紅の血をもつて
誓文血判
命もいらぬ。

眞夜中は
人の咎めもあらされば
思ひつゞけてさまたげもなし。

この胸に
心火點せし戀人よ
そなたのために
しんに戰ふ。

鳥打を片手ににぎつたまゝ、波止場におかれてある積荷の上を飛越して、稅關前の、貨物列車を橫ぎつて狂氣の樣に灯を求めてゐる俺。向ふの海で星の光が、NG丸の腹を、赤く見せた。霰の立罩めたペヴメントに、重い足をひきづりながら、ガサガサなココロに思ふ存分に夜氣を吸つた。

町の入口の一番目のカフエーの扉を引くと――正面にはストーブの火が燃えて、マドロスパイプをくわへたまゝ居睡りしてゐる太つちよの主人とオパール、靑、赤、藍、黃のドレッスを胸から掛けて長い、ストッキングの綻びを繕つてゐる五人のウエトレスが居るぢあないか！　女達は調子はづれのマルセイユを唄つてゐる。

柱の時計は、十二時五十八分。

唄が止んだ、女達は俺をチラットみたが、瞳の內には嘲笑を含んでゐて、亦唄はつづけられてゐるんだ。

ねずみ色の羅紗服に、鳥打では、誰が見ても、マドロスにしか見立てないのだらうよ。俺はいつもの樣に「アキラメ」を感じた。妙に「アキラメ」に馴れた此頃でも、やつぱり女を釣るによい工風はあるまいかなんて思つたがね、なにしろアハ…。

俺の心は嵐より靜かで、心臟は居睡でもしてゐたに違ひない。なぜ、俺は其處を出なかつたのだらう？

すると、時計の下のソフアの影から、赤一人の黑いドレッスを着けた女が、つか〳〵寄つて來て

「ウイスキー、コニヤック？」

おど〳〵した態度はエンゼルの樣に美しかつた。云ひ馴れないアクセントは、微笑は、たまらなく俺をひきつけた。

「コーヒー、ワン」

女は大きくうなづくと、すぐに去つてしまつた其時キチン臺の主人はパイプを床に落した音にめがさめてパイプを拾ふと、いそいで姿を消した。女はコーヒーを卓子におくとすぐ卓子を挾んで腰掛けた。

コーヒーは憂鬱にドクロを卷いて、おれの感觸（タッチ）はコーヒーの匂ひに捕はれてゐた。

「あなた、ドコの方？」

「ノーン」

俺は知らん振りをしてしまつた。

誰が見ても、日本人か？　支那人だらうに！

女は、俺の頰を輕く指先でつついて笑つた

まだ餘白があるのださうです。かうなると、まるで、眞打ちがくるまでつないでゐる寄席（よせ）の前座のやうですね、グッとくだけちやつて、こんなのはどうです、女人藝術誌上にけしからんと叱らないでください。節をつけていつてごらんなさい。

ちよいとこんなことはやらせやうぢやないの。
みイどりさん大事なハートくれなゐ？
あげましよよ
あたしのハートは
眞紅です。
優子さんあなたの眞ごころくれないか。
あげましよよ
あたしのこころは
赤いのよ。
素子さん、あなたの心が知りたいの。
あかンべい
いイやなこつた。
おとといこい。
ブルジョアさん、紅いいいべべ買はないか。
きらひかい
お前あかにし
垢だらけ。

メニウーの裏に、男と女の人形の繪を書いて突出しながら、

抱いてゝれない？」

「ノーン」

「ね！　いいでせう、二人は」

思はず大聲で、歡喜（よろこび）とも悲哀（かなしみ）とも、つかない叫びを發したのだ、日本語で、

「フフン、つまり、かうしたもんさあ！」

女達は、一齊に視線を注いでくれたが、

「キチガヒね」と、さゝやいてゐるらしい。黑いドレッスの女は、肩越しに、おれの耳に強く接吻して、

「ね、いいでせう」

無中で、うなづいてしまつた！

「いくらあればいいのだね」

「四十法」

手先には冷めたい銀貨が、ポケットの隅でかさなり合つてゐるのにふれた。

「あゝいいとも」

そこで約束のウインクをした。

「本當に！」

時は、一時三十七分。

「行かなくつて、二時で閉まるの」

女はお魚のひれの様に右左に脚を動かして、ズボンの上から合圖するので、

「あゝ！」

俺は勘定をすませて立ち上ると、女は仲間に「お休み」といひながら、いそいで從いて來た。

「ね！　こゝ駈けて下さい」

女の辟と一緒に横町に駈けこむんだ。女は無鑑札でないかと氣付たが、二人はその時POといふ安ホテルの地下のサロンで冷めたいレモナードとパンを取つてゐたのさ。

ボイーに渡された、五六號の鍵と蠟燭の一本で薄暗い階段を殺氣の含んだ夜風を、防ぎりながら、五階迄あがつてゆく――

途中――

俺達は女を試す。女に試される事になつてゐる。女が大切にしてくれるか？

どうかといふことを！　嫌なら、女は疲かれた風をして、

「あたな、小遣ひ、もつと欲しいの、でなきあ！　ワタシ」といふにきまつてゐるからさあ、その時、女は男を嫌つてゐると思へばいい。だが、黑いドレッスの女は快活についてくるではないか！　占めたものだ！

五十六號の鍵穴にカギを入れて部屋をみるとまつくらだ、ロウソクの灯で照らすと右手にダブルベッド、小さいソフア、左手には

風の話

小さな窓からも初夏の風が青く吹き込んでくる。諸國から吹込んでくるレコードの斷片。

×

…記憶は腦の中に電氣が貯藏されることによつて生ずる―といふ學説をフイヤデルフイヤの米國哲學協會でクリーヴランド州出身のクライル博士が發表した。

博士の説によると、この電氣の貯藏は神經を通過して、腦に永久に消滅しない鑄型（記憶）として刻みこむ電流の微細なる分子によつてなされるもので、かうして生じた記憶は、連結部に障碍が起つて、記憶が不活潑にならざるかぎり消失しないものだといふのだ。この學説は凡ての印象が永久に腦に銘記される事を意味するもので、從つて、教育、個性なども、肉體の常態――換言すれば、電位によつて定めるものであるといふことになる。

これは大なる發見であるが果してどうか、詳細の報に接しなければと、我國の學者はいつてゐる。私は、私の説として、戀愛も――

鏡、洗而所、壁には裸體畫が、ピンでおさへてあるといふ具合だ。

女は俺の靴の中をきれいに拭ふ、白い手、なれない手付、それは〳〵ナイーブに見へる彼女。

俺や、俺達の仲間の者は、マドンナの様な奴には性慾は感じないのだからなあ――。女は、それが濟むと木綿のワイシャツを着て、ベルギーの民謠に合して、踊つてくれた。

その時、女の素性をなぜ、俺は洞察することが出來なかつたのだらう。

「あなた、ワタシ嫌ひ？」

「ウフン」

わけのわからない返事をした。俺はシーツにくるまつて默つてゐたかつたらしいね！女は急に泣き出しさうになつたので、

「ね！　お前、きつと四十法やるよ、間違ひなく……」

俺は渡して終へばと思つて四十一法出して渡すと、瞳を閉ぢてしまつた。ニッポンに殘して來たR子の顔が飛ぶ。

女は四十一法を、床の上になげたらしく、ガチンといふ音が耳についた。

占めた!!

女はたう〳〵泣き出して、「ワタシ、あなたから、只いたゞくわけありませんもの……おかへししますわ」

「いい！　取つておき給へね

俺がそれを云ひ終ると、烈しく、おれの身體をゆすつて、哀願する様に、唇の上に自分の頰をおしつけた。

俺は、飛起きてぐつと、彼女を抱き寄せたR子の幻影を！　嬉しさうに見上げる女の顔に、吸ひよせられる様にしてゐた。

俺の心は、亦、素直な戀人の心に蘇がへつた――後は書くまい。

外は、NG丸の灯が見へて、きらめく……

朝六時――

船に歸つて、サロンの掃除、野菜の積込やら、シャツの洗濯に追ひ立てられてゐる。目のまわる程忙しいお蔭で、女のことなどすつかり忘れてゐたが、二日目の夜が、アントワープの港を包むころ――

朝からの糠雨で又、夕宵の灯は魅力をもつて肉迫してくる。女の瞳に吸ひ込れるやうに船を出て、一番目の扉をひいたが――

二三人の客がレーコドを掛けて、飲み合つてゐるばかりで、女の姿は見へなかつた。

七時、俺を嘲笑した女達は出揃つたが、黑

惚れあふのも、一つの電氣の交流感電だと思つてゐるから、この米國博士の說に興味をもつ。そしてまた、電氣が神經を通過して、永久に消滅しない鑄型を腦に刻みこむといふのを、印刷機械を見たりレコードの電氣吹込みを見たりしてゐるので、ホントだとわけもなく感心してゐる。ラヂオがあるほどだから、聽く機械さへあれば、戀人が最後に叫けんだ絕叫だつて空のどこかに漂つてゐるに違ひない氣がする。米國の博士よ、早くさういふ聲を聽く方法も考へてください、私の生きてゐるうちに！

×

文戰の今野賢三氏の新著 プロレタリヤ戀愛觀――いかに新らしく戀愛すべきか？――（世界社發行、定價八十錢）を昨夜一息に半分ほど讀んだ。明鷄が鳴いてゐる、もうよさうと思ひながら、本誌に載つた高橋鈴子氏の「こひぶみ――若き日本の女性の場合（小見出し）と「復活」のネフリーユードフとのあたりまで讀んだ。この書は新らしい戀愛のゆく手を差示さうとする戀愛と、今までの歪んだ戀愛の諸相をハッキリと知らせやうとしてゐる。その親切はなにからくるか――今野氏はその序

いドレッスの女だけは、八時、九時になつても姿を見せなかつた。もみくちやな感情が爆發しさうだ。求めてゐる者が、求められない失望を、ぎつしりつめこんで、光の舗道を歩き續けてゆくより外は、女を見出せる方法もなかつたからだ。「アキラメ」が、俺の全身を占領してしまつた。

町の中央の公園の奥から流れてくるコーラスのメロデー、多分オペラがあるのではないかといつてみたんだ、船に歸つても寢るばかりだし、オペラでもと思つて、札を買つて、座席に着いた。

一幕目が濟んで二幕目。

四人のダンサーが、ベルギー民謠にあはせて踊つてゐる。昨夜女の教へてくれたのはあの唄だ、あの踊だつた。と、其の瞬間――フツトライトに照された舞臺には、リザの姿が映つた！ 桃色の短かい薄絹の舞踊服を身に飾つて、踊り續けてゐる可憐な彼女は、黒いドレッスの女リザに違ひない。

リザと叫びたかつた。どうしてリザに知らしたらよかろうか？

手に持つてゐた蛇目傘を振つて見たが駄目！ ぢり／＼しながらも、呆然としてゐたがこらへ切れずに傘を、七分目位開いて、盛んに振ると、リザは氣付いたらしく、ウインクしてくれたので、やつと胸をおろし、目をパチパチしてみせた。成功？

無中で小舍を出て、あたりをウロウロしてゐると、アンコールの聲がして、幕がドりたらしく中がさわがしかつた。こんな所でも、君に見せたら笑ふだろうが――その時肩にふれたものがあつた、振りかへると、元の黒いドレッスのリザだつた。

「リザだつたね、うれしかつたよ」

リザはぐん／＼手をひいて木蔭に來て、

「すぐ逭げてくれない。でないと！」

あたりを見廻してやつと云ひ終ると、

「リザ！」

と呼ぶ太い聲が小舍の裏口にしたので、驚いて、リザの手を引いて表通に出た。そして自動車を止めて、

「フールスピード」と賴んだ。

屋根裏――

天井が三角に尖つた息苦しい樂園が此處。

ベッドの外に鏡と洗面所しかない粗末な部屋に逃亡してゐたのさ。三角に切つた窓からは船が見へる。女はぎうと胸に手を組合せて

「傘みた時はうれしかつてよ」

でから言つてゐる。

一過去において身にふりかかつた戀愛問題のために、惱むことの多かつた私は、今なほ、さうした青年時代の氣持で、戀愛に就いて考へることが多いのです。それだけに何等かの研究的なものを公けにしたい願ひを、昨年から抱いて居りました。幸ひに今回、その機會を得たのです――

階級社會における性的危機の深刻化は如何にして解決されなければならないか？――」

で、その內容の一端に、

戀愛の美は、どんな場合でも絶對ではない。その個人の、主觀のみが絶對である！」

そして、その引例はかなり豐富である。

日本人の、早い、戀愛生活の表現として、萬葉集のなかの歌をのぞいて見ます。

敷妙の枕を纏きて妹と吾と寢る夜は無くて年ぞ經にける

結べる紐解かん日遠み敷妙の吾が木枕は蘿生しにけり

この歌は、卒直な戀情そのものとしての、戀人との性的生活――性的欲求の發現がこの歌の全部であり、精神的な意識の發現もこの歌の全部だと引かれてある。

「もう! おれは、あの晩でお前と、サヨナラした筈だつたがなあ」
獨語の樣に云つた。
「お前は、ばかにふるへてゐたぢあないか」
「こわいんですもの」
「どうして? なにが!」
身を慄して口を開いた。
「ドイツで生まれてね、小さい時、ママと、ベルギーに來た頃は、大戰の最中だつたのよ踊手になつて、オペラに出るやうになつたのが七つの時よ、それからママはある年の若かい男と一緒になつたのが、今のワタシのパパなの……だけど、十三の春、ママが死んでしまつてからも、ワタシ、オペラで働いて、パパと暮してゐるの――」
別に氣に留めることもないことだのに、女は口に出した事を後悔した樣に、うつむいてしまつた。
「十四の年から、ワタシ、ママの代りにされたらしいのよ、毎晩、夜になるのが、怖しかつたわ」
俺は小首をかしげた。
「リザ、お前は幾つ?」
「十八なの、十八なのよ。でね、オホタ、地震より怖くて、パパの腕からのがれる爲にオペラが濟んでから、カフエーで、あなたを誘つたのが最初なのよ。四十法で、パパをだまさうとしたが駄目だつたわ、皆計畫がはづれたの、前のより太い鎖でしばられてよ」
「先刻の髭は、パパかい!」
「え! さうよ。あの晩歸られなかつたでせう。丁度町を歩てゐた所をパパに見付かつてしまつてね。氣狂ひの樣にひきづつて家につれてゆくの。そして、色々聞くから……」
「云つてしまつた!」
「え! 我慢するだけしたが、四十法の出所を聞かれたので云つてしまつたわ「サケロチキウよ」ワタシ、こう叫んだの、パパは、「賣笑婦奴」と鞭で敲きつけてね「お前は何處を犬の樣にうろついて、男を捜してゐるんだい、さあ! 俺の命令をきくかつて」
「なんと云つたのだね」
「もう、パパの命令守ります。と云切つてやつたわ、どうせ、滅茶苦茶なんですもの、どうなつてもいいと思ひ切ちやつたわ」
女は自棄氣味になつてゐる。
赤い唇をふるわしながら、好奇の瞳を輝やかして語るこの美しい女は、荒々しい淫虐者との間に構成された立派な、一個の被淫虐者になつてゐるらしかつたのだ。

細田民樹氏はこの書のはじめに深刻に社會問題的な「性的危機」にある今の若い人々に、最も根本的な示唆を含んでゐると言ひ、平林たい子氏は、この本は、日本の社會事情を觀察することによつて書いた本であるゆゑ、日本の性問題を最も正しく理解してゐると信じるといつてゐる。
あまりに感能的な若人に、正しきプロレタリア精神を、正しく味讀してほしい。(山ノ木つか)

小花瓶

お通夜の眞夜中におたけさんといふ死人が生返つたのでせう、ドロンをきめてしまつた。御親戚一同ウト〳〵した間なので、目をさましても、顏を見合せたきりパチクリパチクリお醫者さんはいふ、「一旦死んだことは確かだ、慢性神經衰弱してゐたから一町位がセイゼイだ」だけど、さて見當りましたともなんとも、其後新聞紙は報じてゐない。福島縣郡山市の出來事である。

×

「ね！　オホタ、ドイツに、ワタシのマザーランドににげてくれない？　お願ひね」
リザはおれの胸に手を合せて甘へる樣に
「ドイツ、ドイツに、平和に歸つたドイツににげて頂戴ね」
俺が、脱船までして、ドイツにいつてどうなるのだらうか？
「リザ！　無理だ、そんな相談はね！　言葉も違ひ、樣子も知らない國にいつてどうする積りだ」
リザは首をふつて、
「大丈夫よ！　大丈夫だわ」
「地上のマドロスになつて、死ぬか！」
俺の頭の内はR子や、故鄕のことが、一ぱいかけめぐつてゐる。
女は哀しさうに睫毛をぬらして、
「オホタ、パパがおそろしいの、アンヴエルスがおそろしいんですもの……」
「わかつてくれなきあ、だめだね！」
「わかつてゐるわ。船はいつ出るの？」
女はぢれつたさうに、俺の胸に、頭をうづめて、あらく歎息した。
出發をいつまでも女に知らせたくなかつた
「なら、ドイツに、にげてくれるのね！」
默つて、ザリをみつめた。
「オホタ！」
たまらないといふ表情でせまつてくる蒼白い顔が、窓の月にさへぎられてゐた。
俺の居る間でもリザを愛してやらう――
可哀さうな女よ！
嵐の後の靜けさが二人を覆ひ、四つの唇は火花を散らし、二つの××は堅くむすぼれてゐた。
「愛する者へよ」
唇を唇にゆるしたことのないリザの無二の贈物が――外は、灯がキラ〳〵きらめく。
出帆の朝が來た――
四日目の太陽が、屋根裏に口笛を吹きながらおどりこむ。
俺は決心をきめた。アントワープ、最後の朝に別を告げることを！
三角窓から、六時に出帆するNG丸の甲板をかけめぐる仲間の姿が手に取る樣に見へる
五時四十分、準備の汽笛が曉を破つた。
スヤ〳〵寢りつゞけてゐるリザは、何氣なささうに心安い小守唄でも聞く樣に汽笛を聞いてゐるらしい。
二人の生活の最後の朝だ――そつと支度に取掛つたといふものの、支度といふこともな

家作十八戸、土地六十四坪、見積り財産三萬圓、品川製作所に二十三年間勤續、然して大崎町から選ばれて陪審員を命じられた某、空家が增し、家賃がへつたので現金のお顔が見たくなり、家作など賣つてゐたのではマダルコイ保險金とりの放火を思ひつき、我家作を燒いて入牢、四十七歲の分別男である。

×

これはまた、地の下にうまつた寶探しだが、慾心などあるべき筈のない和尙さんが、しかも、歷史的にも名高い奧州平泉の、あの名剎の和尙さんなのだから呆れる。八百年の昔藤原秀衡が、平泉一山鎭護のために黃金の雌雄の鷄を埋めたといふ傳說がある。猶其他にも莫大な寶物が埋められてある筈だと、そこで坊さんねぢ鉢卷きで利益折半の約束で、東京の某と結託、お寺のものを賣つては惡事だが、土の下のものは――俺のものだとはいはない、勿體ない勿體ない、佛さまの罰があたると！

×

頭が小型の電球位で、腕は親指ほどしかない小人が、しかも四ッ子で、ピヨコン〳〵〳〵と產れた。しかも女ばかり、ところは

い俺の事だし、五分もあれば出來る。波止場迄は三分としても、まだ十分はある。

起さうか？　起すまいか？　と迷つた揚句このまゝそうつと別れて行かう。――女よ！幸なれ!!　俺は、お前を幸福にする、何ものも持つてゐない。貧しい男なんだから、赦してくれ、亦會へるかもしれないよ――

再び、アントワープに訪づれる日を廻想してゐた。

二度目の「シーオフ」の汽笛が響いた。

三度目で出帆するのだ――

俺はレーンコートを女の毛布の上にかけて枕許に財布をおいて、靜かに扉を押した。女よ！　リザよ！　サヨナラ。

遲れたら、馬鈴薯倉庫か？　そんなことは忘れて一目散に、波止場に駈つけた時は、豫定時間よりも、五分すぎであつた。岩壁に立つてゐたボースンが大聲で罵しつた。

「オホタ、貴樣、一體、何を愚圖々々うろついてゐるんだい！　手前のために五分おくれたぞ！　いいか！畜生奴！　ジヤガイモと、五十日、ニツポンに着くまで同居だぞ、さつさとあがれ、野郎！」

丁度、其の時――

「女が、女が」

皆氣をとられて、その方に瞳を移した。

「オホタ、マルセイユに着たら、無線電信かけてね！ワタシゆくから‥‥」

と、言ひながら駈寄つてくるリザ！

「しやらくせい、アマ奴」

ボースンが云ひ終ると、瞬間、俺の肩に手をかけた。俺はぢつと、唇をかんで足を高くあげた――ボースンを蹴るために――。

そして、いそいでタラツプにつかまつて、船に上りつい時、後を振りかへると、ボースンがタラツプを、はづさうと手をかけてゐるではないか！ハツト思つた。

「女が、女が」と誰かが亦叫んだ。

三度目の「シーオフ」の汽笛と共に、船の左舷は、大きく右に廻轉し初めた。

一丈餘りある岩壁から河へ！　俺はリザを蹴とばしてしまつたのだ。

リザはレーンコートのお蔭でぽつかりと浮くと片手を高くあげて振りながら、何か叫んでゐるのに氣を取られてゐると、俺の襟首を誰かが、ぐつとしめた。

リザの聲が遠くでする――

と、いふ譯なのだ。いづれ、逢つてから委しくはなす――

二九・十二

ホノルル、お父さんは支那人、お母さんは土人。

×

泥棒と泥棒と泥棒ゴツコ、一人が龜井戸で刑事といふ男に現金百壹圓と銀時計二個を奪はれたと訴へ出た。よく調べると、この男よその家へコソにはひつたら、外から歸つて來た男につかまつた。その男が刑事だといつて、コソドロちやんの前記の品を奪上げたのだ。だが、まだ盜みもしない家で、持物を取上げられて殘念やる方なしだが、後暗い品物なので煩悶したが、とう〳〵堪へきれずに訴えたのだ。そこでその、上前とり刑事をつかまへると、これも僞でコソドロにはいられた家の主人だつた丁度目的があべこべになつたわけだ。

×

東京驛の主は大古猫ださうだが新築上野驛には茶褐色三尺ばかりの大狸、尻尾が二つに裂けてゐるのが最近おさまつてゐる。何しろ化されては困ると驛員は眉につば！話はちがうが鐵道省、各鐵道局へ「食堂のコーヒーは出す前に豆を煎ること」といふ省令を發した。外國人に不評だからだと！

◇女人聯盟へ御加入下さい!!

女人聯盟の發展はその後益々盛んで各地の讀者の皆様から非常な熱心をもつて加入の申込あり積極的に支持されることを表明して下さることは感激の外ありません。女人聯盟は本誌愛讀者を中心としてあらゆる婦人が思想境遇、地域、年齢等を超越して親密に團結し女性のめざましい社會的進出や向上のために何等かの力となりたい、將來は聯盟員のために研究機關を設けあらゆる方法によつて女性の親睦の綱となり智識の泉となる事を企畫してゐます。奮つて聯盟に御加入下さいませ。

一通信部 讀者のために通信の便を設けまた御感想などお寄せ下されば紙面のゆるす限り本誌通信欄に掲載いたします。

一講演部 本社には種々の方面の女性が多勢をりますから地方聯盟員の御希望によりましては喜んで講演に出かけます。

一質問部 東京における學校、職業方面圖書その他のことで御質問がありましたら調査の上お答へをし尙ほ交渉の便をも圖ります。

●投書を募る…聯盟員のみならずひろく愛讀者の女性から投書を募ります。從來も毎號創作や評論欄に新人を紹介してきましたがよき寄稿は喜んで掲載いたしますから力あるものをお送り下さい。

●本誌につきての御希望を…愛讀者諸氏の本誌に對する御感想は非常に興味深いものが多く集まりました。尙ほ本誌の内容及び將來に對しての御希望をどしどしおきかせ下さい。

支部をつくりませう!

五人以上の愛讀者のあるところでは支部を設けることが出來ます。支部と本社は特別の緊密な關係を保ち其他の通信、講演、本誌販賣等にもいろいろな便宜を得ることが出來ます。支部設置に就ては既に申込みや質問がたくさんありますが規定其他は追つて詳報いたします。

女人聯盟
加入申込票

住所

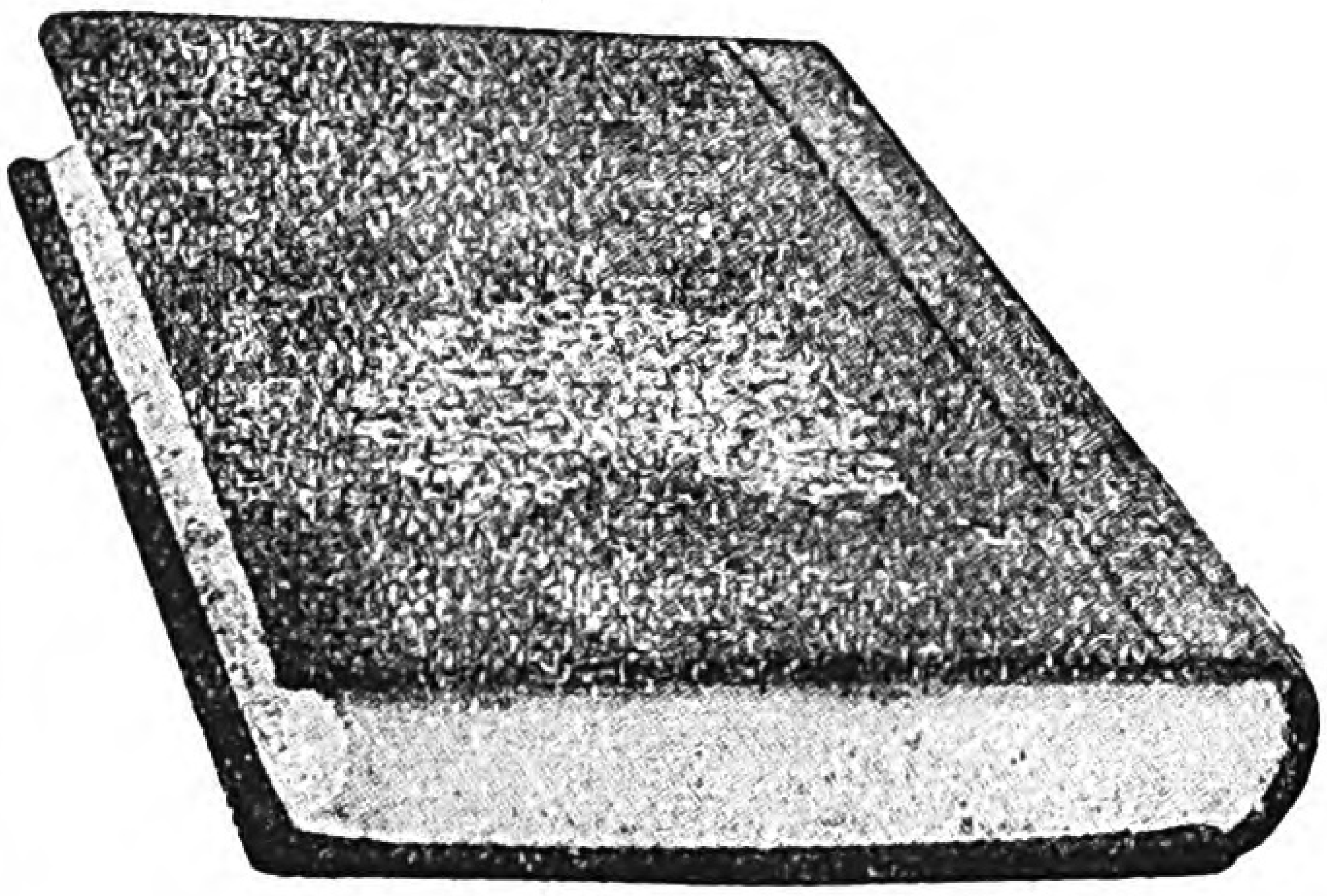
氏名

◇女人聯盟に就き皆様の御希望を御寄せ下さい!

時雨脚本集　第一輯

——ある時期を一轉機として、彼女らしい甦生が努められた。そこに夢の床から離れようとするものの苦しさと悩ましさとがあり、それを生き拔かうとするものの煩ひと惑ひとが來た。僕は彼女のこの憂欝を見て來た。そして彼女はかなり十分に内省と認識とに月日を費やしたのだつた。その效果はこの數年間に徐々に現はれ、若し、性格的な疳癖に、内なるものを傷けられることがなくば、今後自然な發展を示すことが出來るであらうと信じてゐる。此の集に盛られたものは、多くこの再生期——展開期の作だ。一個の女性が、いかに生活の望みと空しさとのすがたを見たか、光りと無知との交錯を見たか、ここに讀者の興味を繋けることは慥かに出來る——

三上於菟吉氏序



内容

ミイの生れた朝　暗夜
月に住む人　氷の雨
つくしの空　犬
業火の洗禮　手見奈
北國藥研谷　西の空

定價金貳圓
送料金六錢
本社處女出版の美本です

東京市牛込區左内町三十一
女人藝術社發行
振替東京七五八三
電話牛込一七八九



その時に

川元ゆなみ

草つぱだ
石くれだ
と思つてるかもしらないが
いつかの時に！
その時にこそ！
草つぱは刄となり
石くれは彈丸となり
奴らの頭に飛ぶだらう
わたし達の仲間は、みな
それを確信する。

赤の氾濫

燃えてゐる

私達よ

古川陽子

女々しい、イクヂがないと嘲笑され
あらゆる暴虐と束縛と辱に
齒を喰ひしばつて忍んで來た
私達よ！
今、支配階級は、資本家は
我々の生血をまで搾取しやうとして居る
武器は磨かれて居る。
私達よ
默つて默つて耐へ忍んできた私達よ
覺めよ、そして奮然と立上れ
同志の前に
赤い美しい血潮を捧げやう
迫れ！



たぎつてゐる
太古の前の宇宙の様に
我らの胸に永い永い時を
うつせきしてきた血の赤が
やがて、巨きな力に
波うちつゝ
金満家の黒い屋根に
氾濫するだらう
素晴らしく、物凄く
ひとときのまに。

朝の双景

朝の街に、
大八ぐるまを押してゆく
やせた女とその六歳の娘、
おなじ時に
デパートへでもゆかうかなと
あるおくさんは爪をみがく。

自由を
そして公然と武器を取れ。

五月の光り

五月の光りよ
射せ！
メーポールの下で踊り戯れて居る
乙女達よ
暴風が、怒濤が、遠くから押よせて來るのをお聞き
黄金の冠が――絹の踊り着が何の役に立つか
五月の光りよ
強く鋭く射せ
働くものゝ五月だ
我等の五月だ
大天に向つて
叫ばう
『世界の母我等』と――



石鹸になつた老火夫

堀川登女

ボイラーは唸つてゐる、その唸り聲の上を作業の機械の音が職工の鼻唄と絡み合つて時々泡のやうに流れた。ピラミット形に積まれた石炭の蔭には年老ひた火夫が腰を下してゐた。ドラム入りの脂肪が沸々と立てる湯氣の向側で汚れた作業服を着た男が掃き集めてゐる苛性曹達の粉末の故であらうか、火夫の眼はゼラチンを張つたやうに曇つてゐる、だが彼の涙腺は曹達の刺激にはあまりにも馴れ過ぎてゐる筈なのだ。一本は空氣、一本は蒸氣、二階へ這ひ上つたパイプの終點には鹸化釜が脂肪と苛性曹達の溶液を無限の熱度で沸騰させてゐた。液は粘々とキメの細い泡を、生きた絹布のやうにくねらせながら圓みのある襞を造つては壞すことを繰返してゐる。ボイラーの口唇が吐き出す眞赤な息の中で、弛んだ顔を悲しげにひき歪めた老人が熱度計の針を見上げた時、彼の凹んだ眼球から白い涙がスーと流れた。涙は頬の皺に湛まつて赤い火をキラキラと燃した。老人は頭一杯に鹸化釜の沸騰を思ひ浮べてゐるのだつた。

―俺は、俺はこの六十年の生涯を一體何の爲に生きて來たんだ。血を吐き身を削るやうな苦勞は只一人の息子の爲ぢあなかつたか、だが其の息子は、俺の血と汗で育つたあの子は俺の苦勞を石鹸の泡のやうにしてしまつた――

―近い內に不幸が來ますよ―

蠟燭の赤い舌に、浮み上つた笠竹と薄汚い脣――老人は二三日前見て貰つた人相見の言葉を思ひ出した。

―その不幸がやつて來たのだ―

ボイラーは唸り續けてゐる、老人の頬には涙が赤い火をキラキラと映してゐる。

Ｄ石鹸工場の近くには有名なＹ貧乏窟がある。油紙のやうな皮膚に、冷い硝子の注射器を顫える手で突立てる朝鮮人、昨夜の肉體勞働の疲勞を濃い白粉の剝げた鼻先に浮した賣春婦は、腐つた白瓜のやうに身體をぐつたりと汚れた蒲團に投げてゐる、生きてゐるのか死んでゐるのか瞬きすら忘れた病人の顏は、闇夜に白く浮んだ墓石のやうだ。壞れた間口と間口はこんな陰慘な室內風景を並べてゐる。錆びたトタン屋根の上で朝陽に湯氣を立て始めた襤褸は空腹とどん底の象徴旗かも知れない。溢れた溝水でじめじめした裏路(ろぢ)を、肋骨が棧のやうに出た胸をはたげた老人が、日向でも探すのかよろよろしてゐる。芋屋の屋臺店が甘さうな匂ひを立て始めると、雛のやうな足をした子供達が一齊に馳け出す。彼等は營養不良で色素を失つた脣に瘦せた指を咬へて、怨めしげに鍋の中でほつこり燒けた芋を見つめる。此處では十二三歲の娘が、勞働者や朝鮮人を相手に未熟な身體を賣つて、米代を稼がねばならなかつた。

石村老人は每日この長屋の前を通つて工場へ通つた。老人はこの前を通り過ぎる時は何時も無邪氣な優越を感じた、そして汚い裏路に向つて話しかけた。

「俺はお前達よりほんの少し金持と云ふだけで貧乏だ、俺の家はお前達の家より一寸優(まし)なんだが汚い。だがな、今に俺の息子は大學を出ると辯護士になるのだぞ、法學士だ、これ、おい素晴しいぢあないか」

云ひながら老人は曲りかけた背をうんと伸し、眼を嬉しさうに輝かせた。

―俺の息子はな―

之が老人の苦勞で埋つた生活を飾る只一つの金鵄勳章だつた。每日一度は必ず男工や女工を捉えてこの勳章を振り廻さないでは氣の濟まない老人だつた。工場の人達は俺が息子の爺さん、かう云つて呼んだ。老人は大好きな酒も呑まなかつた。何よりの誘惑である關東煮屋の繩暖簾の前は顏をそむけて通り過ぎた、息子の爲だ、この一事で總べての慾望を苦痛なしに精算してしまつた老人は何時もニコニコ笑つてゐる。

―息子が辯護士になつたら大きな家に住んで每日遊んでゐても甘い物がふんだんに食へると云ふものだ、さうしたら植木を造らう、俺の身の廻りは若い美しい嫁が世話して呉れる、へへ、、みんなそ

れ迄の辛抱だ—

貧乏な日本人と貧乏な朝鮮人の多いK街道裏で老人は大學へ行つてゐる息子と出來るだけ切詰めた生活をしてゐた。息子が一閑張の机に向つて讀んだり書いたりする傍で老人は工場から歸ると蜜柑箱を臺にして封筒張を始める、夜が更けて來ると火鉢に炭を入れてやりながら滿足さうに息子の横顔を眺めて老人は定まつて云つた。

「なあ創三、勉强も度を過すなよ、身體を毀してしまつたらなんにもならん　學校を出てもまだ一つ辯護士試驗があるからな—

息子は老ひた父の辯護士と云ふ言葉を聞く度に抉られるやうな氣がした。辯護士の準備なんかより以外に彼にはしなければならない仕事が澤山あつた。個人的な生活の安逸は既に創三の念頭から遠くへ飛び去つてゐた。

—まだ親父は何も知らない—

彼は輕い自責を感じる、或夜息子は云つた。

—ね、お父さん、お父さんが毎日通るYの貧民窟の人達は何故あゝなつたかつてことを考へた事がある？」

「ありやお前、怠け者だからよ、たまには運の悪い奴も居やうがな、皆前世の業が悪いからあゝなつとるのぢや、なんで又突然そんな事を云ひ出したのだ、お前は……」

息子は沈默した、彼は讀みかけの本に目を落した。

あと一週間も經てば正月—港に近いT町では千三百人の職工が怒りに突立つた、五十億圓の資金、世界の工場數廿餘、一日の生産高自動車百卅臺、相手はフォードに次ぐ米國の大きな自動車會社が、産業合理化で掃き出した二百八十人の兄弟達のために、解雇絶對反對を要求書の冒頭に掲げた千三百人の怒に顫える足は大地に突張つた。金網に圍まれた工場のモーターはその鼓動をひつそりと靜めてゐたが、彼等の心臓は點火されて爆發した。工場内の從業員大會から爭議へのスタートが切られるとK勞働組合が指導のタクトを力一杯振り上げた。

—公平なる市民諸君に訴ふ!!

電柱のビラは市民に呶鳴りつけてゐる、新聞記事は爭議、爭議に氾濫してデモの寫眞には旗が踊つてゐる。

其の日は宿明けだつた、昨夜の疲勞を癒さうとぐつすり一寢入りした老人が眼を覺した時、猫の額程の前庭に薄い陽が射してゐた。凍つた霜柱が白く寒々と光つてゐる、炬燵はほこほこ温い。

—もう一寸だけ寢てゐたいな—

が老人は意志と意志との小さい爭心を固い掛蒲團と一諸に蹴飛した。

—さあ之から封筒張だ—

豆炭團が悪臭を放つて熟れた柿のやうに赤くなつてくると澱粉を溶かした鍋をその上に乘せて老人は糊を煮始めた。

ーー創三の奴、又竹山さんところへ泊つたかなー

老人は息子と其の友達を信じてゐた。竹山さん處へ泊る、この口實で度々家を明けた。

ーー良い友達だ、貧乏さうだがー

老人は竹山の汚い服裝と眞面目な双眼を思ひ出した。

ーー息子は來年卒業するー

老人は落ち込んだ頰に笑ひを一杯ためて糊を靜に掻き廻した。

ーさうしたらこんな汚い臺所ともおさらばさ、ガスと水道を取付けた、硝子を張つた窓もある大きな家でなあー

糊が粘つて來た、老人の手は忙しげに動き出した。

「おーい誰も居ないんか」

滑りの惡い表の格子戸がガタガタ鳴つた。

「君村創三は此家だな」

「はあ創三は私の息子でーー

「一寸家を調べる」

入つて來た鳥打の男が警察の者だと分ると老人の心臓は頭のてつぺんへ飛び上つてしまつた。

「息子がなんか惡いことでも?」

「惡いどころぢやあない、國賊だぞ、社會主義者だ」

「えゝあの社會主義、そんな事があるもんか、間違いだ、あれは辯護士になると云つて一生懸命勉強してたんだ」

男は机をガタガタ開けた。本箱の本を一纒めにして括つた。

「辯護士、なにが辯護士だ、一生懸命やつたのはストライキの應援さ、ゼネラルモーターのな、そして檢束されたんだぞ、確りしろよお父つさん」

「そんな事はない、そんな事があつて堪まるかい、學校に用があつて出掛けてるのに、人違ひだ、そりや」

「フフン、學校なんかとうの昔に廢してらあ」

老人の手から糊の着いた箆がポトッと落ちた。

「大變だ、誰か來て吳れ、釜へ落ちた奴があるぞッ」

二階から必死の聲が作業場の騒音を棒の樣に突刺した。

ー釜へ落ちたー

みんなが走つた、ローラーの傍から。取り殘された押出機は勝手に石鹼をどんどん押し出してゐる、女工達は青い包裝紙をひつ掴んだ儘、響のする二階の鹼化釜目指して走つた。我先きにと梯子段を押し合ひながら走り上つた。

ー誰だ落ちたのはー

ー俺が息子の火焚き爺さんだー

ーえ?ー

ー過失かー

ー自殺らしいー

―爺さんは今朝泣いてたぞ―

―早く上げろ、早く―

便所に行つてゐたお京は誰よりも遲れた。彼女は大膽に作業場を突切つて走つた。階段を二段づゝ飛び上つた。驚愕のために自失してぼんやりなつた人々を突退けた彼女は、彈む息の下から金切聲を振り上げた、彼女はもう半分泣いてゐた。

「早く上げて、早く上げなきあ駄目ぢあないか」

釜のへりを摑んだ彼女の手はぶるぶる顫えてゐる。

「早く上げてやつてお呉れ、早く上げて」

右の男の腕を引張つた、左の男の胸に縋つた。釜は冷然として脂肪と苛性曹達を沸騰さしてゐる、パイプから來た空氣が液を棒狀に持ち上げた。老人の着物が黑く浮かんでスーと沈んだ。

「駄目だぞ、見殺しだ」

釜底は三角形の尖端を階下迄垂れて深い。それに脂肪と曹達の無限の沸騰點は一分と經たない内に老人の身體を滅茶々々に溶解してしまふだらう。

「可哀想になあ」

女達はスヽリ泣いた。男達は腕を組んだ胸に愁然と顔を埋めた。

―この釜から出來る一萬六千ダース餘りの石鹸には人間の脂肪が入つてゐる―

誰しもがこの事實を前にして生活の裏に隱れた恐怖を探り當てゝ慄然とした。

D石鹸工場は大きい町工場だつたがまだ型打機も自働式を使用してゐない。押出機から出た羊羹のやうな石鹸を型打機の下顎の皿に乘せてペタルを踏むと隨意の模樣とマークを持つた上顎が皿の石鹸に型を打ち込む、左手で乘せる、ペタルを踏む、右手で出す、型打機は之を一瞬の間に何回となく繰返す、一つ調子が狂ふと指を嚙まれるのだ。この工場で只一人の型打工である重吉の指は人並外れて短かかつた。短い指先は乳棒のやうに圓い。型の打たれた石鹸を四角な木箱に詰めるのがお京の仕事だつた。箱に入れられた石鹸は馴れた男の肩で包裝室へ運ばれた。

老人の自殺は職工達の旺盛な食慾に影響した。

「俺あから、なんだが胸一杯で飯が喉へ通らねえや」

晝飯時だつた、重吉は箸を置くとお京に云つた。

「不味いお辨當が餘計不味いよね」

お京の臉はまだ赤い、彼女は云ひながら食べかけの辨當を木綿の風呂敷に包み始めた。

「爺さんが死んだのは君村さんの檢束が原因かい」

「あゝ、辯護士の勉强をしてるとばかり思つてゐた創三さんが突然やられたゞらう、それに刑事が來る迄、お爺さんは創三さんが學校も廢して、組合で働いてることなんか一寸も知らなかつたんだか

らね」
「考へて見りや無理もねえや、廿年といふ火焚きの傍らおまけに内職迄してよ、出世させてやりてえと思つてゐた息子があゝなつたんだもの無理もねえ、無理もねえ」
重吉は圓い指先で目頭を押えた。
「そりや苦勞ばかりで一日も樂な目を見ずに死んだお爺さんは云ひやうのない程可愛想だよ、だがね、重さん、今時、息子を立身出世させ度いなんて思ふお爺さんの間違つた考へ方がまた一層可哀想だよ、そりや創三さんだつて之まで不自由な男手一つで育てゝ呉れたお父つさんだもの、辯護士は愚か大臣にでもなつて樂をさしてやりたかつたらうよ、けれど今の世の中ぢや××や成金になるのは泥棒になるのも一諸なんだ、偉くなるのはそんな事ぢあない。搾取されて苦しんでゐる人々の、鬪爭の爲に血みどろな働きをする事だよ。創三さんが何時も云つてたゞらう、鬪爭の前には肉親愛の情なんか蟻の卵より小さいもんだつて、鬪爭の爲には自己――なんだつけなさうさう自己沒却が第一だつてね」
「やにしち難しい事を云ひ出したな、俺あ勞働者達は働けば働く程貧乏になるのは何故かつて事しか知らねえ、だがそれでいゝんだと思つてゐる」
重吉はバットの煙をフッと吐いた。
「さうは云ふものゝ何んだか爺さんに濟まねえて氣が、頻りにすらあ、君村さんに連れられて組合の集會へ行つたり毎晩のやうに爺さん處へ遊びに行つたりした二人が隱し立てしてたからなあ」
「爺さんが息子を出世さしかつたのは樂に暮し度い爲だつたのだらう、廿年間働き通しでも貧乏だつたからよ。何の爲に爺さんは死んだんだ、息子が辯護士にならない、もう樂に暮せる望みがなくなつたからだ。樂に暮らせない、之は誰の罪だらう、かう考へて來ると今の社會が不可ないつて事になる、ね重さん、さうだらう、もうそんな話は止めにしやうよ」
機械は働き始めた、彼等は腰を浮した。
重吉はK街道の西の端れに住んでゐた。お父は多分男で、お袋も人並に女だつたらうよ、彼は人々の質問に何時もかう答へるのが癖だつた。
―どうにかして人間は生きて行けるもんさ―
彼の放浪生活は彼の思想をこんなにした。けれどこのルンペン的な感情は君村やお京によつて一枚一枚紙のやうに剝がされていつた。爺さんの西隣りに黄と云ふ支那人の家があつた。その汚い二階に居るお京と重吉は創三に連れられて時々組合の集會に行つた。其處には澤山の職工や女工が集つた。彼等は安煙草の煙でぼんやりした電氣の光に鼻の頭に油をギラつかせて討論した。膝の上に擴げたプリントを讀んだ、重吉は集會の歸途毎に、腹の中に出來た熱い塊

りが段々大きくなつて、ぐつと下から突き上げられるやうな昂奮を感じた。

「追ひ付くんだ、遲れちやならねえ」

彼はさう考へた。

―大工場へ入り度い―

之がお京と重吉の心からの希望だつた、すべての勞働者の手と手を握らす爲の組織が、强い壓迫を潜り拔け潜り拔け、粘々と一步一步を押進めてゐる大きい工場へ―製造所の近くに大きな紡績工場があつた。朝夕サイレンがボーと咆えた。仕事の隙毎に二人は凛々と煙を大空に吐き上げる巨大な煙突を眺めて考へた。

年末になると熨斗をつけた石鹼に羽が生えたやうに賣れる、商店に積まれた箱の山が加速度にその形を崩すと、工場では人間と機械の馬力を倍加しなければならなかつた。

―桃割に結いたい―

―長襦袢が着て見度い―

―贅澤だよ、餅さへろくにつけないってのに―

―人絹で造つたら安いよ―

包裝臺を前にして二列に向ひ合つた女工達は貧しい正月の豫想を語り合ふ暇も奪はれて石鹼の包裝に十二月の汗を搔いだ。型打機はカタカタ鳴り續けてゐる、重吉は機械と手足を張り切つた神經で緊いだ、ローラーは絶えず廻轉した、白い石鹼は見る見る内に色と匂ひとを持つた。運搬人の肩は石鹼を滿載した木箱が離れない。人々は食後の僅な時間を出來るだけ利用した、冷えた手を溫めたり、便所に行つたりした。

「俺が息子の爺さんが居なくなつて一寸寂しいな」

綠色の石鹼が曲げた鉛管の形で出かゝつた押出機の、男工が云つた。

「例へ生きてゝも俺が息子は赤いべゝ着たとも云はれまいよ」

かう云つてセヽラ笑つたのは工場主の遠緣で職工監督みたいな役をしてゐる髯だらけの男だつた、職工達は蔭で彼をくまそと呼んでゐた。話の最中を通り掛つたお京は聞きとがめてくまそのがんもどきのやうな顏を睨みつけた。

「へへへ、別嬪さんが睨むと凄えや、全く堪まらねえ、爺さんの息子で何んとか云つたな、創さんが居なくつて寂しいだらうに、お察し致しますよだ、アハヽヽ」

彼の周圍を取卷いてゐた大勢の職工達がドッと笑つた。

年末中には臨時夜業をやつた。十時になると海老のやうに身體を曲げた男女工達が、工場の門から凍てついた街路に寒げな足音を流した。その夜お京は紡績工場前の廣場を三角に横切つた近道から南海の驛に急いだ。一停留場向ふなので徒步で通つてゐたが師走の風は寒いのでやり切れなかつた。利久の齒が刄物の銳さでキリキリ軋

つた。
「おいお京ちやん」
彼女は汚い毛糸の襟巻から顔を上げた、眼の前にくまその髯だらけの角張つた顋があつた。背筋を嫌な直感が氷塊の冷さでスーと撫でた。
「一寸其處迄附き合ひな、お歳暮を買つてやるよ」
「でも寒いし、それに今夜急ぐんだもの」
「寒きや其處いらで温けえ物でも食つてな、手間は取らせねえ、一寸だな、行かう」
くまそは優しい聲の下に砥ぎ澄ました威赫の牙を隱して云つた。女工の馘首や昇給の蔭では何時もくまその四角な顋がものを云ふのだ。お京はそつと圍りを見廻した。北から東へぐるつと工場の塀だ塀の上には眞黒な夜空を支えた煙突が眠つてゐる、四十男の熱した重い手が肩に掛つた。彼女は身悸ひして板のやうな男の胸をドンと突いた。
「止しとくれ、此處はガード下たあ違ふよ、見損ふない助平！」
叫んだ彼女は一目散に馳け出した、水溜りに凍つてゐた冬の月がパッと散つた。
「チエッ覺えてろ小女郎、組合へコッソリ行つたりしやがつて、みんな暴露してやるぞ」
くまその怒聲が磨り減つた下駄の音の間を突切つて後から追ひかけて來た。
「馘になつたつてかまふもんか、そんなちつぽけな町工場なんか今にぶつ倒れるんだ」
步調をゆるめながら彼女は云つた。

　創三の一閑張の机の上に正方形の白木の箱が乘つてゐた。箱の中の壺では溶けてしまつた爺さんの骨が眠つてゐる。骨と云つても四日間煮通した石鹼原液を鹽析法で分解して下に殘つた鹽とグリセリンの塊りだつたが、それを骨代りとするより外に仕方がなかつたのだ。白木の箱の前でお京と重吉は悲しみを新な淚で濡らしうなだれた。明日は正月と云ふのにこの貧しい界隈はひつそりと寢靜まつてゐた。時々遠くを走る電車の音がゴーと靜な空氣を顫はした。創三は一週間の留置にげつそりと瘦せた頰を撫て二人に云つた。
「おいそんな悲しげな顏色ではいゝ供養にならないよ、親父は世の中には盲目で、鬪ふことを知らない者らしい死に方をしたよ—廿年間自分が焚き通した釜で自分で死んだ、死んでから親父ははつきり目を見開いたゞろう、俺は自分を不孝者だとは決して考へない。出來るだけ親父の夢を長くそつとしておいてやりたい、こんな感傷から親父を教育してやらなかつた事に小さい後悔を感じるだけだ。辯護士になつて只一人の親に樂をさせるより、多くのプロレタリアの爲に赤い旗を振る方が俺には大切だつた。そりや死んだ親父は可哀

想だ、不自由な中から育てゝ呉れた親父が死んだのは悲しい、しかし之は小さい悲しみだ。こんなことで闘争心を鈍らしては不可ないんだ。小さい犠牲を踏み越えて前進するのだ、前進だ、只親父の六十年の慘苦は誰がさせたか、之をはつきり掴むことだ、重さんもお京ちやんももつと元氣を出して呉れ」

之は創三の自己辯護ぢあない、前進する者の悲痛を越えて進む者の力強い宣言なのだ。見よ創三の眼の輝きを、涙を乾してしまつた焔のやうな熱情を！

「お京ちやん、お前の好きな芝居の臺詞でもやつて呉れ、ほらあの炭坑夫の臺詞さ、それがお經代りだ」

お京は濕つた聲でグレチエの臺詞を始めた。—お母さんが死んで私達はどんなに悲しかつたか知れやしない。だけどそれだけ强くもなれたんだよ、そして兄さんと私とはもう死ぬ身體だ、だつてこれはもう目に見えてんだよ、死なせまいつたつてどうにもなりやしない、死なせま——

お京は此處まで來るとワーッと泣き出してしまつた。

「おい〱芝居が本物になつたぢあねえか、泣くなよ」

云ひながら重吉は拳で眼を引擦つた。

「涙つぽいのは禁物だ、ぢや重さん續けてやれよ」

靜な微笑を湛えて云つた創三の手は、膝の上で心なしか顫えてゐる。

「ぢあ俺あプルゲルになろう、氣を取り直して一つ元氣なとこを爺さん聞いて呉れ」

重吉はキチンと坐り直した。

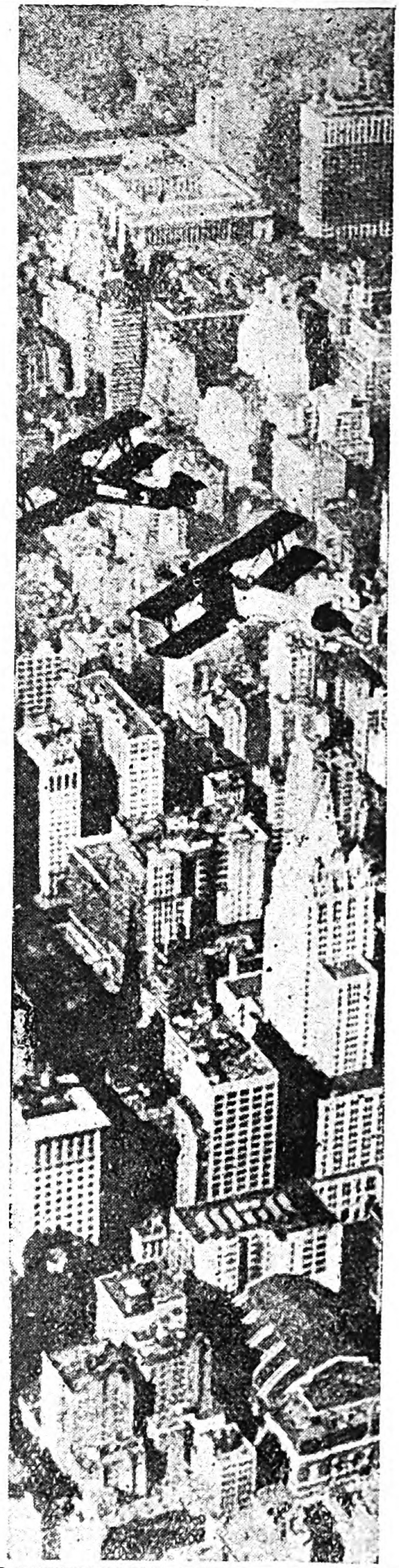
—泣くんぢあねえ、憎むんだ、俺達と同じやうにして奪れたお前達の子供の事を思ひ出して呉れ、そして憎しみを燃すんだ、火を涙で消しちや不可ねえ、その火を掻き立てろ、一切合切燒き拂ふ焔を煽り立てろ—

「さうだ煽り立てろ」

創三は二人に手を差し伸した、三人の掌が熱く重り合つた。もう夜明けに近いか、雞が鳴いた。

—一九三〇・三—





紐育雜景

川瀬美子

1

雨季をむかへて水量をましたハドソン河が、雲の多い紐育の空をうつして、大西洋にそゝいでゐる初夏の朝である。

際限なくつゞく父親ののゝしりを、後にきいてブルックリン橋のたもとにある貧民窟の一軒の住居を出たメリーは、川べりを五六歩あるいたところで長身の青年に出會した。

「あら」

「やあ」

メリーのおどろいた表情に、青年は親しげな微笑を浴びせて、彼女によりそつた。

「どうしてこちらへいらした？」

「昨夜おそく社へ是非かへらなくてはならない用事が出來たのでかへつてきて、今朝ふとあなたの家がたしかこの方面だつたからと思

つて廻つてみたんですよ」
「それはどうも」
二人は簡單な會話を交はしながら、歩調を合せてあるいた。
スキャップの汚名の下に、爭議團の引上げた職場へ、通つてゐた彼女を、さまざまの方法で爭議團に、みちびきいれたこの青年に、この二三日むかひ合つて、語る餘裕のなかつたメリーは、さて何から云ひ出したものかと、靴の先をみつめて歩いた。
「とうとう父がきづいたんですの、おとなりのお內儀さんが告げたものですから」バスにのると彼女は口をきつた。
「しかし私父の方はどうにかして、どこ迄も頑張りますわ。父の云ふ事なんか、一々氣にしてゐた日には、何にも出來ませんからね」
メリーは、彼女自身をいたわるやうに、云つた。
「それは大變ですね。お父さん、それであなたにいろんな事を云ふんでせう」「えゝ。御存知でせうけれど、私達ジュウでせう。それで、父がグラッドストンに、對してはとても理窟以上の同種族つてものがもつ、はげしい――執着――つてなものを、もつてますんでとてもやりにくいんです。でも私、いくら父が何と云つたつて、又もとのはづべき行爲を、くりかへすやうな事は、ございませんわ」
興奮して、メリーは、かはいた唇を、かんだ。
不自然に隆起した彼女の鼻の線を横から見下しながら、青年は、この一人の可憐なユダヤ娘に階級意識を證得させる事が、壓迫された階級に生棲しながら、虛無的な否定的な思想の世界に、さまよつてゐる、全ユダヤ人を、正しい階級人と、させ得る可能性の前提のやうな、暗示に、興奮した。
「あなたもいろいろやりにくからう。たつた一人の肉親だから。しかし我々の間には、人種も國境もないと云ふ事――つまり階級以外には何もないと云ふ事それに、もとづいて、お父さんを、どうにかする事は、出來ないものかなあ」
「私父に對しては、希望をもつ餘裕はありません、でも、私、私自身の發展を信じますわ。父はもうすぐ死んで行く人間ですもの」
あはたゞしいバスの騷音と振動の中で、メリーは、さまざまの雜念を拂ひのけるやうに、朗らかに叫んだ。それが彼を明るくした。
七番街の停留場で、バスをすてると彼は、何となく晴々した氣持で、彼女と肩をならべて、町の雜沓を、通りぬけて、爭議團本部になつてゐる建物の門をくゞつた。
五番街の中央に、ヤンキー娘の購買慾をそゝりたてるに百パーセントの、効果を有する美々しく、かざりたてた店をもつグラッドストン衣服店の、裁縫工解雇問題に端を發したニューヨーク五衣服店從業員の爭議はアメリカ勞働××黨の機關紙『デーリー・ウオーカー』に、關聯した極左の組合の應援の下に、第三週に入つて、ますます根强い持久戰をつゞけてゐた。
他に能力のない――長い間の特殊な技術のために、不健康になつ

てゐる裁縫工は他の衣服店で雇入れる可能性のない現在の狀態の下では、解雇されたからには、餓死の他にみちはない。

何故なら、强壯な失業者が巷に充滿してゐるではないか。

彼等は死物狂ひだつた。

ニスのはげたテーブルとイスのらんざつにならんだ部屋の中で、爭議團の人々は、インターナショナルをうたひながら、各々のパートについてゐた。

うちつゞく檢束に指導者の數は次々とへつてゐつたが、彼等は、それに反比例する强靱な團結力をもつてゐた。

メリーは、すばやく彼等の間をすりぬけて、臺所の代用にされてゐる次の小さな部屋に行つた。そこでは、彼女の同僚達が五六人でパンやをきながら、彼女へ忙しい笑ひをおくると、だまつて玉葱とナイフをわたした。

昨日も又爭議團の代表が、支配人に交渉した結果は思はしくない由が彼女につたはつた。

六十人の解雇された人々を、何らの犧牲もはらはず復職させる——その事のために、代表達は、直接グラッドストンに會見する事をのぞんだが空しかつた。

その日夜がふけてから、メリーは、父親のゐる家にかへつた。

必ず彼女を見舞ふであらうはげしい叱咤と罵倒を豫期しながら。

そして、さうしたあらゆる行爲をさへ、ゆるして尙彼女自身を、つなぎとめておく、父親の不可思議な吸引力に對して、今こそ確然たる訣別を豫期しながら。

ドアをあけるやいなや、ベッドの上から、ねつかれなかつたらしい父親が不自由な足をひきづりながら、メリーに飛かゝつてきた。

横面を、はげしく父親の固いこぶしでなぐられて、彼女の疲勞した神經は朦朧と焦點を失つてメリーは、べつたりと、リノリウムの床の上に倒れた。

「メリー、貴樣は、親の恩もわすれて——、

畜生！

恩知らず！

今日まで育てられた恩も忘れて勝手なまねばかりしやあがつて、ほんとにこの野郎あんな靑二才にだまされて、親に、たてつくとは——畜生！」

父親は、はげしい息づかひで、つゞけ樣に、メリーをなぐつた。

「今朝も今朝で、あんなに、俺が云つてゐたのに、何と云ふざまだ。變だ〳〵と思つてゐたら、あんな靑二才とくつゝいて、主人はおろか親にまでたてつくとは貴樣それでも人間か」

今朝にも、ましたはげしい父親の怒りの原因が、あの靑年にある事を知つて、メリーはもうろうとした意識を統一して、何か云はなければならないと思つた。

「それはちがひます。あの人は、私を、正しい道へみちびいて、く

れた人です。私、その正しさがお父さんに、わかつてもらへなくても、ともかく、正しい事をしてゐると信じます。」

彼女が自信をもつて云ひ放つと、父親がたゝみかけて叫んだ。

「貴様俺達父子が、たゞの白人ぢやないつて事を忘れたのか。俺達は、俺達がジユウであるために、どんなめに白人から、會はされてきたかをいつもわすれちやならないんだぞ。それを貴様は、俺が色々厄介になつたグラッドストンの旦那に、反抗した上に、たつた一人の親をすてゝ、あんな白人の若三に、引つかゝるつて事があるかつ。」

語尾が涙でにごつた父親の言葉が、メリーの胸に強くひゞいた。

あらゆる思想も宗教も否定して、故國をもたない故に、特別いやしめられた位置に置かれて、理想のない生活をつゞけてゐるユダヤ人は、己をいやしとする他の民族へのはげしい憎惡と共に、同じ民族に對して、強い理窟以上の、吸引力をもつてゐた。

そのユダヤ人の一人である、メリーの父親には、彼の生活の中心であつた一人の娘が、同じユダヤ人で、彼自身ひどく信用してゐる、グラッドストンに對して、爭議團の一人として、白人の間に交つて、反抗した上に父である自分に背かうとしてゐる事があの白人の青年との戀愛に原因してゐるとしか信じられなかつた。

彼には、戀愛以外の男女の關係は、わからなかつた。これ程自分達を屈辱的な立場に居く白人の青年と、たつた一人の肉親である自分をすてゝ――それが彼にメリーを入つざきにしてもあきたりない程の、怒りとかなしみとを、覺えさせた。

その父親の言葉が、新らしい時代への遠大な理想のために、今末梢的な感傷をすてやうとした彼女自身の決心を瞬間にぶらせたのにふときづいて、メリーはかうした、非科學的な、感傷への執着が何としば〳〵理想に到達するための、この種の事件の發展をにぶらせたかを思つて、がく然とした。

その夜そのまゝ父親にむかつて、一言も發しなかつたメリーは、眞夜中一抹の哀感をふりきづて、父親の寢息をうかゞつて、ベッドをぬけ出た。

音のしないやうに、戸をあけて外に出るとひどい霧だつた。

2

精巧な銀細工の置時計がリズミカルに六時をつげると、グラッドストンの一人娘バーバラは、椅子からすいと立上つて、もう一度前髪を、やはらかくカールした彼女の顔を鏡の中に見た。

この春巴里の遊學を終へてかへつて來てから、はじめて、巴里において同窓だつた友達から、夜會に招待されたバーバラは、ぴつたり身についた夜會服に、ひそやかな幸福感を感じながら、メイドの一人があけたドアを、細い舞踏靴をならして出て行つた。

父親の部屋の前までくると、彼女は、あはたゞしく戸をノック

して、答へもまたずに、部屋の中をのぞきこんだ。
「お父樣。お仕事？　一寸行つてまいります。」
「どこへ行くのだ？」
グラッドストンは、五六年前妻を失つてから、この娘を溺愛してはゐたが、うちつゞく財界の不況が影響して、彼の商賣不振を來したゝめに彼が裁縫所の整理を行つた結果彼の豫想以上の、爭議がぼつ發して、そのため日夜なやまされつゞけてゐた際なので、思はず美々しくかざりたてた何の苦もなさゝうな娘のふるまひにとげ／＼しい言葉を發した。
バーバラは、父親の意外な樣子に、一寸おどろいた。
「いつか申し上げたパリでのお友達からダンスの會の、インビテーションを、いたゞいてましたんで、行つて來るんです」
彼女は、父親の、浮かぬ態度が不滿だつた。
華やかな期待を、もつて出かけて行かうとしてゐる自分を、もう少し滿足氣に見送つて、くれてもいゝではないか？
「ダンスの會？それもよからう。しかしお前はお父さんが、この頃くるしんでゐる問題をよもや知らないのでは、あるまいね。」
父親がペンをおいて、むきなほつたので、彼女も不精無精部屋の中に、入つてきた。
彼女は毎日々々玄關のベルが、けたゝましくなるのを知つてゐた。そしてそれが父親に、面會を申込んで來る爭議團の代表者達である事も知つてゐた。
それから父親が不在を使つて、彼等との面會をさけてゐる事も。
しかしそれが、自分に、何の關係があらう。父のおこした問題は父が解決すべきではないか？それが父の子に對する義務ではないか？
彼女は、こんな風に考へた。
「だつて、それと私がダンスの會に、行く事と、何の關係があるのでせう。私ともかくまいりますわ時間におそくなりますから」
「行くのもよからう。しかしお父さんは、餘計な事を云つてるんぢやないぞ。お前がそんなところへ行くところを、爭議團の奴等にでも、みつかつてごらん。どんな目に會はされるか、わからないから。」
後から話しかける父親の言葉に、バーバラは一寸ぎくりとした。
あの父の娘であるために、そんな危險を感じなければならないなんて――何故自分にそんな義務があるのだらう。自分は自分として適當な快樂をとるべき權利がある筈だ。だのにあの父の娘である事のために。
しかしバーバラの不安は玄關に、横づけにされたカデラックに、乘つて失ふと一掃された。
車は、いさゝかの振動も感じさせずに、明るいダウンタウンを、まつしぐらに驀進した。

走れ！走れ！

何を思ひまどふ事があらう。

自分には自分のみちが開けて行くのだ。

バーバラは、今夜の夜會への、華やかな豫想に、心をおどらせた。

明るいシャンデリアがすみ〴〵まで、一つの影もつくらずに、てらしてゐる大廣間では、今中央の上段に陣取つた音樂隊が、ひどく煽情的なジャズを奏しはじめた。

夜會服から腕を、あらはに出した女達がタキシードのズボンの華車な男達の胸にひつかゝつた形で今ダンスが始まらうとしてゐる。

みちびかれて、この部屋に入つて來たバーバラを今夜の主人公であるポーリンが走つてむかへた。

「ずい分おそかつたのね。さあ、ぢやあこの方とおどつてちやうだい」

紹介されたのは、若い實業家らしい紳士だつた。

光る舞踏靴、おどる指輪。

そこでは、若い男女によつてのみ、かもし出される歡樂の雰圍氣が、あかるいジャズにとけて行つた。

バーバラは、たへまなしに、幾度も〳〵新らしい相手に、プロポーズされておどつた。

彼女の額は、汗ばんで頰は上氣した。

この瞬間が若い彼女にとつては、無限の幸福感をもたらした。

もはや爭議團の事も、父親の不機嫌も、彼女を、なやませはしなかつた。

彼女は、ダンスがすむと最近ヨーロッパからかへつて來たと云ふある寶石商の息子に、手をとられて露臺に出た。

星は、ふるやうにかゞやいて、上氣した頰に、空氣が水のやうにひやりと感じられた。

幾組かの、男子が暗い露臺に、ダンスでかるく疲勞したからだを運んできた。

夜目にも、それとわかるこいピンクの夜會服をつけたポーリンが彼女の傍を二三人の青年にとりまかれて通りぬけるのが、ふとバーバラの目にとまつた。

「すばらしい彗星ですつて？　ホホ……。お氣の毒な事に、あの方はジュウですのよ」

まぎれもないポーリンの聲だつた。

さもいまはしさうに、口をゆがめて、「ジュウ」と云ふ言葉を發音してゐる、ポーリンの顏が、バーバラには、まざ〳〵と見えるやうな氣がした。

ジュウ！

ジュウ！

ジュウ！

この場にゐるあらゆる女が、相手の男にむかつて、白い歯を、みせてさゝやいてるやうな豫感が、さつとバーバラの身の中を走つた。彼女自身が「ジュウ」である。それは今の彼女にとつて、爭議團よりも父親の怒りよりも、おそろしいそしてどうする事も、不可能な事實だつた。

バーバラは、狂氣のやうに、今彼女の指先をつゝましくその唇に、もつて行かうとしてゐる相手の男をふりきつて、その場を去つた。

いくつかの部屋をぬけ、廊下を通つて、無意識の中に玄關に出た彼女は、待たせてあつた自動車にとびのつた。

「歸つておくれ。かへつて。」

彼女は來る時ははちきれさうな幸福の豫感をもつて、乘つたくるまへ、今はその反對の事實を證驗して身を投じると、運轉手に命じた。

車は音もなく、クッションの上にうつぶして狂氣のやうになくバーバラをのせて、暗い邸町をはなれた。

3

「お早う。同志志田」

明けはなれた窓から、すが〳〵しい、うるほひをもつた初夏の空氣がながれこむデーリーウオーカーの編輯室の朝である。

助手のローラは、ひらりと、あらいしまの、はげたスカートをひるがへすと、机の端に腰をかけて、ポケットから出したシガレットを、うまさうにくゆらした。

この建物の中の一室に住つてゐる編輯人の一人である日本人の志田は、ロシアの××黨本部から來たニュースを、手にしながら、一寸ローラの方にむきなほつた。

「うちのフレデリックね。昨夜こちへ來なかつた？」

「來なかつたね、一週間程前の晩一度來たつきり。」

「さう。」

「もうあの爭議も、大丈夫だから今日あたりくるかも知れない。あの男うまくひつぱられずに、すんだらしいから。」

志田と、はなしながら、ローラは、机の上の書類を手にして、一々目を通した。

「ローラ。ニュースの記事をあつめやう」

「オールライト。」

「全ロシア農家數の六〇パーセントのコルホズ化」

「おや〳〵。」

彼女は、志田の言葉に從つて、草稿を、つくつた。

部屋の中の人數は、朝のあいさつと共にだん〳〵ふえてきた。

「お早う。」

突然戸をあけて、いきほいこんだフレデリックが入つてきた。

「昨夜おそく、とう〱グラッドストンの奴に會つた。回答は、今日中にする事になつてゐるんだがこちらは、斷然初志を貫徹させるつもりでゐるんだ。向ふではスキャップで對抗するつもりらしいがそいつも大半こつちのものにしちやつたしね。」

フレデリックは、連日の過勞と睡眠不足のためにくぼんだ目をかゞやかせながら話しつゞけた。

「それはよかつたね。それに、フレデリック。あなたも一つおめでたい事があるんでせうハヽ……」

ローラは一人でおもしろさうに、笑ひながら、仕事をつゞけた。

「何でえ。この奴變な笑ひ方しやがつて。」

フレデリックは、イスに、こしを下すと、妹の渡してよこしたシガレットを、たてつゞけにふかした。

「同志志田、うちのフデリックはとても隅にはおけないのよ。あのとてもいゝ人を獲得しちやつたの」

「獲得は、よかつたね、してどんな人を獲得したの」

志田は、一しきりすんだ仕事を、まとめながら、輕くたづねた。

「スキャップで通つてゐた、ユダヤ人の娘だ。俺あ今度の事件で、少しでも僕が人から、ほめられる事があつたとするなら、それはまあさしづめこの事だと思つてるね」

フレデリックの樣子が、餘りに眞險なのでローラも、志田も手を止めて彼に注目した。

「とにかく、あの娘は、親父――つまりあの娘にとつてはたつた一人の肉親――をすてゝ爭議團に加はつたんだからね、あの娘は、もう死んで行く父親に、對して、理窟ぜめにする必要は、みとめないと云つてゐる。それで僕あふと思つたんだが、全ユダヤのソヤガージェネレーションが、かうした意志の方向に動いて、行つたらすばらしいとね。特殊なものは別として、あゝした生活狀態にあるユダヤ人つて民族に、同種族の觀念があつて、同階級の觀念がないと云ふ事つまりあの民族が今までひどく虛無的だつたつて事は、俺達の責任の一つとして、考へても、惡くはあるまい。ともかく、最初は父親の命令で、ストライキ破りを、やつてゐた彼女が、そこまで行くまでには、かなり俺の努力があるんだよ。先づはじめ俺が、スキヤップの奴等に、ビラをまいたときからはじまるんだからね」

「もうたくさんよ。兄さん。」

ローラは、いたづらさうに、一寸首をひつこめた。

「それは、さうと、志田君。君んとこの、ミセスは、その後どうだい？　少しは、いゝかい！」

瞬間志田の心を、暗いものが通りすぎた。

彼の妻の京子は、もう一年も、せきづいを病んでねてゐた。

この病床生活で、忙しいからだの志田から、十分の愛撫を受けられない彼女は、どんなにか、日本の兩親のゐる家に歸りたがつた。

その度に、彼は時々妻の存在を負擔に感じた。

三年前に、モスクワの×××大學を出ると、片山潜の紹介で、紐育にきた志田は、當時この地で、小さな飲食店をしてゐた日本人の家族の娘と戀に落ちた。

長いさつばつたるモスクワ生活で、寂莫をきはめた彼の魂に、一つのうるほいをもたらしてくれた京子と、彼はすぐ結婚した。

兩親の歸國後も、彼女は夫の傍にとゞまつて、彼の思想に、同化するために、いぢらしい努力をはじめた。

しかし、長い病床生活に、くたびれた彼女の心に彼女の兩親のゐる家のみ力が、彼女が同化しやうとする、思想以上の强い力で、彼女をとりこにした。

「あなた。日本へかへりませうよ。家へつれてつて頂戴。」

彼女に、云ひだされる毎に、彼も、ふと彼の產れ故鄕である、冬でも羽織無しですごされる中國の海岸を思ひ出すともなく思ひ出さずには居られなかつた。

しかし、彼にとつて日本にかへる事は不可能だつた。彼には、紐育における使命があつた。

「相變らずだよ。あれは、日本へ歸らなくてはなほるまいて――」

「あなたと、こちらにゐながら、どうして日本の家へなんか、かへりたいのでせう、變ね」

志田の言葉を、ローラが不思議さうにきゝかへした。

彼は、ローラのその言葉の裏に、たつた一人の妻をさへ、完全な同志にする事の出來ない彼自身に對する輕い侮蔑の意味のある事に、氣づいて思はず唇をかんだ。

コムミユニストである彼が、彼に、もつとも接近してゐる彼の妻を、コムミユニストとする事が出來ないと云ふ事は、いかにも餘りにも非公式的な逆說に違いない。

しかし、英語の、ホームと云ふ言葉も、フアミリーと云ふ言葉も、ふくまぬ日本の家のもつ一種不可思議な傳統的なみ力は、アメリカ女の、ローラには、當然わかる筈はないと、志田は思つた。

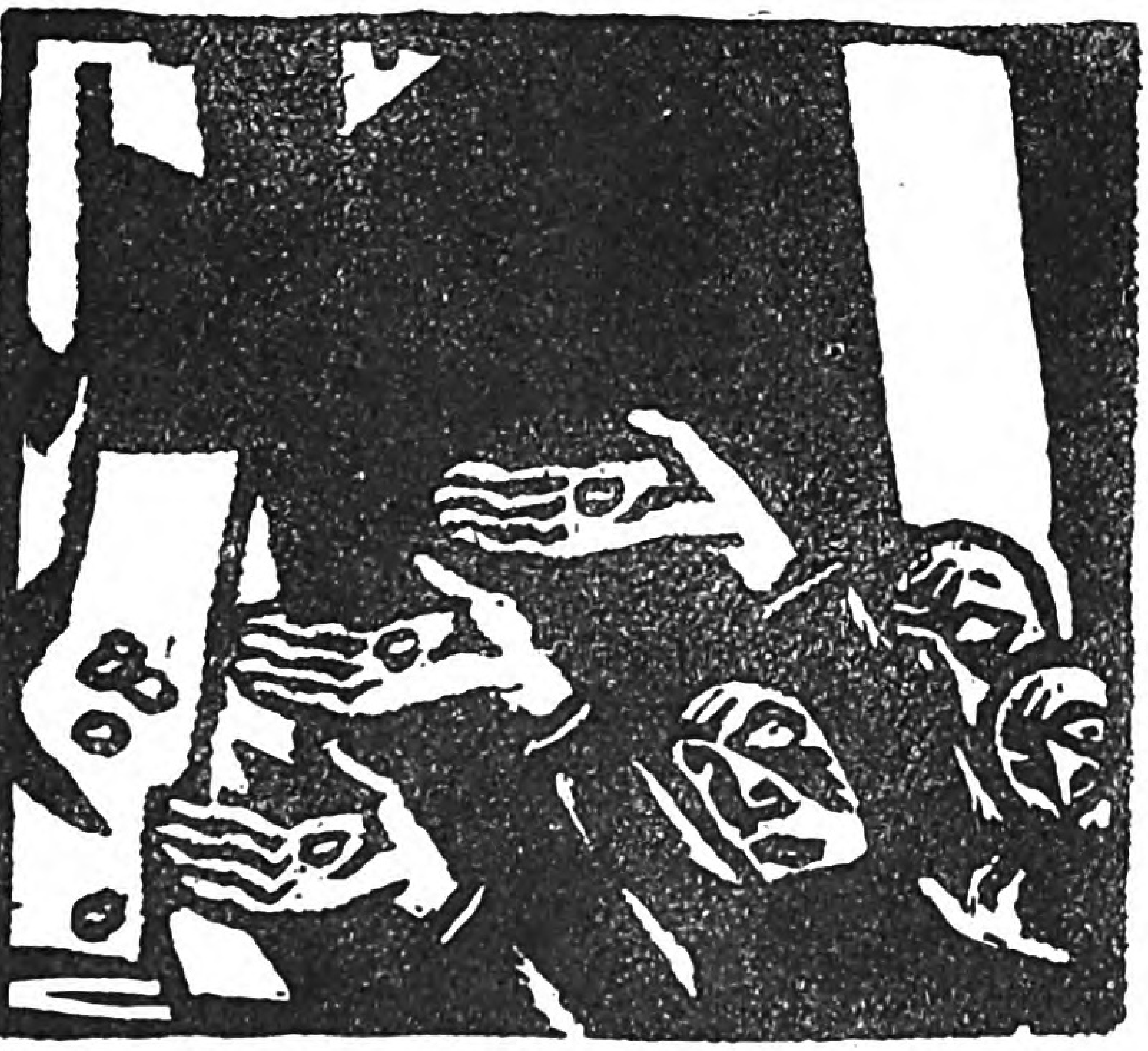
彼自身時々そのみ力の、とりこにならうとしてゐるではないか。

志田はローラのその問ひには答へず、だまつて不氣嫌にペンを動した。

彼は、あきらかに憂鬱だつた。

ブロードウエイを、逍遙する女達の腕があらはになつて、紐育は夏になつた。その頃グラッドストン衣服店の爭議における爭鬪團の勝利が、全紐育の新聞をにぎはした。

一九三〇・四・一三・



乞食と上棟式

粟井瓔子

正月明けの十五日。はしの仲田の生糸工場の上棟式だつた。乞食の矢一は健康な歩みで街道を南へ歩いた。乞食業を家業としてゐる彼は啞である。近村に祝ひ事や悲しみのあつた時に裏口の方に矢一の顔の見えない事はなかつた。

もう七十に近い小さな躄のうゝさんもおなじ仲間だ水鼻で浮いた薄い棕櫚の様な髭に笑を浮べてひどく前かゞみになつて彼も矢一とおなじ目的ではしへむかつて歩いてゐた。土堤からはしの五色の吹き流しがよく見えた。うゝさんは招かれてゐる様に浮々してゐた。

棕櫚箒木やの爲も、筬やの覺次も、摺積やの藤次も、皮草履やも元氣よく集つた。うゝさんと矢一とに氣安くした事のある程の乞食は皆はしを指して來た。はしは矢一とうゝさんとの二人の繩張りである。彼等ははしは棟上げの餅を四俵も搗いた事を知つてゐた。酒は四斗樽で三丁も牛車で曳き込んだのを確に見たものもあつた。眞物の料理人が七人も雇はれたといふ噂もきいてゐた。はしの上棟式は近年近所にない大祝ひである。

はしは仲田の家號である。仲田は今、村の中心になつてゐるが、昔この郡の一番端であつたので、それが自然家號となつたのである。仲田は大戰後の好景氣に充分手を擴げた威勢の好い家である。今度の祝ひは工場の上棟式と土藏湯殿臺所等の改築も兼ねてゐた。その上主人は今年四十一で、その祝ひも一緒にするのである。淺黄

の定紋入りの幕で張り廻された、はしの長い軒下には麗々しく書き出された姓名を持つた米俵が、庇にとゞくまで積み上げられてゐた。まるで主人の今の威勢を披露してゐる樣である。

矢一が藁で作つた、たわしを持つて臺所に這入つて行つた時に手傳ひのおかみさん達は急がしさうに手を動かし乍ら、はしのおかみさんや娘の新らしい衣裳について噂してゐた。矢一のする仕事はなかつた。野菜の下洗ひ等は、もう前からしてあつたのである。矢一が來たのを知つた近所のおかみさんは氣前よく大きな茶碗にお酒を一つぱいついでくれた。そして奇麗に洗はれた野菜を指さして手を振つた。矢一は茶碗から飲み乍ら機械的に「いや〳〵」をした。其の時の唸り聲が餘り調子外れだつたのでおかみさん達は一齊に笑つて、矢一にからかひ始めた。矢一は頓着なく一人のおかみさんの手から牛蒡を奪つて「うゝゝ、うゝゝ」と低く鼻唄の樣に唸り乍らせつせと皮をおろし始めた。

うゝさんがはしに着いた時、彼はもう矢一が來てゐると言ふ事が解つた。裏庭の入口に積み重ねてある蜜柑箱の上に矢一のこち〳〵になつた煙草入があつたからである。

「矢一はもうおかみさんに會つた。」

と思ふといらだゝしい淋しさがこみあげて來た。然し優しいうゝさんは「まあ、いゝや」と鼻水をすゝり上げて湯殿の焚き口の方へ廻つた。其處はいつもよりよく片ずいて、大きな木の根の腰掛もなかつた。うゝさんが廊下の方へ廻らうとした時に、出て來る矢一とばつたり出會つた。うゝさんは水鼻の溜つた上唇を無意識に動かした。矢一は努めて肩を張らうとしたが、それは無駄だつた。

うゝさんは佛の樣に無心で、眼はお袋の樣に優しい。矢一は自分が恥かしくなつた。然しうゝさんの顏をみてゐると嬉しくなつて、悦びを表して唸つた。うゝさんは矢一に小指を出した。それが何を意味してゐるかを一眼で悟つた矢一は大きく唸つてうなづいた。うゝさんが母指を出すのを見て、矢一はあわてゝ口に手を當てゝ首を振つた。うゝさんは主人が自分等の仲間、特に矢一の聲を嫌ふ事を知つてゐた。矢一の唸り聲は雞をしめる時に出す樣な聲に似てゐた。おかみさんはその事を心配してゐるのも知つてゐた。おかみさんは仲間の間で佛樣のやうに言はれてゐた。おかみさんはあはれみ深くていつも彼等の味方であつた。

はしの表からは絶へず喜びの客が這入つた。泥の着いた野良着を捨てた彼等は折目の着いた着物をきてかたくなつてゐた。乞食の仲間は二人を除いた六人で玄關口から堂々と祝ひ詞をいつて這入つて行つた。こんな時には彼等のお歡びも快く受け入れられるのである。彼等はそのまゝ裏口の方へぬけて行つた。其の時はしの親類の子供等が冷い眼をして「ほいと」とがや〳〵言つてゐたが、彼等は平氣で祝儀のお酒を振舞つて貰ふのであつた。三日間を此の家の客

になる爲に彼等は極めて愛相がよく、しかもつゝましやかにお酒の馳走にならなければならなかつた。

仲間は居場所を最も好い所に見つけた。此の内の地藏堂の軒下である。後には大きな工場があつて、前には大きな松や梅の木があるので、巡査等の眼はかゝらない様に出來てゐた。藁を集めて來たのは襤褸やの藤次である。皆うゝさんと矢一の處へ顔出しに行つた。

うゝさんは大様に笑つて、寒さうに肩を動かしてから言つた。

「不行儀な事をして、髭に見つかるなよ仲よしにな、」それからニコ〱笑つた。

矢一は肩を引いて唸つた。仲間に對する親しみの表現である。それから眼を輝かして、相手の顔を凝視めて、口に手を當てゝ首をしやくつた。

お酒が廻つたうゝさんは、風呂の前でこくり〱してゐた。三時から上棟式が始るのでざわ〱してゐた。

うゝさんが惜しい夢から醒されたのは矢一の唸り聲であつた。矢一はうゝさんに餅撒きの近い事を知らせた。此處も氣の立つた手傳人でうゝさんには危險であつた。

「もう三つも若かつたらなあ――。」

うゝさんは口の中で小さく言つた。風呂釜の暖かさにうつとりしてゐたうゝさんは此の場所を去らなければならない事が悲しかつた。こんな格好な樂な隱居所はめつたに彼に與へられはしなかつた。矢一もうゝさんの衰へを淋しく思つた。もう無理に對立しなければならないでもないと思ふ氣持が彼を頼りなくさせた。

十と八つ位の腕白者が紋附に袴を附けて、工場から飛び出して來た。うゝさんと矢一をみると惡戯者らしく笑つて、喚いた。

「うゝさん灸！」

「うゝさん灸！」

「すえたら傷い、いたうて泣いた。」

うゝさんは飛び上つた、が、がつくりかゞんだ。朝から具合が惡かつた胃が又ひどく痛みだした。

「うゝ、灸すえるぞ！　阿呆、去ね。」

「矢一ッ、去ね、やい聽へるまいがよ、へん。」

二人は飛びかゝりさうである。後に味方をする者が大勢居るといふ强味で、子供たちの見幕は荒かつた。矢一はうゝさんを守らなければならないと思つた。矢一の眼はきら〱光つた。唸り聲は高くなつた。子供は恐くなつて、下唇を思ひ切り突き出して顋をしやくり、喚き乍ら逃げた。

「啞と癩癇！　啞と癩癇！」

「お、し、と、て、ん、か、ん、」

矢一はもう誰も居ない、仲間の場所へうゝさんを連れて行つた。

二時頃からはしの前は人が集つた。一番多いのは子守と男の子である。かまぎにはいつたお餅が屋根へ運ばれ、三寶が運ばれ、燈臺に火がついた。はしの旦那が三寶の前に座つた時さゞめいてゐた群衆は緊張した。

うゝさんは土藏の横の様な處にゐた。自分の外に誰も居なかつた。そんな筈はないと思つたが人間は一人も見えなかつた。空はやけに高くて青かつた。立派な檜を惜しげもなく使つた本家の棟が上つたばかりである。眞中の大黒柱がどつしりと落ちついてゐた。棟木の上の組立の座には三寶の土器がきら／＼光つてゐた。棟にはおかみさんのお祖父さんが、大黒柱の様な感じで立つてゐた。見えなかつた群衆が後から／＼集つて來た。

津浪の様な響きが起つた。人間の聲である。その中には拍手も交つてゐる。

「はしの旦那！」

「はしの旦那！」

旦那が――おかみさんのお祖父さんが手を鳴したのだ、旦那は手を眼の方向に高くあげた。東から西に向き直つた様である。

ある重さを持つた物がうゝさんの膝を打つた。うゝさんはぺつとり油汗を出してゐた。白い餅だつた。また一つ落ちて來た。黄金色の蜜柑も落ちて來た。掻き集め乍らうゝさんは、群衆の叫び聲を聞いた。叫び聲に交つて手の平で餅を受けてゐる音も聞いた。その掌に當る快感を思ひ覺した。うゝさんも空に向けて手を振つて兩手を合した。

「大工さん、餅ぢやあ！」

「大工さん、餅ぢやあ！」

と群衆は叫んでゐる。見當はずれの餅がうゝさんの前へも落ちて來た。うゝさんは昔の事を思つた。彼ははしは一昨日朝から夕方までかゝつてお餅を四つの臼で搗いたと聞いてゐた。

「それにしても矢一は片手かな？　なあに五十やそこいら拾つたかな」

五尺七寸もある頑丈な矢一の姿がちらついた。それから仲間の顔が順々に現れた。うゝさんは此のまゝぢつとしてゐる事が出來なくなつて立ち上つた。「おいぼれ」と陰口をきかれるのが耐えられなくなつたのである。工場の外の墓地に出た。此處へ來る間にうゝさんが見たものはよろめく自分の足と、自分の足が踏む方一尺程の地面だけであつた。

はしから一里程離れた町の檢番へ工場の事務が交渉にいつたのは五日も前であつた。六時から十二時まで十五人の妓を契約した。勿

論此の檢番內での賣れ妓ばかりであつた。大嶋席の琴彌と八千代と淸香と歌留多と藤井席の照吉と照葉と菊彌とは是非にとの事であつた。呼ばれた藝妓は皆愉快だつた。はしのお祝ひでは個人々々として隨分祝儀がもらへる事は解つてゐた。こんな時には有志連の所謂髭連中よりも、お百姓さん達の方が藝妓には好い客種であつた。年寄の百姓はお茶屋へは遊びには來ないが、こんな時には必ず祝儀を別に用意して來るのであつた。

うゝさんはもう古くなつたはしのお祖父さんの石碑に寄りそつてゐた。群衆の押し合ひへし合ふ聲はまだ續いてゐた。子供の押しつぶされた樣な泣き聲を聞き乍らうゝさんは泣いた。聲も淚も乾いてしまつて、かちかちした泣き方にしか泣けなかつた。うゝさんは深い古井戸の中に落ちて行く樣な寂しさを感じた。其處には死と隣り合ふ樣な冷やかさがあつた。聲の聞へる人間の世界にはいくらあせつても通じない樣な頼りなさがあつた。うゝさんはもうぢつとしてゐる事は出來なかつた彼は餅や酒をうばひあつてゐる仲間より、この墓場の下の人達の方が自分に近しく感じられた。妙な空虛が彼の心をかはかせそそつた。夢中で手に觸れた石をとり上げると、彼は自分の後頭部をのめるほど打ち下した。よろ〳〵とのめつて前に倒れたはづみに碑の下臺の角に强く額を打ちつけた。

餅撒きは終つて、群衆もいつの間にか散つてしまつた。後には拾てた紙片が飛んでゐた。夕方になると名物の風が强くなつた。

地藏堂の前に歸つた仲間は賑やかだつた。皆袂も懷もお餅でいつぱいであつた。めいめいが大きな袋を出して自慢話をしながらお餅を叮寧に數へてしまひ込んだ。矢張り矢一の高が一番であつた。矢一は末廣も四方固めの臺も、手ぬぐひに包んだ銀貨も拾つたので大變な自慢で、高くさしあげて仲間のものに見せた。棕櫚箒木やも負けないで赤いおき上りをふりかざした。箕やは白い手ぬぐひで鉢卷をして、立ち上つて、末廣をかざした。矢一はあたりを見廻した。莚の隅に誰のものでもないお餅があるのが眼についた。

矢一は狂つた樣に立ち上つた。矢一とやり違ひに御坊の彥が古びたばりかんをさげてはいつて來た。懷はやはりお餅でふくれてゐた。彥はばつが惡くお辭儀をして、頭を掻いた。間ののびた笑ひをして一同をくるりと見廻した。一同は氣づまりな樣子でお互に顏を見合せた。彥はばりかんを寶器ででもある樣に抱へて、虱でも居さうな頭ばかりの彼等を順々に見廻して、のそりと莚の上に座つた。世話好きの襤褸やは針金の樣な髮をつかみ乍ら言つた。

「ようー　兄い、又遲いぢやないか、…まあ好い所よ。好い土產があるて、ハッハッハ、」彥はばりかんを見せびらかす樣に振つた。

「なあに、三人に一寸挨拶ごとせえすりやあ、…なあ！　兄弟、俺達ァ何でもないさ。」

藁草履やは頭を掻き乍ら言つた。

「挨拶つて、へつ、何でもねえよ、あの水つ鼻垂しの老ぼれと啞さ。……へッ老ぼれがくたばる迄の話よ。啞は椽の下の土龍見てえなもので、老ぼれの智慧がくつついてゐる間が恐い矢一でさ、へッ。」棕櫚箒木やの爲が湯呑茶碗を彥に廻し乍ら言つた。

矢一はうゝさんを探した。風呂の前には居なかつた。うゝさんが居る筈のない臺所までのぞいた。うゝさんの眼は鬼灯の樣で、唸り聲は野獸をなぐり殺す時の樣に響いてゐた。臺所の人達は矢一の物凄い容子に驚いて、顏に出た冗談も消えてしまつた。

矢一は今朝うゝさんに會つた時に「もう長くない。」と言ふ事を直觀した。誰よりも英雄である事を望んでゐた矢一はうゝさんを度々輕蔑して居た、然しうゝさんの居ない世界は寂しかつた。今黑い孤獨感が氣味惡い塊の樣になつて矢一を追つかけて、來るのであつた。矢一は氣狂ひの樣になつて探して廻つた。

地藏堂の前の連中は寒くなつた。お酒はもうなかつた。海からは冷い風が吹きつのつて來るし少し位の焚火では何にもならなかつた。こんな時には大きい茶碗で、冷いのを一息にあふるのが上策であつた。それにお腹工合も落ちつかなかつた。

「糞ッ老ぼれ、一寸も顏を見せやがらねえぢやねいか。」

御坊の彥はブリ〳〵した。その言葉で火をつけられた樣にぢつとして居る事が出來なくなつた竹箒やは立ち上つた。だが、「奴等は啞と死にぞこないだ。」と言ふ氣持が皆の頭を取り捲いてゐた。

「もうしばらく我慢せ、勝手を知つた二人が好いものを持つて來てくれらあ。」と心配して笊やと襤褸やが樣子を探りに出かけた。

事務室の上の五十何疊の大廣間では近村の髭連中が席に着いた、もう殆んどそろつて、お調子は行儀よく並んでゐるが皆の杯はふさつたまゝである。主人の社長と營業部長の挨拶があるのである。階段の方からはなまめかしく藝妓の聲が聽えて來た。

下は母屋を何間も打ち通してかぎなりの大廣間が出來て、近所の人々や工場に働く女工の親父さん達が、窮窟さうに押しひしやがれて座つてゐた。此處でも專務と去年帝大の法科に入學した社長の息子の挨拶があるのであつた。賄部屋からは賑やかに三味の調子を合せる聲が響いて來た。前に並んだ銚子からは暖い酒の匂が皆の鼻を打つた。下の燗方の傍には、同じ樣な恰好の好い德利が百本程づらりと並んで待つてゐる。女工達はじやべり乍ら髮をなでたり衿を合せたりして賑やかに知らせを待つてゐた。

地藏堂の前でも酒盛が始つた、彥と襤褸やがもらつて來た午餐の殘りものと燗ざましであつた。

矢一は暗くなつた庭の隅から納屋まで探したがうゝさんは居なか

つた。矢一の怒り聲は寂しかつた。矢一はもう一度風呂場から臺所を探した。うゝさんはどこにも居なかつた。矢一は地藏堂の前に歸つたがうゝさんは居ないで、皆は賑やかに飲んで騷いでゐた。「俺等をおいて、勝手にねだりやがる。」と云ふ氣持で彼は一つぱいになつた。そんな不行跡は彼等の仲間ではあり得なかつた事である。御坊の彥は眼をきら／＼させて挑戰的な態度に出て、茶碗からなめる樣に飲んだ。皆は矢一のなじるやうな眼にあつて野獸に追ひつめられた樣な息づまりを感じた。矢一は酒を入れてある藥罐を蹴り飛ばさうとしたが、莚のはしにおき忘られたお餅が彼の頭を冷した。

「何でえ、おめへさんとこちとらがどんなに違うんだ、ふん。」

と彥は言つた。苦勞性の笊やは何とかしなければならないと思つた、が聽く事の出來ない矢一は又出て行つた。

下の連中は十時前に切り上げて歸つたが、二階は益々熾になつて黃色い聲が高くなつた。地藏堂の仲間も醉つた。そして三味のもつとよく聽へる通りの廣場へ莚を持ち出した。火は大きくなつた。が風が強く吹き通すので飲んでも飲んでも二階の連中の樣に好い氣になれなかつた。

酒持つて來い、矢一、」

「酒持つて來い、啞、足りねえぞ、」

「酒持つて來い、髭が何でえ、」

ロ々から出る言葉はたるんでもつれた。

「俺あ！ 俺の、俺のかゝあ、どいつが盜みやがつたい？ 可愛いゝ奴だつたよう。」

二十年も昔の繰り言を始めるのは椋櫚箒木やである。襤褸やはいま／＼しくいつた。

「糞ッ、巡査も先生も醫者を抱いてらあよ、」

その時隣村の巡査は停車場から急いで來た。今日晚くから縣廳に用があつて終列車で歸つたのである。彼もお客の一人である。髭連中は一時過ぎまでも飲む例になつてゐるから、行くにはひどくおそい時間でもなかつた。それになじみの加留多が來て居る筈である。

彼の眼に入つたのは地藏堂の前の火であつた。火は燃えあがつた所で、圍りに集つてゐるものゝ姿まではつきり見えた。皆手と首を振つて唄つてゐた。彼は厄介な事に引つかゝつたといら／＼した。

「××が何でえ、何ンでえ。」

「ありや金持の番犬よ、」

彼は耐へられなかつた。彼等は節迄つけてゐる。

「××がおこる…‥××がおこる。

おこる××の子が唄ふ。」

三味の音は高い。彼の腹立ちは倍加した。

「こらつおい、貴樣等は又喰つたな。おい、返事をせんか、返事を。

あれ程いつたぢやないか、こんなところをうろ／＼しちやいかん。

立て、立たんか。」

「馬鹿ッ。」

彼は薬罐を蹴つた。

彦は立ち上らうとしたが止めたのは棕櫚箒木やであつた。

「惡うござんす、はい眼のつく處へ出たのは惡うござんす、はい、旦那惡うござんす。」

「うん、解つたか、解つたら去ね。」

「惡いが……旦那はど偉い事をなさいました。勿體ない事で、――私らには、その薬罐に入れた酒が、生命よりたつといので――旦那人間に罰が當るものかどうか知らねえが、どうせ錄で行きますまいよ。」

「生意氣ぬかすな、こんな事をすると――。」

彼は言葉につまつた。此の連中に監獄もまだ勿體な過ぎるところであつた。「糞ッ、火を消さんか、この風に。氣狂ひ犬。」

夜が更けて風は益々強くなつた。雲の間から出た十八日の月は氷の様な光を投げた、仲田の墓場には斃れたうゝさんの屍が捨てられた案山子の様にへばりついてゐた。その屍から三步程步道に寄つて一つのお餅が皮肉にもころがつてゐた。まるで土に氷りついた様である。氣まぐれに投げた一つがころがつて來たのであらう。仲田の騒ぎは風にまぎれてこゝまでも響ひて來た。

矢一はとう〱山の端のうゝさんの小屋まで尋ねて來た。然し敷き流しのぼろ〱の蒲團と穴のあいた頭巾があるばかりであつた。矢一は自分が拾つたお餅を小屋の隅の破れた籠の中に入れて出た。しばらく横の道祖(さい)の神の前にぼんやりしてゐたが、思ひ出した様に風をつきのける様に步いた。はしのどこかにうゝさんが居るに違ひないと思つたのである。

はしの女中が畑に出た時に犬が墓場で吠えてゐた。若い女中は人氣に醉つてうつとりしてしまつて、平生から頻母しく思つてゐた職工の今日の容子に夢中になつてゐたので、もしや畑で待つてゝくれはしないか出て見たので、犬の泣き聲など耳にも入らなかつた。いつもは恐ろしい墓地續きの畑さへ恐ろしいとも思はなかつた。だが犬の聲は普通と違つてゐた。あんまり氣狂ひじみて高くなつた時に女中も氣がついて不思議に思つて墓地の方をみた。小高くなつてゐる墓地には何かゞある様であつた。彼女はそれが何だかはつきり解らなかつた。彼女はたゞもうこわくなつて飛ぶ様に走つた、皆の處へ來て始めて大聲で「キヤッ」といつた、そして忙しく肩で息をした。おかみさん達は吃驚して女中をとりまいた。燗をしてゐた番頭達も物見半分の氣持で飛んで來た。女中は自分も何がそんなに恐かつたか知らなかつた。お墓にあつたものは黒い長いものだつた。彼女には唸り聲の様な犬の聲が耳を去らなかつた。今彼女は死人でないかしらと處女の持つ鋭敏さで直觀したのである。「死人?」ともう

一度思ひ返して時々彼女はぞつとした。皆は女中が木の葉の樣に震へてゐるので只事ではあるまいと思つた。只事でなかつた矢一の態度をみたおかみさんはそれを矢一と結びつけて考へてみたりした。

「どうした？」

「ね、犬がお墓で‥‥。」

「犬がお墓でどうした？。」

「吠へてゐるの、黑いものに、嫌ア」

彼女は顏を兩手でぴたりとかくした。

二階の酒宴は酣で主客共に席を亂して藝者に三味を合させて隱し藝の披露に夢中である。若い役場の吏員や信用組合連はやつと一本になつたばかりの菊彌に舞を所望してゐた。その舞は終りに裾を上までかかげなければならないのであつた。菊彌はこんな場合にどんな我儘でも笑ひ事の樣にして通すこれ等の人々が悲しかつた。いやしい笑ひを續けてゐる人々を思ひきり強く打つてやり度いと思つた然しもう一番ねえさん格の照吉が三味を彈き始めたので仕方がなかつた。半ば程まで一處にといつて加留多も淸香も扇を持つて菊彌を促した。まじめになつて眼鏡を直したのは赤髭の村長である。助役は齒莖に唾を貯めてふくみ笑をして側の校長に眼くばせをした。褪せた紋附羽織をきた神主は前に美濃半紙を擴げておはこの達磨を描いてゐた。照葉を離さないでちびり〳〵飲んでゐるのは鬼齒の出た禪坊主である。眞言宗の坊主は傍の法華坊主にくど〳〵と壞家の愚痴を並べてゐた。下手な淨瑠璃を唸つてゐるのは村長である。力を入れる度に顏が金時の樣に赤くなつて、口は右の耳の方までさけた。入口に近い席の方では組長さん達が藝者の三味に合せて都々逸を唄ひ、拳をうつてゐるのは獸醫と宮總代である。

下卑てたるんだ聲と共に拍手が起つたのは菊彌が無事に舞ひ收めたからであつた。照吉の傍にぺつたり座つた菊彌は長い袂で顏をかくして首筋まで眞紅にしてゐた。役場連中の間から潮の樣に卑しい笑ひ聲と共に烈しいアンコールが起つた。照吉と八千代は答へて反對に鶴龜を彈き始めた。菊彌は素直に加留多や淸香に連れて立ち上つた。

「うゝさんが死んだ、仲田のお墓で、」といふ噂が酒席にぱつと擴つた。醉つてふら〳〵してゐた主人は「仲田の墓」といふ言葉に驚いて下に降りていつた。醉つた村長も巡査も村醫も僧侶も神官も其の言葉を別に氣にも留めなかつた。何にしてもうゝさんは老ぼれた乞食である。破れた頭巾よりも役に立たない一つの老敗物でしかなかつた。皆は思つた。

「あれはもう死ぬ筈でしてね、こもにくるんで共同墓地行きですよ、それにしても厄介な時に死んだものだ、時もあらうに。」

皆な嫌な氣持を追つ拂ふかの樣に、杯から溢れてゐる酒をかたむけた。

「照吉、何かやつてくれ、ごうぎなのを、」
舌をもつらして村長はいつた。若い人々は立ち上つて舞妓と安來節を物凄い足音を立てゝ踊り始めた。

地藏堂の前で隣村の巡査は早く皆を解散させ度いとあせつた。二階からは三味と共に加留多の可愛いゝ聲が渦卷の樣に彼の耳をおふて來るのであつた。醉つた乞食達は大きくなる火と、巡査の段々いら〳〵して來る聲にけしかけられた樣に太々しくなつて、まじめに赦され樣ともしなかつた。氣狂ひの樣になつて急いで來た矢一は火の周圍を見廻して、人が騷いでゐる工場の方へ馳ていつた。

「こらつ」

巡査はかんしやくのはけ口を見出した樣に誰にともなくどなつた。その時彼は意識的に顏をまげて、自分に背をむけた彥の背を凍つたぼて靴でいやと言ふ程蹴りつけた。彥は挑戰的に口をへの字にまげて立ち上つた。と同時に彼は彥の横顏を大きな平手でうつた。いきり立つた彥は燃えてゐる大きな丸太をぬき取つた。その時矢一の海鳴りの樣な唸り聲が起つた。矢一は群衆にさからひ乍ら大きなものを曳きずる樣にして飛び出して來た。群衆は矢一の狂暴さに呆然として手が出せない樣な有樣であつた。矢一の唸り聲には聽く者を地獄の底にひつさらへて行く樣な物凄い哀調を響かせてゐた。

矢一が曳きづつて來たものは額が裂けた干からびた屍だつた。爭つてゐた××は急に色を失つて矢一の方に體を動かした。矢一は飢えた狼の樣な眼をして××に挑戰的に出た。彼は××が世の中で一番嫌な恐いものであつた。それ等の事は瞬時の間であつた。

「うゝさんだ！」

「うゝさんだ！」

連中の中からは怒氣を含んだ聲が起つた。

「誰が殺したんだ。」

「出ろ！　俺等の仲間を殺しやがつたの はどいつだ！　言つてみろ!!」

仲間の聲は嵐に吠える樣に響いた。矢一は冷く氷つた樣になつたうゝさんの屍を火の傍に置いて、大きな眼から涙をぼろ〳〵流し乍ら賑やかな二階をにらめた。

彥は手に持つた火のついた丸太を二階めがけて投げた。それを追ッかける樣に棕櫚箒木やも襤褸やも笊やも只夢中になつて丸太を取つては投げた。

干からびた乞食の屍と、此の仲間と、それから仲田家に釀し出す空氣を前に、只呆然としてゐた××は驚いて止め樣としたが丸太は松にかゝつて、松は風にあふられて立木のまゝ燃え始めた。工場の方に集つてゐる群集もあつと思ふ間に事務室に移つた。火のあふりを見た事務室の二階からは安つぽい流行唄を唄つてゐる聲から聲が益々高くなつて外の聲もきゝつけない――

近代無錢旅行

——同行三人——

つくしんぼうが伸びすぎてしまふわよ、と利根川堤の優子さんの妹さんから手紙が來た。五月の雜誌は念入りな特別急行ですまｧと、さあ出かけやう！。今年も私は御大名旅行だ。五圓のお札一枚で會計の事は存じません。上野驛の雜鬧にお上りさんのやうにびつくりしてゐると、優子さんとみどりさんが食料の大きな包みをかゝえ込んでやつて來た。永島林さんは亭六先生に停電したのだらう。六號記事を遊んでなどゐられないんだらう。遊んでゐるやうで見ると私たち丈がうろ〳〵遊んでゐるやうでいやになつちまふ（素）

いやに働き者ぶつたユウウツなんかすましこんで書き立てて、いいぢやないの遊ぶ時位遊んぢやへ遊んぢやへ。きつとまだよ素川さん、ナンテぐるりと一まわりさせられる上野の驛のムダ長さに、松坂屋でかつた食料品をかかへてくると、ゴチヤゴチヤの待合所で小さな風呂敷包一つ持つて、本を讀んで居る勉强家「あたしはこん度もふところ手」あいにくふところのうすいらしいさびしさに、好きなくだものも買つて來ないでポツケツトに手をつつこんですましてる。知らぬ他國に行くんだから私だつて御大名の方がいいな。あたしも優子さんに責任のあるものはみんな預けちやへ（みどり）



ゆりの流れた唾き

——日本橋——
14
時雨

西洋の唐茄子——ツバキ

紳田のクリスチヤンの伯母さんの家の家風が、あんぽんたんを甚くよろこばせた。この伯母さんは、女學校を出て、行燈袴を穿いて、四圓の月給の小學敎師になつたので、私の母から姉妹の緣を斷るといはれた女だ。でも、當時を風靡した官員さんの細君になつたので、また緣がつながつたものと見える。思ふに私の母はちと癪だつたに違ひない。家業は自分の夫の方が小粹なモダンだが、家風がばかに古くつて、伯母の家とはてんでおはなしにならない違ひかただつた。

それも、八十になるおばあさんが居るからだ——さう思つたことであつたらう。今考へると、月琴をかゝへたり、眉毛をたてたりしたのは、時代の風潮ばかりではなく、このおばさんの近代生活にグツとしたのかもしれない。

しかし、その時分のモダンは、四布風呂敷ほどの大きさの肩掛けをかけたり、十八世紀風のボンネツトや、肩に當ものをしたり、お乳にもあてものをして、胸のところで紐を編

いつも〳〵子供扱ひにして、やれそんな事するもんぢやないとか、お氣をつけなさいよとかさん〴〵えらがるくせにこうなると、合計掛樣とかなんとか、後を向いて舌でも出してゐるくせに。けちな五圓札一枚で四日の合計をしろなんて。こんなづう〳〵しさは今に始つた事でもなしヨチ〳〵とばかり特別製の小さな財布に押込んだ十五圓。三人分の切符を買ふともう大分心細くなる。どうせ貧乏人のする藝當。でも案外面白くなるかもしれない。先づおたのしみ〳〵。（優子）

汽車も二度目だから、中々早い。改札口で落合つた優子さんのお母樣。姪のしげちやんがお菓子の入つた赤い鞄を後生大事に、身體ばかり大きい連中をいゝ遊び相手に二十日鼠のやうに飛びありくので、四人の子供の始末に困つたやうに苦笑ひ。しげちやんの頰つぺた食べちやつてよ。キヤツ。とまるで强盜が出たやうな騷ぎ。窓の外は黃色い菜の花の連續。若葉。麥の穗（素）

ガツタングーガツタングー。こんなのろい汽車嫌ひ。佐原の町はね、人で人で人で人で人で大變。東京から私達がきたのでこんなに皆なが大騷ぎと思つたらそうぢやなくてあしたは香取樣の十三年目に一度といふ大きなお祭り。ヘエー悲しい日に來ちやつてねとばかり俗塵を逃れに來たつもりの私達は悲觀する。せつかく迎ひに出てくれた優子さんの家がおとくいの自動車屋さんも車のない人だけのお迎ひと云ふなさけなさ。（みどり）

もうあそこが利根川の土堤よと私はとくい

上げたりするシミズを着て、腰にはユラ〳〵ブカブカする、今なら襁褓干しにつかうやうな格好のものを入れて洋服を着てゐた時代である。江の島か鎌倉へゆくと、近所知己からお留守見舞といふものをくれて、歸つてくるとあの子は洋行をして來た——嘘ではない、洋行といふ新時代語と、道中とか旅とかいつてゐたのを旅行といふむづかしい言語で言ひあらはさうとした間違ひを平氣で、いつてみれば、あの方がダラ幹さんといふ方？ そんな位なところなのだつた。もつとあとだつて、昨夜は大財産をなすつて、なんて、財産と散財とをとんちんかんなのを、どうしても得とく出來なかつた女さへある。

私の家族は御飯のとき、向側の角が祖母、火鉢をはさんで父、すこしはなれて母、母の橫から小さい姉妹が折曲つて、祖母の前が丁度私の居場所になる。みんな各自のお膳を行儀よくひかへる。祖母は何もかも一番早くゆくから一番さきにしまひになる。すると、長い煙管をついて監視人と早がはり、御飯粒ひとつでもこぼすと、その始末をしてしまはないうちは食べさせない。あたしは味噌汁が厭ひなので、ぽつちりお椀の底の方へよそつてもらつてもつい殘す。とにかく祖母の目はあたしにばかりそゝがれてゐるからたまらない、最後に、小言はいはずに、

「越中立山、無限地獄に墮るぞよ。」

と、あたしのお殘りへ白湯をさして飲んでくれる。あんぽんたんながら、それには恐縮して、老人の眼は惡からうからと、だんだん後へさがつて座るのだが、お豆腐ぎらひのために母が内密で半片にしてくれると、ちやんと知つてゐる。だから私はすべて、襖のそとへ手をついて——只今！ といふ機械人形のやうなおとなしさだ。この祖母は、ぞんざいな者が傍へくると、近よらないさきから足を踏まれない用心に、あいた、あいたと言つた。と、いかなぞん氣ものでも吃驚して立止まるか靜にあるくかする。一擧兩得、叱らずに、

になる。その昔あんなにも高い横塀だと思つてゐたのに、如何にも古ぼけた姿。でも熱田醫院とかゝれた門をくゞるとさすがに嬉しい妹が玄關に走り出す。よく來たわね。よくきたわね。皆うれしくなつてくたびれたのも忘れてお菓子をムニャ〳〵。(優子)

自分の家へ來て優子女史がちよいとセンチになつたところは見ものでした。香取のお祭よ。軍神祭よ。どつちを向いてもお祭り騒ぎで、私たちまでがお祭みたい。疲れたとか何とか云ひ乍ら、日が暮れるや診察室を片付けてダンスレコードかジャンガジャンガ。誰が一番巧かつたかと云へば六つになるしげちやん。みどりさんにリードされる足どりの輕快さしげちやんしつかり。といつておいて、おどれない私は二階へ上つて横になつてゐると時々は肌寒い四月なのに蛙が盛んに鳴いてゐる。大きな人間が三人も四人も疲れた〳〵で寢て、あしたの朝、二階が玄關になつてゐなければいいがといつたのは日本トルスタヤみどり女史でした(素)

夜になつて前のタンボでも後のタンボでも蛙が、ギャオギャオギャオ鳴き出したら妙に淋しくなりました。あしたの朝起きると二階が玄關になつてるぞつて心配したのはあたしぢやなくて素川さんです。ところがあさ目をさますといい案ばいに無事で、實はほつとしました。ホラ貝の音がします。馬蹄のひびきがします。青葉。青葉の香取の山をぬつて旗さしものがひるがへります。寢床にはらばひになつて、窓をあけてみてると、大好きな

叱られずにすむ妙諦である。

そんな家から小官員さんの新家庭へゆくと、伯母さんは多い毛をお釜敷のやうな束髪にねぢつて、襟なしの着物で、おかみさんでもひつかけ(帶の結びやう)でなしに、ちりめんの前掛けも締めないで、机のやうな大きなお膳へ白い布をかけて、夕飯の時には若い牧師さんも來て座つて、いろんなお皿が出ても、すぐ食べないで、鐵ぶちの眼鏡をかけたその若い牧師さんが、小さな本を開いて、なんだかブツブツ言ふと、みんな頭を垂れてゐて、終ひにアメンと呟やいて額と胸とに三度十字をきる。でも、大人でも、よつぽど待遠しいと見えて十字は實に早くやる、お茶碗もすぐに口にもつてゆく。食物は家のよりまづいが牛乳の罐は朝毎臺所にぶらさがつてゐる。伯母さんは雞卵の黄身をまん中にして白身を四角や三角に燒くのが上手だ。駿河臺へニコライ堂が建つとき連れてつてくれたのもこの伯母さんだ。ヴヰオリンの音や、ピアノや、オルガンの音をはじめて耳にしたのも伯母さんの住居へとまりにいつたからだつた。そのころ下町でそんな音色も、樂器も知つてゐるものはなかつた。あんぽんたんは外國の匂ひを、ここではじめて嗅いだのだ。なぜなら神田は學問をする書生さんの巣窟であり、いまでいふインテリゲンチャの群である。帽子をかむつた人なんか、めつたに見ない下町ッ子は、通る人がみんな白金巾の兵兒帶をしめてゐるのに溜息した。夕方は下宿屋の二階三階に、書生さんたちが大勢てすりに腰をかけてゐた。私は女がさういふふうをしてゐるのを新宿で見たことを伯母さんにはなした。

南校の原でバッタやオートをつかまへ、牛が淵でおたまじやくしを掬つた。從弟とおまつちやんと三人で、炎天ぼしになつて掬つたが、入ものをもたないので、土に掬ひあげたのはすぐ消たやうに乾かたまつてしまつた。三人は唾をした。川の水に唾をして唾が散れば肺病ではないと、なにが肺病なのかよく知らないのに、幾度も〳〵唾を吐いた。すぐに

チャンバラの様ですつかりよろこんぢやいました。寢呆の素川さんは、「ホラ見ロヨ、面白いぞ」つて云つてもフンフンて鼻をならしながらしぶつています。そこでゆふべ人をいぢめたばちに横でワイワイ騷いでトウトウおこしちやいました。その時の顔をみんなにみしてやりたい位（みどり）

早く利根川の土堤へとんで行きたいな。御飯がすむと籠とシャベルを持つて、しげ子の手をひいて青い土堤をめざしてポツ〳〵出かける。勢ひこんでかけ上つた土堤の上、いつも綠の草の上に澄んだ風が吹いてゐるのに、今日はここも人。この廣い川はきいろい手拭をかむつた老弱男女を滿載した船でもう半分程つまつてゐる。でも私達は摘草に來たんだかまはず摘みませう。もち草を澤山つんで草餅をこしらへるんだから。片つぱしから摘んぢやへ。摘んぢやへ。たのしみにしてたツクシンボはもう大ていオバサンになつちやつた。だからもち草の間からニユッとでてゐるツクシンボをたまに見つけるとみんな喜んでキアー〳〵。夢中になつて摘んでると何だか下の方がやかましい。船が岸へついたと思ふとほつかむりの連中がドヤ〳〵と飛び上る。この先が大變だ。アッと云ふ間もなく岸に並んだ一隊。クルリとおしりをまくると怪しげな音。シャー〳〵〳〵。こつちの方がよつぽど顔が赤くなつて、退却々々。

鳥居河岸の邊にわざ〳〵東京へ誂へた立派な船が出來てゐると云ふので土堤づたひに行つて見るとなる程。へさきに鳳凰のくつつい

散つてしまうと手を叩いて歡聲をあげる。

歸ると盥を出して水をあびる。溝に糸みみずのウョ〳〵動いてゐるのを見つけて、家の金魚のおみやげだと掻廻す。邸町の晝は靜かで、座敷を大きな揚羽蝶が舞ひぬけてゆく。お砂糖水をこしらへやうと砂糖壺をあけたら、ここにも大きな蝶がじつとして卵をしてゐる——私たちはウワッと叫んだ、なにもかもが珍しいのだつた。

だが、ふと、自分の家の午後も思出さないではない。みんなして板塀がドッと音のするほど水を撒いて、樹木から金の雫がこぼれ、青苔が生々した庭石の上に、細かく土のはねた、健康さうな素足を揃へて、手拭で胸の汗を拭きながら冷たいお茶受けを待つてゐる。女中さんは堀井戸から冷つこいのを、これも素足で、天びん棒をギチギチならして兩桶に酌んでくる。大きな桶に入れた、麩麵が持ちだされる時もあるし、寒天やトコロテンのこともあるし、白玉をすくつて白砂糖をかけることもある。

——そのころの人は水の味をよく知つてゐた。どこの井戸はくせがある。この水は甘いあそこのは質が細かい——女中さんは自慢で手桶のふたをとる。今日のは何處のですかおあてになつてごらんなさいと——

金魚も水をとりかへてもらつて跳上つてゐるであらう。私の鉢のまるつこの子は、大きくなつたかしら、背中がはげてきたかしら、目高が突つつきやしないかしら——

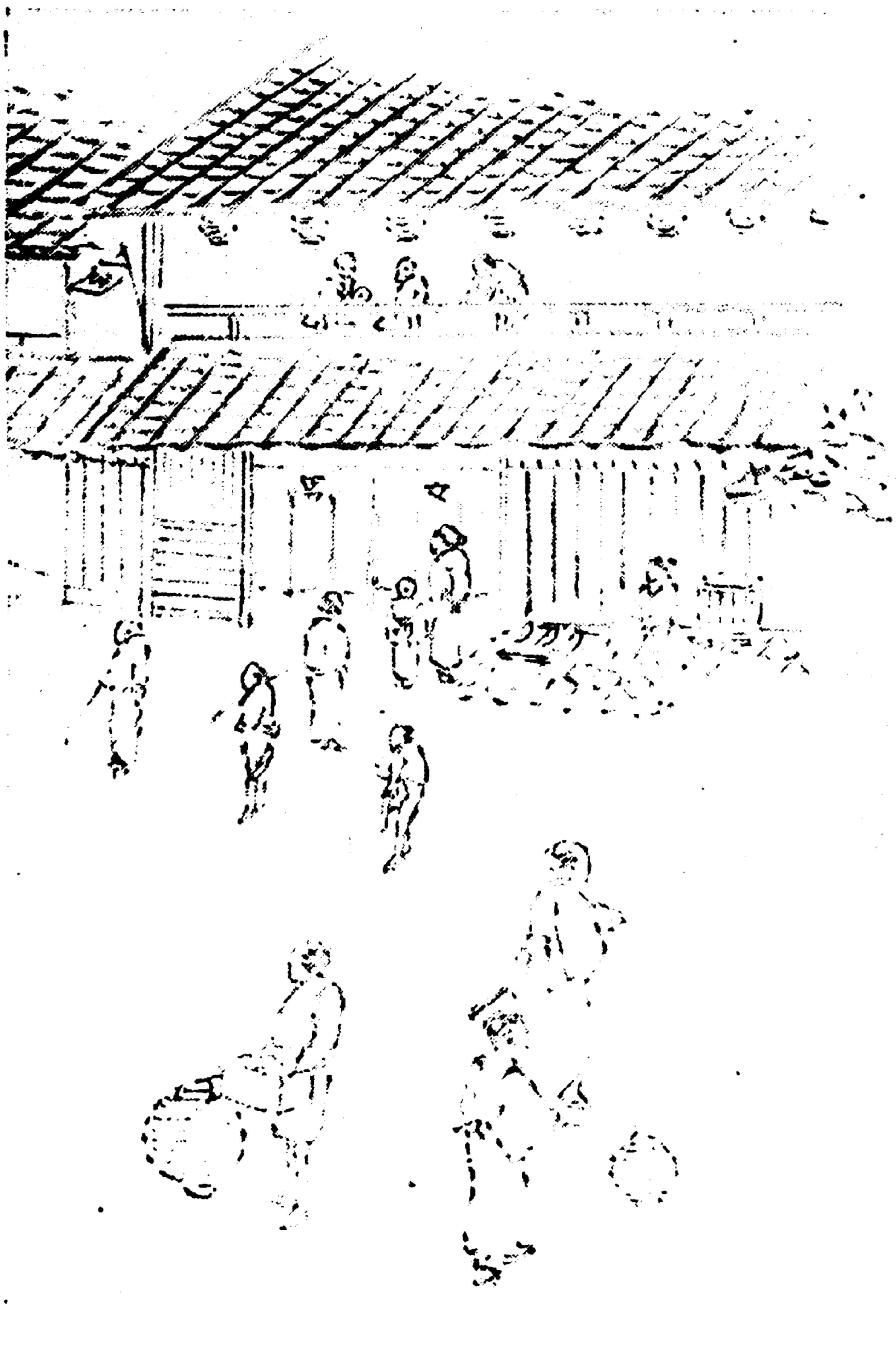
「ねえおまつちやん、辨慶蟹ね、なにを食べてるだらう。」

おまつちやんもちよつと不安な顔をする。つくばゐの吸込みの小さな穴へもぐつてしまつた辨慶蟹の子が、年々に大きくなつて、片つぽの鋏だけがやつと穴から出せる位に、吸込みの穴の中で成長してしまつた。右の手をだして、穴のまはりの青苔をはさんで食べてゐたが、もう手のとゞくところには苔がなくなつてゐたのだ。根の赤い、ギサ〳〵のある

た、私達がのつかつたら一ぺんに沈んぢまひやしないかと餘計な心配。あんまり見とれてゐたんだか何だか、ふと見るとこれは又醉ぱらひの一群。切角摘んだもち草の籠をひつぱつて「ヤイ、よこせ」と強そうな事を云ふ。シヤクにさはつたから、シヤベルでピシヤンといやな奴の手をたゝいてやつたら、びつくりしてひつこめちやつた。愉快々々。(優)

愉快愉快が實はそうぢやなくて、しつこい醉つぱらいね。私達をつかまへて、ついてきてうるさく惡口をあびせかける。モダンガール、こんなのは今更惡口の中に這入りやしない。大根足、これも古い、田舎役場の書記の出來そこないの樣な、選擧演説のやとわれ馬の樣な野郎達、が大きな聲でどなるので只でさへめずらしがつて見ていた土堤の人達がぐるりととりまいて仕舞ふ。「彼女等は日本の婦人でありながら、溫順なるべき婦人でありながら、何故に、斷髮、洋裝なのでありますか——彼女等は……彼女等は……、」素川さん「うるせいな」優子さん「何よ自分達だつてけちな洋服きてるくせに」みどりさん口惜しくなりすぎて口をきかない。しげ子ちやん、あとで「あたしよつぱらい嫌ひよ。ねえ叔母ちやま」(みどり)

香取の山から笛やたいこでねつて來たお士の行列が河岸へついたんだ。又こゝでもひとさわぎ。私達も船を借りて川の眞中へ出る事にした。家の裏から水門までは竿で行く。ボチヤン〱と船の腹をうつ水の音。せまい兩岸にはまだ黃花い猍の花がチラホラ水門の下



奇麗な、そして不具な片手が穴の中から差出されると、小さい時分にはよく抓みだしてやつた大人たちは、意固地に逃込むのを憎がつて、この頃は手をだすのを見つけるたんびにざまあみやがれと言つて笑つた。子供はその大人を憎んだ。誰もが居ないと、おまんまつぶを持つていつてやつた。好きな澤庵もやつた。澤庵を裂いてやるとよく知つてゐてはさんだ。此方からは見えなくつても、穴の中からは見えるのかも知れない、小さな眼が覗いてゐた

をくゞる時みんなでオーとよんでみる。オーと大きく壽きかへつてすつと利根川へすべり出る。澤山の見物船の間をぬけてギイ〳〵と艫をこいでゆく。例の飾のついた船の上ではピーヒヨロドンドンで踊狂つてゐる。踊りながら船は佐原の方へゆる〳〵と漕いでゆく。もうお祭りはあき〳〵だ。さて今晩はどんな事が始るか。(優子)

(一回ぬかしてはずるい)。頭もひげも、顏まで白い優子さんのお父さんはいゝお父さんだ。「御神輿の行列を拜まなくちや」とお祭りなんか鼻で笑つてゐる連中を熱心に引率して田圃へ出かける。香取から舟つき場まで十八町鎧兜の野武士連に警固されて香取樣がお渡りになるのだが、村々の氏子達が乏しい生活費を割いて大人や子供に整へたレイヨンの陣羽織裝束が、赤や黄色にチカ〳〵光る。「香取樣つてあのお榊木でせう」四人の白丁に舁せた大きい榊木を指さしたが、お父さんもよくは知らないらしい。返事はすこぶる曖昧だ。とぎれては續き、とぎれては續き、見飽きて、敬神家のお父さんの聞き役を私一人にまかせておいて、ずるつぺの三人はよもぎをつんでゐる。やうやく金具のピカ〳〵光る御神輿がゆる〳〵渡御になると遠くから帽子をとつて敬禮をし、孫のしげちやんにもおじぎをおしといふ。赤い帽子をかぶつたしげちやんはおぢいさん子だからおとなしく云ふ事を利く。うふつ。とかみ殺し乍らいゝお父さんだなと思つてゐると、さゝら何とか云ふのが通る。他の笛や太鼓と同じに竹のさゝら



──故父漢石翁「實驗畫錄」ヨリ

のでもあらう。

私たちは小さな龜の子をほしがつた事がある。壹錢銅貨位のや天保錢位の大きさのを買つてもらつて悦んだが、餌に蚯蚓をやるので厭ひになつた。私は蛇より蚯蚓が厭だ。蛇は下町にはゐないから、話以上傳說化した恐怖をもちはするが、見たことがないから蚯蚓の方が氣味がわるかつた。その蚯蚓の太いのを、小さな龜が食べる。しかも、背中を突ッ

をさら〳〵〳〵と鳴らし乍ら行くのでこの祭りの名物の一つださうな。

「お父さん今晩どぜう打ちに行きませう!」歸りがけに私はゆうべきゝかじつたどぜう打ちを提議すると、「ふふ」と云つたつきり。行かないのかと思つてゐたら夕飯がすむと物置きをごそ〳〵やつてカンテラと針のついた竹干を持ち出して「行かう」といふ。ワッッとみんな歡聲を上げて後につゞく。荒物屋で改めて新らしいカンテラを買ひ火をつけて貰つて出かけやうとすると「先生大丈夫ですかい」と誰か彌次つてゐる。先生とはお醫者樣だからだ。月のない眞暗い空だ「どぜうがカンテラをお月樣だと思つて遊びに出て來るんですつてね」と出鱈目を云つたのは誰か。カンテラをいくら振つてもどぜうなんか一匹もゐない。こゝは濁つてゐるから、こゝは耕したばかりだからと行けども〳〵たゞ空し。「どぜうは白い腹を出して眠つてゐるんだよ」といふがそれでもゐない。そのうちに石油のつめ方が惡かつたとみえてカンテラの火が心細くなつて來たのでやうやく思ひあきらめて引かへす事になつた。「石油をつめかへて向うの田圃へ行きませう」今度はみんなの方が强硬だが老人はさつさと一人家へ歸つてしまふ。どぜうが見つからなくて恥かしくなつたのらしい。カンテラを新らしくしてから迎へに行くとやつぱり一緒に出かける。洋服の上から白い診察着をきた老人は中々勇敢で、先へ立つてどん〳〵行く。一匹のどぜうが眠つてゐる。それつとばかりみんなが打ちたがつてゐ

ついても石つころのやうに堅くねむつてでもゐたやうなのが、餌を見ると猛然と首を伸してかぶりつき、掌を擴げておさえる。大きさからいえばあんぽんたんが大蛇にむかつたやうなのに、蛔蚓の胴中からは濁つた血——液が出てくる。龜の子はお爺さんのやうな皺だらけな頸をのばし、口は横まで一ぱいに裂け、冷やかな眼をうごかさずによせてゐる。不思議なことに、後年よく見たのだが、その眼が蛇の目とおなじであり、口のかたちも似てゐる。もしもし龜よ龜さんよの唄を、可愛らしい子供の口からきいても、なんだか龜が陰險でいやだ。

夏の下町の風情は大河から、夕風が上潮と一緒に押上げてくる。洗髪、素足、盆堤灯、涼臺、櫻湯——お邸方や大店の歷々には味はへない町つゞきの、星空の下での懇親會だ。湯屋よりもちつとのびのびした自由の天地だ。まづ各自の家が——家並が後景になつて天下の往來が會場だ。その時は、もし、お長屋に警官さんがゐても、その人もまたほんとの人間にかへつて、胸毛を出して尻をまくりあげて、澁團扇でパタパタやつて來會される。おかみさんの肌抜ぎも咎めなければ、となりのお父さんの褌一つなのも當り前なのだ、眞に天眞爛漫、更けるほど話ははづむ。何處でもする怪談ばなし、新聞がいまほど行き渡らないから舊幕時代の、垢のつききつた「お岩樣」で聲をひそめてゐる。夜六時すぎてから「お岩樣」のはなしをすると怪異があるといふのだ。そら引窓があいた! なんて、年甲斐もなく妙な聲を出すのもある。

新内が來る、義太夫がくる。琴と三味線を合せてくるのがある。みんな下手ではない、聽き巧内が揃つてゐるからだ。向ふ新道の椽臺でやらせてゐる遠く流れてくる音を、みな神妙に聽入つてゐる。生活に幾分餘裕があつたのでもあらうが、お三日に——朔日、十五日、廿八日——門に立つ物乞も大概顏がきまつてゐた。ことに門附けの藝人はもらひをき

るうちに一早く老人が仕止めてしまつた。ほら又ゐた。景氣がいゝぞといつてゐるうちに今度もお父さんだ。打ちたいわ〳〵。とみんなから不平が起る。だが下手にすると逃げてしまふからといつて四匹も一人で打つてしまつた。バケツの中に泥と四つのどぜうがペチャ〳〵してゐる。私が一匹、みどりさんが一匹、ほらゐる〳〵早く〳〵と云ひ乍ら老人は氣が早い。今度も自分で打つて得々としてゐる。みんな思はず大聲で笑ひ出してしまつた。どぜうは七匹。夜風に草の香が流れる。(森)

打たしてくれえ──悲鳴をあげてやつと一匹、「どうも田の水が濁つていて不可ん、居ないからもう歸らう〳〵」みんなもあきらめて歸りかけると歸らう〳〵のお父さんはすまして反對の田圃の方にゆく。おぢいさんといふものはとかくのんきで可愛いものである。どぜうを打つた、たたりか罰か、あしたのあさ起きてみたら雨がジャボジャボ降つていた家でねころんで森川さんのいつもを偲ばうかとも思つたけれどそれもつまんないしで御信心御心信鹿島神宮でも參詣しませう。雨の水鄕めぐりはかへつてすてきよ。いい氣になつてボッボ蒸氣のふたをあけたら大變滿員でいらつしやる。靴をぬがされて、降りたは降りても坐るところもない。御信心厚い嫁な奴たちが酒臭い息をはいたり、水鼻をすゝつて德富蘆花の紀行文の中にはこの水鄕の稻の色を……とかなんとか學者ぶつてみたり、人の方をぢろ〳〵見てみたり、ところがこつちは大變だ。のびることも出來なきやちゞむことも

めてゐるやうだつた。女太夫の各殘りもあつたのだらう、家によつては煙草の火をもらつて話してゆくのもあつた。琴三味線の合奏は老女が多かつた、みなといつてもよいほど舊幕臣のゆかりだつた。緣日のはづれの方に、小さく敷ものをして、紙がとばないやうに小石をおいて、お家流の美事な筆跡で、すら〳〵和歌や詩を書いては、一枚書くと丁寧にお辭儀をする品のよい老女がゐた。落泊ても手や顏に垢をつけてゐなかつた。その前にしやがんで、表札を書いてもらつてゐるものや、手紙の上封を賴んでゐるものもあつた。私はよく言はれた。お前は、書籍ばかりすきだと、あゝいふ人になるよと。

小傳馬町の、現今電車の交叉點になつてゐる四辻に、夕方になると櫻湯の店が赤い毛布をかけた牀床をだした。麥湯、甘酒、香煎なんでもある。このごろの芝居ではお盆でだすが、一人だと茶臺──眞中に穴のあるのでも出した。その廻りには、煎りたて豆だの、赤に紫の葡萄の繪を描いた行燈のぶどうもちだの、飴やが並んだ。金米糖やもあつた。金花糖やも人形町に店があつて、招き猫は大小となく出來てゐた。嚙るとガランドウとムクとあつた。廻り燈灯やとほゝづきやが夜の色どりで、娘たちが宵暗にくつきりと浮いて匂つた。

浴衣と行水が終日の勞れを洗濯して、ぶら〳〵歩きの目的は活動もなくカフエもない、舞臺裝置と、繪でいつた芝居見たままの切組み燈籠が人を寄せた。

橫山町や、藥研堀あたりの大店では荒い格子戸の、よく拭き込んだのをたてゝ、大戸を半分だけおろして、打水をして見せてゐた。わざと店はあまり明るくはなかつた。そして店はキチンと取りかたづけられて誰も──小僧一人居はしなかつた。さういふ家の前を離れると、すぐ傍が黑い藏であつたり、木口のよい板塀であつたりして、天水桶や、金網をかけた定夜燈が灯つてゐたやうに覺えてゐる。日本橋にはさういふ古風なところが多くいつまでも殘されてゐた。

出來ない。どろどろのみんなの下駄や傘の上につかる。奥の方に佐原の女學校の生徒が五人程居た。「アラ今は」「赤逢つたわね」去年素川さん達がお菓子をあげたら受取らないで來てて仕舞つた禮儀となつかしみを知らない人達だ。こんだ船の中に樂々と足をのばしてキャッキャッふざけてゐる。私達の方を見ながら笑ひながら、私達の苦しみを見ながら。たまりかねた素川さん一貴女達足をひつこめてすこしつめて丁だい、こんなにこつちはこんでるんだから」それでもヘラヘラ笑ひながら知らん顔である。佐原の女學校の生徒といふものはそんなに偉いのかと思つちやつた。潮來で人が少し降りてぢやないあがつてやつと坐れた。優子さんがスケッチブックを取り出してニヤニヤしながら、いやな奴達を片つぱしからかき出した。かかれる方はあはてて帽子をなほしたり、ネクタイをひつぱつたり、ハンカチでかほをふいたり、冗談ぢやないや、(みどり)

雨が愈々烈しくなつてガラスの破れ間から吹き込む。どうしてこんなちつぽけなモーターなんか造つたんだらう。私達みたいに大きいのは例外だとでも思つてゐるのかしら、雨の水鄕をたのしむどころの騷ぎでもなく四つのぬれ鼠は鹿嶋にたどりついた。皆妙におなかがすいて自動車を待つ間親子丼を、あまり重くない財布をのぞきながら。この親子丼御飯の上にチョビンと齒のたゝない鷄と卵がのつてゐるばかり。始めから御かずの足りないのをみ越してゐるんだ。だつて店には罐詰

燈籠の中味は、背景も人物も何もかもが切りぬいた錦繪なのである。三枚つゞき五枚つゞき、似顏繪のうまい繪師のが繪双紙屋の店前にさがると、何町のどこでは自來也が出來たとか、どこでは和唐內の紅流しだとか、氣の早い涼臺のはなしの種になつた。そしてよくは覺えてゐないが、脚光などの工合もうまく出來てゐた。遠見へは一一上手に光りがあてゝあつた。曾我の討入り、狩屋のところなどの雨は、後に白瀧といふ名で賣出した、銀紙のチリ〳〵した細い根がけ（白瀧として賣出したのは、今の左團次のお父さんが白瀧姫とかいふ織姫になつた狂言の時だつたと思ふ）を、上から下へ拔いて、書心に雨を面白く現はしたりしてゐた。白い背絲（これもバラ〳〵した根がけ）でこしらへたのもあつた。

何處の家で、今年は素張らしい切り組みが出來たと噂されるほどなのは、中々手を盡して橫長角な遠見を深くせまくした、丁度舞臺の額緣の通りなのが三面ある家も、四角にして四面あるうちもあつた。一幕目二幕目と續いたのや、または廻り舞臺のつゞきや、一番目の呼物と中幕と、二番目のを選んだり、更にまた其家の贔屓役者の當り役ばかりを選んで幾場もつくつたりした。前に言つたやうな、動かして見せるのではなく、三尺からのものを四ッも五ッも飾つて見せるのもあつた。職人衆のうちのは景氣よく明つぱなしで、店さきへ並べて、奥の人達も自慢さうに簾のかげで團扇づかひをしながら語りあつてゐるのもあつた。その上にも景氣をつけて新內をやらせたり、聲色つかひを呼込んでゐるのもあつた。

繪双紙屋の店には新版ものがぶらさがる。そぞろあるきの見物はプロマイド屋の店さきにたつ心と、劇好きと、合せて繪畫の觀賞者でもあるのだ。

子供といふものは、ふとした時にきいたことを生涯忘れぬものである。あんぽんたんの

が澤山並んでゐるんだもの。仕方がないから海苔の罐詰を買つた。もつと小さいのがあるのに大きいのを出す。くやしいから殘つたのをすまして紙に包んでいよ〳〵自動車で鹿嶋神宮へ。（優子）

せつかく靈驗あらたかなお宮へ來たんだからお賽錢の代りにおみくじをひく事に仕やうと衆議一決、最先きにおみくじの筒をふると二十五番。みんなのは何番か忘れてしまつたが、お札所へ來ると五錢と引きかへに一枚の紙をくれた。凶、谷川に棹をさす如し、とか何とか無理な考へだがそれを無理のないやうにすれば吉になるとある。成程？　緣談、待ち人みんな駄目、これで五錢は高いや、優子さんは、十三番大吉、緣談金談大いによしらまくやつてら！妹季子孃、吉、姉さんの緣談のお据分けに預かるべしとか。みどり孃は七番の吉で草木の種を蒔くが如し、緣談後の向がよい、出產は永引けど安く女子など。だけど一體みんなは願ひ事を考へてからひいたの、と不思議に神樣や佛樣の好きなみどりさんが恐ろしく神妙な事を云ひ出す。みどりさんも未だ可愛らしい所がある（紫）

首を一つピヨコンとさげて、之が鹿嶋さまと見廻して、おみくぢ代二十錢拂つたら參詣が濟んぢやつた歸りは潮來まで自動車をとばした。長い長い橋を渡つた。何ていふんだか忘れたけどいい氣持だつた。（みどり）

利根川の水に雨が降る。去年の旅が思ひ出される。小さな船が引つくり返り相に風がひどくなつた。鹿島樣の祟りかもしれないとみ

幼心にしみついたのは、前にも書いたかもしれないが、太胡さんといふ、何か不平を癒してゐたらしい酒のみの壯士が、私がほうづきをふくんでゐるのを見て、たつた一言激しくたしなめたことがある。それからフッツリほうづきを鳴らさない、器用に何でも鳴るのだが——出たての空豆の皮などを、ついふッと吹きはするが、すぐ苦さがこみあげてくる。も一つは父のいつたことばで、ある時、父はしみ〴〵と、幼い私に言ふやうな事でない言葉を洩した。よほど胸につまつてゐたのであらう。

「四民平等の世の中なのに——俺はいけない。なあんだ、當り前だと思ひながら、情けないことに町人根生がぬけないのだな、心ではさう思ひながら、つまらない奴に自然と頭が下がりやがる。甚いもので、代々植付けられて來た卑屈だ。いめいましいが理屈ぢやどうにもならない。お前なんぞは、そこへゆくと、生れた時から自由の子だ、どんな奴にも頭あさげるな、おんなじ人間だぞ。」

私は父を愛す、晩年に近く失敗したけれど、それは、殆ど父の仕業ではないほど私の知る父とは矛盾した事だつた。私の筆はやがて其方へも進んでゆくであらうが、そこでは辯護しないが、父の壯年時代を知り、晩年を知るものは、なにの爲にかを考へさせられる。父は後にいつたことを、ふと迷つて、そしてまた長く悔ゆると——

父の人格がすこし變つたのは、中年過ぎて男の子が出來てから、母の狂愛に捲込まれてからだつた。私につぶやいてきかせたころは、實に好きな父だつた。夜、客のない時、お膳を前にしてチビ〳〵やりながら書籍を讀んでゐる。私を前におくのがくせだつた。ふと氣がついて書物から眼を離すと、おとなしく膳の前に座つてゐる私に、お肴をつまんで口に入れてくれた。（それは四つ五歳のころのことだが——）私は父が傍見をしながら猪口を口にはこんで、このわたが咽喉につかへたのを見てから、いつも鋏をもつて座つてゐた。

どりさんの云ひ相な言葉だ。やうやく疲れた〳〵と、各々互ひにつぶやき乍ら濡れそぼつて歸つて來ると優子さんとみどりさんは早速ダンスだ。暖かくなつてよとい〻氣持でドタ〳〵パタ〳〵ジャズ〳〵〳〵。外は凄じい嵐。木の葉のもまれる音がする。見てたつて足は暖まらないから、お炬燵へ入つてうつ〳〵してゐると東京から歸つたお船頭さんが現れて「やあしばらく」「今日は、明日は舟が出せるわね。」そのうちに船頭さんもダンスの仲間に入つた。嵐がやむかしら。大丈夫よ今夜のうちに思ひ切り吹いてしまへば（素子）

素敵にいいお天氣、でお冷やのごはんでおむすびを作つて、ソセージのサンドウイッチを持つて家の裏から竿で水門までゆきました。ところが利根川は大變な浪なんです。白浪が立つて舟は何邊出してももどされます

えつちらおつちらやつと岸をはなれたと思ふと又二三間先の岸にヒュッと横づけ。大わらはの助手達キャアキャア云つてるまにヨイショとばかり竿をついた優子さんぐにやりと一本太い奴を折つて仕舞ひました。舟が川つぷちでヨタヨタしてる間におなかがすいたのでおむすびを食べちやへ。一體いつ潮來につくのよう（みどり）

お腹がはつて元氣恢復。手に竿を持つて立ち上ると勢ひこんで岸をつく。この頃風が大分凪いで來た。竿と櫨でどうやら川の眞中まで漕ぎ出したが少し油斷すると又岸へ吹きつけられそうになる。この所大苦心。やつと向ふの土堤の方が近くなつて喜んだが、サテ與

父は私を友達のやうに、とんでもない場所へまで連れてゆく。藥研堀のおめかけさんのところへ連れていつたまま、自分は用達しに出てしまうので、私は二三日して送りかへされる。ついて來た老婢が、なにかと告口をするのに、私は何も言はないので母に大層折檻されたりした。

またある時は吉原へ連れてゆく。櫻の仲之町の道中も、仁和加も見た。金屏風を後にして、アカデメックな椅子に、洋裝の花魁や、芝居で見るやうな太夫は厚いふきを重ねて、椅子の上に座り、前に立派な廣帶を垂らしてゐるのを見た。せまい道巾のところへいつたら、小さな店に、さびしげにゐた黑い白粉をつけたやうなお女郎が「おちやぴんだ」とどなつて、煙管を疊に投げつけたので、私はびつくりして、格子にぶるさがつてゐた手をはづしてベソをかいた。ある時は芝居につれていつた。よはむしな私は芝居がこはくて、大きらひだつたのに連れていつては失敗してゐた。新富座に時の大名優九世市川團十郎が「渡邊華山」をして、切腹の正念場の時、とう〳〵私は泣出した。父は私をかゝへて家まで送つて來て、折角のところを見そくなつたとこぼしてゐた。そんな事は度々であつた。私はかなり大きくなつてからでも、芝居茶屋の二階に、ボッネンと、あねさまを飾つたり、ボンやり考へたりして一人で居殘つてゐたことが多かつた。

それより困るのは、撃劍大會といふやうなところへ連れてゆかれる事だ。私の姪や甥がボート選手の古いのをお父さんにもつて、その季節に連れてゆかれると、お父さんの熱狂奔走ぶりに悲しくなるといつたが、私の父の撃劍の場合もさうだつた。小つぽけな子供なんぞ袖の下にはひつてしまつて、父は棧敷にがんばる。吃驚するやうな氣合をかける。ト、ト、ト、ト、トッ、そら突け！と呶鳴る。私は縮みあがつてしまつて、父は殺されやしないかと思つた。やがて自分も引つぱり出されてゆく。ゴチャ〳〵になると、どれが誰だ

田浦へ入る口が見つからない。水門丈見えてるが草にかくれて流れが全然見えない。あそこだ。いえ、こつちよ。で遂に迷子になつて利根川を右往左往。やつと見つけて入江に漕いで行つた頃は力も大分つきて、竿を握つたまゝあつちへヒヨロ〳〵こつちへヒヨロ〳〵船頭さんと奮闘の眞最中、みどりさん、何かにつまづいてドシヤン。しりもちついて、背中をびつしより。べそかきそうになつたのを辛じてこらへたと云ふ顔。皆氣の毒やら、おかしいやらで苦笑ひ。水門をくゞつて田甫の間を行くと與田浦だ。廣い水。モグリが水の上を走る。お魚がはねる。皆いい氣持になつてゐた時。今日は佛滅だ。みどりさんそんな事云ふのが好きなせいだか、又竿であごをつかれる。今度は見ものだ。ふくれるぞと見る間に例のだんまりが始つた。一人で怒るのを樂しんでゐると云ふ、例のだんまりだ。こうなつたらさはらないが先づ安全。私達が夢中に船を操つてゐるのに涼しい顔で背中を向けて座つてる御孃様。ここでも停電する事數回。いよ〳〵十二橋の入口にかかる。一同喉はヒリ〳〵。手は豆だらけ。そこで生へぬきの船頭さんに頼みこむ事にして嶋に船をつける。助けて〳〵と呼びたい氣持で（優子）

日頃ひよろ〳〵だの小さいのと惡口を云ふみどりさんが花嫁さんのやうに正面を見たつきり。そこで怠け者が働く事になつて棹をさすやら、ろを押すやら大奮闘。自慢のお船頭さん補佐の役目を優子さんと二人で大童になつたところ丈が見もの。水の中からよしの若

か分らないので、私ば歸れるのかしらとベソをがまんしてゐる—

國會開設前の時流は、三多摩の壯士が竹やりで何百人押寄せてくるのなんのと、殺伐な空氣であつたと見える。政談演説會や討論會もよく開かれた。ある折兩國の福本といふ講談席亭で、講談師なのか壯士なのか、或は辯士なのか、またはそれらの交りなのかそこの處は記憶が誠にはつきりしてゐないが、擬國會みたいなものが催ふされたらしい、例によつて私は父に連れられていつた。自由黨の人たちが多く來てゐたのであらう、あれは中島だよとか、あれは誰たよとか種んな名をきいたが覺えてはゐなかつた。たゞ、父と論じあつたので板倉中といふ人の、赤ら顔の、小肥りの顎髭のある顔と、づんづら短い姿と名を覺えてゐる。この時も、正面の棧敷にゐたが、大きな聲をするので私は閉口してゐた。それに、どこでも呶鳴るので溜息が出た。

父は刀が好きだつた。暇があると拭ひをかけたり粉を打つたりして、いつまでもあきずに眺めてゐた。磨に出したりするのも好きだつた。燈火の下でやる時もあるが、晝間でも靜なときには一室を締めきつてとぢこもつてゐた。そんな時、母は大きらいだつた。



「そらお父さんがはじめた、みんな退いておいでよ」

といつて自分からさきに避けてしまつた。

私はなんとなしに、父の仕事に興味をもつた。よく傍に居た。父は顎であつち

芽が五寸程伸びてゐる。新らしい眞物の船頭さんを頼んで心安く舟が水の上を辷り初めた頃はすでに陽は西に。この地方特有の墨繪で描いたやうな一本橋が見える。十二橋だ。兩岸には柿と楠の木の若葉が見事な艶を見せてゐる。木苺の白い花も見える。水、水、水、去年このあたりの水のよさに思ふ存分おぼれた私は今年はここに來て初めて水郷の水を感じた。舟は靜かに水を分けて進み、ろの音がのどかだ。ゆつくりしませうよ（素）

　舟でひつくりかへつてぐしよぬれにはなるし、下手なお船頭さんには竿であごをつきあげられちやふし、みんなはほらおこるぞふくれるぞつてはやしたてるし、そんなに待つてるんなら思つてる通りふくれちやへで、あつちへよたり此方へよたよたぐるぐるまわりをしている船の中で、ゆらりゆらりと一人でいい氣持。背中のぬれたのも乾いちやつたし、十二橋には來たし、一二三「眠つちやつた」とかなんとかてれかくしふくれた事は水にながしてあとはすこぶるほがらか。佐原へ歸るモーターに綱でひつぱつて貰つて、船頭さんもみんなものんきな顔をして、空、色、水、田甫、水、いいわねえ。出掛ける時のひどい風も夕凪ぎになつて物音一つしない靜かさ、モーターに別れて皆はろのおけい古、素川さんが一番うまくて、スーッの上からひもで腰をくくつた妙な格好をして、でも感心におへそをはずさない。優子さんが一番下手だ、あたしはまんなか、あんまり力をいれすぎてはおへそをはずす。ろと心中しかねない有様だ。

へいつて居ろと指し示した。私は室のそとから覗いてゐると、父は居合を——聲もかけずに、すらりと座つたまま ぬくのを試してゐる。二ふり三振り刀を振つて、また惚れぼれと見てゐる。みだれとか、燒刄の匂ひとかいふものを教へてもらつたのもそのころだ。

　私と父との靜な問答がはじまる。

「お父さん、劍術つかひがいい？」

「うん。」

「繪かきがいい？」

「うん、」

「なにが好いの？」

「お父さんはな、八歳か九歳の時分手習師匠が大變可愛がつてくれた、するとな、雷師匠といはれた手習のおしよさんの近所に國丩といふ繪かきがゐてな、繪を教へてくれて、これも大變可愛がつた。その時分東兩國に、萬八といふ料理やがあつて、書畫の會があると龜田鵬齋といふ書家や有名な繪かきたちが來てな、俺を弟子にしようとみんなが可愛がつてくれた。その頃の人たちが、紙へかいてくれた繪話のやうな繪が澤山あつたのだが、祖父は丹念にとつておいてくれたのだが、どうしてしまつたかなあ。どつちかになつておけばよかつたのを、祖母が商人がいいといつて、丁銀といふ大問屋へ小僧にやられた。」

それがな、といつて父は私のおかつぱの頭に手をおいた。

「丁銀のおばあさんも八釜しやで、灸が大好きだから、祖母の氣が合つてたんでやられたのだ。」

「では小僧さんでもお灸を据えられたの！」

あたしは大きな父が痛ましかつた。私とおなじやうに、やつぱりお灸を据えられたのか

ヨイショとおしてキヤアはずれちやつた、ひつぱりあげるに一さわぎ（みどり）

夕日が綺麗だ。水の色が眞珠貝の樣に反射する。いつ迄も水の上で遊んでゐたかつた。

今日は夕方の汽車で歸へるつもりだつたがどうにもこうにも疲れてしまつた。お風呂へ入つたら最後、さすがのみどりさんも今日は踊り狂ふ元氣もなくおふとんの上へゴロリ。（優子）

水郷の風のさわやかな所で四五日靜かに本でも讀み度いな。といふ私の祕かな願ひはどつかへすつとんだといへば、淋しいから今年中ゐてもいゝと妹さんは云ふ。だが併し、今年中では私の方が少々人なつかしすぎる。ぜいたく云はないで歸る事にしませう、と情けない聲を出して、あゝ疲れた〳〵とばかり五日目の朝見送りの妹さんも一緒に歸路へ。佐原へ着いてみると見事に豫定の汽車に乘りおくれてゐる。ついでに成田までやつてよ、と四人は駄々をこねて自動車から下りない。優子さんの家の出入りの自動車屋さんは四日五圓の旅費を知るや知らずやお爲にならないからと躊躇するのを、若い元氣な運轉手と諸共に說き伏せて、最後の豪遊とばかり成田まで自動車をふつ飛ばして、京成電車へとびこむ。今日は雜誌の發送日なので、流石の放蕩女達も我が社戀しくなつたのです。一そ東京までやりませうかといつた元氣な運轉手は一生懸命で帽子を振つてゐたつけ（素）

や忘れた、せつかくたたいたどぜうを食べてくるのを、をしいな（食慾娘）

と——そして祖母がよくはなす、

「祖父が丸の內のお出入り屋敷へゆくと、向ふから、藥包紙のやうに日にやけた小僧が、白い齒をだして、ニヤ〳〵笑ひながら來るので、よく見たら家の息子だつたと。」

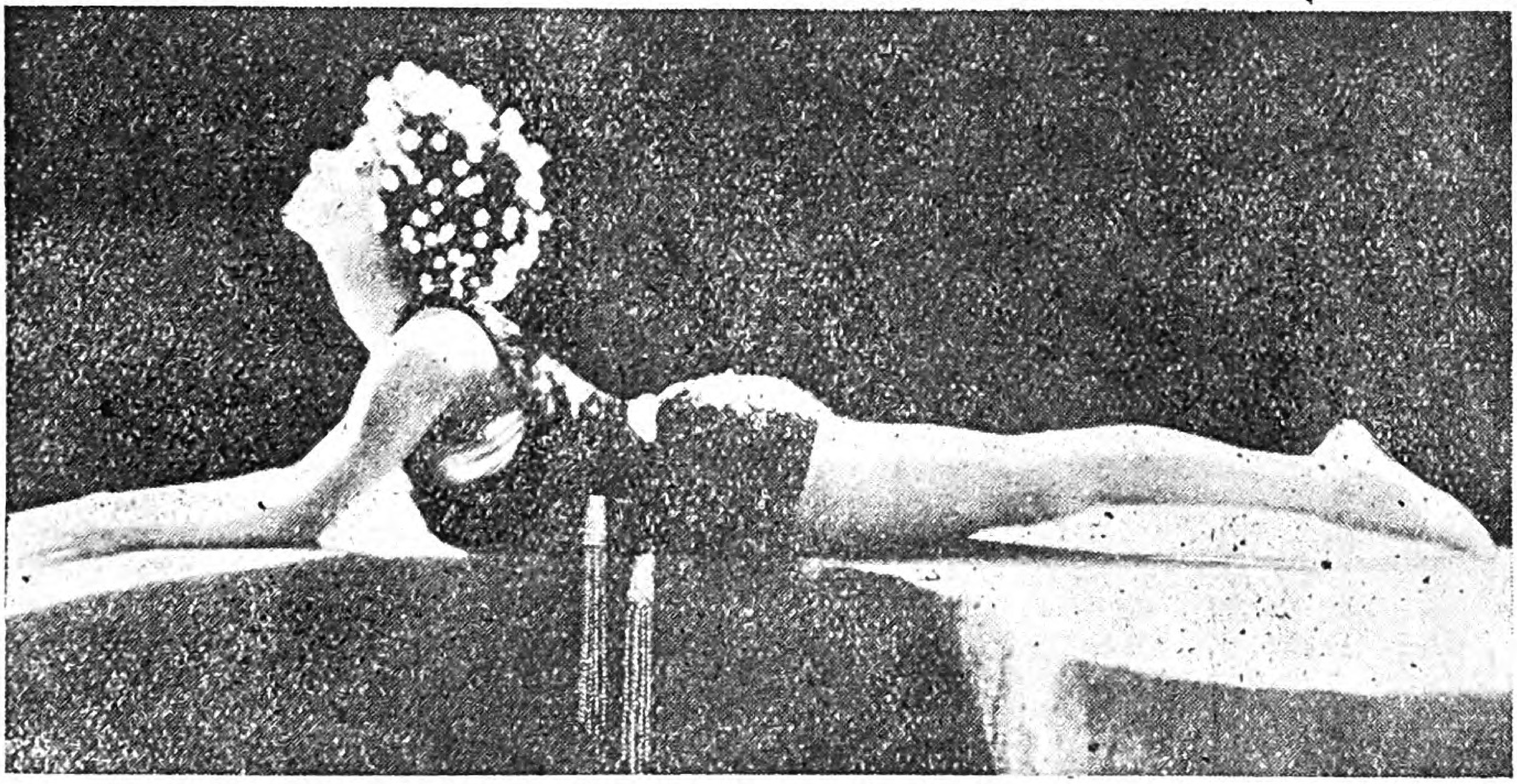
父は色が黑くて菊石があつたから、この上黑く干しかためた小僧だつたら、どんなに汚なかつたらうと思つた。

——父はよく言つた、菊石といふ號をつけやうと思つたが、漱石の方がよからうと。だが、父の若い血は算盤をはぢくまで辛棒しかねて、お玉が池の先生千葉氏の門下になつて、先生には可愛がられたが、親や近所からは鼻つつまみになつた。

——この項つゞく——

——前號、「岩見銀山」と書くのをあやまつて 鼠銀山」と書きました。

每號の挿繪は故父渓石七十一歲のをりに描いたものです。父の六歲ごろから明治二三年までに見たものを描いておいてくれました。題して「實驗畫錄」といひ百五十圖ばかりあります。寫眞は靑年時代の父です。



ナジモヴのサロメ

映畫漫想（三）

尾崎翠

聲の美

誰が、どんなつもりで考へだしたのかは知らないけれど、聲畫を思ひついた頭は、よほどのなまぐさ好きだと思ふ。それとも、この斷定は聲畫を聽いた結果だけによる速斷で、この頭は、なまぐさ好きと別な、いろんな性情を持つてゐたと假想してみるならば、話は自づと別な方に發展する。

假想に登場する彼は、實のところ、招く結果など考へ得ないほどのおとぎばなし好きで（なまぐさ好きと何て遠いことだ）、このごろはやりの、機械を使つて頭の遊びをしてみたい衝動を持ち、このごろはやりの、地球をてのひらにのつけて、いろいろ、粘土こねや千代紙細工のやうに、好み好みの形に作つてみたい情念を持ち、このごろはやりの、混沌の花を愛し、――ともかくそんな傾向の方に屬する彼だつたかも知れない。總じて、地上よりは蜃氣樓の方に心をよせてゐるふうな。

さうとすれば、彼は映畫に聲を吐かせることを思ひついた瞬間、最初の瞬間、彼自身の思ひつきに醉つてしまひ、吃りがちに叫んだかも知れない。

これは、おお、なんとすばらしいおとぎばなしだ。俺は、どの、どの表現派映畫の監督よりも、ずつとすばらしいおとぎばなしを思ひついたんだ。やまひで紙のやうに薄くなつたマルグリツ

ト・ゴオチエの胸から、あの細い胸から、消えぎえの蜉蝣の、翅るやうな聲が出る「アルマンさまお手を……死ぬつてさう苦しいものではないわねえ」臨終の椿姫にこのせりふを言はせることによつて、アラ・ナヂモヴの演技はよけい深く、よけい偉きくなるのだ。俺の頭は、なんとすばらしい夢を思ひついたことだ。臨終のせりふが次第に細り、消えてゆくことは、マルグリットのからだを細り、消えさせる効果を持つてゐるのだ。それから、初めの方のアルマンとの睦言――むつごと、む、つ。ご、――ここにこそ聲が要るのだ。睦言を默つた身ぶりで現はさなければならなかつたのは映畫に聲を吐かせるこの思ひつき前の遺物なのだ。

聲畫を思ひついたのが決してこんな人種ぢやなく、ひろく地球上を見わたし、そろばんを取り、澁い手つきで眼鏡をなほし、つまり山本嘉一がX演藝株式會社の社長に扮したふうな人士だとしたら、それはまつたく神秘の霧に包まれた世界で、はぢかれているそろばん自身にも解らない神秘なのだ。だから、霧の中味は社長だけが知り、假想なんかで解ける問題ではないやうだから、それはやはり霧の中へ託しておくことにしよう。

それで、このおとぎばなし好きの男は（彼はチヤアルス・フアレルのやうに、さらさらと風に吹かれてる美男でもいいし、頬骨のあたりにすこしだけ鬚をもつた、さらさらとした醜男でもいい。しかし決してヴアレンチノではないのだ。といふのは、接吻に巧みな男の頭に、「む、つ、ご、と」などの夢の宿る事は稀だからだ）――それでこのおとぎばなしの好きな男は、彼の思ひついたものを言ふ映畫がいよいよ作品になり、彼の耳に還つてきたとき、自身の發明品から大きい背負ひなげを喰ひはしなかつたかと思ふ。

おお、これが睦言なのか。む、つ、ご、と――。俺の思ひつきはこんな、こんな動物園のためぢやなかつたんだ、こんな、こんなまぐさいやつの。（彼は蒼くなつて、ためいきを吐く。しかし、彼のためいきは、いま幕の上で役者の吐いてるためいきの、幾倍の眞實を持つてゐるのだ、やはりためいきなどいふものは、音は小さくても、鐵板をかなづちでぶつやうな擬音よりは、本ものの方が眞實だ）まあ、しかし、睦言の一人がナヂモヴでなくてよかつた。聲畫つてやつは、臨終のマルグリットを羽根蒲團のやうに



太らしてしまつたかも知れないのだ。そんなしろものだ。ところで、俺は考へなければならない。ひとつの思ひつきが、頭の中に、頭の中に在るあひだと、外で形に、形に現はれた時との違ひこれは暢氣な問題ぢやなささうだ。

こんな違ひは到るところ、ごろごろころがつてる。珍らしくもない惡戯ものらしいが、さう暢氣な問題ぢやないんだ。たとへば、ひとりの女の部屋着にしてもさうだ。この女は、細紐や

帶しめを軀にからみつかしておくと、頭の血管が大きく、小さく息してしまひに眞蒼になつて、勉强できない、そんな健康狀態だ。だから胸のひろびろとあいた、腕の短い部屋着を着て机に向ひ、なにか勉强してゐる。この部屋着は、實のところ、すこし不恰好だ。襞ひとつなく、軀が二つ這入りさうな程ばくばくの、鯉のふきながしなんだ。だから彼女はきつちりした着物に頭の血管を締めつけられる心配なく、胸のあきすぎた不恰好な部屋着は、彼女のたつた一枚の勉强着になつてゐる。そこに彼女の男友だち、まあ男友だちが這入つてくる。そして彼は、胸のあいた部屋着に、ちよつとしたほどの感じを受け、この感じは、女が机をはなれない限り男の中で大きくなつてゆく性質のものだ。としたら、女にとつてひろびろと寛い勉强着は、男にとつては、なんか、別な、締めつけられるやうな存在かも知れないのだ。胸のあきすぎてる部屋着一枚だつて、男と女にこれだけの違ひを惹きおこすのだ。だから、まづ俺のしなければならないことは、俺はもう、いろんな思ひつきを創ることは止さなければならない。このことだ。

そしてこのおとぎばなし好きの男は、アラ・ナヂモヷが幕の上で一度も聲を吐かないで、やかましい聲畫時代の來る前に幕の界から消えてしまつたことを歡んだかも知れない。

靜畫へのノスタルヂアの赴くところ、その故郷はいろいろ數多いけれど、なかでいちばん大きな故郷は、アラ・ナヂモヷ夫人のやうだ。いちばん故郷らしく、いちばんノスタルヂアの深いナヂモヷ。今日では「贖罪」も「サロメ」も「椿姫」もそのほかも、みんなむかしの影になつてしまひ、ナヂモヷは舞臺へ還つたとか風のたよりを耳にしたのもむかし。そして彼女の新らしい影を見るすべもなく、それだけ「サロメ」と「椿姫」への追慕は身に泌みて深いのだ。

人間がだんだん忘れつぽくなり、ひとつの偏執が五分間で消え、次のが二分で消え、第三のが三十秒で――こんなふうに小刻みになつたら、幕の上の役者なんて、せいぜい聲畫を二つほどしやべり、三つめにはBが迎へられ、だからAは永久姿を消し、Bは作品一つだけでCが迎へられ、こんなふうになるかも知れない。次から次忙がしいのは役者の募集係りで、役者は一人一作に限られ、その日その日の新聞紙のやうに翌日には古新聞になつてしまふ、こんなふうに、けれど、それはそれでいい。飽きつぽい世には間にあはせがつきものだし……

どこのおさんどんにも
わかしゆはつきもの
あたしがジヤックをもつたとて
ジヨンはきのふのこひびとよ

――厨前かけをしめた可愛い小娘のうた――

……つきものだし、どうせその役者どもは、顏だけとか、二本の脚だけとか、ブロンドの生えぎわだけとか、そんな部分にちよつとした天與をもらつてゐるだけで、そんな天與が募集係りの好みに合つただけで、演技の腕前といへば豐作の大根畑か、せいぜい螢なのだ。だから三十秒の偏執でたくさんだ。そして、ナヂモヷはシヤンデリアだ。いま、螢どもの多い今日、消えてしまつたナヂモヷに寄せる想ひは、大がかりな、凝りに凝つたシヤンデリアへの渇仰なのだ。

もうひとつ、ナチモヴを惜しむ挿話のやうな想ひをここに言ふならば、「椿姫」で對手役をつとめたルドルフ・ヴアレンチノ（氏は幕の界きつての惱殺屋で、地球上のあらゆる國境の襖を蹴つとばしちやつたさうです）が死んだからつて、なにか、その、漠とした女性の雲のやうなものに向つて、短かい挨拶をすれば濟む「さうですか。御愁傷さまですね」。けれど、椿姫その人に對しては、ナチモヴが映畫界を去つたことは、ヴアレンチノの死よりもずつとずつと痛いのだ。なぜといへば、ヴアレンチノは螢のひとつで、ナチモヴはシャンデリアだからだ。そして、技巧といふものの力はこれだけに偉きいのだ。


ナチモヴの椿姫

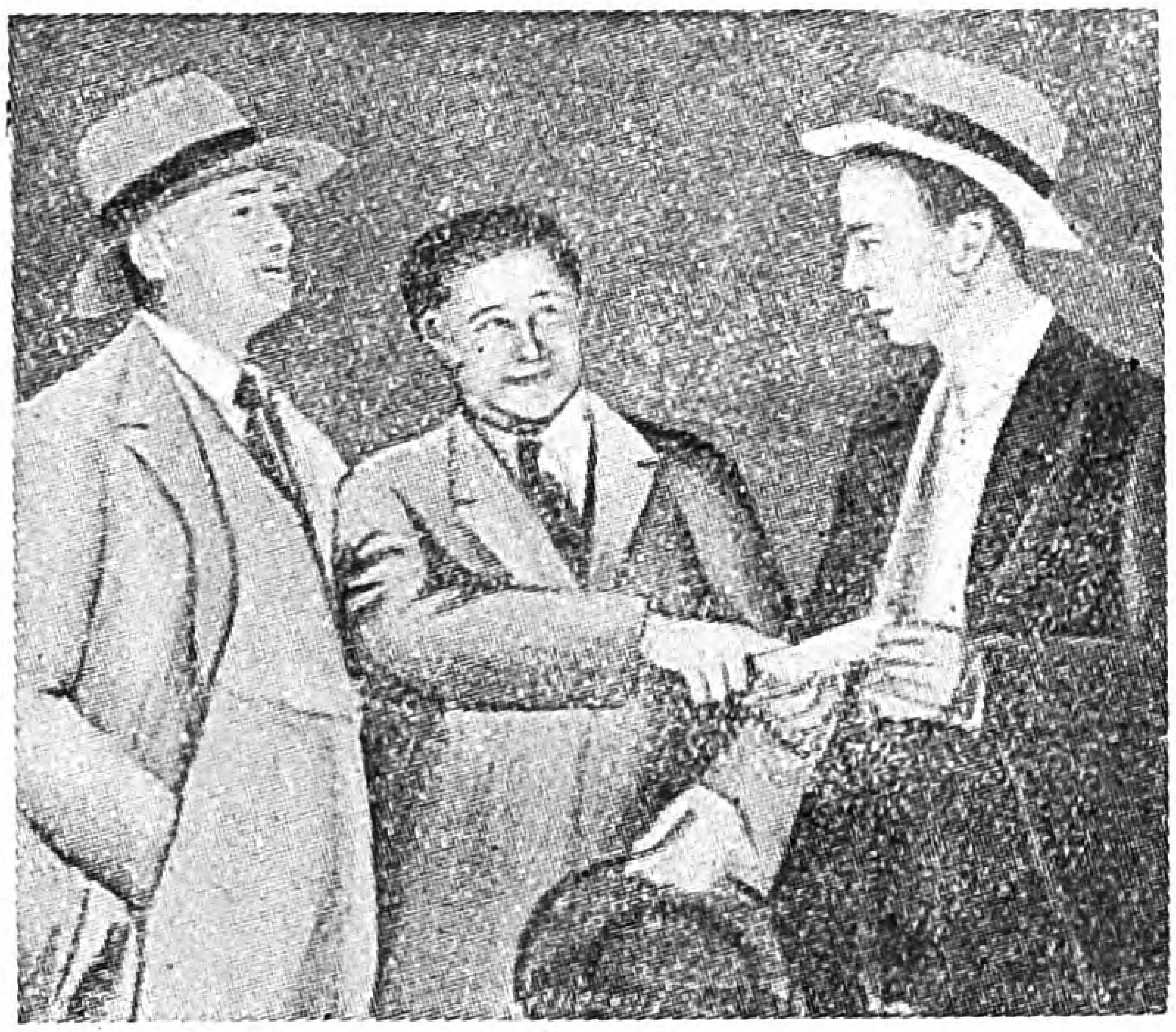
　ナチモヴの偉きさは、自然を足蹴にした偉きさと言つていい、彼女の爪さきにまで行きわたつた「お芝居」の巧さは、およそ素朴・ありのまま、ナイヴ・生地、そんなものを引つくりかへし、そんなものを嘲笑したくなるほどの力を持ち、そして、技巧天國を教へる。映畫のよさといふものは、普通には、役者のなんかの癖――ひとつの黒子――ちよつとした匂ひなど、部分的な、小さいものによつて、觀客のささやかな偏執を誘ふ、それだけのことだ。これが螢どもにできる仕事なのだ。そして、ナチモヴは全身の技巧で、小さい偏執を許さないほどに觀客の全心を包んでしまふ。もし幕の上で役者に打たれたい觀客があつたら、彼はただナチモヴの演技を見てゐればいい。殊に「サロメ」と「椿姫」を。そしたら彼は凡百映畫で一本の脚に見とれ、ひとつの笑靨を愛してた狹さを自嘲したくなりさうだ。

　「椿姫」と「サロメ」で、いろいろに變つた頭髪の美――髪の美――髪の力――その强さ。ナチモヴの境地はこれだと言つていい。髪の美。時にはあの體軀に背負ひきれないほど大きい、絢爛な、豪華な髪（こんな時、ナチモヴのからだは、ほそぼそと、消えてしまひさうに、水をはなれた人魚に、なつてしまふ）。時にはあの肩を腕を強く、わがままに、誇りだかく、嬌慢にする髪。時には謙虚に、時には暴慢にする髪。この髪の美――技巧の天國。次次と變つていつた「サロメ」の髪は、監督者のちよつとした興味やなんかで思ひつかれたものではないのだ決してないのだ。思ひつきや間にあはせはナチモヴの演技が許さないのだ。「サロメ」の髪は、ナチモヴが全身と全心で、あらゆる抽象名詞を表現できる役者だといふことを教へるのだ。

　ナチモヴの體軀の動きには、畫面のはじめからをはりまでを通して、舞踊の美がある。律動の美。時には大濤。時には風に吹かれる草の葉。時には神をも蹴つとばす太さ。そして時には、藁屑にも拜

跪する細さ。そしてこの律動をあまり活かせないやうな、誰にもひととほりは演れる性質の畫には、彼女の出演は惜しいのだ。なにも眞珠を豚にくれてやることはないのだ。

ナヂモヷのもつ律動は、凝つた衣裳をつけ、大がかりな時代ものへ（これは文字どほりな時代ものではないけれど、呼びかたにつたので假にかう言つておく）だけを演る特權を持つてゐる。かけだしのシナリオ・ライタアのちよつとした出來ごころに宿つた、お粗末な、がさつな世話もの（これにも時代ものと同じ意味の註をつけて）は引つこめた方がいい。なにも眞珠をちつとでも豚に見せてやることはないのだ。だから「贖罪」や「海の神秘」は豚に眞珠の方で、「サロメ」と「椿姬」こそナヂモヷのほんとの領土なのだ。ただ「贖罪」（これはそのむかし大久保キネマのプログラムに「ナヂモヷの妖女」と呼ばれた作品です）には、ナヂモヷのリズムを活かす一つのすばらしい場面があつた。地下室だつたかの、陰慘に蒸れた酒場でごろつき女のナヂモヷが高い臺の上で踊り、無賴漢・街女・ごろつき・ルンペン・ぢごく・ごろつき・破戸漢・べらんめえ・こんちくしやうの群衆が、臺のぐるりにごつた返してゐる。ナヂモヷの足さきの丁度頭あひのところに群衆の額がある。そのなかでまたいちばん頭あひのところにある二つの額（二つとも、しやうのねえ阿魔ナヂモヷの情夫のだ）を足蹴にする、この時。



「駄法螺成金」のハリイ・グリイン（眞中）

「サロメ」と「椿姬」の細かい思ひ出は、もう紙數も時間も迫つたから、またの折にして、ナヂモヷに夢をひとつ捧げよう。聲畫時代の騒々しさをよそに、ナヂモヷはいま、何處かで、大がかりな時代ものを、深い沈默を守つた靜畫を作つてゐてくれたらと思ふ。武藏野館の第三階に、すばらしい技巧天國をもたらしてくれたらと思ふ。切に思ふ。

時のもの

「駄法螺成金」――主演したハリイ・グリインの壯烈なおしやべりを聽いたのち武藏野館を引きあげ、新宿驛に向つて歩きながら思ふことは（これはグリインがはたらきかける妙な心理だ）もう一度引つかへしてあの壯烈なおしやべりを聽きたいといふことだ。そして、聲畫もたまにはこんな作品を作つてくれるものらしい。

ハリイ・グリインの演技は（壯烈なおしやべりのアクセントと、話の運びと相まつて）武藏野館から部屋へ歸つた後、「キビツア」の語のために辭書を引かせるだけの力を持つてゐる。せい低の、ときどきネクタイを歪めた、貧乏を嘆きながら貧乏に平氣な、ユーモラスな投機心のかたまりの、自分の娘の美しさを崇拜してる……ま

あそんなグリインに、あ、は、は、と笑ひながら「キビッア」を引いてみる。新造語なのか、それとも辭書が安直すぎるせいか、英語にも獨逸語にもないけれど、好い具合に武藏野館のプログラムがキビッアの定義を丁度一ダアス並べてゐたので――貴下の自動車を借りて、郊外から「油がなくなつた」と電話をかけて來る人種――探偵小說の結末をいちばん初めに讀む人種――限りなく駄洒落を吐く人種――其他で、ともかくグリインはこんな人種をそつくり出してゐる。メリイ・ブライアンの娘の父親にしては若すぎるユウモア。カアドをいぢりながら呟く鼻唄。金持ちとの小切手の交渉。この場面がしやぼんのあぶくのやうに輕くて愉快だ。殊に舞臺劇に譲らない長つたらしさを持つた相場放送の場面が、グリインのあまり美しくもない聲のアクセントの力で、ちつとも長つたらしく思へない。全篇を通じて彼のせりふ中味が解つたら、おもしろさは一入であらう。

メリイ・ブライアンは父親の壯烈なおしやべりの蔭にかくれてあまり活躍してゐない。彼女の伸々した四肢の推讃は、それを主題にした畫を見た上にしよう。

壯烈なおしやべりの兄弟に、これはまた「はい、さうです、勿論です」と一語しか言へない男がゐる。表現派の中から拾つて來たやうな扮裝と表情が、キビッアのあぶく氣分を助けてゐたと言へないだらうか。もうすこしくらゐ彼の大映しがあつたら、はつきりさう言へるのだが。

「都會の女」――このチャアルス・フアレルは殊に若々しく、殊に爽かな美男。殊に冒頭の汽車のなかで車掌に向つて上げる眼は美しい。けれどこの頃のフアレルの畫は、どうも仕掛けが小さく、ちよつとした纏まりや氣分で安心してる憾みがある。この邊が監督者の罪かも知れないけれど、もつと大がかりな、どつしりした、だから買ひおきのチヨコレエト玉でないものを演ればと思ふ。「ラッキイ・スタア」と「都會の女」をつづけて見、過去の「フアジイル」の莊重さを想ふ。

このメリイ・ダンカンは、なにもさう、大した役者ぢやない。締切りが迫り、ペンが疲れた時は、堂々とオミットしていい女優。常識網膜にぼんやりと映つてくるだけ。

新刊紹介

「キヤラメル工場から」に就いて。

「プロレタリア運動は工場から」――プロレタリア文學は常に工場を背景にする。工場に於ける女工の生活を、女性の立場から取扱つた窪川いね子氏の作品の意義は、極めて大きいものである。日本のプロレタリア文學の意義深い收獲の一つである「キヤラメル工場から」と「煙草工女」とが、氏の作品集の中でも、特に優れてゐるのは自然である。書店の爭議を取扱つたものには、稍女學生趣味がある。此作者にはプロレタリア文學になくてはならぬプロレタリヤの意力が表現されてゐないが、作品の大部分が、作品中の一つ「自己紹介」の中に語られた、作者が經て來たそれ〲の時代を創作化したものとして、作者の生活體驗の表現として、そこには眞のプロレタリア文學として此小說集の持つ一種の强みがある。

小林多喜二氏は「工場細胞」でプロレタリア運動に於ける「女性の獲得」を描いてゐる。窪川いね子氏は「獲得されたる女工として、藝術を通してプロレタリア運動に參加してゐる。日本プロレタリア作家叢書の一つとして、婦人の創作が上梓された事は喜ぶべきである。

（板垣直子）

東京市麹町有樂町一ノ四日比谷五番館戰旗社發行定價六十錢

ストライキは眞劍勝負だ！

——社會時評——

永島暢子



行列必ずしも示威ではない

萬國の勞働者の威力を示す日、メーデーが日本でも五十團體、一萬五千の勞働大衆參加の下に行進が行はれた。折から吹きまくる失業者の波、工場閉鎖、賃銀値下、大小工場のストライキは、鐘紡の動搖と、ジエネラル・ストライキをも起しかねまじき形勢にあつた、東京市電のストライキを中心とする、交通勞働者の動搖、それ等一切の闘爭は、メーデーへ〱と高められた。

この威力に恐れをなした支配階級は、メーデーが近づくにつれて、××的勞働者の檢束を初め、赤色勞働組合全國協議會員の組合の參加不許可を宣し、三人に一人位の×犬の配置を以て、葬式行列に終らせ樣との手段をつくした。そればかりか、參加を許さなかつた赤色勞働組合の行動を恐怖し、各辻々を嚴重に堅め、メーデーを完全に戒嚴令下の如き狀勢の中に行はせやうとしたのだ。それに對してまた、司會組合たる組合同盟初め、メーデー對策に集まつた組合は、何等抗議する事なく、唯々としてそれに甘んじた。否甘んじたばかりではない、意識的に赤色勞働組合をボイコットし、靜謐に、しめやかに、花嫁の如くしとやかにメーデーを終らせやうとしたのだ。

だが勞働者大衆は、斷じてそれに滿足しなかつた。總同盟系の幹部の激勵演說が、大衆の聲に葬られ、加藤勘十が演壇に立ち往生し、大山郁夫等の演說が、すつかり彌次り倒されたる事實は何を物語るであらうか。行進途中、官×と勞働者大衆との小ぜり合ひ、××歌の高唱、デモを議會へと向けやうとした計畫、解散後市役所へ押しかけろとの要求の高かつた事實、四百名に近き檢束者の表はれ、等々を並べあげるまでもなく、勞働者大衆の意志は、もはや單なる行進に滿足出來なくなりつゝある事がわかるではないか。官×幹部の壓迫を乘り越えて、火山の如く噴出する勞働者の××的威力は、既にその統一を、正しき方向への指導力を待ち構へてゐる所まで高まつてゐるのだ。

勞働者のみが、勞働者の行ふべき事を正しく知つてゐる。行列必ずしも示威ではない。若し勞働者の望みが、たゞ行列行進にあるのなら、××は何等壓迫を加へず、小學生の遠足の如く許可するであらう。だが勞働者の本能的なる團結の意力を知るが故に、その團結の力が解放への要求を孕んで支配階級に肉薄する事を知るが故に、彼等は權力を以て、飽までも押へつけやうとするのだ。

メーデーを決行したとて、葬式行列である限りは、それは何等勞働者にとつて意義はないのだ。組織必ずしも力ならず、組織が勞働者の××的意力と結びついて初めて、組織の意義が生命を持つ様に、メーデーの意義は、勞働者の抗勢を、一歩でも前進せしむる行動をとるにある。この日を期して、勞働者の要求を、如何に戰ひ拔くかにあるのだ。

すべて勞働者の行動は、常に解放に向つて鬪ふ事によつてのみ意義づけられるのだ。

悦に入つてる無產黨代議士

第五十八議會の人氣役者は、勞農黨首大山郁夫である。彼の議會に於ける行動は、とにもかくにも一般の注目を引いた。二十七日の質問演說には、各ブルヂョア新聞は、惜し氣なく紙面を提供し、その人氣の程を示したものだ。何故氏は、かほどまで注目をひいたか卽ち既に他の無產黨代議士の鼎の輕重は問はれてゐるのに、勞農黨はまだ一度も試驗臺に上つた事がないからだ。殊に常々××的無產黨は俺一人と、盛んに言葉で氣勢をあげてゐるので、さてこそどんなものかと、物見高くもなるのだ。

しかし大山氏は、飽までドン・キホーテの役割をしか演ずる事が出來なかつた。氏は、勞働者農民被壓迫民衆の立場から質問をするのだと見ゑをきつた。(その言やよし)そしてその質問の要旨は、政府は支配階級の代辯者である爲に、選擧の時の民衆への公約を果し得ない事を難じ、消費稅の減稅、勞働組合法案の制定、失業保險法の制定、月額四十五圓以上の恩給の廢止、農民及百五十圓以下の俸給生活者の借金支拂猶豫法の制定等を要求してゐる。

そしてたゞそれだけである。

けれど氏は、これだけの演說が、議會で滿足に出來た事が、嬉しくて仕樣がないらしく「街頭でやると違つてうるさい取り締りもなく、十分に言ひ得たのは、近頃にない愉快でした。無論あれが街頭だつたら、直に辯士中止と檢束です。殊に私は政府といふよりも、議會を使つて、一般無產大衆に訴へる事が目的なのですから、この點も大いに果した譯です。」(國民)と悦に入つてゐる。だがこれを要求した事は、他の無產黨代議士と、どれだけの相違があるであらうか。言葉の相違を除いて。

大山氏は、勞働組合法制定を要求してゐる。眞實に勞働者の、組合活動の自由のためならば、この前に發表された組合法案なら、完全に取締り法であり、この法制定の曉には、××勞働組合が、どうしても地下運動を餘儀なくされる事は明ではないか。それなのに氏は、「ないよりもある方がよい」といふのだ。(總同盟は進んで要求してゐるので、この點だけの相違で××的だと思つてるだらう)失業保險法その他の事項も勞働者農民、一般無產階級の生活の改良の爲に、必要のない事はない。

けれど、若し氏がいふ如く、拘束なき議會を利用して民衆に訴ふるものならば、何故に國家權力の根本のバクロをなさなかつたか？

支配階級が一切をかけて、即ち、金解禁・緊縮政策・資本の整理・勞働の強度化・失業者增大の必然性等を以て、金融ブルジョアジー万才のため、帝國主義戰爭準備に沒頭してゐる事實を究明し、それに對し、勞働者農民一般無產大衆は、如何なる要求を持つべきか、如何なる方向をとるべきかを何故示さなかつたか？そして尙且、何故に支配階級に對し、勞働者農民の要求貫徹のための活動の自由を要求しなかつたか？

職業紹介所の增設や、地方起債やその補助だけでは、到底失業者を救濟し得ない事や、等々の事は今更氏から聞くまでもなく、一般無產大衆は、とつくの昔に知つて、うじ〳〵としてゐるのだ。たゞ聞き度い事は、社會の不合理の原因と、自分の要求を統一し、具體化し、いかにして、支配階級の牙城に突き進むかだ。

だがそれは勞農黨に望むのは無理であらう。いかに口では、××的な事を言はふとも、心の底では、まだ〳〵改良主義的社會××を肯定してゐるからである。出來るだけ御機嫌をとり結びつゝ行動しやうとするからである。(これは社會民主々義者の常態だ)

殊に、御愛嬌な事には、氏はひどく檢束の事を問題にしてゐるが、演說會に於ける××の中止檢束は、決して、正しい事を言つた時ばかりではない事は、もはや經驗者の知る所ではないか。××は、前以てこの演說會を成立させやうか、解散にしやうか、また成立と見せて虛をつかうか、檢束者はどの位と、もう計畫は、豫め出來てゐるのだ。勿論大衆の動搖の如何によつて、番狂はせしなくはなからうが、時には家に早く歸つて休みたいと、中止解散を命ずる亂暴な事さへあるのだ。だからよく司會者が「諸君！」と大衆に叫びかけて解散になり、翌日のブルヂョア諸新聞は「不穩な言動があつた爲に解散になつた」などゝ報導した例は、よくあるではないか。演說會場を唯一の鬪爭場と心得てゐる氏等にとつては、議會はおしやべりするに都合はよいかもしれないが、その位の演說なら、何も議會を利用する必要もなからうといふものである。

いゝ氣持ちで議會に座つてゐるのは、敢て大山氏ばかりではない。淺原健三氏が、同志會の御大、武藤山治氏と、議會に於て、失業問題で渡り合ふさうである。二人の討論會から、何もいけない事はなからうが、何も今更一產業資本家を相手どり、失業問題の意見しらべをしなくてもよいではないか。金融資本家の代表、井上藏相が一枚かはらうと、無意味な事に變りはない。この相撲は、單に氣まぐれであり、自己滿足にすぎなく××を永遠のあなたに追ひやらうとする、春の日永の餘興でしかないのだ。

饑餓に追ひつめられた勞働者農民、一般無產大衆は、實に餘興所ではない筈だ。眞劍に自分達の生活のために戰つてもらひ度いからこそ、一票を投じ、その當選に、よもやの望みをかけて當選に努力したのだ。が結果はその反對ではないか。

それとも淺原氏たるもの、堺利彥がいふ如く、一勞働者から、代議士の榮冠(?)をかち得たので、嬉しくてたまらず、武藤氏と討論などとの山氣を起したのでもあらうか。

だがどつちでも同じだ。實に口ではどんな事を言はふとも、社會民主々義者の鬪爭は、畢竟この範圍を出ない事しか、勞農大衆は、今こそはつきりと知るべきである。

市電從業員は何の爲に戰つたか？

昨年十二月、賞與二割減、昇給延期のベラボーな當局の態度から

奮起した東京市電の從業員は、市民の不便を思つて、屈服的解決條件に甘んじて、解決したのだつた。だが飽までも、市電の經營難を勞働者の肩に轉化し、勞働の强化によつてのみ切り拔け策を講じやうとし、且從業員の抗勢にカンシヤクを起し、どうしても組合ぶつつぶしをしやうとした當局は、再び十二月の約束を無視した態度に出たのだ。

即ち、六月の賞與一割減を目論んで豫算を作つたばかりか、復興祭の臨時技工六十名と、停年に達した少年車掌四名の首をチョン切つたのだ。しかも從業員が、この暴戾なる市電當局に反對して起つ事を豫想し、職員の電車運轉の稽古自動車網の計畫怠りなく、積極的に、從業員に敵對行爲をロコツにした。

これに對して、從業員も起たざるを得なかつたのだ。一、賞與一割減絕對反對、二、震災手當の即時支給、三、解雇された臨時技工に三ヶ月の手當を出し、就職を保證しろ、臨時工の解雇絕對反對、四、少年車掌の停年による解雇反對、五、退職手當、一時金選擇の自由、六、職制改革による收入低下の反對等を掲げて、四月二十日ストライキの火蓋を切つた。

市電八千の從業員は、一糸亂れず結束を堅め、各自の部署を守り、官犬の警戒をくゞつてよくその戰ひをつゞけた。市電當局は、既に用意があつた事とて、ストライキの前から職員、青年團、日給五圓以上で募集したスキヤツプ團を編成し、社會奉仕を看板の反動共の應援と共に、爭議ぶつつぶしにかゝつたのだ。不狎れの爲の衝突や、傷害の口實をまで從業員の責にかけ、當局並に反動のみが、ひとり、市民の間に他意なく奉仕するなどと胡麻をすり、市民の同情を待つて爭議を有利に展開しやうとした。

その間組合の切りくづしを策し、買收につとめ、且××の力と共に、爭議團を攻めたてた。ブルヂョア諸新聞はまた、その本性をバクロして市電當局に加擔し、市民を代表するが如く裝つて不平を並べたて、從業員の行動を排擊批難した。この非常の時に、無產者の味方顏をする堺利彥氏初め六名の無產市議團も、何等、從業員の間に戰ふ術を知らず、僅に退場で態度をごまかし、市會をしてストライキ彈壓の決議をなさしめた無能振りを、發揮したりした。

この一致せる支配階級並に御用人の統制振りに、恐れ入つた濱田、伊藤の右翼の一派は、市民の不便默し難くなどゝ尤もらしい事を言つて、兄弟を敵に賣り渡してしまつた。

爭議の狀勢を適確につかみ得ず、經濟的鬪爭によつてのみ、その要求を貫徹しやうとした、篠田、赤木の社會民主々義者の幹部の指導は、右翼の寢返りに制裁を加へる手段も知らず、これより起る爭議團の動搖に、空手傍觀する他知らなかつたのだ。そしてはたゞ、當局に泣きつき、警視總監にすがり、笑止にも、どうしたら、組合の顏が立つかといふ事にのみ腐心したのだ。

このだらしなき幹部の指導は、ます〱爭議團を疲勞に導き、鬪ひの意氣を失はしめ、遂には、今まで敵として戰つた、市長の人格に信頼しなど、勞働者の風上にもおけない口實を平氣で持ち出して、爭議稀に見る慘敗に終らしめたのだ。條件は、無條件就業、要求條項は、就業後解決といふのだ。

實に市電從業員諸君は、何の爲に戰つたか？との反問を提出する樣な戰ひを終止つゞけて來たといつても過言ではない。只管懇談、嘆願の行動なら、何も、爭議の犧牲を拂はずともよかつたではないか。爭議は決して生優しい犧牲では決行出來ない事は、第三者より

從業員諸君がよく知つてゐる筈だ。

けれどこの爭議のだらしなさに引きかへ、このストライキは、非常なる威力を支配階級に與へた事は否む事が出來ない。それは何故か？

市電從業員立つと知るや、同じ市に働く市電協同會、市從業員組合は、或はサボに入り、或はストに立たんとし、大阪、横濱の市電また爭議を策し、神戸市電は斷然ストを決行した。この事はまた西武鐵道の從業員を蹶起せしめ、官業なるが故に、彈壓も亦一層ひどい鐵道の從業員は、その組織の微弱なるに拘らず、よくその鬪爭意力を發揮し、意識的サボに入り、或時は山の手線のダイヤの混亂を敢てしたなど、交通勞働者は今一息にて、ジェネラル・ストライキ決行にまで突き進む傾勢を示したのだ。しかも鐘紡三萬の勞働者は非常なる動揺をつゞけ、街には失業者は溢れてゐる。工場閉鎖、賃銀値下げ等々、勞働者大衆の生活不安は、いやが上にも爆發的空氣を濃厚にしてゐたのだ。この狀態を見てとつた關東消費組合聯盟は、全國の僚友組合に指令を發して應援を決し、その兵站部を受け持つ準備に取りかゝつた。

かゝる客觀的狀勢と、高潮に達した交通勞働者との鬪爭意力が、堅く結びついたならば、必ずこの爭議は、必然的に政治的に變化し、全産業のストライキにまで押し進め得る可能性を充分具へてゐたのだ。勝つも負けるも勞働者の顏に泥を塗る樣な、事はなかつたのだ。だのに爭議は何故に慘敗したか？丸山警視總監からまで、なめられる樣な醜狀を呈したか？

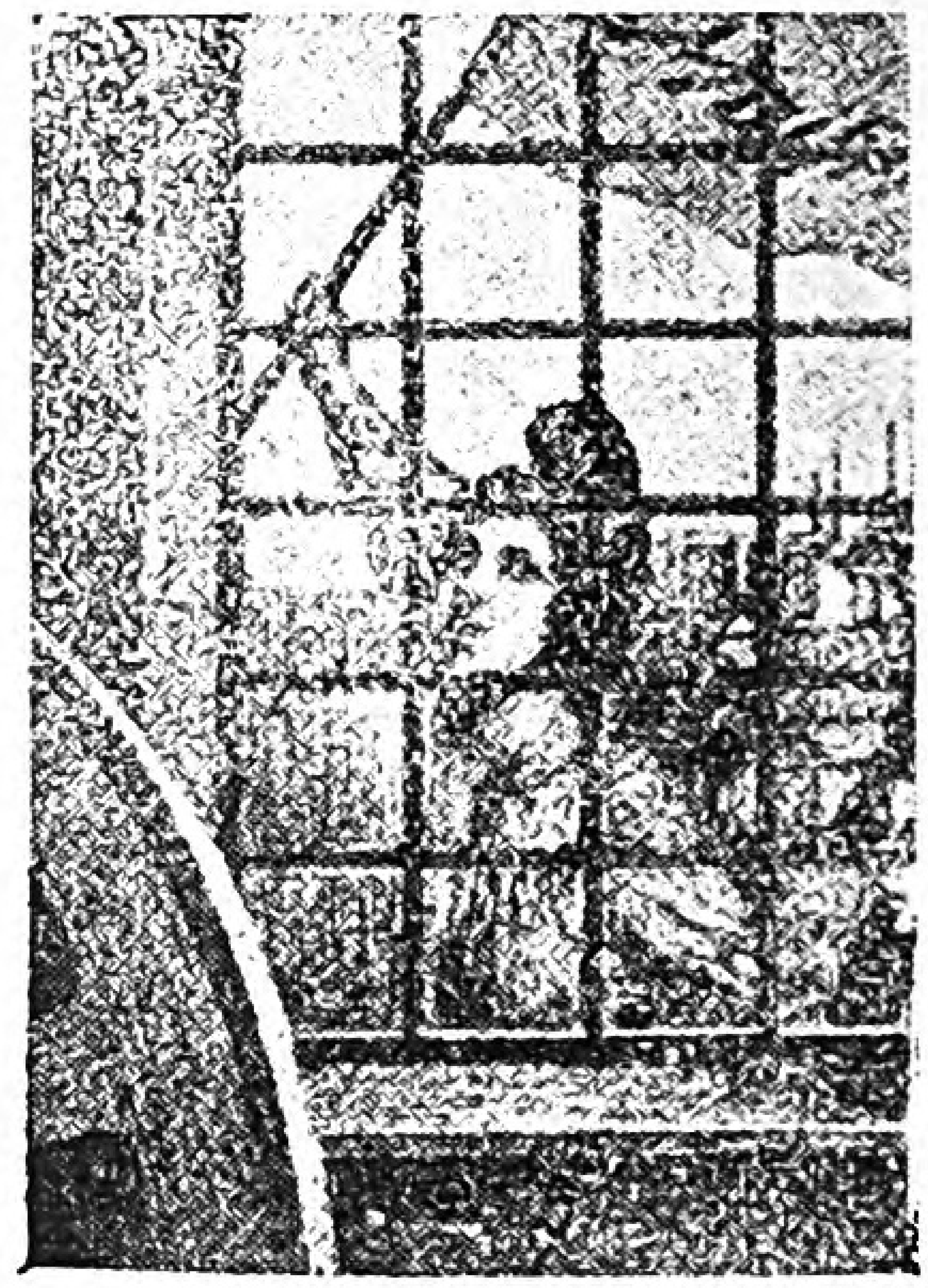
いふまでもなく、爭議の全權を委任された幹部が、よく戰ふ事をしなかつたからである。彼等は、爭議が始まるや否や、爭議團をカン詰にし、××の彈壓をさけて遠隔の地に走つた。××歌、勞働歌をうたつて氣勢をあげる事を禁じ、激勵演說をさへ拒む狀態だつた。そして解放を怖れて、靜に〱と、まるで赤靴强盜の樣な口癖で以て、爭議團大衆の氣勢をくじいてしまつた。しかし一度の示威運動もなく、職場を占領してそこに陣を守る手段もとらず、何等、支配階級をふるひ立たせる行動をとり得ず　鍋釜かゝえて逃げ廻つた事が抑々の敗因なのだ。

更に爭議團を遠隔の地におく事は、その刻々の狀勢の變化の連絡ははかどらず、また一般の狀勢を大衆に知らしむる事は、速刻に出來ないので、そこからも爭議の氣勢はくじかれて行つたのだ。

從業員大衆も間違つてゐた。從業員のために、眞實に戰ふ氣力なき、正しき方針を持たざる、幹部に、あまり信頼しすぎたのはいけなかつたのである。

ストライキは××である。少しでも敵に、嘆願したり、叩頭したりする樣な、好色根生を持つた幹部は排擊すべきであつたのだ。勝つか負けるか、二つに一つしかない眞劍勝負に、色目を使ふ方の負けなのは、一の常識でないか。

最後につけ加へる事は、交通爭議の常例として、ブルジョア新聞は、一齊に「市民の足を奪ふ從業員諸君に、市民の同情なきは云々」とおタイコを叩いたゞけに就てゞある。勿論フンガイする人達もあらう。だがそれはブルジョア新聞によつて代表される、小ブル層であつて、一切の勞働者、未組織大衆に於てさへ、及小市民の大部分さへ、從業員諸君の團結を賞揚し、その右翼の裏切りに憤慨したではないか。勞働者小市民階級が、從業員の爭議に憤慨したのは、だらしなき戰ひに終つたからだ。戰つて戰ひ拔けば、彼等の同情は一層强く從業員諸君の行動に集まるであらう。



黎明期に於ける勞働婦人

我國勞働婦人運動の展望

織本貞代

四

が我々は茲に一面我國資本主義發展の特殊性を見遁してはならない。明治維新以後始めて公然と諸外國との交通開始せられて、先づ最初に我國の家內工業的農家經濟を襲擊したものは、先進資本主義國家の廉價なる商品であつた。卽ち紡績產業方面のみについて見るも明治元年より同十年に至る期間に於いては輸入總額一〇〇に對する綿織物の割合は一四パーセント、同じく綿織絲の割合は一五・二パーセント、原料たる生綿及繰綿は僅かに二パーセントを占めて居るに過ぎない。綿織物はその廉價なるにより、綿織絲は廉價なると同時に農家婦女子が本業の餘暇を以つて手紡した各製品每に細大不齊を免れない不完全な絲よりも、機械によつて今や、番手による各標準的太さの一定せる優越性を以つて、急速に我國農家本工業を解體に導いたのである。これ等の事情は必然に機械の輸入を刺戟せずには置かなかつた。この過程を野呂榮太郎は『マルクス主義講座十三號所載、日本資本主義發達史下』に於いてそれぐ綿織物、綿織絲、及棉花の輸入に應じて三段に分けて考察してゐられる。摘記すれば左の如くである。

『綿織物の輸入が、直接に、農家の自然經濟の重要品としての本工業に與へた影響は、併しながら綿織物のその種には決定的たり得なかつた。蓋し單なる消費資料としての綿織物の輸入は生產手段たる綿絲棉花のそれの樣に直接に生產過程そのものに影響する所少ない……』『資本的商品の輸入が日本の農家本工業の解體と從つて資本家的生產樣式の發達とに與へた影響の中で最も決定的な

のは綿織絲のそれであつた。綿絲の輸入によつて、先づ最も著しき影響を受けたのは、織物業、殊に木綿織物業であつた。……綿織物業に於ける資本家的生産は、新機械の輸入と相俟つて急速なる發展を遂げるに至つた。』

綿織絲の輸入は明治十一年より二〇年に至る平均に於いて輸入總額に對する二〇パーセントに增加して居り『綿織物業が輸入綿絲の使用に應じてその生産樣式を一變した結果、內地産棉花に對する需要の減退となつた（同期間內に於ける棉花の輸入は僅かに一・三パーセント）其處で『政府は棉花栽培を奬勵し、綿絲の輸入を防遏せんとする目的を以つて、木綿織の中心地又は棉花産地に紡績工場設置を計畫し、西南役後、華士族授産金を以つて紡績機械を萬國から輸入して、希望者に無利子十ヶ年償還の方法で拂ひ下げ、又は紡績機械購入費の一時繰替拂をなす等、只管その發達に力をつくした。

『從つて綿絲紡績業は（前號所載の如く……織本）明治十八九年頃より急激に進行せる日本の第一次産業革命の中心産業として急速なる發展を見た』のである。かくて『綿絲の輸入は近代綿絲紡績をば日本第一の大工業として發展せしむる起動力となつた點に於いて特に主要視せられねばならぬ』（傍點織本）なほ因みに『最高に、資本家的農業生産の産物たる廉價の棉花の輸入は、我國に於ける棉花栽培をして、單に商品として許りでなく、農民の自家用衣料の原料として經濟的に不可能ならしめた。機械紡績業は、先づ內地棉奬勵の爲に採用せられたのであるが、大紡績業發達の結果は却つて封建的小規模農業による日本の綿作をして、資本家的農業製産による廉價にして大量的なる外國産棉花の輸入の前に衰退のやむなきに至らしめた。

かくて國內工業の發展に伴ひ既成品の輸入額は原料の輸入額とその地位を顚倒し、日清戰爭を狹む明治二十六年より同三十五年間に亘る十年間の平均に於いては綿織物四・一パーセント、綿織絲三・九パーセントなるに對し生綿及繰綿は二一・三パーセントを占むるに至つた。なほこれを日露戰爭を狹む三十六年より四十五年までの平均について見るならば、綿織物は二・九パーセントに減じるが綿織絲の如き〇・三パーセントにて殆んど影を沒したるに對し、生綿及繰綿は二八・九パーセントに增加してゐる――以上すべて輸出總額一〇〇に對しての割合、野呂氏前揭書十頁所載統計に基く。

かくて日清戰爭直前たる明治二十六年には我國に於ける紡績會社數四十六、五十六萬八千錘を運轉して四十一萬四千梱に達するに至つた。其紡績聯合會加盟會社につき爾後の發展を述れば左の如し。

年度	會社數	工場數	錘數（千錘）	綿絲生産高（千梱）
明治廿六年	四六	四六	五六八	四一四
同　卅六年	五一	七六	一・三八一	八〇一
大正　二年	四四	一五二	二・四一四	一・五一七
同　八年	五四	一九〇	三・四八八	一・九二〇
昭和　三年	五九	二四五	六・二八六	二・四五一

以上我國の紡績産業は明治二十年前後より日清戰爭終結までを發展の第一期とし日露戰爭を經て、世界大戰中交戰諸國、殊に英國紡績の衰退に乘じてその市場販路を蠶食し、遂に今日に於ける世界的地位を確保するに至つた。

五

婦人勞働者の多數を使用する工業に製絲產業がある。古來生絲の製造は農家副業の主席を占めて來た『開國當初、眞先に先進ブルジョア國の廉價なる資本家的商品の襲擊を受けたのが農家手工業であつた樣に、廣大なる世界市場に向つて流出した日本最初の商品の重要なる部分も亦農村半工業品であつた。生絲、屑絲、蠶卵紙及製茶等がそれである…野呂氏前掲書一九頁』そして此四品の輸出總額は明治元年より同五年までの平均に於いて、全輸出總額に對して七九・三パーセント即ち約八割を占めて居り、その半を占むる三八パーセントは生絲であつた。しかも此の生絲は、その輸出先を先進資本主義國家とし、夫等諸國に於ける機械製絹織物業の原料として當然機械生產化し、大量化し、その經營を資本主義化さねばならない必然性に置かれて居た。殊に後進日本の資本主義が先進資本主義國の商品と競爭せんとするに際し、生產手段（原料）として輸出される生絲は、完成品である所の製茶等に比しより効果的であつたのであり、從つてより重要性を持つてゐた。即ち明治五年には官營による機械製絲工場（富岡製絲所）先づ出現し、明治十一年六月には片倉組が同族相集まつて、三十餘人取りの機械製絲工場を長野縣諏訪郡川岸村に起した。

野呂氏に依れば『日本の工業中最も早く廣汎に商品生產化され、且つ工場生產化されたのは製絲業であつた。明治十五年末に於ける各府縣工業場の工場、工人、生產額等の總計中、製絲工場の占むる割合は次の如くである。

種類	工場	工人 男	工人 女	工人 十五歳以下	工人 計	產出價 千圓
總計	二・〇三五	一五・六五四	三五・五三五	九・八六三	六一・〇五二	二二・〇〇一
生絲	一・〇六八	二・七五五	二七・七〇二	六・九九五	三七・四五二	一〇・四六八
同上百分率	五二・五%	一七・六%	七七・九%	七〇・九%	六一・三%	四七・五%

『機械製絲は、明治二十二年に於いて既に全生絲生產高の約四割に及んだが、同二十七年には早くもその過半（五割七分）に達し、爾來遞增して四十一年には七割、大正十二年には九割三分を占むるに至つた』機械生絲が座繰製絲を驅逐して行つた過程を同書二三頁の統計に依れば次の如くである。

年次	機械製絲 貫	同上割合 %	座繰製絲 貫	同上割合 %
明治二二年	三三三・五二六	三八・九	五二四・八六〇	六一・一
同　二六年	五八八・二二〇	四七・七	六四五・二三四	五二・三
同　二七年	七三四・三六八	五六・六	五六二・四一五	四三・四
同　三一年	七八七・九〇五	五三・二	六九一・八四二	四六・八
同　三六年	一・一六三・〇九一	六三・一	六八一・二九九	三六・九
同　四一年	一・七七七・六七五	六九・九	七六五・〇五九	三〇・一
大正　二年	二・八五一・四三五	八一・八	六三六・四九一	一八・二
同　七年	四・七三八・二八五	八八・九	五九〇・三〇五	一一・一
同　一二年	五・八三二・七九八	九三・四	四〇八・九三八	六・六

これによつて製絲事業に於いても亦、早くより機械生產に對して官民共に意を用ひながらも、その急速な進展を見たのは我々の既に見た綿絲紡績業と同じく、第一時產業革命の時期に在つた事を氣づかれるであらう。機械製絲は明治二十二年當時既に總生產高の三・八九%を占めて居たとはいへ座繰製絲とその地位轉倒し

始めたのは同廿六年より廿七年の間に於いてゞあつた。

なほ此の時期に於いては 毛織事業――日本フランネル會社＝大阪毛織前身（明治廿四年）日本毛織、モスリン紡織＝合同毛織前身、東京モスリン（以上廿九年）――製麻事業――製麻事業は軍需品製造を主とし、從つて日清戰爭前後にかけて大いに發達した――等すべての纖維産業の勃興時代であつたといへよう。かくして玆に婦人勞働者の絶大なる需要が呼び覺まされ、明治十五年末に於いては工人總計六萬一千人（前出野呂氏統計）であつたものが二十九年末に於いては、生絲産業のみに於いて十七萬二千九百人（横山源之助氏『日本の下層社會』一六八頁）の職工を使用する事となつた――我國統計の不備により、これ等の總括的なやゝ完全な統計は『日本帝國統計年鑑』の第一・十より集蒐し得る人には或ひは可能性があるかとも思れるが、私の様に實際運動に追はれて居るものには到底なし得ない事を遺憾とすると共に 深くお詫び申上げる次第である）

更に明治三十六年より大正九年迄、十八年間について全國紡績及織布工場に働いた職工數の増減を見るであらう。

年別	總數	男	女	百分比（男・女）%	
明治卅六年	七八・五四一	一四・九五二	六三・五八九	一九	八一
同　四一年	八五・三七〇	一六・五三三	六八・八三七	一九	八一
大正　三年	一四〇・四四二	二五・七三〇	一一四・七一〇	一八	八二
同　九年	一九六・八六四	四二・八八四	一五三・九八〇	二二	七九

即ち明治卅六年より大正三年に至る十一年間に於いては 約二倍の増加を見、更に大正九年に於いては約三倍に達してゐる 女工の増加率は男工のそれに較べて逐年 増加の傾向を示して來たのであるが世界大戰中の好況時代、即ち八年後期より 九年上期にかけては反對の現象を呈してゐる。同一産業内に於けるかゝる變化は當時大々的に行はれた女工爭奪戰の影響によるものであらう。

なほ常時十人以上を使用する全工場の男女職工増減について 明治四十一年より大正七年までを、世界大戰を轉期として二期に分つて見る時は次の如くである――農商務省 第三十五次統計表に基いて算出――

年次	總數	男	女	百分比（男・女）%	
明治四一年	六四九・六七六	二四八・七五一	四〇〇・九二五	三九	六一
大正　三年	八五三・九六四	三一八・六六七	五三五・二九七	三八	六二
同　七年	一・四〇九・一九六	六四六・二一六	七六三・〇八一	四六	五四

即ち明治四十一年より大正三年に至る 六年間に於いて男子は六萬九千九百十六人即ち 二〇・六パーセントの増加を見たるに對し、女子は十三萬四千三百七十二人 即ち二五・一パーセントの増加を示し、女子は絶對的にも相對的にも増加してゐるのであるが、三年より七年に至る四年間に於いては 男子三十二萬七千四百四十九人、即ち倍數以上の増加を見たるに對し、女子は二十二萬七千七百八十四人即ち二九・八パーセントの増加に過ぎない。即ち絶對的には相當の増加を見てゐるが、相對的にはむしろ減退の徴があるといへよう。全産業を通じてのかゝる現象は纖維工業内に於ける前記女工爭奪戰による影響を見遁してはならぬが、一層根本的な理由は世界大戰前後に於ける我國重工業の異常なる發達、及び戰後に於いて我國綿絲産業がその生産の大なる部分を支那に移したるに依るのである。大正七年に於ける男子四六パーセント、女子五四パーセントの割合は その後大戰による産業界の激動が稍常態

に復すると同時に、再び女子に於いて上向し、女子勞働は從つて再び絶對的にも相對的にも增加の傾向をとる事となつた。卽ち大正十四年末に於いては此の割合は四一パーセント對五九パーセントを示してゐるのである。

婦人はその天性温順なるにより、よく虐殺的なる資本主義的搾取に耐へ、剩へその賃銀の低廉なるによつて、利潤を追ふに只管なる資本家はあらゆる產業に婦人を驅り立てずには措かなかつた婦人は今日纎維工業に於いてのみならず、機械器具及化學工業、食料工業雜工業等、あらゆる分野に入組んでゐる。今之等について常時十五人以上を使用する工場について見れば次の通りである

――大正十四年工場監督年報――

順位	業務別	職工總數	男	女	百分比(男%)	百分比(女%)
一	染色工場	九五八・六九三	一七七・九六〇	七八〇・七三三	一九	八一
二	機械器具工場	一九五・五〇六	一八〇・一七三	一五・三三三	九二	八
三	化學工場	一五四・五三〇	一〇九・八二九	四四・七〇一	七一	二九
四	飲食物工場	六二・二二八	四六・九二四	一五・三〇四	七五	二五
五	雜工場	一一二・〇三〇	八〇・四二二	三一・六〇八	七二	二八
六	特別工場	一〇・一七六	九・八三七	三三九	九七	三
	合計	一・四九三・一六三	六〇五・一四四	八八八・〇一九	四一	五九

卽ち職工總數百四十九萬三千六百六十三人、內女工總數は八十八萬八千十九人で職工總數に對する五割九分、卽ち半數以上を占め、更に染色工業に從事する職工數は全職工數に對する六割四分を占めて我國產業に於ける染職工の重要性を語ると共に、同じく染職工業に從事する者の內女工數は男工數の四倍以上を示して居る事によつて我國に於ける婦人勞働者の重要性を遺憾なく語るものといへよう。

なほ此の外同じく大正十四年末に於いて鑛山勞働者三十一萬人中婦人勞働者は七萬二千人の多きに達して居り、十五人未滿の危險有害工場に働く者六千七百人である。その他五萬三千の婦人交通勞働者、二萬の婦人勞働人夫等々を數へる事が出來る。かくて我々は今や、資本主義生產の中軸たる工業に於いて、その他の資本主義的產業に於いて勞働者が如何に決定的地位を占めに至つたかを見得たのである。

新刊紹介

今、井上信子氏の現代川柳句集「蒼空」の寄贈をうける。

カットした時は二つになつてゐる
叩かれた丈けの力は鳴つてゐる
眼覺めける白紙へ今日のプログラム
接吻が足しにならうか胃のくぼみ
雜草を苅ればぬからず貨がこぼれ

川柳は草にあてた鎌のやうにサクリとして氣もちがいい。(定價七十五錢・市外落合町柳樽寺川柳會出版部)

白木正光氏から新著「愛翫動物」を贈られた。美しく上品な手觸りを感じる。氏の夫人が山羊を飼養される着色口繪がある。自序に、家庭に清純なる趣味を與へ、子女の情操敎育に資し、動物愛護の精神を普及させたいとある。五百八十頁挿繪入りの美本である。(日本橋區通三丁目春陽堂發行・定價貳圓八十錢也)



未開社會に於ける性と抑壓（三）

B・マリノウスキー著
小林すみ子

三　家庭劇の序幕

子供が出生後自由でも獨立的でもない事は一般哺乳動物の特徴である。營養、保護、保温、清潔及び身體の安樂等は總べて母親の手を煩はさなければならない。人間の母子間の色々な肉體的配置も丁度之に相當してゐる。生理的に子供には母親に對する激しい本能的興味が存在する。母體の暖かみや抱かれる事殊に乳房にすがり乳を吸ふ事等、乳兒の母親に對する切望がそれである。最初此の關係は母親の撰擇的な愛情に依つて定められるものである。即ち母は自分の腹をいためた子だけがいとしいのである。けれども赤坊は、乳さへ吸はせればどの婦人の胸であらうと滿足してゐるだらう。然し直きに子供は區別をする樣になり、母親と同じく專ら只獨りだけに愛着する樣になる。斯樣に、誕生は母と子の間に一生切つても切れぬ環を作る。

此の環は幼い哺乳動物が獨力で生活なし得ないといふ生物學的事實に基いてゐるものであり、多くの種は母性愛と名付ける最も強い本能に依つて斯樣に生存を續け得るのである。然し乍ら社會といふものは急いで割込んで來て、自然の力有る聲に先づ弱々しい命令を下さうとする。未開と文明とを問はず總らゆる人類社會では、風習や法律道德、時には宗教迄、普通妊娠初期の樣なこんな早期にもう母親と子供間のつながりを認めてゐる。母親は——時としては父親も——種々な禁忌（タブー）や戒律を守らなければならず、胎内の新しい生命の幸福を願ふ儀式を行はねばならない。出產は常に重要な社會的出來事であつて、屢々宗教的色彩を帶びた多くの傳統的なしきたりに圍繞されてゐる。斯樣に母子關係の樣に最も自然で直接な生物學的關係でさへ、其の生理的決定と同樣に社會的にも固定する。だから社會の傳統と慣習の勢力に全く無關心で記述する事は出來ないのである。

さて、我々社會に於ける母性の社會的要素を簡單に述べ且つ特徴を擧げる事とし樣。母となる事は文明社會では、道德宗教的、時に

は藝術的な理想ですらある。姙婦は法律や風習で保護され聖なるものとして尊敬されねばならない。そして彼女は自分が身重な事を誇らしく幸福に思ふべきである。之が實現可能の理想であるといふ事は歴史と土俗學が證明して與れる。現代ヨーロッパに於てさへポーランドの純粹な猶太人社會では實行されてゐて、彼等の間では姙婦は眞の尊敬に價するものであり姙婦自身も身重な事を誇らしく感じてゐる。けれども基督教を奉ずるアリアン社會に於ては、下層階級では姙娠は重荷であり厄介な事と見做され、ブルジョア階級では、一時的に社交生活より身を退かねばならないので當惑と不快の源とされてゐる。斯様に未だ生れない子供に對する母親の態度が重大である事を我々は認めねばならない、そして又此の態度は環境（ミリユー）に依つて異るものであり社會的價値に由るのであるから、此の社會學的問題はもつと綿密に研究されて然る可きである。

さて子供が生れると母親の本能衝動と生物學的模範行爲は、社會から承認される許りではなく彌が上に力附けられる。即ち社會は、風習や道德理想として母親を子守にしてしまふ。これはヨーロッパ諸國を通じて下層階級も上流階級も略同じなのである。こんな生物學上保證された根本的關係でさへ、尙或る社會では風習の爲或は愛情を缺いてゐる爲、非常に變形してゐる事がある。以前フランスの中流階級では子供を生後一二個年里子にやる事が一般のならはしであつた。今日でこそ不自然な事として卑めるがその頃ブルジョア階級では、乳母を雇つて侍かせるといふ無害な方法、又は人工榮養で育てる事が流行して居つた。斯様に母性愛といふものは國民性や經濟組織や道德的相違に依り異るものなので、此處で又社會學者は彼の分野を付加へねばならなくなる。

これから太平洋の波に洗はれる彼の母系社會に此の問題を尋ねて見様。メラネシア婦人は子供にいつも變らぬ激しい愛情を持つてゐる。そして周圍の社會はさうした感情や傾向を助長し風習や儀式で理想化する。姙娠と定まるや希望に包まれた母親は多くの飲食物に關するタブーや 其の他の戒律を守り未來の子孫の幸福に事無き様用心しなければならない。姙婦は、土人の感情を實際行動で實現した理想として尊敬を受けてゐる。初めての姙娠の時には、特に念入りな儀式が行はれる。儀式の目的は複雜で稍漠然としてゐるけれども、事の重大性と姙婦の優遇、並びに名譽を強調してゐるのである事は疑も無い。

出産後一月許り母子は總べての煩ひを避けて靜かな所に居る。其の間母親は專ら哺育に力を盡し、ある限られた女性の親族だけが小屋へ出入を許される。普通は里子は稀であるが、離乳後やる事もある。其の場合も極く近親の間に限るのであつて、他人にやる様な事は絕對に無い。母子の沐浴式や特に母に與へられたタブー、披露の爲の訪問等の數多の律（おきて）は、自然の環に、も一ツ加へた風習の環で母子を束縛する。

斯の如くどちらの社會でも、本能の生物學的調節に搦てゝ加へて風習や道德禮儀等の社會力が皆、母子を結付け且つ母性愛を十分發揮させる様な方向に働いてゐる。此の社會力並びに生物學的力が調和すれば大きな滿足と祝福を齎らす。社會は自然と一致協力して、出産といふ創痍（トラウマ）で壞された胎內の平和な生活を現實に繰返さうとする。ランク博士は精神分析學の發達に貢獻する所有つた著書の中で、胎內生活と其の記憶が後年に重大な意味を齎らす事を述べてゐる。出産の「創痍」に就いては種々考へ方が有らうが兎に角、生後

數ケ月は生物學的力及び社會力が、子供を幸福な狀態――軈ては離乳といふ「創痍」で壞されるのだが――にして置く事は疑ふ餘地が無い。只文明社會の上流階級に於てのみ異常な例外が見られるのである。

父系家族と母系家族では、此の時期の父性愛に大きな相違がある。稍意外に感ずる事は、父性の肉體的絆は全く認められず且母權制である未開社會で尙、父親は我々一般の間に於けるより以上に子供と親しい關係を持つてゐるといふ事である。我々の社會では實際父親は赤ン坊の生活に極く些細な役割しか演じてゐない。風習や家風や禮儀に依つてブルジョアの父親は育兒室から遠ざけられてゐる。そして農夫や勞働者は四六時中大部分、子供は妻に委ねて置かなければならない。多分父親は、赤坊の望む通りにしてやる事を煩はしく思ひ、其の爲に時間を費す事を厭やがるであらう。だが、普通は赤坊の面倒も見てやらない代り又干渉もしない。

周知の如くメラネシアでは「父性」は純粹な社會的關係である。此の關係の半分は、彼の妻の子供達に對する義務に在る。前にも述べた樣に彼は「子供を腕に抱取る」のであつて、歩行中母親が疲れたら代つて子供達を運歩かねばならないし、家庭では哺育を助ける義務がある。彼は子供を淸潔にしてやつたり色々必要な事をしてやる。土人の言葉の中には、父性やそれに伴ふ辛苦、及び子の孝養の義務等に關する紋切型な辭句が澤山ある。トロブリアンドの典型的な父親はよく働く眞面目な保姆であつて、傳統的な義務に從順に服してゐるのである。然し乍ら父親が常に子供の世話をしてゐるといふ事は、時とすると彼自身の愛着から出發してゐる事があつて、其の場合には父親は自分の義務を熱心に而も好もしくやつて除ける。

此の時期に於ける父系及び母系關係を比較して見るに、主な相違は父親に在る事が解る。我々の社會では父は遠ざけられ、稍々下ッ端の役をするのが關の山であるが、それに引換へトロブリアンドの父親はもつと積極的な役を演じてゐる。――子供との間に愛情の絆を作る、絕好のチャンスを與へる重要な役割である。兩社會とも、僅かの例外を除いては生物學的傾向と社會狀態との間に葛藤（コンフリクト）を起す樣な餘地は少しも見出されない。

（四）　母權社會に於ける父性

子供は母の乳房を離れる頃は步いたりもう片言で話をする樣になる。だが母體からの獨立は極く徐々に行はれるものである。子供は未だ乳房にすがつたり抱いて貰つたりする事に激しい、以前に變らぬ慾望を持つてゐる。

之は自然な生物學的傾向なのだが、我々社會では一二歲頃の慾望は妨げられ滿たされないのが普通である。我々が今到達した時代は、離乳を以て始まるのである事を先づ頭に入れて置かう。離乳に依つて乳兒の生活は調和を破られる、少くとも改革されて了ふ。上流階級では離乳は用意周到に前から加減されるので、何事も無く過ぎて了ふが、下層ではこれは母親に、殊に子供に取つての苦痛な挫折となる。軈て色々な邪魔が母子の間に押入つて來る頃はもう著しい變化が子供に表はれて來て、子供は獨りで動廻り自分で物を食べ感情や思考を少しづゝ表現し、理解や注意もする樣になる。上流階級では子供部屋の色々な設備に依り、子供を次第に母親から離してゆく。此の方法は子供には直接何のショックも與へない代り、子供の生活に不滿と切望のギャップを作る。下層階級では、今迄平和に

兩親の寢床を分つてゐた子供が、或る場合には當惑の種となつて來、ひどく邪魔物扱ひされる樣になる。

ニユーギニアの珊瑚島では母性愛は我々のそれとどう異るだらうか。先づ第一に、離乳期が晩く、時としてはもう走廻つたり實際に何でも食べられ、種々な事に興味を向け始める頃迄續く事が有る。卽ち子供がもはや母親の乳房を欲しがらなくなり、必要としなくなつた時行はれのであるから、最初の挫折は除かれる譯だ。「婦長權」卽ち支配權が母にあるからといつて、無暗とガミ〳〵言ふ樣な事はない。トロブリアンドの母親は此の時期に於ても、以前と變らぬ優しさで子供を連歩き可愛がり、遊び相手になつてやるのである。そして風習並びに道德が彼女を斯く行はせるのである。又法律や風習習慣等は子供を夫より以上密接に妻に結付けてゐる。夫權は只、子供の權利を補助する爲のものに過ぎない。親密な夫婦間の心理は又別物であるが、其の場合と云へども父親が子供を母親から遠ざけて了ふといふ樣な事は、確かにザラに起る事では無いのである。メラネシアの母親と典型的ヨーロッパの母親とのもう一つの差は、前者が非常に子供を甘やかす事である。子供の躾けも道德的敎育も無く、又さういふ事はもつと大きくなつた後外の人がやつて呉れる筈なので此の時代に嚴格にする必要は無いのである。此の母親の躾けが無いと云ふ事は、一方では我々社會でよく見かける樣な異常な嚴格さを防ぎ、他方では母を悅ばせ賞められ樣とする慾望を子供の心に起させる。此の慾望は、子の親に對する愛情の强い環の一つであり、後年の永續的な關係を形造るに大いに力有るものだ、といふ事を記憶せねばならない。

我々社會の親子關係を見るに、國民性や社會階級に關係なく父は依然として家長の地位に在る(註)。彼は一家の長で血脈を爲す元であり、又家族の扶養者でもある。家庭の絕對君主なので兎角暴君になり易い。其の場合には彼や妻子の間に有らゆる形の不和が持上る。之等の細い事は多く社會環境(ミリユー)に依るものである。ヨーロッパのブルジョア階級では、子供部屋の種々な設備に依り子供は全く父から離されて居る。保姆はついてゐるのだが、母に監督され母の言葉に從ふのが普通で、此の場合大抵母は子供の愛情を一身に集めてゐる。一方父親は滅多に姿を現はさないので自然、只の見物人か他人の樣になつて了ひ、子供は彼の前では行儀良く振舞ひ色々な事をやつてお目に懸けなければならない。彼は非常に威くて罰の源であるからおばけ程恐ろしくなる。だから一般に混ぜこぜな結果が出來上る。父親は完全な人間で彼のお蔭で何事もうまく行つてゐるのであり同時に又恐ろしい「鬼」でもあつて、家中が彼を娛しませる樣な工合に出來上つてゐる事を直きに子供は覺る。優しい思遣有る父は半神半人の役割を容易く演えるだらうし、尊大で氣の利かない木偶の坊は、晩かれ早かれ疑ひは愚か憎惡の目を向けられる事だらう。母親は、時には父が子に罰を加へる爲の仲立にもなれば、仲裁人ともなる。

(註)此處で再び現代の米國や英國の家庭に關する一つの例外を述べたい。父は次第に家長の地位を失ひつゝあるのだが、有らゆる事情は流轉するのだから此處でそれを斟酌してゐる事は稍不安である。細君のお尻に敷かれた意氣地の無い父親しか知らないらしい精神分析家が、來るべき時代迄「エヂプス錯綜」を保存して置く事は望みが無いだらうと私は思ふ。

中央及び東部ヨーロッパの貧しい農夫や勞働階級の、室一ッ寢床

一つの家庭では、結果は同じ事とは云へ當面の光景はブルジョアのそれと異つてゐる。父親は子供と密接な關係を持つてゐるのだが、より大きな愛情を禰らす事は稀で一般に急性や慢性の不和を惹起す方が多い。疲れて仕事から歸つて來た時や、居酒屋で酒を飲んで來た時には、家族にあたり散し妻子を虐めて鬱憤を晴らす。父親の殘酷な行爲が全く見られない様な村や貧民窟は無いので有る。醉つぱらつて歸つて來た農夫が慰みに子供を毆つたり、寢床から曳摺り出して夜中冷い戸外へ放棄つて置く様な事件は、ザラに擧げる事が出來る。

精々いゝ場合でも、父親が仕事から歸つて來たら子供達は早速騒々しい遊びを止めて靜かにし、悦びや悲しみ等の子供らしい感情の爆發を抑へなければならない。父は貧しい家庭に於ても罰の源である。母は矢張り仲裁者であつて、屢々子供に下されたむごい運命を共に分つ事がある。もつと貧しい人々の間では一家の支持者といふ經濟的役割と、父の社會力とはもつと速かに且確然と認められてゐて、彼の殘酷性と同様な不可抗的力で働く。

此の時期に於けるメラネシアの父親はヨーロッパの家長とは大いに異つてゐる。夫と父の社會的地位の相違並びに家庭に於ける役割に付いては、第四節で簡單に述べておいた。彼は血統を子孫に傳へる家長でもなければ、主な稼ぎ手でもないのである。之が爲妻に對する態度や法律上の權利は自然變つて來る。トロブリアンド人は滅多に夫婦喧嘩をやらないから、妻を虐めるなぞ以ての外の事である。それに又終生暴君で居るのも難かしい事だらう。性的同棲生活に關してさへ妻の義務夫の特權といふ、我々社會の規則の様なものは土人の法律には無いのである。トロブリアンド人は、夫は妻に性的奉仕をして貰つてゐるのであるから、それに價する人間で有る様に心懸けねばならないし、又妻に報ひてやらなければならない、といふ傳統的な考へを抱いてゐる。妻に報ひる色々な方法の中、主なのは彼女の子供を愛し奉仕する事である。土人間には、之等の節義に關する諺が澤山有り、口傳に依り傳へられる。父親は子供が未だ赤坊の頃は優しい保姆であるが、少し大きくなつて來ると遊び相手になつてやり、方々へ連歩いたり子供が夢中になる様な面白い遊戯や仕事を敎へたりする。

斯様に、部族（トライブ）の法律道德及び風習的傳統が有する組織の力と結合して働く爲、夫として父としての態度が家長制度のそれとは全く異つて來る。之は抽象的な定め方だが、と云つて實生活とかけ離れた單なる法律上の原則ではないのである。之は日常些細な事にも表はれてゐるし、家庭内の有ゆる關係に染み込んでゐて、家族の感情を支配してゐる。子供達は、母が――酋長と結婚した土民の女であつても――夫に壓服されたり虐待される場面や、夫に依賴する卑屈な生活など全然見た事も有りはしない。彼等は父親の重々しい手を感じてゐない。父は子供の血縁でもなければ持主でも恩人でも無く、何の權力や特權も持たないのである。而も尚、父は、世のノーマルな父親と同じく子供に對して強い愛着を感じてゐる、そして此の愛情は傳統的な義務と共に、父をして子供の愛を贏え、且親の威光を示さうと努力さすのである。

ヨーロッパの父性をメラネシアのそれと比較すると、矢張り社會的要素と同じく生物學的要素の重大さを忘れてはならない。生物學的に普通の人間は自分の子を可愛がる傾向を持つてゐるものである。けれどもこの傾向は、子が親に負はせる多くの辛苦に打勝つ程

强いものではないらしい。だから社會と云ふものが割込んで來ると、父は絶對君主になつて了ひ、子供達は只父の利益や快樂や名譽心を滿足さす爲に存在してゐる、といふ樣な事になる。此の社會力は、生來の愛情や、煩はしい事には堪え兼ねる天性等の幸福な均衡を破つて、反對側に傾ける。一方母權社會では、父は子供に愛される權利も特權も無いので、愛情を贏える爲には自分で努力せねばならない。だが同未開社會では、神經を惱ます事や野心も少いし、經濟的責任も輕いから自由に父性愛に身を打込む事が出來るのである。我々社會では生物學的傾向と社會力との調節が、小兒時代の初期には工合良かつたものが段々調和を缺き始める。メラネシア社會では、圓滑な關係がずつと續いて行く。

父の生物學的傾向や子供に對する愛又は子の心に呼起す私的な愛情の量とは等しくない、過分な社會的權利や特權を父親に賦與する「父權」と云ふものは、大いに家庭葛藤(ファミリーコンフリクト)の原因をなしてゐるものである。

一言欄

議事堂とダンス

神奈川縣會議事堂では去る建國祭の夜在留外人及名士を集め狂亂にも眞夜中の三時頃まで踊り狂つた。

嚴正であるべく縣民の囑望をになふ縣會議事堂に於て、たとへそれが知事の外人引留策とは言へ彼等が××ダンスホールを停止されたのは一年も前の事ではない。

しかも彼等が唯一の楯とする處の法規には舞踏場の營業時間午前三時とは書いてなかつたと思ふ。其數週間ばかり以前××部長は「最近退廳時以後室内に點燈し、たま〲碁將棋等に耽る者を見受く、縣財政窮乏の折柄各位御自重を望む」と以後雨天の際とて容易に點燈を許されない。當夜踊りつかれて、翌日十時十一時頃御出勤相成つた部長及課長連中は御存じなかつたかも知れぬが、先づ一番先に來る給仕が驚いた。一階から四階廊下の隅々までも灼々と輝いてゐたではないか。これが「縣財政窮乏の折柄」だのに。

緊縮内閣の振向けた現××縣知事は、勿論彼等がしば〲云々される官僚的態度幾らかでもそうした非難を取消す爲の舞踏會であつたかも知れぬ。だがいかに上流名士にのみ柔らか味と切れ味を見せた所で、毎日何人か縣廳に出かけて來る木綿袴の地方町村長に對する彼は依然明治初期に於ける大官僚におとらぬ態度を持してゐるのだ、廳内に於てすら下級吏員は高等官に、高等官は課長に課長は部長に部長は知事に、彼等が夫々慇懃なる態度は昔農民對藩士の土下座のそれよりも尙みじめではないか。

エレベータは四時半迄に停止する任務者優遇に於ては結構、吏員の多くは仕事の都合で五時六時近くまで殘る事がある。まつくらな階段を五階あたりからテク〲と降りなければならない。擔任者に對して絶對の同情ある彼等でありながら一言の命令で夜中の三時まで昇降機を動かした知事を彈ずる者は一人もないお人好しばかりだ。彼は善良な部下を持たして呉れた現内閣に向つて萬歲を唱えてゐる事だらう。

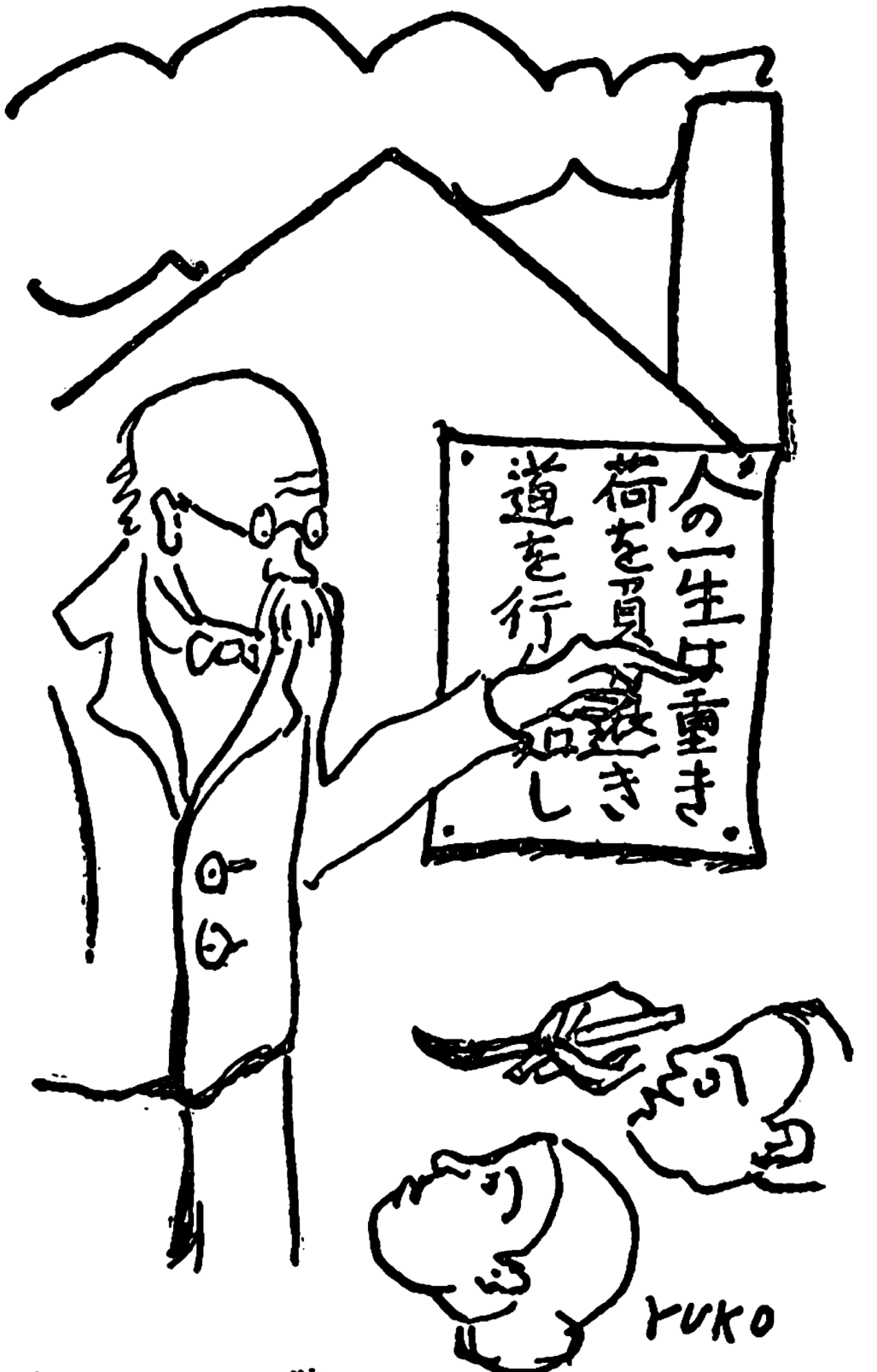
今後も彼は議事堂を度々有效(?)に開放する意向と共に無數の參考書を積んだ書庫及圖書室も仕事に追はれてゐる執務時間中だけでなくもつと有效に開放してほしいものである一を投じて二を得る事に有名な知事よ、忙しくてそんな暇はないかも知れぬ。だが御自分の靴下代に等しい日給四十二錢を得んが爲に、終日追廻されてゐる給仕の姿を見てほしい。

不況のどん底に泣きながら負ひきれぬ税金を厭應なしに持つて行かれる縣民がジャズに合せて踊る貴下の姿をどんな眼をして見てゐるか、一寸想像してみるといゝ。

坂本恭枝

學年工仲間

西田縫子



一

此煙草分工場内にある補習小學校の六年級は其時清書の時間だつた。

「皆んな、今日の清書は餘程確かり書か無くちやいけ無いよ。二學期の試驗點に這入るんだから」

年寄つた先生は、訛りのある言葉で嚴しくそう云ふと、白墨(チョーク)を持つた儘で隣りの級に教へに行つた。隣りの級と云つたところで教室そのものが、女工全部の使用する食堂だつたので、隣り同志の間隔と云つても背中合せに据え立てられた大きな黒板と、教壇とがある限りであつた。それでも生徒達は、先生の姿が黒板の向ふに見え無くなると、直ぐ例によつて、ガヤガヤと騷ぎ出しては級長のお勢をハラハラさせるのだつた。

一年から六年迄の各級が、名目だけでも區別されてあつて、それを二人の先生が、三級に分けて、其内極少數の一二年を、交互に授業して居るのだつた。

生徒の何れもが皆な工場の幼年工達で、町の小學校を中途退學したり、何時とは無しにずるずると休み通して居る者達ばかりだつたから、年齡なども少しも統一されて無く、總

じて早熟な不健康な者が多かつた。
生徒の數は一番多い六年級で、男女子合せて十七名だつた。それは多いと云つても町の學校の半分にも足り無い人數だつた。けれども、お勢は町の學校に居て四十人の級長になつて居る時よりも、此補習校で十七名の級長を務める方が骨折りだつた。
工場では、素直で學問の出來る子供よりも、仕事の能率が高くつて、流行唄の上手な子供の方が喜ばれた。子供大人に限らず好學の風の見える者は、餘り氣受けが好く無かつた。お勢も他の生徒達から、嫉妬交りの異端者扱ひを受け無ければなら無かつた。
「ねえ、みんな靜かにして頂戴な、他の級に惡いから、先生にも惡いから」
お勢は、黑板の向側の先生に氣を兼ねて、幾度か皆に注意を促したが、間近に居る者が一寸振向いては見たが、直ぐ又傍の騷ぎに連れて其方を向いて仕舞ふのだつた。
先生も仕事の傍らの勉强と云ふ理由から、萬事が寛大で、學問でも品行でも決して嚴しく云は無かつた。生徒達はそれを好く承知して居た。
「皆んな、靜かに仕無くちや駄目じや無いの、先生が試驗だつて云つたじや無いの」
小杉と云ふお勢の前の席に居る女生徒が、お勢の心遣ひを思つてそう云ふと、忽ちに方々から罵詈が飛んで來るのだつた。
「何んでえ」
「小杉、おべつか」
「おかめつ面らッ」
強い小杉は、そう云はれると默つて居無かつた。赫い頰を一層赫く膨らして、應酬した。其處で尙々騷ぎは大きくなるのだつた。此んな事は珍らしくは無かつたが、其度にお勢は悲しかつた。お勢は級長と云ふ責任感に責められ乍らも、如何する事も出來無いで、ひとりで困つて眺めて居た。
ピシッ、―と云ふ先生の鞭の音が、靜かな向ふの天井に銳く反響すると、皆なは始めて先生を思ひ出した。そしてぶつぶつ呟き乍ら机に向ひ出した。
「煩さいわねえ」
小杉は自分の事を忘れたやうにそう云つて、ほつとして笑つた。お勢も默つて微笑した。小杉の鼻の頭に汗の玉が、煙草の粉塵と一緒に固まつて光つてゐるのが妙に眼に付いて、お勢は氣の毒なやうな變な氣がした。
お勢は漸く落着いて筆を持つた。そして書損じた一枚の半紙を紙挾みに仕舞つて、今一枚に今度こそ上手に書かうと向つた時だつた
「お勢ちやん、半紙持つて居無い」
机を並べて居た仲好しのお琴ちやんが、お勢のエプロンを引張つた。

お勢は合點が行か無いでお琴ちやんの顏を見た。すると隣側の机で慌てた聲が、

「好いんです、好いんです」

とお琴ちやんを押えた。それは眞木と云ふ男生徒で、三月程以前に補習校に這入つて來た幼年工だつた。

「眞木さんが半紙を借してつて云ふんだけれど、あたし皆な使つちまつて持つて無いのよ、お勢ちやん持つて居無い」

お琴ちやんはそう云つて、極り惡そうに赫い顏をした。

「濟みません、僕書き損ひして仕舞つたもんですから」

少年はそう云つて書損じた淸書を上から押へて恥し氣に微笑した。お勢は、そうした眞木の美くしい横顏を見ると、自分にも譯ら無い羞恥を感じて、急いで視線を反らすと、一枚限り殘つてゐた半紙を、默つてお琴ちやんに渡した。お琴ちやんはそれを眞木に取次いで遣つた。

「濟みません、濟みません」

眞木はそう云つて幾度も、お琴ちやんに頭を下げた。そして體を伸して、お勢にも叩頭をした。それで又、お勢は譯も無く顏を火照らして仕舞つた。

二

「眞木さんて可愛い人ね」

學校が退けて、作業所へ歸る廊下で、お琴ちやんはお勢に囁ひた。其時も何故かお勢は、お琴ちやんの言葉に素直に肯く事が出來無かつた。

――それからお勢やお琴ちやんは、段々に眞木と親しくなつて行つた。そして何時か補習校の生徒全體が親しくなつて仕舞つて、皆なは毎日、晝食の三十分、學校での十五分の休憩時間を、何時も一緒に食堂の南側の芝生に集つて遊んだ。

男女工の區別無しに、用事無しで課の違ふ作業所へ行く事は、可成り嚴禁じられてゐたが、補習校の生徒だけは何と云ふ理由も無しに、只學年工と云ふだけで何處の作業所へ出這入りする事も、許されてゐた。そんな事も、生徒逹の間を確かに親密にした。

丁度其頃、幼年工の酷使や、義務教育を終へて無い年少者の使用等が、喧しく叫ばれて來た頃で、此煙草分工場にも、補習小學校が新設されたのだ。

――工場内に學校が設けられた事は、單調な機械生活に飽きて居る女工達に、何等かの好奇心を與へた。其内にも、此補習校が出來て始めて採用された少年工は、好奇的な女工を一途に騷がせた。

腕に學工の文字を縫ひ付けた少年工は、何處の作業所にも無條件で容れられた。だが何處でも矢張り美貌い者が餘計に可愛がられた。眞木や山内と云ふ少年は、其内でも殊に、皆に好かれた。

「おい、よう其處の可愛い子供よ、遊んでおいでよ、お小母さんの

所でよ」

休憩時間などに、食堂の大火鉢の周圍で煙草を吸つて居る露骨な年頃の女工に呼び止められて、眞木や山内はよく逃げた。

お琴ちやんは、眞木、山內、小杉、暴者(あばれもの)の田中等の、自分の氣に入つて居る生徒達を皆な、女工長の小谷さんに紹介した。

小谷さんはお琴ちやんの伯母さんだつた。工場に居て、女工長や組長に知人を持つ者は如何にか心强かつた。

お勢は今迄、お琴ちやんと仲好しだつたので、自然と小谷さんにも可愛がられて居た。何の知合も頼りも無い工場の、多數の他人に交はつて居て、女工長の小谷さんに可愛がられて居ると云ふ信頼は、少さいお勢の唯一の力であり誇りでもあつた。お勢はそうした感情から、早く世に處した少女の禮心と云ふやうな氣分で、小谷さんに報ゆる心で、お琴ちやんの學問を授けた。

お琴ちやんは、色白で小柄な可愛らしい少女だつた。だが非常な我儘で學校は少しも出來無かつた。學校の出來無い事は伯母さんの小谷さんも知つて居た。小谷さんはお勢にお琴ちやんの學問の事をよく頼んだ。

「お勢ちやん、琴代が先生の云ふ事を肯か無かつたらあんたが叱つて遣つて頂戴ね、あんたは級長さんだからね」

そう云ふ小谷さんの心理(こころ)を、お勢はよく理解して居た。そして、そんな時はお琴ちやんと顔を見合せて、默つて笑つて居た。お勢とお琴ちやんには、呑氣な朗らかな日が毎日續いてゐた。

けれども、お琴ちやんが大勢の友達と遊ぶやうになつてからは、お勢は以前のやうに、小谷さんから可愛がつて貰へ無くなつた。お琴ちやんは何時も、眞木ばかりを、小谷さんの所へ連れて行くやうになつた。

――十二月に這入ると巻上課の方は一段と多忙になつた。定時間の五時が、毎日續いて七時八時迄の殘業になつた。女工達は居殘る事を愚痴(こぼ)し乍らも、歳暮の金を少しでも多く取らうと努　した。午前と午後にある休憩時間にも、休まずに働く者が少なく無かつた。

それに連れて補習校の生徒達も、自然と學校の往[illegible]に道草を仕無くなつた。彼等も又此年末をうんと働いて、正月には買ひ度いものが多數(たくさん)あつた。その代りに晝食の休憩が、益々惜しい遊び時間だつた。彼等は毎日同じ事をよくも飽きずに繰返して遊んだ。繩飛び、陣取り、鬼ごつこ、皆な町の學校で少さい時代にやつた事ばかりだつた。そして其等の遊びをするにもそれぞれのグループがあつた。お勢にお琴ちやん、眞木山內小杉田中其他の三四人が、何時も一つに組して居た。そして、その遊び仲間の女王様は何時もお琴ちやんだつた。お琴ちやんは何をする時も、自分の思ふ通りを皆に命令した。皆は又素直にその命に從つた。

お勢は、そうして同じ友達同志で遊んで居り乍ら、お琴ちやん一人が勝手に我儘を振舞つて、威張つて居るのが氣に入ら無かつた。

そして又、その威張るお琴ちやんに從順に仕える他の友達も、氣に入ら無かつた。」

だが、お勢は皆が何故にお琴ちやんの機嫌を取結んでまでも、お琴ちやんと遊びたがるか、其理由をよく識つて居た。

生徒等はお琴ちやんに嫌らはれて、女工長に憎まれるのが怖しかつた。皆は、女工長に憎まれて辛い口惜しい目に逢つて居る女工達を散々に、見聞して居る。だから仕方が無いんだ。お勢はそうも考へるのだつた。不平や反抗の心が起る度毎に、自分は級長だからと云ふ、理由にならぬ理由を付けて、寂しい優越感の內に何事も諦めて居た。

だが、そうしてお勢はお琴ちやんの態度を冷靜に傍感して居たけれど、時々お琴ちやんが、樣子の違つて來たお勢を敬遠して眞木一人に從いて居るやうな場合、お勢は、自分自身にも譯らぬ憤りを感じて、其儘に濟す事が如何にも我慢なら無かつた。

「お琴ちやん、もうあんたには算術を敎へて上げないわよ」

お勢は、そつとお琴ちやんにそんな事も云つた。今迄お琴ちやんは、お勢に對しては他の子供達にするやうな、我儘や意地惡は仕無かつた。それは單に仲好しの友達と云ふばかりでは無かつた。お琴ちやんは何時も、學校に行くと、何事にもお勢の力を借りて居た。お勢の强味は其事だけだつた。

云つて仕舞つてから、お勢は後悔した。お琴ちやんは、默つて一寸凝視したきりで何も云は無かつた。

「小谷さんに云ひ付けられたら何うしやう」

お勢は、二三日小谷さんの顔を見るのが怖かつたが小谷さんは別に何も云は無かつた。だが、お勢は段々憂鬱になつて行つた。

「遊びに行くのはよそう」

幾度かお勢はそう考へた。

けれども、食堂で皆な一緒にお辨當を使つて、元氣好く芝生の上に飛び出して行くのを見ると、自分一人が作業所へ歸つて行く事は矢張り出來無かつた。わいわい騷いで居る大勢に從いて、お勢は進まぬ心を持ち乍ら、芝生に出て行くのだつた。そして遠くから、皆と一緒に燥しやぎ乍ら、絕えず眞木やお琴ちやんを凝視めて居た。

眞木は何時も寡默だつた。自分が先頭に立つて事を遣るなんてことは決して無かつた。それで居て、眞木は生徒中の人望を一身に集めて居た。お勢も又眞木を本能的に、自分等より如何にか優越た人間と信じて居た。級長の自分を凌ぐ眞木の人望も、お勢は決して妬ましくは思は無かつた。只、お勢に悲しいのは、眞木を見る度、眞木を思ふ度の寂しさだけだつた——

「皆んな、陣取りをしませうよ」

今日もお辨當を濟ますと、皆は直ぐに食堂を飛び出した。

お琴ちやんの宣言で、皆はジヤンケンをした。そしてお勢は珍らしく眞木と組んだ。皆がお琴ちやんの顔を見た。何時もお勢と組む

のは田中や其他の三四人だつたが、今日は山内もお勢の組だつた。

お勢は何と無く勝誇つた氣分で、味方の陣地を決めやうとした。するると、

「俺よした」と云つて田中が皆なから離れて行つた。

「何故？」

お勢が振返つて、田中の行く方を見ると、向ふの花壇の前にお琴ちやんが、一人で此方をじつと凝視めて居るのだつた。

「あたしもよした」

「俺も」

皆なバラバラになつて、二三人はお琴ちやんの方へ馳出した。

「あんたもよす、山内さん」

お勢は烈しい侮辱を感じて、柔順しい山内を詰問する様に云つた

「だつて、皆ながよして仕舞ふのに……」

山内は當惑そうに皆を振向いた。

「好いわッ」

お勢はむらむら湧き上るお琴ちやんへの憎惡を、食堂の羽目板に添つて、俯向いて歩いて居る眞木の後姿に投げ付けた。

熱い、痛いやうなものが、鼻から頭の芯へつんと突抜けた。お勢は手に持つて居た枝切れを其處に投げ捨てると、どんどん馳出して仕舞つた。

――其日、學校では誰もが餘り騒が無かつた。お勢は机に向つて晝間の事を考へた。そして近頃自分の何處かに、勉强心の薄らいで來た事を感じた。自分が學問を怠惰け出したので、皆なが莫迦にするのだ。お勢は務めてもそう考へた。兎もすれば他所に外れやうとする心持をじつと押へて机に向つて居た。

其日お勢は學校が終る迄、お琴ちやんと一言も口を利か無かつた。十五分の休憩時間も、お勢は鉛筆を離さ無かつた。

――先に歸らうかしら。

お勢は幾度か思ひ惑つた。今迄にも一寸の喧嘩はした事があつたけれど、家へ歸るのを別々にした事は一度も無かつた。二人の家は、直ぐ近所で、工場で女工長の小谷さんに世話になるばかりで無しに、家に居てもお勢はお琴ちやんの家の人達に、何彼と仕て貰ふのだつた。子供を同じ工場に通はせて居たけれど、お琴ちやんの家はお勢の家よりもずつと裕福だつた。お勢の弟達は始終お琴ちやんのおつ母さんに菓子や小使錢を貰つた。時にはお勢の母親までが、小母さんの着古した袖や半襟などを貰つた。お勢はそんな所にも、お琴ちやんに對して負目を感じなければなら無かつた。

――雑鬧する更衣室の入口で、お勢は何時迄もお琴ちやんを待つた。もうもうと紛埃の立迷つてゐる室内に、巡視さんの靴音が空虚に響いて、女工達が皆な歸つて仕舞つても、お琴ちやんは出て來無かつた。

何時の間に歸つたのだらう。――お勢は惱る氣にもなら無いで、

暮れ切つた通用門を出た。

——貧乏は悲しい。——お勢はふと途中で、貧しい我家を痛切に感じた。

三

翌日は算術の試驗がある日だつた。

これが濟めば二學期の試驗は全部終るのだつた。——工場の方は益々多忙になつて、一日增しに活動が盛んになつて行つた。

髮から顏から一杯に、足袋の爪先迄、煙草の粉埃を浴びた女工達は、一齊に工場歌を合唱して勢ひを付けた。能率增進を督勵する訓示が每日張り出された、夜業時間になるとパンが配られた。

生徒達も、學校を休んで働きたかつた。けれど又一方に試驗も氣になつた。皆なは大人の女工達の唄ふ工場歌に、少さい心を躍らせ乍ら、試驗が濟んだら學校を休まふと樂しみにして居た。

四時になつて、お勢が學校へ行く仕度をして居ると、お琴ちやんが迎へに來た。お勢は一寸意外に思つたが、默つて一緒に出て行つた。二人共に昨日の事は何も云は無かつた。

算術の試驗は容易しかつた。お勢は書き上げた答案をさつさと先生の机に出して來ると、お琴ちやんの方を成るべく見無いやうにして讀本を開いた。お琴ちやんは机に押被さつて、答案を隱すやうにして、何時迄も考へて居た。お勢も同じやうに默つて居た。平素ならば早速にお勢の力を借りるお琴ちやんだつたけれど……

先生が隣りの級から戾つて來て、机の上の答案をめくり乍ら皆なの方を見廻した時に、お琴ちやんは漸く起つて行つた。お琴ちやんの答案に間違つた所のあつたのを、お勢はチラと覗た。

——試驗が濟むと學校の缺席者は目立つて增した。

お勢とお琴ちやんの仲は元通りになつてゐた。

「お勢ちやん、あんたも休まない」

後十日程で休暇になると云ふ或日、お琴ちやんはそう云つて、あいてる机を見廻した。

「そうね」お勢は生返事をして居た。

學校を休んで十日間、二時間づつ餘分に働けばお正月に活動を見る位の金が餘計に取れる——けれども——

「あたし、休ま無いわ」

お勢は、きつぱりと云つた。

——翌日は時間になつてもお琴ちやんが來無いので、お勢の方から迎へに行つた。

「何卒お先に」

お琴ちやんはお勢を見てそう云つたきり、多忙そうに手を働かして居た。

「でも時間よ」

咽喉迄出て來た言葉を、周圍の氣勢に吞まれて仕舞つてお勢は默

つて學校へ行つた。
生徒は半分も出席仕無かつた。先生は出席點檢を終ると、缺席した生徒達に明日は必ず出席するやうにと傳言して、授業を始めた。
お勢は缺席者が餘り多いので、先生に申譯の無い氣がした。
其内に來るだらう。いいえ來無い。――お勢は、色々な事を自分で說いて、自分で答えてお琴ちやんを待つたけれど、遂々終業迄お琴ちやんは來無かつた。それに今日は眞木も缺席した。眞木の見え無い事はお勢の心を如何にか寂しく不安にした。
「あたしも休めば好かつた」
輕い後悔に似た氣持が寂しくお勢を包んだ。だがお勢はその氣持を直ぐと持直した。
―規定された時間は眞面目に働か無ければならぬやうに勉强も又、規定の時間だけは眞面目にやらなければいけ無い。萬一して今日眞木さんは工場を休んだのかも知れ無い。眞木さんが工場に來て居て學校を休む譯が無い、あの人は本當に眞面目なのだから――
お勢はそう考へて、自分で自分を慰めた。
「今日來なかつたのね」
歸りに更衣室で一緒になつてお勢はお琴ちやんに聞いた。
「ええ、あんまり遲れたから」とお琴ちやんは笑つて居た。
其翌日もお琴ちやんは學校を休んだ。眞木も休んだ。此所暫くは晝食の休憩も皆な餘り遊ば無かつたので、眞木が工場に出て居るか居無いかが課の違ふお勢には一寸解ら無かつた。
今日は生徒は數へる程しか出席しなかつた。先生は空隙きの座席を見渡して、毎日休まず出席する生徒達を褒めた。授業が少し早目に終つた時、先生は明日から休暇にすると云ひ渡した。豫定より二日程早かつた。
皆なは何時もより一層に、輕い足調で作業所へ戾つた。
――スチームの高い溫度が作業所の扉を開閉する度に、脂臭い生溫い風になつて室外に溢れ出た。
お勢は、幾重にも曲折した階段を、一息に半分餘りも馳け登つて、三階の作業所を見上げた。ガラガラッと云ふ重い扉の開く音に續いて、埃りつぽい風と唄聲が、一緒になつて流れて來た。
「學校かい」
頭の上で突然に呼ばれてびつくりして居るお勢の前に、作業服の裾を、階段に引擦るやうに長くした小谷さんが立つて居た。
「ええ」
お勢は慌てて會釋をした。
「偉いわ」
そう云つて小谷さんは微笑した。
「琴代は休んで居るのよ」
お勢は、はつとして小谷さんを仰ひだ。
「あの子は此間からね、お正月のお小使ひを働くつてね、一生懸

命、大忙しに働いて居るのよ」

そうして、小谷さんは又微笑すると、するする裾を引ひて階段を降りて行つた。小谷さんの束髪に被せた茸のやうな白い作業帽が、階級の下に消へて仕舞ふと、お勢は思はず泪を零した。

小谷さんの微笑はそれと無く、お勢を咎めて居るやうに思はれた。——貧乏人のくせに此多忙しい中を學校にばかり通つて居る。——何處かでそう云ふ聲がお勢を嘲笑した。

お勢は、何物かに追はれる様な怯えた心で作業所に馳戻つた。作業所の中は、工場歌と機械の音と、スチームの熱した汚れた空氣とで、湧き返るやうに渦巻いてゐた。お勢は、何時もの通りに只今の挨拶をしたけれど、仕事に熱中して居る人々は、誰一人答えて呉れやうと仕無かつた。

―眞木さんさへ休んだ、あたしも休めば好かつた――

お勢は、自分が甚く怠惰者になつたやうに羞恥しまれて、肩身の狭い思ひで、機械に油を差した。

四

歳末の夜の町は、騒然として賑はつた。お勢とお琴ちやんは、絶間無い人波に洗はれ乍ら、雑閙する露店の前を、彼方此方と見て歩いた。蝦蟇の油を賣る露店の前で、暫時く立止つてからお勢はお琴ちやんに云つた。

「あたしもね、あんたと一緒に學校を休めば好かつたわ」

「そうを」

お琴ちやんは冷淡かつた。

「どうせ明日からは休暇になるんならね」

「でも、學校へ行く人は偉いのよ」

「偉か無いわ、ちつとも偉か無いわ」

お勢はお琴ちやんが相手にしないので情けなかつた。

「眞木さんも休んだんですものね」

云つて仕舞つて、云は無ければ好かつたと思つた。

「そうを、眞木さんも」

お琴ちやんは知つて居ると云ふ素振りだつた。

「あらッ、お琴ちやん知つてるの」

お勢は意外な思ひで訊いた。

「ええ、知つてるわよ、だつてもあたし、約束したんですもの、眞木さんと一緒に休むつて……」

お勢の權幕にお琴ちやんは、やゝ鼻白んで答へた。お勢はその言葉を聽くと、自分にも解らぬ憤らしさで、お琴ちやんを凝視した。

「何故あたしに教へて呉れ無いの」

お勢はお琴ちやんの前に立塞がるやうにして詰寄つた。

「だつて、あんたはあたしが訊いたら休まないつて、そう云つたじや無いの」

「そいでも、眞木さんが休むつて云つたら敎へて呉れれば好いじや無いの」

お勢は如何しても、其儘に默つて居られ無かつた。

「どうして、どうして敎へなきやいけないの、眞木さんが休む事を敎へなきやどうしていけないの」

今度はお琴ちやんが默つて居なかつた。

「どうしてつて事は無いけども」

如何してとは判然(はつきり)云ふ事がなかつた。お勢が詰まつて仕舞ふと、お琴ちやんは尙々執拗に迫つた。

「だつてあんたは、あたしが訊いた時に休まないつて云つたんだから眞木さんが休む事なんか敎へないでも好いじやないの、他人(ひと)が休むのに敎へるなんか餘計なお世話だわ」

そう云つて、お琴ちやんはどんどん歩き出した。

「でもあんたは、何時もそう云つたでせう。あたし達は仲好しなんだから、何時でも何でも一緒にしませうつて、そいだのにあんたは眞木さんとだけ約束するんですもの、——此頃は何でもそうよ、お琴ちやんは此頃は何でも眞木さんとばかりするのよ、眞木さんとばかり仲好くするのよ」

お勢は今日迄、云ひ度くて云ひ得無いで居た事を、思ひ切つて云つた。

「あたしが何時眞木さんとばかり仲好くしたの、何時なの」

振返つて立止つて、お琴ちやんは必つとお勢を凝視した。

「そんなに眞木さんと一緒に休みたかつたら勝手に休めば好いじや無いの」

お琴ちやんは意地惡く云ひ放つた。お勢は、何か强い事を云つて遣り度かつた。强い事を云つて、お琴ちやんを負かして遣りたかつた。けれども、お琴ちやんを負かして、小谷さんやお琴ちやんのおつ母さんに告げられたならば——お琴ちやんは默つて俯向いて、足早に歩いて居た。

お勢は何も云ふ事を辭めた。女工長や他の女工達に憎まれて、自分が工場に通へ無いやうになつたならば——お勢は貧しい我家を考へて、母や弟を思ひ出して、熱い泪をじつと堪えた。

何時もの別れ路に來た時に、二人は左樣ならも云は無いで、お互ひに逃げるやうに別れて仕舞つた。

五

二十九日の午前中で、卷上課の作業は終つた。明日から正月の三日迄は一年に一度の公休暇だ。女工達は全部の窓を開け放つて、一年振りの腰を伸した。

「補習校の生徒は學校に行くんですよ。掃除は仕無いでも好いから直ぐに行つて下さい」

甚い紛埃の中を小谷さんが布令て步いた。あの夜默つて別れたき

りで、一度も逢は無いお琴ちやんが、今日は機嫌の好い顔で迎へに來た。お勢は一寸間が悪い感じがしたが、お琴ちやんが平氣な顏をして居るので、お勢は自分の機械だけを掃除して、組長さんに頼んで一緒に學校へ行つた。

今日は皆な出席して居た。何時もの机の前で無しに、眞中の廣い所に全部一緒に集つて、先生から休暇中の心得を訓示されて、今年のお別れの式を終つた。

「先生左樣なら」

「先生ッ、來年お目に掛りますッ」

何時も生意氣な生徒達も、今日は本當の子供らしさで、來年の八日迄逢へ無い先生に別れを惜しみ、圍り合つて廊下を歩いて行つた。休暇中の行動の豫定が、それぞれに話し交はされた。大抵の者が、活動見物にゆくといつた。

作業所へ別れる路に來た時に、皆は幾度も左樣ならを云つた。何時迄も名殘りが盡き無かつた。

「今度逢つたらお目出度うだよ」

誰かが大きな聲でそう云ふと、皆なは一層賑やかになつた。

「一寸一寸、眞木さん待つてよ」

行き掛けた眞木を追つてつて、お琴ちやんはその耳に何か囁ひた。

眞木は一寸此方を振向いて、拳骨を作つた腕を伸して、お琴ちやんを打つ眞似をすると其儘に、くるりと廻つて行つて仕舞つた。

眞木の拳骨からぎやうさんに飛退ひて、お琴ちやんはキヤツキヤと笑ひ乍ら走つて來た。

「どうしたの」

お勢は妬ましい氣がした。

「どうも仕無い」

だが、そう云つてお琴ちやんは尙も其方を振返つて居た。

——町では師走のお天陽さまが、賣出しの小旗をヒラヒラと照らしてゐた。

陽のある明るい町を歸る事は本當に久振りだつた。二人は毎朝毎晩通る道を物珍らしく見て通つた。露店の前も夜程に混雜して無かつた。二人は一軒々々の店に、用も無いのに立寄つて行つた。お琴ちやんは莫迦に機嫌が好かつた。

「お勢ちやん、あたしの家へ寄つて遊んで行か無い」

表通りを曲つて、別れ路に來るとお琴ちやんはお勢を誘つた。お勢はふと寄つて行かうかと云ふ氣になつた。

「ねえ、まだ早いから好いでせう、ねえ、いらつしやいよ」

お琴ちやんは、明るい空を仰ひで重ねて誘つた。

「ええ、でもねえ」

お勢は行かうか行くまいかと迷ひ乍らに、又何處か行きたく無い氣持を持つて居た。

「あたし、又今度行くわ」
お勢は懐中の給料袋を思ひ出して、早く我家に歸りたかつた。早く歸つて陽の當つてゐる家で、給料袋が開けたかつた。
お琴ちやんは詰らなそうにお勢から離れた。
「そいじや、お勢ちやん大晦日にいらつしやいよ、大晦日は家でお汁粉を拵へるから、それが好いわ」
お勢が今日行か無いと定まると、お琴ちやんは一人で燥しやいで決めて仕舞つた。
「ねえ、大晦日にいらつしやいね」
「ええ、行かれたらね」
「行かれたらじや無いわ、屹度よ、屹度ね」
お琴ちやんは馳け出し乍ら何遍も大聲で念を押した。

――大晦日の夕方、お勢は末の弟を背負つて、お琴ちやんの家の近くに行つて見た。狭い露路の內は、塵一つ無く閑寂に掃き清められて、小さい同じやうな門松が、何處の家の玄關にも格子の兩側に飾り付けられてあつた。
横丁一つ隔てただけて同じやうな露路でも、お勢の家の近所は始終喧かましかつた。赤坊が泣いたり子供が喧嘩をしたり、大人が怒鳴つたり、門松を飾つて早くから、靜肅に年を迎へる仕度をする家などは一軒も無かつた。
お琴ちやんの家の玄關には、お琴ちやんのらしい赤い緒の高下駄が置かれてあつて、奥の方の人聲は誰だか解ら無かつた。
お勢はそつと玄關の前を離れた。お勢は、此處でもお琴ちやんと自分に、幾多の相違がある事を考へた。お勢は悲しかつた。同じ人間で、同じ家で、どうして金持と貧乏が出來るのかと考へた。どうして自分の家や、自分の家の近所ばかりが何時も貧乏して居るのだらうと考へた。
むづかり出した弟を揺り乍ら、露路を出掛けたお勢は、露路の角でお汁粉の話を思ひ出すと、何だか急に、自分が貧乏たらしくなつて、厭らしくて、何も彼もが憎らしかつた。

六

一月四日の始業日に、お琴ちやんは赤い絞りの切れを掛けて、髮を桃割れに結つて來た。友禪銘仙の仕立下しの着物に、帶をお太皷に結んだお琴ちやんは、少さくて人形のやうに可愛らしかつた。
「お勢ちやんは如何して桃割に結は無いの」
お琴ちやんを取巻いて、色々な評をして居た大人の一人はそう云つて、お勢に聲を掛けた。お勢は默つて微笑ひ乍ら、お琴ちやんの姿を眺めて居た。
「あたしの髮形、お可笑しく無い」
お琴ちやんは幾度も自分の髮に手を遣つて、お勢にきいた。

「お可笑か無いわ、好く似合つてるわ」
「あたしね、厭だつたんだけど伯母さんが結へ結へつて云ふから結つたのよ」
お琴ちやんは口と反對に嬉しそうに笑つた。お勢はお琴ちやんの後姿を眺めて、自分の綯直しの着物をそつと見た。お琴ちやんのは着物も帶も皆な新しかつた。
「大晦日にどうして來無かつたの」
お琴ちやんが不平そうだつた。
「家じや、お勢ちやんが來ると思つてお汁粉を澤山拵へてたのよ」
「御免なさいね。あたし用があつたから」
お勢は嘘を云つた。
仕事始めの日でも、誰も機械に掛らなかつた。何時もは白と黒との作業服で一杯の工場が、今日は帶や羽織で色とりどりに飾られてゐた。課長さんも事務員さんも女工長さんも、今日は皆な機嫌の好い顔で、大勢の騒ぐのを眺めて居た。
「大晦日にね、眞木さんが來たのよ」
「ええッ、何處へ、お琴ちやん家へ」
二人並んで皆の賑はふのを眺め乍ら、お琴ちやんは思ひ出したやうに云つた。お勢は、眞木が來たと聽いて驚いた。
「いいえ、あたしん家へ來たんじや無いのよ」
そう云つてお琴ちやんは話し出した。
「大晦日の夕方にね、眞木さんが來たからおいでつて、田中さんが迎へに來たのよ」
「田中さんて、あの田中さん」
お勢は、解つてゐる事を更に念を押して訊いた。
「そうよ」
「そいでお琴ちやん行つたの、そいで眞木さん居たの」
「居たわよ」
お琴ちやんは、お勢が餘り眞劍なので、不審そうに見て居た。
「そいで眞木さん何か云つた」
「何んにも云や仕無いわ、だつてあたし、家の角迄出て見たんですもの」
「眞木さん一人限り居たの」
お勢は終ひ迄聽か無ければ氣が濟ま無かつた。
「一人じや無いわ、山内さんも居たわ、まだ大勢マント着て向ふの方に立つて居たわ」
「そう」
すつかり聽いて仕舞ふとお勢は又、自分一人が仲間外れにされたやうで寂しかつた。
大晦日の夕方ならば自分もお琴ちやんの家の前に行つたのに、どうして眞木達に逢は無かつたらう。お琴ちやんの家だけを訪ねて行つたと云ふ眞木が、お勢は怨めしい氣がした――

「眞木さん不良少年みたいね」
その言葉はお勢自身で少しも豫期仕無い言葉だつた。云つて仕舞つてお勢はすつかり慌てて仕舞つた。
「不良少年、誰が、眞木さんが」
お琴ちやんは、大きい瞳をきつと瞬ひてお勢を見上げた。そう訊かれるとお勢は益々困つた。お勢は必ずそうだと極めて云つた譯では無かつた。只自分が飽迄も信じて居た眞木が、そんなに大勢して夕方になつて、町を歩き廻るなんて事が、如何にも眞木らしく無い眞面目を缺いた行爲に思はれた。その感情が、不用意にそんな言葉になつた迄だが、其一面には、お琴ちやんに對する故も無い反抗と嫉妬も交じつてゐた。
「眞木さんがどうして不良少年なの」
お琴ちやんは意地惡く追及した。
「誰も眞木さん一人が不良少年つて云や仕無いわ」
「じや誰が不良少年なの、他人の事を無暗にそんな事云ふもんじや無いわよ」
お琴ちやんは大人振つた口調でそう云つて、眞木の潔白を示す言葉に苦しんだ。
「眞木さんなんかとても眞面目よ、そいで悧巧よ、眞木さんが不良少年なんて、そんな事は決して無いわ」
お勢は默つて、溢れそうな泪をじつと堪えて佇んだ。

七

八日は學校の始業式だつた。
皆なも早くから出席して居た。眞木も居た。教室の空氣も何時もより一段と澄んでゐるやうだつた。眞木も、今日は自分から友達に話し掛けたりして居た。眞木はお勢にも微笑ひ乍ら挨拶した。お勢は何かほつと安心した。
――初春氣分で工場内は、毎日何處と無く賑やかだつた。生徒達は又々毎日遊び出した。午前の休憩、晝食の休憩、午後の休憩、其等の休憩時を皆な遊んでも、まだまだ遊び足り無かつた。お琴ちやんは毎日機嫌が好かつた。
お琴ちやんは種々な品物を持つて來て自分の好きな友達に分配て遣つた。――けれどもお琴ちやんはお勢には少しも與れやうと仕無かつた。お勢も又、そんな物を貰つて、お琴ちやんに從いて行きたく無かつた。お琴ちやんに種々な物を貰ふ小杉や田中達は、喜んでお琴ちやんを女王樣にした。
お勢は、その樣子を遠くで見て知らぬ振をして居た。お琴ちやんが何か物を取り出すと直ぐ其處を退いた。
そして段々に、お勢はお琴ちやんから離れて行つた。
「お勢ちやん、どうしたの、厭に働くんだねえ」
大人の女工達がそう云つて不審がる程お勢は遊ば無くなつた。

暗い淋しい、永い冬だつた。
最初の内は休憩時間になると誰かしら迎ひに來る者もあつたが、それも終ひには來無くなつて、お勢は本當の一人になつて仕舞つた。勿論、學校の往復や工場の行き歸りに、お琴ちやんと一緒になる事は滅多に無くなつた。お勢が自分から離れても、お琴ちやんは平氣だつた。お琴ちやんには友達が多數あつた。眞木も山内も、小杉も田中も其他に幾人も、皆なお琴ちやんの友達だつた。

矢張りお勢は寂しかつた。食堂に居て一人でお辯當を喰べて居る時など、元氣の好い面白さうな皆の聲を聽くと、自分も出て行つて仲間に這入らうかとも考へた。だが、お琴ちやんが居る。お琴ちやんが威張つて居る。さう思ふとお勢は寂しいのも我慢した。

――三月に這入ると學年末の試驗が始まつた。六年級の者は急に活氣付いた。彼等は四月になつて學校が終へると一人前の職工になれるのだつた。成績順の噂さが持ち出された。一番にはお勢が推された。眞木は成績が好くても途中から入學したのだから二番だらうと云ふ事になつた。

お勢と眞木は殆ど差別無しの成績だつた。皆の噂通り眞木が途中から入學したと云ふ理由で二番になれば、自分が一番になれる事は、お勢自身にも確實に豫想された。

だがお勢は、眞木が一番で自分が二番でも好いと思つた。眞木と自分が同位の成績で、只單に眞木が途中入學の爲めに、一番を得られ無いならば、自分は喜んで一番を眞木に讓ると思つた。

―先生が眞木さんを一番にして與れると好い。――お勢は、秘かにさうなる事を希つた。だが――眞木さんが二番じや可哀そうよ。お勢ちやんより眞木さんの方がずつと好く出來るのに――、さう云つてお琴ちやんが話したと云ふ事を聽くと、お勢は又自分の期待して居た事を、お琴ちやんに裏切られたやうに口惜しかつた。

―お琴ちやんがさう云つてるのなら、あたしは決して一番を下るまい。――お勢はさう決心して、一心に一番を目指して勉强した。

「お勢ちやん、あんた學校を卒業したらどうするの」

此頃は用事の他に口を利かぬお琴ちやんが、珍らしくお勢に話し掛けた。

「どうするつて何を」

お勢は、お琴ちやんの云ふ意味が解ら無かつた。

「田中さんはね、學校が終つたら給仕に行くんですつて、此んな工場に居ても詰ら無いからつて、さう云つてたわ」

お勢はその話を、何か非常に悪い事のやうに聽いた。折角に學校を卒業させて貰つて、直ぐと他所に勤めるなんて事は、何か道理に外れてゐるやうで、お勢は心持好く聽け無かつた。

「だからあたしも、電話局に行かうかしらと思つてるの」

「お勢ちやんも行か無い」

お琴ちやんは一寸考へた後でお勢を誘つた。以前にも一度お琴ち

やんに勸められて、反對した事があつたのを思ひ出した。

「あたし解ら無いわ」

毎日煙草の粉を浴びて、脂臭くなつて居るよりも、袴を履いてお化粧をして、電話局に通ふ方が好さそうにも思へた。

「あたしは卒業したら直ぐ工場を辭めるわ」

お琴ちやんは電話局が如何に好いかを、種々と話して聴かせた。お琴ちやんの姉さんは電話局に勤めて居た。

八

試驗の終つた翌日だつた。お辨當を濟ましたお勢は、久振りで芝生に出て行つた。

南向きの廣場は好く陽が當つてゐた。四五人の大人連で鬼ごつこをして居る者も居た。皆なは繩飛びをして居た。お勢も皆の傍に寄つて行つて繩飛びの仲間に這入つた。そしてお琴ちやんの見え無いのに氣が付いた。

お琴ちやんは風邪を引いて、眞綿を頸に卷いて居た。元氣の無い顔で、食堂の窓下に日向ぼつこをして居た。其の傍に眞木と山内が一緒に本を讀んで居た。

お勢は、お琴ちやんの元氣の無い沈んだ顔を見ると、忽ち堪え切れぬ反感に襲はれて、默つて居られ無くなつた。持つて居た繩を放すとつかつかと、お琴ちやんの傍に寄つて行つた。

「お琴ちやん、繩飛びに這入ら無い」

「厭ッ」お琴ちやんは素氣無く外方を向いた。

「どうして、好いじや無いの」

お勢は意地に掛つてお琴ちやんを引き出したかつた。

「厭よ、あたし厭よ」

お琴ちやんは白い眼を上げて、體を曲らして邪慳に叫んだ。

「およしよ、山邊君」

低い聲だつた。お勢ははつとして眞木を振返つた。眞木の眞黒な澄んだ瞳がじつと視た。瞬間、お勢は何か口走つて其處を飛退いた。そしてぴよんぴよん跳ね乍ら田中の傍に走つて行くと、田中の持つて居る繩の片端を掴んでうんと引張つた。

不意を打たれた田中は、危ふく踏止つてお勢に對抗つた。

「よしッ」

二人は芝生の上で綱引きのやうに身構えた。皆なは呆れてお勢を見て居た。

「危いッ」

誰かが叫んだ時、お勢は繩の切端を持つて仰向きに倒れて居た。はつとして眼を開くと、高い々々紺青の空に、眞晝のお天陽さまが、少さくくるくる廻つてゐた。

「お天陽さま、お天陽さま、あたしは惡い子供で御座います」

目尻の両側に、熱い泪が幾筋も傳つた。誰かが起しに來たが、お

勢は起き無かつた。汽笛が鳴つて皆な起ち上つた。

「あんまり騒いだから泪が出ちまつた」

裾の埃を拂ひ乍ら、お勢は誰にでも無く獨言ちた。

傍を通つた子がにつと笑つて行つた。

眞木もお琴ちやんも、もう窓の下に居無かつた。

其日學校でお勢は、何時ものやうに大きな聲で、本を讀む事が出來なかつた。晝間の事を思ひ返して、眞木に逢ふのが羞耻しかつた。先生の聲が半分も耳に這入ら無かつた。お勢は眞木が如何にか自分を惡く思つて居るだらうと悲しかつた。だが、どうにも成ら無い事だつた。お勢は誰に逢ふのも厭になつた。

成績發表の結果は、眞木もお勢も同位だつた。お琴ちやんは、眞木が總代に出ると聽いて、自分の事のやうに喜んだ。お勢も嬉しかつた。これで漸く眞木に對して心が濟むやうな氣がした。

卒業式は三月二十四日だつた。學校は二十二日迄で休暇になつた。其夜は春になつて初めての大雪だつた。

二十三日の午後、學校からお勢に呼出しが來た。

「ほうら、優等生だよ」周圍の者がそう云つて冷やかした。

嬉しいやうな、羞耻しいやうな不安で、お勢は顔を眞赤にした。

冷たい雪風の吹く外廊下を、火照つた頰でお勢はどんどん走つた。素晴しい雪晴れで、雨垂れの音が其處此處で、靜寂かに聞えた。

職員室に行く曲角の所に、兩手をズボンに突込んだ眞木が、一人でしよんぼり立つて居た。お勢は眞木を見ると一寸立止つた。

人の氣勢で振返つた眞木は、お勢を見ると靜かに微笑した。

「先生に呼ばれた―」

「ええ、呼ばれたの、眞木さんも」

「ええ

斜めになつた太陽が、二人を微温く照らしてゐた。

「お琴ちやんは電話局に行くつて、君は行か無いの、山邊君」

餘りに意外な質問でお勢は驚いた。

「あたしは、あたしは行か無いの」

全身に眞木の瞳を感じてお勢は俯向いた。

「ほら雪が落ちるよ、ほらッ」

眞木に引張られて、お勢が氣が付くと、屋根の容解た雪が、音を立ててお勢の足元に滑り落ちた。

―眞木さんはあたしの事を憎んで居や仕無かつた。――

お勢は泪を一杯溜めた眼で眞木に微笑した。眞木が親しくお勢に話し掛けた事は、今日が始めてと云つて好い位だつた。誰に對しても沈默つて居る眞木ではあつたけれど、お勢には殊に他所々々しかつた。偶時に二人の視線が逢ふやうな事があると、慌てて眞木はそれを外した。そうした眞木の解せ無い態度を、お勢は今日迄寂しく眺めて來たのだつた。

―今日こそお琴ちやんに勝つた。――お勢は判然りと心に肯定い

た。

卒業式が濟んで二三日すると田中が辭めた。お琴ちやんは電話局にも行か無かつた。人が變つたやうに柔順しく工場に通つた。

學校時代の友達も、卒業してからは課の運ふ關係や何かで段々と離れ去つて仕舞つて、うら淋しい、急に大人になつたやうな日が續いた。櫻の花が、咲いて散つて、お花見の噂も漸く消へかけた頃、眞木が工場を辭めると云ふ噂を、お勢は食堂で聽いた。

「お琴ちやん、眞木さんが工場を辭めるつて本當」

恐ろしい事を確めるやうにお琴ちやんに說いた。

「本當よ」

お琴ちやんは淋しさうに、餘り口を利か無かつた。夜店の明るい燈火も、今夜は二人を引止め無かつた。

九

「眞木さんて云ふ子が小谷さんの所に來て居たよ」

組長さんに敎へられてお勢は食堂を飛び出した。そして一散に三階の小谷さんの机の所に行つて見たが、誰も居無かつた。

何處へ行つたんだらう。――お勢は廣い作業所の中を見廻して、ハアハアと息を切らしながら又階段を馳け降りると食堂の方から來る小谷さんを見付けた。

小谷さんは眞木と並んで何か話し乍ら此方へ向かつて來た。

「眞木さん」

呼ばうとしてお勢は止まつた。

後から追つて來たお琴ちやんが、眞木の傍に來て並んだ。

三人が近付いて來ると、お勢は急いで階段の下の洗面室に隱れた。此處でお琴ちやんに逢ふのが厭だつた。

「眞木さんなら何處へ行つても出世するわね、伯母さん」

お琴ちやんの甘えた聲を聽き乍ら、お勢はじつと立つて居た。

「何處へでも行くと好いわ、皆んな皆んな行くと好いわ」

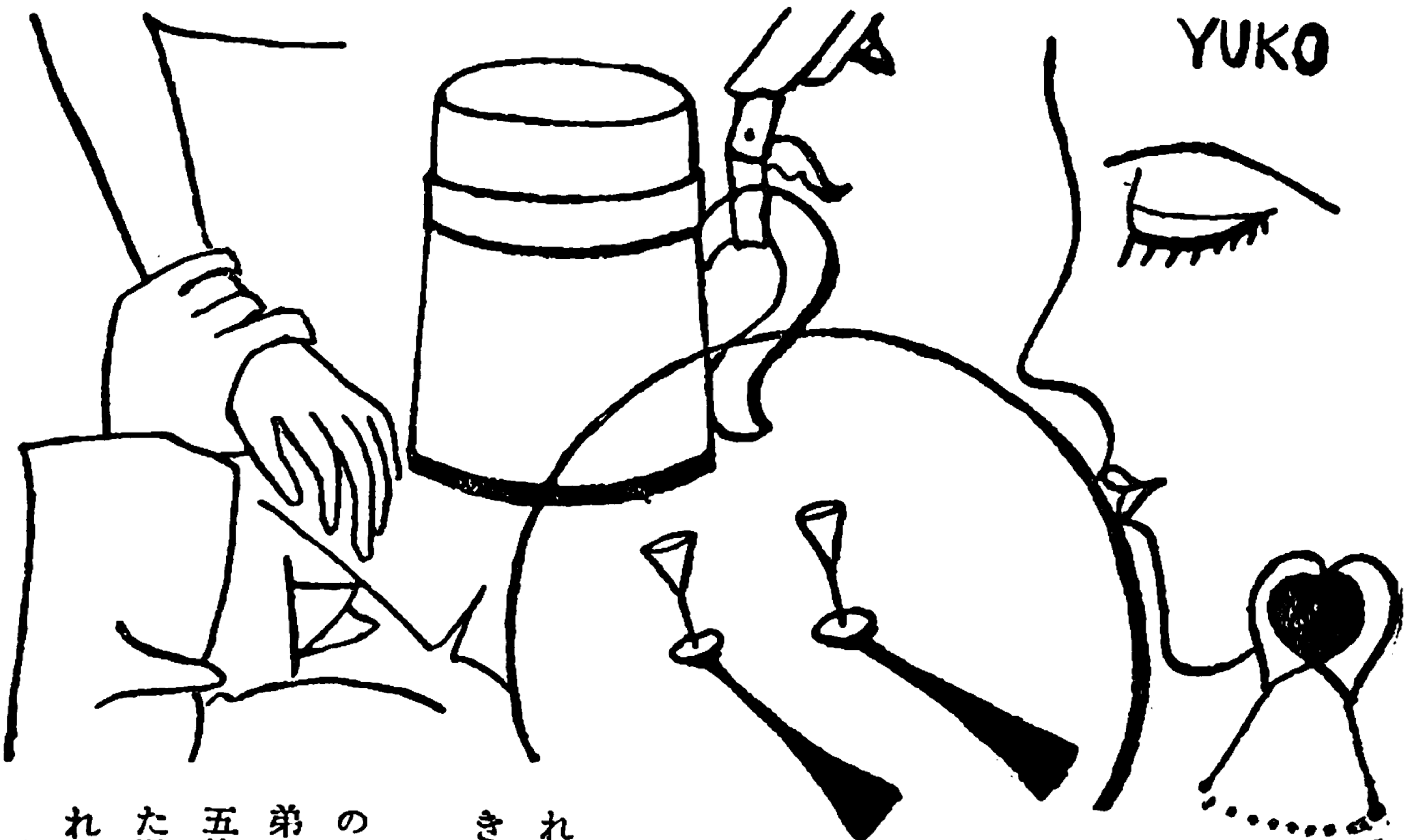
お勢は心の內でそんな事を叫び乍ら、遣り過した三人の後を追つた。小谷さんを眞中にして三人は、受付から櫻並木の坂道を、通用門の方へ出て行つた。

詰襟の學生服を着た眞木の横顏が、五月の太陽に照らされて、一層美くしく輝いて見えた。坂を降つた所で眞木は幾度も叩頭をした。お琴ちやんは小谷さんのスカートに取着いて何か云つて居た。

三人は又步き出した。お勢は見付らぬやうに後を從いて行つて、櫻の木蔭から三人の後姿をじつと凝めて居た。

通用門の所で立止つた三人は、其處で又幾度も叩頭をした。眞木は帽子を手に持つた儘で幾度も、振返り乍ら門を出て行つた。

眞木の姿が門の外に消へて仕舞ふと、お勢はほつと溜息を吐いた。熱い泪が幾筋も頰に流れた。何か非常に大切な、一生取返しの出來無い大事な物を失くしたやうな淋しさだつた。



彼女の戀物語

眞杉靜枝

一

お龍と云ふ、おせつかいなおばさんさへ此の世にゐなかつたら、此の戀物語は生れなかつたにちがひない。その頃十七だつた美那子には、たゞ石本さんが非常に好きだと、お龍おばさんに打ちあける無邪氣さがあつたばかりだ。

月の無い或る夜、大晦日に近くて、町では福引が初まつてゐたので、それを外出の口實にする事を、美那子は、お龍おばさんに敎へられた。夜の彼女の外出には、弟がついて出る習慣であつたが、これは手も無くごまかせた。卽ち、彼女と弟とが五枚づゝ母にもらつた福引札を家を出ると直ぐ、そつくり弟に持たせて、少し有難た過ぎると云ふ顏をしてゐる弟を、人が列を作つた福引場のさくの中に押入れ、それから、彼女は一丁程はなれたおばさんの家へかけ出した。

石本邸の高い塀に添つて一と曲りし、その塀のはづれに小さくくつついてゐるお

龍おばさんの家の格子戸の前迄、息の切れる程走つた。その格子の前に、おばさんは赤ん坊を抱き、出て立つてゐた。

『あゝくたびれちやつた。走つて來て。』彼女は先づそう云つた。

『うまくお出になれましたの？　そして弟さんは？』と訊くおばさんの聲が割に低く緊張して、彼女の燥やいでゐる氣持を壓した。

　おばさんの家の、奥の八疊の間にはなぜか灯がついてゐなかつた。其黒ずんだ疊の上に彼女は座らされた。明け放した隣りの部屋の灯でその八疊が茶の間らしく、長火鉢なぞがあるのを見てとれた。

『今晩は、――何だへ？　用事つてのは。』

　格子を引き開ける音と一緒に、石本さんの快活な聲がした。

『おしるこです。わざ〳〵お呼びしてすみません。』おばさんは直ぐ立ち上つた。石本さんの高い姿が、灯を後ろにして、閾のところに立つた時、彼女はお頭儀をした。

『宮川さんの――』おばさんは彼女を紹介した。

『あッそうか。――何あんだ』。と口走り、石本さんはひよいと頭に手をやつたが、直ぐにがたりと座つて、丁寧に彼女に答禮した。

　おばさんは、二人におしるこを出した。二人共妙に固くなつてゐておばさんが一人で何か喋つてゐたが、やがて、家中におばさんがゐなくなつた事を、二人は感付いた。で一層こわばつて仕舞つた。

『どうして、學校を途中で止めたのです？』

　石本さんはそんな事を低い聲できいたりした。

『面白く御座いませんの。お家にゐたつて詰まらないのですけど』

彼女は齢の割に巧者な口の利き方をした。

『將來に、何か目的と云ふやうなものでも、あるんですか？』と、角張つて石本さんは訊くのだ。

『あるにはありますけど、――駄目ですの私、結婚しそうなんですから。』

『ほを――』意外、と云ふ調子の聲をあげた。結婚を口に出すと同時に、彼女の心臓が急に暴れ出し、後に出る言葉を禦ぐ程だつた。

『結婚つて、いゝ事ぢや無いのですか』

　彼女はメンタルテストでもされてゐる時の樣にせい〳〵利口にみえる事を云をうとした。彼女の婚約者になつてゐる相手はどうしても彼女が愛する事の出來ない人で、それを悩んでゐると云つた。

　石本さんは、それはひどい間違ひだと、直ぐ彼女の氣持に同感し、どうかしてその結婚を止て貰う方が本當で、そうで無ければ、不幸は彼女許りで無く、相手の人も随分氣の毒な譯だと云つた。

『僕、お龍から、あなたのそんな婚約のある話なんかまるできかなかつた。』と不服そうに云つた。

『併し、その事は、僕が何とか云ふべき問題ぢや無いが、あなたの本當の強い意志一つで何とでもなる事ぢやないかと思ふ。』

『私どんな事があつても結婚しませんわ、あんな人とは、――家出しても。』

『併しよく自重しなけりやならない問題ですよ。――それより他に方法はないか――。』

石本さんは可なり熱してゐた。

無鐵砲に家出をすれば、反つて結果が惡くなる位の事は、彼女にも解つてゐたが、それを悟すやうな調子に何度も云ふのだつた。

暫くして、石本さんは不意にさつと、立ちあがつた。そして直ぐ彼女の脇にすれ／＼に座つた。でも、それ丈けで只硬くなりつゝ、自分を愛して呉れてゐるやうに、お龍がとりついだが本當か？　と云ふ事を、やゝ聲を震わせて訊ねた。彼女は默つてうなづいた。

『けれどね――』。石本さんは、亢奮を壓へつゝ云つた。自分を好きになつたのが原因で婚約者を嫌ひになつたのではないか、――若しさうであつたら、自分は彼女を憎む、と云つた。彼女は首を強く振つた。

『ぢやその人は、初めから嫌ひだつたの？』

彼女はうなづいた。

『ぢやなぜ今になる迄それを放つておいたの？　――それが僕はへんに思ふ。なぜ――』とつき詰め、併しふと氣をかへた風で、

『併し、男の場合とちがふのだらうなあ、女の人と云ふのは――』と獨語のやうに云つた。何かしら甘い氣持ちで、彼女は泣き度くなつた。此の時格子が開いておばさんが歸つてきた。石本さんは、急速に立ちあがりてれたやうにおばさんに、立つたまゝ何か云つた。

『もうお歸りなさつた方がいゝでせう、又と云ふ機會の爲めに』とおばさんは云つた。

で、彼女は、石本さんとおばさんに見送られつゝ玄關を出た。何か變に心が重たく、石本さんに會ふ前よりは餘程憂欝だつた。

二度目は、正月の三日の夜であつた。さんざめきが、家々の垣の中からもれてゐた。

おばさんの家の格子を、そろ／＼と開けると、いきなりそこへ顏を出したのが、石本さんだつたので、彼女は不意に打たれ、まごついて、一度現はした姿を又戶外へ引込めたりした。だが其の頃の石本さんの顏は、怒つてゞもゐるやうに眞劍であつた。

その日、お龍の夫である園丁が家にゐるので、奥の石本さん達の邸の方へ行く事になり、彼女がお龍おばさんの玄關を上ると、石本さんは直ぐ彼女のぬいだ草履を持ち、座敷を越へて裏庭へ出た。

燈籠に灯の無い靜かな白い溜池の横を、石本さんについて行くとやがて母家らしい家の木戶を開け、そこから廊下へあがつた。西洋館の方から、音樂がきこへて來た。矢張り暗い廊下を足音をしのばせつゝ、幾つかの部屋の前を過ぎ、或る障子の前で立ち止まつた。

『此處、晝間の僕の研究室です、電燈がありませんけれど――』。石本さんは囁いた。冷めたい疊の上に、二人は壁に背中をつけて並んで座つた。二人はとぎれ／＼に言葉を交はすほか、暗闇に向つてぢつとしてゐた。時々石本さんが煙草に火を點け、その都度石本さん

の高くそぎ立つた鼻が暗に浮き出た。
彼女は、自分の婚約者が、酒呑みで取りえと云へば、俗つぽい方の社交家であるばかりだと話した。
『そんな人との結婚が、あなたを幸福にすると兩親が本當に思つてゐるの？』
『思つてゐますのよ。つまり世渡りのうまい人物が、世の中の成功者だと、うちの人達は信じてゐますもの。――あの人その點では勝れてゐるでせう。屹度――』
石本さんは、それで判つたと云ふ風にうなづき、そして今の世の中では、そう云ふ考へ方も道理でない事も無い、と云ひ、で次ぎに少し苛立ち氣味に、一たい彼女はこれからどうする氣か、と云つた。彼女は急に苦しくなつた。
『僕はあなたのお役には屹度立ち得ないと思ふ。――それは此の間も云つた通りにね。此の問題は、あなたの意志一つが、解決の力でなくてはならないと思ふんです。』と力をこめて云つた彼女は譯が判らなくて泣き度くなつた。
『此の儘でゐれば、結婚させられて仕舞ふ許りですわ』
『どうも、おかしいですねあなたの云ふ事は、結婚つて、一たいさせられ得るものですか。するんでなくて、させられる、と云ふ結婚があるんですか。そんな事が、僕には解らないなあ。若し、本當にどこまでもあなたが我慢ならない相手だつたら、此處を押し切つて仕舞ふ決心が、あなたに一人でに出て來る筈だと思ひます。』
で、石本さんは、彼女を逋れて逋げる事を昨夜一寸考へたと云つた。併し、それには彼女の氣持を、もつとはつきり知りたい。そして二人が結婚するには、そんな卑怯な眞似でなくとも他に方法がありそうな事も考へ、それから又、あと一年で大學を終へる自身の事や叔父に當る此の石本家に對する恩義等を次ぎ〳〵と考へさせられるので、もう暫く、せめて一年の間、彼女の方の結婚を伸ばす方法を取つてもらへたら、と云つた。彼女は、一々うなづいてゐたが、何故か、もう何も云ふ事が無かつた。
それから、尙數十分二人はぢつとしてゐた。すつかり喋つて仕舞つたあとの石本さんは、やゝ苛立つてゐるやうであつた。が、やがて、彼女は、石本さんの熱い呼吸が、フト彼女のほほにすれ〳〵に近寄つて來るのを感じた。が彼女は、まるで無智であつたので、ぢつとしてゐた。すると、突然石本さんは氣をかへ、さあつと顏を引き、あわてゝ襟を正したやうだつた。何事も無かつた。二人はやがて立ちあがつた。おばさんの家を出る時、石本さんもついて出た。
『さよなら』戸外へ出るなり、彼女はぴよこんとお辭儀を一つし、それからさつさと歩き出した。一丁程來て、明るい町にさしかゝつた時、後から聲がした。振り返へると、石本さんが、二間程後から其處迄見送つて來てゐた。
『此處でさよなら、氣を付けてゐらつしやい』で、彼女はその方へ

向き今一度お辭儀をすると、又さつさと振り返りもせずに歩いた。

二

三度目に石本さんを見た時、彼女は既に人妻であつた。彼女の結婚が、石本さんの事が兩親に知れた爲め、半年程早められ、その事に就いて、お龍おばさんや石本さんの方から、何一つ積極的な方法に出て來ない理由を、彼女は、判然とは知らなかつた。只、泣き乍らお嫁に行くのだ、と云ふ悲壯感で彼女は滿足し得る女であつた。美容術師が來る前日。髮を洗つた彼女はフト出來心で、七寸ばかり髮毛を切り、それを紙包みにして、お龍おばさんに送り、石本さんに渡してもらふ事を頼んだ。それで彼女らしく、石本さんに對する氣持はすんでゐた。

結婚後の四日目の夜であつた。若夫婦の爲めに出來た新宅の石門の前で、醉つぱらひの暴れるらしいさわぎがきこへた。

戸外に月が美しく、街路樹のかげで笛を吹く人があつたりして、彼女はさつきから外へ出てみたくて仕方が無かつた、よいきつかけが出來たと云ふわけで、彼女はすぐ戸をあけ、表へかけ出した。

醉つぱらいは、丁度兩腕を抱へられ、ブランコのやうになりつゝ、連れて行かれるところであつた。その後ろ姿の羽織のがらと、濃く長い髮毛の具合ひ、それから怒鳴り立てゝゐる聲のどこかに、それが石本さんらしいと思つた。すると、次ぎにそれは石本さんだ。と彼女は思ひ込んだ。そう思ふ方が、彼女の心は滿足なのであつた。彼女の好きな泪が湧き出て來るので。――咽喉が破れそうな聲をあげて、石本さんは彼女に悲痛な贈りものをしてゐるやうに彼女は思つた。彼女は泣けた。嫌やでたまらない夫の顏をも思ひ浮べ、一層泪を雨のやうにした。丁度あつらへ向きな月の美しい夜で、廣い郊外の路を、石本さんたちの一と群れは、次第に驛の方へ遠ざかつて行つた。これで、石本さんに四度目に出會ふと云ふ偶然がありさへしなければ美那子が年を取つて、次第にセンチメンタルに飽き、社會の實相に觸れる人になるに從ひ、石本さんの面影も彼女の心から消されたままであつたらう。

四度目の會合迄に、それから十二年の年月が流れて居た。その時の美那子は、神戸の通りで、カフエーキングの女給をしてゐた。

氣の毒な年増女給である許りで無く、彼女はその朝、實費診療所で、肺尖カタルの警告を受け、セキを防ぐ爲め、首に酒の濕布をしてゐた。病氣と云ふ悲慘をさへぶつゝけられねば、思ひ切つて飛び込んだ此の女給生活に、彼女は大して まゐりはしないわけであつた。未來にも過去にも、大きな戸をおろした、此の女給生活を、彼女は唯一の避難所に選んだ。半年此處でかくれてゐれば、彼女の避難の目的は果せるわけであつた。半年の中には今監獄にゐる彼女に

とつての第三の夫が、出獄する、そして、彼女が行衛不明であれば仕方なくその息子と一緒に、故郷へでも引きあげるにちがひない。彼女はその夫と手を切り度いのであつた。彼女は、きよとんとした目を見張つたまゝ、いつも無感覺にカフエーの空氣を呼吸してゐた只、夜の發熱丈けが、彼女にとつての情けない刑罰であつた。

劇場と、飲食店で埋まつた此のK通りは、夕暮れ時分から、そろ〳〵活氣づいて來た。ざわめきが歩道を流れ、どの店からもレコードや、自動ピアノが、聲をあげ初める。そう云ふざわめきの夕暮れが同時に、彼女の脊骨に、氣味の悪い悪寒を持つて來た。若い女給たちは、此の一刻を、鏡に鼻をすり寄せ、クリームと粉白粉をぬり込むのだが、彼女は、ストオブの脇に、歯を噛み合せた。客が、次第に、店にたまつて來た。いつの間に、それがあの華々しい夜の酣になるのか、彼女は殆んど無中でからだを働かしてゐるうちに、毎夜きまつて、夜の華々しい酣時分がやつて來るのだ。

彼女は、頰をぽッと赤くして、全く上氣して仕舞つてゐた。時刻は丁度芝居がはねた時分なのだ。客は店のうちにぎつしりと席を占め、擴聲レコードの音樂と、客の唄ふ聲、酒番の野蠻な掛け聲、チヤリン〳〵と云ふフオークやナイフの喧騷。それに、店の中は、むつとする程、ストオブや人のいきれで温まつて、凡て、もやのやうな煙幕で包まれて仕舞ふ。

彼女は、此の時分になると、全くわけが判らなかつた。只逆上してゐた。四方の鏡に寫る彼女の顔は、決して、晝間のやうに苦勞のにぢみついた年增女ではなかつた。頰が花のやうに赤くひらいて、目が輝やいてゐた。彼女が若い女給達と同じ様に燥やいでも、此の場合、決してみつとも無いとは思へなかつた。はしやぐ方が、此の雰圍氣には調和した。彼女は小聲で唄を唄つたり、歩調を、ジヤズに合せたり、ビールを注ぎ乍ら、上半身をひねつたり、笑つたり、そして冗談で客をよろこばせたり、彼女は無中で調子に乘てゐた。此の時、確か、體温が三十八度位はあるにちがひなかつた。

こんな仕業が、彼女の病氣にどれ丈け害があるものかは、夜の二時頃になると、判るのだ。客は、卓々の上に、雜然とした彼女たちの取りかたづけの仕事を殘して、引きあげて了ひ、押し閉いた窓々から、たちこめた温氣を出して了ふと、その中で女給達は、つぶやくやうな唄聲を繰り返し乍ら、いま一ど働きとり片付けをやらねばならない。彼女はその時分、足許にベツトを引きづつて歩いてゐるやうな激しい疲勞で、打ち倒れそうになつた。腋下に冷たい汗を殘して、體温は又悪寒がする程引き下がつてゐた。鏡の中では、彼女の顔が、コヒの肌のやうに血の氣が無く、目が、死んだ魚のやうに、干いてつり上つてゐた。髮毛の上に、白くほこりが積つて、それをみると、彼女は聲を出して泣きたくなつた。——

こんな、彼女の生活の前に、石本さんが現はれたのだ。

最初、扉を押し開けて、どの客ものやうに其處に顔を出した石本

さんの、白く面長の顔を見た時、彼女の心が、フト何かばく然とした喜びに觸れた。非常に遠い、樂園のやうな記憶が、ぼんやり浮んだ。次ぎにそれが、はつきり石本さんだと氣付いた。

丁度店は酣時分で、何心無くぶらりと入つて來た石本さんと、その連れの二三人は、ぎつしり詰まつた店の入口に、暫く立つたまゝ、空席を見渡さねばならなかつた。

やがて、一番奥の家の窓ぎわがあいて、そこへ席についた。若いお菊と云ふ女給が、注文をきく番であつた。

彼女は、到當、そばへ寄つて聲をかける事にした。こんな意味ありげな偶然に、冷たんではゐられなくなつた。

だがおだやかで、落着いた幸福を持つてゐるらしい石本さんの、どつしりした服裝なぞを、近寄りつゝ見るうち、彼女は、何度も氣をくれがした。最後の氣をくれに、捨て鉢が、鞭をあてた。で、心よりも、ずつと蓮葉に、彼女の聲は飛び出して仕舞つた。

『石本さんでゐらつしやいませう。――しばらく。――十二年振り私、美那子。』

無理に作つた笑顏が、へんにゆがんでしまふのを感じた。すると、同時にこちらを振り向いた石本さんは、その刹那、大仰な驚聲と同時に、目を丸くした。彼女は、思はず兩手をひろげ、乙女のやうに顔をかくして仕舞つた程だ。石本さんは、へんな聲をあげて、ばねのやうに立ちあがつた。

「どうして此處に、――どうしてこんなところに――』興奮しつゝ、そんな事を口走しつた。彼女の咽喉元から、泣き笑ひのやうな聲が飛び出し、二三度無意識にお辭儀をしたりした。不思議な、まるで豫期しない感激に打たれた。石本さんの表情が、こんな所にゐる彼女をみて、全くうろたへる程驚いてゐるのだ。それが、彼女にとつては、餘りに豫期しない事だつた。他人と云つていゝ程度にしか、彼女は思つてゐなかつた。十二年間の彼女の境遇はよくなかつたので彼女は、荒りようとした中で、不意に慈愛に觸れたやうに、泣いて仕舞つた。

石本さんは、何から何迄訊かねばならないと云つた。彼女がこんな所にゐるのを、自分の責任でゞもあるやうに力んで云ふのだ。

『何も彼も、お話ししますから、何卒きいて下さい。屹度びつくりしてお仕舞ひになりませうけど――』

『只の遇然ぢや無いと思ひます。僕はこんな所へまるつきり來た事ないんで、それが不思議に入つてみる氣になつて――』と石本さんは云つた。その溫直らしい背廣や、ステッキの好みなぞを、彼女は溫かさに觸れるやうに、見直した。

『外へ出れない？。此處ぢや話も出來ないし。外を歩るこう。一と晩中歩いて、何も彼もを僕も話したいし、――』と云つた。

彼女の病氣にとつて、それは無理な註文である事は確かだが、なぜか彼女は斷り切れなかつた。十二時でひけにしてもらひ、外へ出

る事にした。

暗い空に向つて、屏風のやうな高い洋建築がそゝり立ち、その下の、凍てたアスハルトの歩道を、二人は濱の方に向つて歩いた。時々四ツ辻へ出ると、風が話の聲を塞ぎそうになつた。

以前の彼女の印象に比べ石本さんには、やゝ落着きがなかつた。彼女に出會つた驚きのせいかともみられたが、それよりも、彼女の方に十二年の經驗から落着きが出來過ぎたのかもしれなかつた。

『僕の方の事、兎も角先きに報告しますがね、平々凡々なのですよ』と云ひ、石本さんは東京で學校卒業後、直ぐ神戸の叔父の會社へ赴任し、今では割に重要な席を持ち、叔父の世話で妻を持ち、子供も二人ある、と云ふのであつた。

『隨分結構ね。落着いてゐらつして。私なんぞ、あれから、とてもあらゆる波亂を越へて仕舞ひましたわ。』

彼女は、好きで無かつたあの最初の夫を人間としての自覺を持つと同時に、離別しなければゐられなくなり決心して家出をした。

『あなたが仰言つたやうな、一人でにそうしなければゐられない氣持が、結婚してから初めて湧き出たんです。――馬鹿でしたわね、私本當に。』ところが、夫は恨みと未練で、おとなしく別れて異れるやうな人ではなかつた。彼女は、夫を置き去りにした不貞の罪名で、辯護士にとわれたり、法廷へ持ち出すとおどされ、或時は、夫自身が懷中にピストルをのぞかしてやつて來て、一緒に死ね、と迫つたりした、彼女は其の當時、どんなに泣き乍らも一方激しく強くならねばゐられなかつた。

次ぎに間も無く彼女は、哲學者を自認してゐる或る資産家の長男を愛した。年は若かつたが、彼には亡妻の殘した二人の子供があつた。間も無く二人は結婚した。半年程たつと、第二の夫は發狂した發狂の素質を充分持つた、氣の小さい人であつた。それからまる二年間、病院で彼女は氣狂ひの相手をした。自分自身さへ氣が狂ふかと時々思つた。おとなしい氣狂ひであるかはりに、絶へず心を苦惱させ何かに恐しがつてゐる狂つた夫の氣持を、しみ〲理解して看てゐた。その夫の死後、彼女の手に五萬圓のお金が、與へられた。

『それから、私ね思ひ切りいろんな出鱈目をして仕舞ひました。』思へば此の時彼女は第二の轉るはずみを重ねたわけだ。第一のあやまちが最初の夫との結婚だつたとすれば。――

五萬圓で雜誌を出し初め、家に若い左傾文士の居候なぞを幾人もおき、彼女自身、女王の生活が初まつた。

間も無く出會つたのが、今の夫であるAであつた。Aは、實に頭のいゝ、徹底した自由主義者で、世界を歩いて來た老紳士であつたが、當時は、K新聞の編輯長をして、獨身だつた。婦人をよろこばせる術をAは、委く知つてゐた。彼女の金を旅費にして、世界を放浪したい彼女の望みがAの氣輕な贊成で實現される事になり、Aは職を捨て、二人は東京から大阪迄の旅をしたのだ。それ丈けを半年

かゝつて。——ホテルの贅澤な酒が、Aを非常によろこばせ、Aが破目をはずすと、恐ろしい酒癖のある事を同時に彼女は發見せねばならなかつた。Aの貞操なぞ、南洋のゴリラにさへあたへられたものである事、故郷に、妻と、もう成年した息子もあり、そして、彼女がそれを知り、愛想をつかしかけると同時にそれを感付いたAは、ひどい嫉妬で彼女を殺そうとした。以後その恐しい生活が、四年も續いた。彼女は、幾度殺されかけたか知れない。そしてAは幾度酒亂で、留置場に宿を占めた事か知れない。金は勿論なくなつた。Aの書いたもの等、どこへ持つて行つても三文の値打ちも無かつた。Aのやりたがる金儲けは、昔Aが秘書を勤めてゐた事のある、只今政界の大立者の男爵の、裏面を持ち出して金にする位ひの事なのだ。彼女は益々おそろしくなつた。今丁度その生活に別れやうとする、きわどい所なのだ。——

『今、監獄にゐるのは、何で入つたの』石のやうに默つてきいてゐた石本さんは、怒つたやうな調子で、そうきいた。

『さあ何ですか。印署僞造とか云ふものらしい——』答へ乍ら彼女は、心の中がこだまする程、空虚になつてゐるのを感じた。石本さんを傷付けて仕舞つたのでは無いかと思つた。

二人は、さつきから、倉庫のやうな、建物と、建物の間に風をよけて、腰掛けてゐた。石本さんは、いつ迄も、じつと腑向いたまゝであつた。彼女の經驗が餘りにけがれてゐて、石本さんを、裏切つたのだと、彼女は思つた。

つひ、近くで、波の音がした。からだの調子が、いつもとちがひ、兩肩に疼くやうな惡寒がして、その癖、熱も大分あるやうだ。

出鱈目な過去を、清算した不快さから、彼女の心はいら〳〵した。併し、こんな時、最も強い立場を、人は見つけるものだ。彼女は過去の輕はづみに對するつぐないを、フト未來に向つて目算すると、同時に此處にかうしてゐる事が、不必要になつた。『つまらない事、おきかせして仕舞つて、ごめんなさい。私、何ですか恥しくなりましたわ。——隨分お氣持が惡かつたでせうね。——私これからだと思ひます。これから、全てのつぐないを出來るのだと思ひますの。——私、夫の方がすつかり片がついたら、又東京へ出て、今度は大眞面目に法科の夜學にでも行つて、女辯護士にでもならうと思ひます。もう歸りますわ。私、今朝醫者に、肺炎カタルと云はれてゐますのよ、此のセキ油斷なりませんわ。ですからもうお別れしませう。』と云つた。

すると、默つてゐた石本さんは、突然手を延ばし、すがるやうに、彼女の手を握つた。せき込んだ、低い聲で云つた。

『あんまりひどいんで、實際どうしていゝか判らなくなつた。——併し、これ丈けは確かに云へる。それ丈けの苦勞をあなたにさせたのは、皆僕が惡いんだ。確に——』

『まあ——』。彼女は驚いた。

が、今も、トランクの中に、彼女がお龍にことづけてよこした髮毛を大事に保存してゐる、と云ふ石本さんの言葉をきくと同時に、彼女は泣き聲をあげた。

『――何にしろ、あなたは、あの時、實に賴りない人だつたからねえ。』石本さんの聲はしみ〴〵してゐた。彼女が婚約者を嫌ひだ、と口に云ひつゝ、矢張り兩親の云ふ通り、そこへ行かうとしてゐる煮へ切らない態度が、腹立たしく、どうでもなれ、と云ふ氣で、默つてゐた、がいよ〳〵彼女が結婚したときいた時から、ひどくやけにならずにゐられなくなり、子供々々した彼女が、結婚を、何事かはつきりとは知らずに、不幸に身を落していつたのだと思ふと、可哀想になつたり、或は、あゝは云つても、婚約者を愛してゐたのかも知れないと思つて怒つて、みたりした、と云つた。

　彼女の胸にも、當時の事が、はつきり浮んで來た。

『馬鹿だつたのですわ。手のつけられない馬鹿だつたのですわ。つひ近頃まで。』

『僕が一緒に歩かうと思つて、お龍の家を出たのに、あの頃のあなたは、家の前からさつさと一人で行つて仕舞つて、僕がさよならと云つたら、振り向いて一寸お辭儀をした切りなんだ。――腹を立てたのかな？　とあとで思つた』

『無中だつたのですわ。――一人になるとあれで隨分激しく戀したりしてゐたくせに、お目にかゝると、まるで芝居でもやつてゐるやうに硬くなつてしまつて。――ほんと、あの時分の戀つて、どう云ふんでせう――』

『苦しいの？』やがて彼女のショールに埋めた顏を陥く樣にした。

『えゝ、少し熱があるので。』

『ぢや立とう。そして歸りませう。』彼女を抱へるやうにして立ちあがつた。さつきとは、違ふ路のやうだと思ひつゝ、彼女は、石本さんの一方の腕に背を抱へられ乍ら歩いた。少し、風の寒さがれた、家と家との間へ來ると、二人は默つたまゝ、腰かけて休息した。何かゞ、押し默つた二人を支配してゐるやうに、二人は肩と、肩とをしつかり組み合せて腰をおろした。次ぎに腰をおろす時には、石本さんは、彼女を自分のひざの上に抱いた。

『寒い！――』

『いゝえ』暫くじつと溫め合ふと、又立ちあがつた。次ぎに腰かけた時も、そうした。立ち上る時もなる丈け抱へ合つたまゝ立つた。

　何度目かに立ちあがつた時だつた。立つと直ぐ歩き出すかはりに、石本さんは突然彼女を佝ほ、強く抱きしめた。それから唇を……

　彼女は息が詰まりさうだつた。石本さんは無中になつた。やがて彼女の肩に顏をおしつけたりした。そして又今の場所にどつかりと腰をおろして仕舞ひ、彼女をそのひざの上に引き寄せた。そして、泣き度い、泣き度いともがくやうに云つた。

　彼女は、この出來事は夢以外では無いと思つた。石本さんの狂ほ

しい興奮が悲しかつた。十二年目に叶つた戀だと云つて、石本さんは泣くのだ。――もうはなれない。はなれない。――そんな事を何度も云つた。彼女も泣いた。――

朝は、薄紫の霧の上で、空が、インクのやうな色になる。牛乳屋の車と、人のしわぶき、大地を打つ人の地下足袋の音なぞが、どこからともなく起つて來る。

彼女は、そんな時分に、キングの扉の前迄石本さんに送られて歸つた。

彼女に、病氣と云ふ苦手さへ課せられなければ、石本さんとの間を、これ以上の深みにすり込ませるわけではなかつた。

彼女を入院させ、お金もあたへ、そして毎日見舞に來て呉れる石本さんはなぜか親切過ぎて物足りなかつた。一途で、善良で、輕薄にみえた。併し、退院した日に、二人は全く深入りして仕舞つた。

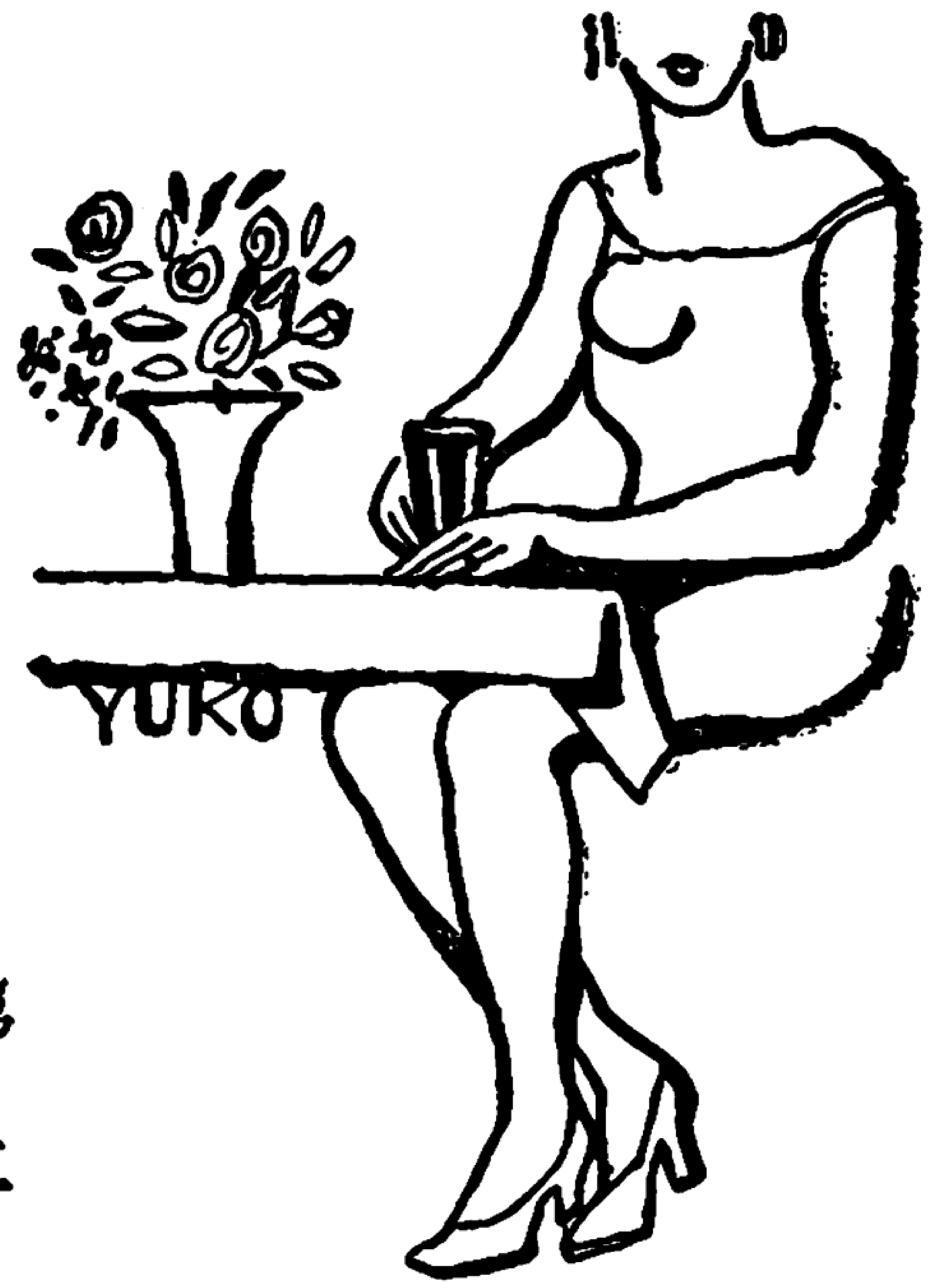
すると又その事が、石本さんを、氣狂ひの程興奮させずにはおかなかつた。彼女は、どつしりと落着いて、二人の關係を意義立てゝ行くと云ふやうな事の出來ない石本さんの、ふんべつのない態度が、情けなかつた。

直ぐにも、妻や子供、そして生活の方の位置と云ふやうなもの迄、投げ出して仕舞つて、彼女との愛に生きやうと云ふのであつた。

そんな事を云つて力んでゐる石本さんの顔が、明日にも又別の事を云ひ出す事を、彼女はどうしても豫期させられてならなかつた。明日になれば、必ず彼女が豫期した通りの言葉を、いかにも、大發見のやうに、そして此の事件は、いかにも、彼女一人が大惡人であつた爲めに出來あがつた。と云ふ風に悟つた顔をして云ひ出すにちがひない。妻や子供を捨てると云ふ事が、どんな悲劇であるかを、石本さんは、明日になつて初めて知るのだ。誰れかの口から、生活を棒に振つた女に溺れると云ふ事が、どれ丈け輕るはづみであるかをきかされ、あらためて、彼女の顔を、今更のやうに、魔女をでも見直すやうに、戰慄して見直すのだ。暫くたつと、あの石本さんの顔や言葉がどんなに變る事だらう。

彼女の心から、冷めたい笑ひがにぢみ出た。彼女は、すぐに、杖をとりあげた。間違ひの無い、絶對に嘘をつかない確かな頼りになる杖を、彼女は十二年の經驗から發見してゐた。それは、近頃かい込んだ、彼女の書籍だつた。彼女に近いうちに働き場所をかへて、石本さんも、自分も健康になる立場をみつけやうと思つた。

『しつかりした自個を持つためには、もうかけ足をせねばならない程、私はいゝ齢をしてゐます。女辯護士の試驗なら、私うまく受けられると思ひます。私の經驗から女辯護士の仕事には非常な興味がありますのよ』。落着いて、石本さんに、そう切り出そうと思つた。



みちづれ（つゞき）

ヴイクトオル・マルゲリット作
望月百合子譯

第二章——四

『えゝ、私にもそれは分りますわ！　だから困るんです…あの人を悲しませることを思ふと、私は誰よりも強くそれを苦しいと思ひます。だつてどうもしようがないんですもの。私はあの人に何にも約束なんかしなかつたんですもの。寧ろ、私達が知り合つてからといふもの、いつでも、私は結婚はしないつてはつきり宣言して來たんです。法律はあんまり惡く作られすぎてゐますもの』

『貴方達は一緒に住んでゐるんだし、子供はあの人のでもあるんだから、それでよささうなもんだのにね！』

『それなんです。子供があの人のでもあるつていふことが問題なんです！　私は出産前に、その問題に觸れなければならないと思ふと心配で仕方がないんです…私は毎日その問題を引き延してゐるんです。だけどあの人はどうしたつてそれだけは諦めなければなりません…！』

『それはまたどうしたと云ふんです？氣にかゝるぢやないか…』

マドモアゼル・アルデイは心臓に手を當てて蒼白になつた。

アニツクはやさしく彼女を見た。

『私は商賣のおかげで、自由結婚であつても私達を束縛するこの法律をよく知つてゐます！　まあ、きいて下さい。私生兒保護に關する法律です。だつて法律が一度、私生兒を保護するとなれば、それは勿論母親に對してです！…第一條…おゝ！　私はそれを暗記してゐます。『最初に認知したものが親權を持つであらう。そして同時に父母が認知した場合は父親のみが親權を持つ』です。

『父親だけが？』

『えゝ』

『父親だけがね！　それで分つた！…だが一寸待つておくれ。ノートに書くから…私がいま材料を集めてゐる『女人生活の實際的

法律』といふ小さな本のためにね。私達の法律に對する無智は全く恐ろしいよ！　私がこの通り無智なんだもの！　日常使はれてゐる法律こそ、第一に多くの無駄なものの代りに、學校で敎えなければならないことだもの！……えゝと？　私生見保護に……。　あゝさう。何時發布された？……』

『一九〇七年七月二日。』

『ありがたう…で、若しあんたが子供を自分の思ふまゝに育てる權利を保つてゐたいとすれば…』

『どうしてもアメデエに、子供の認知を私の後でしてくれるやうに賴まなければならないんです』

『あの人は決してそんなことには同意しないだらうよ』

『しますとも』

『さう思ふかね？』

『だつてそれを私に拒絶することは出來ないんです。私の子供達の敎育を私の自由にすることが出來るためにこそ、私は結婚しないんですもの！……』

『だけどそんなことをすると今度はあの人が拒絶するかも知れないと私は思ふよ。考へて御覽。悲しみの餘り、侮辱に堪え切れなくて、男が、父親が、まつさきに自分の權利を拒否するかも知れないぢやないか。……さうしたら世間の風習は法律程に物を云ふよ！……役場に行つて父親不明と書き入れることだつてあの人には出來るんだからね』

『あの人は私が認知した翌日認知するでせう』

『考へて御覽、そんな讓步が！……あんたは出來ないことを要求してゐるよ。そりやあんまり殘酷だよ』

『だつて、貴女はこの解放のためにこそ一生を犧牲にして努力なさつていらしたんぢやありませんか！　貴女は獨身で通していらして、それを實行なさらうとはしなかつたんですけど、私は、貴女の魂の娘である私は、その爭鬪がどんなに殘酷であつても、實行しなければならないぢやありませんか？』

『それはさうよ。だが何んて辛棒强いんだらう！　だがアメデエだつて、さつき云つたやうにしようとすれば出來るんだよ。あの人だつてあんたと同じやうに……』

『それや分つてゐます。だけど私の愛するアメデエにはそんな疑ひをかける必要はありません。こんな事は不公平な過誤に對する正しい償ひなんですもの。あゝ！　若しあの人を愛する女がたとへあの人に對してでも、自分を防禦しなければならないとしたら、それも運命だと思つてくれるでせう……ねえさうぢやありませんか？』

　マドモアゼル・アルデイは靑い美しい眼でやさしくアニックをみつめた。その淸らかな眼はたゞ疑問しか表現できないのを悲しむやうにまたゝいてゐた。

『だけど、』とアニックは溜息を吐いた。『まだそれまでには間がありますわ。まだ五ケ月は……それでは！……』

『あんまり苦しまないやうにしておいでよ。幸福といふものはめつたにない植物だからね！……結局、幸福といふものは、結婚でも、自由結合でもないと私は思ふよ……ブルウサ夫人の言はれたことはほんとだ。幸福といふものは私達自身によるものなのだよ……あんたは、あんた一人だけのものにしたいと思ふその子供のために苦しんでゐる。そしてその子供は生れもしない先からアメデエとあんたの仲を不和にしてゐる……また、モニックは、ブランシエとあのひ

との間をつないでゐるあんな立派な子供達にも拘らず……』
『あゝさうさう、モニックのことを話して下さい』
『あの人達の家庭の主な收入といふものは――ブランシエが財産を持つてゐるにしても――モニックがまだマドモアゼル・レルビエであつた時に經營し始めたシャルドン・ブルウといふ大きな裝飾工場から來てゐるんだよ……』
『で？』
『處がモニックは只その持主であるといふだけで、實際の經營を全部秘書のあのロシア人で、マドモアゼル……』
『チエルバクエフ……プロピノ男爵と結婚したクレエル・チエルバクエフでせう。あの人なら、ゼロノフがよく知つてゐますわ』
『その女が少しも仕事をかまわずに、いい加減な管理人なんかに任せつきりにしたものだから、シャルドン・ブルウは人氣があつたにも拘らず、倒れさうになつてゐるのさ……それでモニックは再びその經營を自分でしたいと思つてゐるんだけど、ブランシエが反對するんだよ。それでもつれてゐるのさ』
『ほらね、自分の自由を讓り渡すといふことがどんなに不都合だかお分りになるでせう！』
『おゝ！　でもあの人達は愛し合つてゐるんだから。モニックが讓歩するだらうよ』とマドモアゼル・アルデイは言つた。

第二章――五

　ボオルと彼は、取り散らした寢臺の上で、いまし抱擁の腕を解いた處だ。激しい爭鬪か、めまぐるしい旅行かの後のやうに、がつかりして仰向けに寢てゐたが、やがて彼は眼を開けて、彼女の手に觸つた。彼女はその接觸にぶるぶると身慄ひした。
　彼は亂れた美しい金髮の下に彼女のうつとりとした薔薇色の顏を見て微笑した。胴體はしつかりと張り切つた乳房や腹部をもり上らせてゐる。一本の脚を折り曲げ、他方の脚を伸した姿態は、腰の線と共に、腹部の貴とい計劃を、卽ち最近になつて目立つて來た母性を物語つてゐる。
　彼はあの深い眼で彼女をみつめた。その眼は感謝のために謙遜になつてゐる。彼女はその複雜な表情がたまらなく好きなので、不意に飛び起きて、彼の首に抱きついた。そして彼の肩に頸をすりつけて熱情的に言つた。
『私のもの！』
　併し今日は――心に屈托があるせいか、いつもよりづつと疲れてしまつた――ボオルは遠い處を見つめ乍ら何か思ひ耽つてゐる……彼は愛する者がいつでも、相手の不可思議な魂の動きが分らないときに必らず發する質問を機械的に發した。
『何を考へてゐるの？』
　併し彼女が答へるまでもなく、ロヂエは何も彼も分つてゐた。そして彼は慈愛といふものは一度獲得すればそれでいいものではなく不斷の努力に待たねばならない程、一時的なそして貴重なものであることを知つてゐた……。
　彼女は溜息を吐いた。すると彼はすぐ自分の下手な質問を悔いた彼には、いま、彼自身が歎いてゐるいま、どんな考へがボオルの心を一杯にしてゐるかが餘りによく分りすぎてゐるのに。これが幾

年かの別れの前の最後のランデエ・ヴウなのだ。餘儀ない別れ、もう少し經てば西と東に……永久にさよなら！と同じやうに辛らい『さよなら』だ。

彼女は横向きになつて、自分の生命のたつた一つの支柱にでもすがりつくやうに、全身的に彼にからみいつた。そして強いて自分を強くしようとして、わざと悲しい問題にはふれずに、神經質に言ひ出した。

『もう家へ歸らなければならないと思ふわ…私の家へ！……私達の可愛いヂネットに對する希望より外にはなんにもないあの牢獄…』

彼女は生れる子供が女の子であればいいと思つてゐた。そしてその子をヂイと呼びたいと思つてゐた。本能的に、彼女は掛物を取り除けた。裸體だ。彼等の愛撫の錯亂の中にあらゆるものが崩壞してしまふ時間以外の時は、姙娠してからの彼女は、カトリック敎の僞善からといふより、複雜なコケツトの感情から、彼等の戀愛の中にある羞恥を感じてゐた…そのデリカテスを彼女は無頓着にも、彼女の二重の僞瞞といふ不道德に結びつけてゐる。

ポオルが着物を脱ぐ時、帽子と共にかけたヴエールの下で、掛時計が銀鈴の音を靜寂の中に響かせる…四時…五時…六時…

『六時よ』と彼女は悲し氣に繰返へした。

『もう！』

彼女は伸びをした。

寢臺の緣に腰かけて、身仕度にかゝつた。そしてもう薄い寒冷紗のシユミイズを着た。白い肌にその薔薇色のシユミイズが餘りに美しく調和したので、まだ寢てゐたロヂエはもう一度彼女を引き寄せて、丸味を帶びた繻子のやうに柔らかな肩に接吻した。

『さあ、もうやめて！遲くなると困るから』

そしてすばしこく彼女は起き上つた。彼も起き上つた…忽ちいつもの單調な、つまらない生活が二人を捕えた。彼等は同時に着物をまとつた。かつてこんなにも着物の重味を辛らく感じたことはなかつたのに。そして同時に、言はなければならないことが迫つて來て、彼等の悲しみを益々強くする。

あらゆる意志と、あらゆる勇氣を振るつて、彼等は無駄な名殘りのために、避け難い出　前の、この最後のランデエ・ヴウを悲しいものにしてはならないと決心した。ロヂエよりもポオルの悲しみは深かつた。彼女がその悲しみを言葉に出すまいとすればする程、それは外に表はれた…何が彼に、こんなにも恐れられる旅行をさせるか？…勿論、彼はお產月の九月には歸つて來ると約束はしたが、彼女には地獄のやうな、危險な海や、辛らい自分の家や、腹黑い自分の夫しか見えなかつた…未來は一切暗く不確だ！

銀行家であると同時に、最新式の方法で開らかれた產業上の專門家でもあるロヂエ・ジユウヴエは——ポオルを知るづつと以前から——明治大帝時代にシヤバ一家に依つて大阪に起された仕事を復興させるために日本へ行かうと思つてゐた。その仕事が復興すれば、ジウヴエ及びシヤバ商會の爲に非常な販路を擴張することになるであらう。またこの電氣機具專問の商舘支店と同時に、ロヂエ・ジユウヴエは銀行關係の友人數名と協同して大阪に——巴里に本店を設置すると同時に——商業銀行の代理店を開らかうと思つてゐた。かうして貿易の手を擴げることが出來るだらうし、そこから——資本と正直と、巧妙なやり方とで——素晴らしい利益を上げることが出來

るであらう。勿論危険はある！大いに成功しようとすればそれは止むを得ないことではないか？‥‥

併し今まで計劃だけだつたものが俄かに進捗して具體化されてしまつた。‥‥別れ、さよなら！　忽ち、蜃氣樓は消え失せてしまつた。彼等は溝渠の前にゐた——底知れぬ深淵を、ポオルは思ひ直しても〳〵抑え切れぬいら〳〵しさの中で豫感してゐた。

『少し葡萄酒でも飲んだら？もうお終ひにしなければならない』と彼が言つた。

彼女はこの言葉がはつきりとした意味を持たずに彼女の内に降つてゆくのを聞いてゐた。‥‥だがこの言葉は酸のやうに彼女を焼いた‥‥『お終ひ‥‥お終ひ‥‥』彼女は果てしもなくひろがつてゐる海や、なつかしい顔を乘せて、遠ざかつてゆき、やがて消えてしまふ船を見た‥‥。

ロヂエは鏡の前でネクタイを結んでゐた。その鏡の中に悲しみにかき亂れた彼女の顔を見た。びつくりして彼女の傍に飛んで行つて抱きしめた。そして慰さめようとして言つた。

『僕達の仕合のためだもの！‥‥僕が貴女を信じてゐるやうに、貴女だつて僕を信じてゐるんだもの‥‥さうしなければならないんだから‥‥そして僕が歸つて來たら、貴女が離緣して‥‥』

『それや分つてます、御免なさい‥‥だつて自分でどうにもならない程悲しいんですもの』と彼女は涂切れ〳〵に言つた。

瞼に涙が玉を列らねた。彼女はしつかりしようと思つて、足で床を叩いた。

『何んてばかでせう。こんなことは何んにも言はないお約束だつたのに、それだのに‥‥』

彼女はどうかして感情を抑えようとして、小さなハンカチで眼を叩いてゐたが、すぐそれはぐつしより濡れてしまつた。彼女の頰は涙で鹽辛らく濡れてしまつた。ロヂエも悲しい顔をして小簞笥から大きなハンカチを出して、それをひろげて差出した。彼女はそれを受とり乍ら强ひて微笑しようとした。

『私、かうしてハンカチを半ダースも濡らしてしまふでせうよ。若しこんなにゴツ〳〵したのでなければ！これでは鼻の皮がすり剝けてしまひますわ！‥‥いつか私が差上げたのを下さればいいのに！』

『あれは僕のトランクの中に、貴女の香水と一緒に大切に藏つてあります‥‥そしてこゝに貴女の寫眞が、ほら！（彼は財布をひろげた）‥‥ね、貴女の心は僕から決して離れはしないんですよ』

彼は彼女の痛む眼に小さな接吻をして涙を止めた。

『貴女の思ひは、僕の思ひだ‥‥いつでも僕を力づけてくれるものは、貴女の心と、僕達の未來のヂイだ。貴女達は僕と一緒なんだ貴女達のために、僕は安心して出發する。そして貴女達のおかげで僕は淋しさに堪えられるんです‥‥貴女の面影は孤獨と退屈から僕を救つてくれるでせう』

彼女はかうつづいた。そして夫に對する不安も、絶えず夫に對して金を支拂はなければならないことすら忘れて言つた。

『貴方には、面白いことがおありになるでせう。‥‥旅行だの、お仕事だの‥‥それに男といふものは勇氣があるものだから！』

彼は非常な愛をこめて彼女をみつめた。それが餘りに優しかつたので彼女はすつかり感動してしまつた。併し彼女はその愛情に溢れた表情を通して、彼が内に一種の滿足を感じてゐることを覺つた。近い未來の、未知の行動、努力、冒險を思ふ滿足だ。彼女は俄かに

鋭い嫉妬に心臓を嚙まれるやうに感じた。

『私を決して忘れないつて、誓つて下さい！…そしてあの小さな機械人形のやうな女達…私はあのおとなしさうな樣子をして、眼の吊り上つた女達を恐れてゐます…』

彼女は『自分のもの』といふやうな眼で彼の全身を包んだ。彼はすらりとした背丈の顏に髯のない、やゝ長いオールバックにした金髮と、その下に露はな旺い精力と卒直とを示す額とを持つた非常な美男子だ。彼女はこの栗色の眼の光が、時に他の女の顏に注がれはすまいかと疑つた。彼は朗らかに笑つた。それで彼女はやつと安心した。彼女は、彼女自身何んにも咎められるものを持たないかのやうに、彼の誓ひをゆつくりと嚙みしめた。

『安心していらつしやいムスメサン！…僕にはもうどんな女のためにだつて少しの場所も殘つてはゐませんよ！貴女が此處に、此處に、此處に…』

彼は證據立てるやうな身振りで、次々に額と胸と、そして…もつと下の方を指した。彼女は笑ひ乍ら身ぶるいした。

『おかしな十字架のしるしだこと！…私だつて、貴方は私の血の中にゐらつしやるのよ。だからこそ私に貴方をお待ちしてゐる元氣があるんでせうよ…そして鬪ふ！…何故つて家ではあんな酷い男ですもの凡てがうまくゆかないだらうと私、それを恐れるのよ！』

『若し貴女が何か恐れてゐるんなら、僕、旅行を止めようか？…僕は一切を擲つても寧ろ…』

彼女はロヂエの顏に不安の色を見て、もつと大きな心配で彼を苦しめまいとして言つた。

いいえ！アニックと私でどうにかしますわ…心配がないではないんですけど、貴方がお歸りの頃は、私も自由になつてゐます…』

扉を開けるまでにもう數分間、そして彼女が先きに一人で出かける…そして彼等は各々の運命に向つて行くだらう。彼はその夜直ちにマルセイユ行の夜の急行に乘つて巴里を發つた。二人とも停車場のプラットホームの無頓着な雜踏の中で最後の別れの瞬間まで待つことが辛らかつたので、彼等は懷しい彼等の巢であるロヂエのアパルトで、秘かに、最後のベエゼエを交はすことにしたのだつた。

二人は默つてお互にみつめ合つてゐた。彼女は伸ばされた腕の中に身を埋めた。この最後の瞬間にも、他の時以上に、彼女の內に二重生活の意識があるわけではなく、只輕い心の本能が、同じやうな恐ろしい眞面目さで、快樂に利益にと飛びまわつてゐるのみだ。

『私の戀人、私の生命、每晚私にお手紙を書いて下さることを忘れてはいけませんよ。私もさうしますから…そして便船每に私の處に本當の日記が屆くやうに！…アニックの處に、ね？…マルセイユから電報を一つ、そして港々からも一つづゝ。それからお手紙を待つ間の氣安めに時に一つづゝ電報を下さい…』

彼は涙ぐんだ眼で彼女を見つめてゐた。そして彼女の言ふことに一々よろしいよろしいと答へた…その時、心を引き締めてゐるにも拘らず、彼がすゝり泣くばかりになつたのを見て、彼女は思はず彼を抱きしめた。最後の、短かい抱擁、最後の凝視、彼女の內に熱情的に彼を竅ひ込むと同時に、彼女は最後の聖餐の如く、彼にあらゆる熱情を投げつけた。そして急いで、外に出た。

階段に來て始めて、彼に別れて來たと！時に、あらゆる力を失つてしまつたかのやうに、足が萎えてしまふのを覺えた。彼女は何かの死塊が、虛空の中に降りてゆくやうに思つた…。

大阪に於けるメーデーを觀る

甲　賀　喜　夫

産業合理化の嵐に依る賃銀値下、時間延長臨時休業、工場閉鎖は全勞働者階級を飢餓線上に追ひやり紡績交通金屬等全產業的ゼネストの氣高まり、支配階級の×暴的彈壓と大山、堺、麻生、安部等ブルヂョアヂーの手先き社會民主々義者の裏切りの裡に第十一回メーデーは擧行された。

雨の五月一日、大阪の左翼勞働組合は嵐の豫想とそれに對する抗爭の決意を持つて居た丈に、降りしきる雨に意氣天を衝く計りだ。

大阪各勞働組合は早朝から各勞働組合本部又は中之島公園附近に集合して中之島公園グランドへ乘り込んだのだ。

東大阪の左翼勞働組合大阪全產足袋工、ゴム工、ブラシ工、皮革工、の五組合は當日上六公園に集合し、それより中之島へ繰り込む事になつて居たが、玉造署の彈壓に依つて中止を命ぜられ多數のビラ文書は押收された。

五團體協議會本部の大阪全產業勞働組合にも早朝中本署に依つてメーデー檄文の押收を受け五月一日は午前から殺氣立つて居た。

中之島公園には九時から各勞働團體が乘り込んで來る。朝鮮勞働は警戒線もものゝ數かはとの調子で突破して、ワッショ〱のデモで押し寄せて來た。

總同盟は鐘紡淀川工場爭議團を先頭に二千有餘名右翼らしく靜々とやつて來た。分裂騷ぎで動員競走に注目されて居る全國同盟も總同盟より二三百餘計動員して全部新調の組合旗を先頭に入場した。

アナ系二十名は淋しい乍らも元氣よく黑旗を守つて異彩を放つて居る。東京神戶橫濱とストライキ動搖に依つて、大阪の交通勞働者の城砦として衆望を一身に集めて居る自助會、厚司姿の農民組合もグランドを占領した。壹千有餘の官憲の嚴戒裡に一萬の大衆は午前十一時迄に殆ど出揃つた。

第一部隊、總聯合、第二部隊、全協、全產、左翼單獨勞働組合、第三部隊、總同盟、第四部隊、市電自助會其他交通電氣勞働組合、第五部隊、全農並アナ系、第六部隊、勞農黨系並左翼自由勞働者組合、第七部隊、組合聯合、朝鮮勞働組合等、第八部隊、向上會、海員組合等、第九部隊、全國同盟、第十部隊、純向上會の配列で各部隊長旗の下に出發を待つて居る。

左翼系の大阪全產を先頭に、全協自由勞働等は場內をデモで一週しては「左翼勞働組合萬歲!」を叫んでダラ幹への示威運動を開始する。アナ系は官憲の注意、中止も聽かず××田の森に黑旗立てゝを高唱して早くも十二三名の檢束者を出す、殘留數名も被檢束者と一緖に暴れ總檢を覺悟したが、返つて官憲に阻まれて引離されて仕舞つた。

全協大阪金屬、朝鮮勞働にはソビエートのピオニイルを偲ぶ少年軍が百餘名參加して小供乍らもそこらの右翼大人共の眞似の出來ない元氣さだつた。彼等の口から出る「未來は我等のものなるぞ!」に一種の凄味さえ加つて居た。

雨! は彌々降りしきる。

日本の勞働組合組織上の最大缺陷たる、婦人勞働者組織率の僅少の批難の裡に、鐘紡爭議團女工諸君を初めとし、綿紡、朝鮮勞働等二千に近い女性の參加者も心强い

正午全國農民組合の田邊君の開會の辭に次いで各團體より十名の挨拶者が演壇に起つ「ダラ幹〱〱〱反動〱〱〱〱」の彌次とデモで、勞農黨系を含む合流主義者の辯士で滿足に語れたものは、官憲の中止のないのにも關はらず一人も無かつた。

審判者は戰鬪的プロレタリアートだ! 十二時半第一部隊總聯合を先頭にデモは開始された。

天神橋の橋上から天王寺公園目掛けて一萬の大衆は南進する。

午後二時過ぎ最後の部隊純向上會が出發を了へた時には第一部隊は一里半先きの天王寺公園に先着して居た。

一九三〇年の十一回メーデーは昨年に比して闘爭的には行はれた。

だがダラ幹指導下の組合は田中特高課長の「メーデーはなごやかなお祭りだ。ある派の人達は階級對立は激化した。メーデーは一大闘爭日だと云ふがそんな風には了らしたくはない」の御命令を忠實に守つて葬式の行列を例年通りやつて居た。

然し左翼勞働組合は、集合、出發、行進、解散迄極力階級的に戰つた。全協の金属は幾度も××に襲はれ乍らも確り四ッに組んだ腕を離さず、ドロ靴で蹴る、頭髪をムシルの××に應えて戰ひ抜いた

小岩井、安島、仲橋等勞農黨ダラ幹と分裂迄して赤色勞働組合を死守した同組合は天王寺公園で勞農黨係のデモ隊に横車を押しに行き、あはや大衝突も豫想されたが勞農黨係の無氣力で事無く濟んだ

大阪全產業勞働組合も無產大衆黨ダラ幹を蹴飛ばした左翼勞働組合だが行進の途中ネバリ强くデモつて行く。それに反して無大系の組合は一人の參加者も無かつたのは皮肉だつた。遂に當日の檢束者は八十名を突破した。

午後三時半再び各勞働團體代表の演說が始まる。全產、自由勞働を除いては全部彌次り倒されて仕舞つた。

殊に鐘紡兵庫工場爭議指導組合總聯合は左右全大衆から其の裏切り的罷業解決を糺彈され、右翼中間派のプロレタリアートも具體的なダラ幹の正體を見る每に闘爭的勞働組合を信頼する熱意の現れて居るのがまざ〱浮んで居た。

雨の上つた午後四時に第十一回メーデーは了り一萬の參加者は再び會し戰ふ日を約して各〻の工場職場に急いだ。

第十一回メーデーを觀る十目十指は左翼勞働組合の動員力の增大(三、一五　四、一六、二、一二の無力を語る)急テンポの沒落第三期の資本主義を裏書きする婦人少年勞働者の參加者の增大を特徵とし勝利とするだらう。だが百パーセントの階級的見地からの五月一日大阪の大示威運動はその名に價ひしない失敗の一日だつた――

×暴的支配階級の產業合理化、街頭に溢るゝ百萬の失業者、××主義戰爭の準備、戰ふプロレタリア前衛の決死的英雄的闘爭等、尖鋭化せる階級對立の社會をシンボルするには餘りにも平和な、無氣力なグロテイック過ぎた。

官許メーデー、山案子メーデー葬式メーデーの域は依然として出ては居ない。

第十二回一九三一年度メーデーの日迄の一年間、大阪戰闘的プロレタリアートの決死的闘爭を通じてメーデーを市×戰へ！のスロガンの具體化を希望して擱筆する。

新潟縣下メーデー參觀

青山幸子

見付町(南蒲原郡)

午前十時三十分着の列車にて長岡、高田よりの參加者六〇〇名餘でありました。二十名の婦人隊が握り飯を片手にした姿は全く涙ぐましい位の勇敢さでした。十流の×旗、スローガンは小作權確立、家賃値下げ、太筆に書き流してそしてメーデー歌を高唱しました、警察隊は新潟及三條加茂からやつて來て激烈な警戒と彈壓を加へましたので參加者よりも見物人が怒り出して警官と小ぜり合の結果、四名檢束されてブタ箱行きに決りました。私は參觀しまして工場勞働婦人の智的水準の高いのに驚きました。私達農村の婦人は社會的知識では彼女達よりおくれてゐる事を感じました。けれどもまた女性のぎやくたいされた恐怖の歷史

より脱け切れない爲めに工場婦人も充分勇敢ではあつたとは云へませんでした。併し近き將來は必ず勇敢になります。最初のメーデーとしては他縣にない程盛大だと言つてゐます。參加團體は婦人の方としまして名古屋紡績新潟工場、製紙工場、新潟市街自動車車掌、織物工場の女工さん達でありました。

王泉町（中蒲原郡）

行進約一里主催者北日本農民組合で五〇名外に農家の中小農の娘や主婦連が乳呑子を背負つて萬丈の氣を吐きました。新潟の井上氏などの講演が晩にありました。

白根町（中蒲原郡）

四〇〇右左翼の大親玉が出場しまして一番氣勢があがりました。玉井さん小林さんを始め農民組合の功勞者達であります。

私の村も中蒲原郡です、中蒲原郡で二つの町でメーデーの皮切をやつたのは全く嬉う御座います。

京都メーデー傍觀記

岩田敏子

今年のメーデーには聯盟員一同が繰り出すつもりでゐたが本當に理解を持つてゐる人が少いので先づ私たち少數者でメーデー傍觀をした。

四條河原町に十一時に集つたが示威行列は中々來なかつた。

——十二時三十分——

來た!! 來た!!

私達は早や昂奮して、全身をゾツトした惡寒が走る。昂奮の惡寒である。

聴け萬國の勞働者
とゞろき渡るメーデーの

フレー〳〵……私は叫びたかつた。赤い組合旗を幾本も押し立てた威勢のよい一團が歌ひながら通りすぎた。

先頭に立つた××が私を見てニヤリと笑つて行つた。W××殿だナ——私もニヤリとして微笑をこらへる事が出來なかつた。

私達は行列が長ければ長い程うれしい。

まだある……まだある……

メーデーのスローガンを標した長旗が幾本も幾本も降りしきる雨を冐して跳つてゐる。

あまりにおとなしい一團が通過する時には「しつかり歌ひなさい今日は貴方々のみの日ではありませんか」と云つてやりたいし威勢の好い一團の時には手をふつてハンカチをふつて兩手を高くさしのべて應援したい。

フレ〳〵〳〵……と。——が私服制服の警官の爲にさへぎられて思ふ一萬分の一も表現出來ない。

又勞働者の人達も私共を輕蔑してゐるだらうと。私達はかこち合つた。

この同じ街路を本月十四日の祇園會には長いゾロ〳〵したおねりがあると云ふ。祇園會には赤飯をたいて御馳走をこしらへて更に電線を切つてまでの好意を示す市民もメーデー行列には甚だ冷淡である。

今見る藝妓の白い顔と勞働者の黑い顔のコントラスト同樣だ。

「やつぱり働く方の人が可哀想やわ、今でもええのやつたら傘を貸してやりたいくらいやわ」三四人の藝者の會話をきいた時、

まあアナタ方でもやつぱり……

私は手にしてゐた女人藝術のポスターを手づかみにして渡し度い衝動にかられた。

行列を見送つた私たちは又圓山公園へと彼等の後を送つた。そして彼らの後に立つて彼等の熱辯を聞くべく懸命だつた。

「見物の人はズット後へさがつて下さい」

私達はてもなく後へ追ひやられた。折から一層降りしきる雨の音に演説は皆目きこえない。大きくせのびをすれば偶にやつと彼らの顔が見える位だ。——それは眞赤に昂奮した顔だつた。又緊張した

顔だつた。
私は最後の勞働者萬歳！ の叫びに私の心の中で萬雷の如き拍手を送らざるを得なかつた。

東京メデーの一員

ふだん私はそんなに自分の寢ぼうを悔やんだ事はない。だがメーデーの朝ばかり朝寢は罪惡に思へた。圓たくの無代乘りをしてやうやく間に合つた荒木ビルの前には赤い組合旗が五六本立て合はされぞく／＼と少ない電車が勞働者を滿載してくる。その度にわき上る喚聲とメーデー歌。氣勢を上げろ！ 氣勢を上げろ！ 我れ等の鬪爭の日だ。芝公園のまわりは溢れるやうな勞働者の群れ、朗らかな、併し、鋭い笑聲が曇つた空の下に彈け散る。

さあ腕を組んで！ 私たちが入つたのは靑バス現業員組合の中だ。「ちよいと○○さんこんちは」私の右隣りは業平橋の車庫から來た剽輕な元氣者だ。片つぱしから知つた人を捉かまえて「今日は」をやつてゐる。「今日來ない人もあるのよ。口惜しいわ」そう云ひ乍ら、知つた人の乘つた靑バスが來ると忽ち「○○さん」と嬉し相に呼び掛けてしまう。左側は新宿車庫の中々勇敢な人だ。

芝公園の入口。お巡りの見本みたいに大きいのや小さいのがずらりとならんで張番してゐる。そこへまたトラックがやつて來る。と私の隣りは歡聲を上げた。

「あーらお巡りが檢束されてるわ」

どや／＼と飛びかゝつて身體檢査が始まる。私たちの少し先きで目星をつけられてゐたらしい二三人が忽ちぬかれて後の方へ引づつて行かれた。「お前いくつだ？」「○○さんを拔かせるつて事ないわ」と叫んで私の左側は腕を組んだまゝ飛びかゝつて行かうとする私は正式な組合員ぢやないのだ。調べられたら面倒だ。と思ふと、勢ひ込んで一緒に飛び掛つて行けないものが、反對に公園の中へ早く入つてしまおうとする。拔かれた人を勇敢に取り返しに行かれない氣持のたぢろぎが、私の背にスーと淋しいものを走らせた。だが拔かれた人達も間もなくうまくやつたとみえる。「私二十三で子供が三人あるつてやつたわよ」柄が小さいので未成年だと思はれた一人が蓮つぱに嘲笑つてゐる。

芝公園は一萬五千の勞働者で埋まつた。見渡す限り人の頭と赤い組合旗が翩翻とひるがへる。變に胸のつまるやうな感激を私はぐいと呑んだ。どこからともなくメーデー歌が沸き上り、やがて民衆の旗が歌はれる。昂奮した凄まじい人波がダダヾヾと雪崩れかゝつてくると一人や二人が何と思つてどうにもなるものではない。それつ！といふかけ聲たつた一つだ。慌てたお巡りの黑服が滅茶々々に列と列とを押し分ける。

ビール箱の上では五分間演說が初まつた。幾人目かには女の人も立つたらしいが、私達のところまでは見えも聞こえもせぬ。新宿車庫の人は私の腕をつかんだまゝ、ぐん／＼人を分けて前へ前へ。

「演說が聞えなくちやつまらないわ」とう／＼前線警戒を突破して演壇の柵の中まで入つてしまつた年寄りの愛宕署長が、耳の後へ手を當てがつて壇上と睨めつこしてゐる。「メーデーは吾々のお祭りぢやない。鬪爭の日だ。今日のデモは上野へ行かないで、日比谷の議會へ押しかけろ」「資本主義の番頭反動濱口內閣はわれ／＼の爲に何をしたか。失業と第二の××戰爭だ！ 吾々は……」慌てゝ「中止」をやつて間に合はないと、正服私服がバラ／＼と引づり下しに飛びかゝる。

十二時、示威行進が始まつた。私たちの靑バス現業員組合が先頭だ。私も靑バス從業員のつもりで一緒になつてよく知りもしない現業員の歌をうたつてゐるとメーデーの歌の外はいけないといふ傳令が來る。大門の曲り角近くへる來と赤いビラがパッと行列の上へ進

舞ひ上つた。大騒ぎで拾つてみると「メーデーを禁止せよ建國會」こんなものふみにじつて進め！「交番へ引ばられたらしいわ」といつてゐると、道の角だ。群衆の中から警戒の正服の後に、によきりと男の腕丈が出て、一摑の赤いビラがヒラ〱と私たちの上に散る。同じ建國會のビラだ。だがお巡りさんは澄まし込んで隊伍を整へた行列の監視に餘念がない。「そのビラ撒きをつかまへろ！」そんな事は云ふ丈野暮だ。昭和通りは一杯の群集だ。「○○さん」又やつてゐるのかと思ふと「あの人爭議の時の犠牲者よ」と群衆の一人を指さす。「あの人とてもしつかりしてたのよ」向うでは一生懸命で手を振つて應援してゐる。わざ〱トラックを運轉しながら行列の近くへ來るのもある。「○○さん」とみんな一齊に挨拶する。「隨分馘首られたのね」「○○さん」も辭職しろつて云はれてゐるんですつて。勿論思想の方よ」「元氣がないぞ！」と應援員がかけ廻る。みんなは又かれた咽喉をしぼつて唄ふ。私たちの直ぐ横についてた正服はつり込まれて口の中で一緒にメーデー歌を唄つてゐたお××さんよお腹の底までメーデー歌を唄つてごらんなさい。そうすると自分達の立場がはつきり判かつて來るから――。先頭の加減かメーデー歌丈が盛んに唄はれるがとてもおとなしい。上野の山へ入る所で、白い朝鮮服の婦人が四五人、盛んに應援して手を振つてゐるのが殊更らに目についた。

上野の集會場へ入つたのは三時半。こんなにきちんと豫定通り片付いて行くのが大衆の意志だらうか？「組合同盟は元氣がなくて駄目だね」水道の所で一人の勞働者が今日の司會者組合同盟の人を捉かまへて云つてゐる「そんな事あない」と對手は肩をそびやかした示威の間は平氣だつたが、互に組んだ腕を離すと忽ちふら〱だ。解散、凄まじい街頭デモが始まり相だつたので、皆後から駈出したが公園の入口で騎馬巡査にけ散らされて後片もない。私は急にびつこをひき出してしまつた。（素川）

青バス組合參加

旗、歌、旗、歌、人、續々とつめかけおしよせて來る勞働者の大群、廣い芝山内も見るまに一ぱいの人にうづめられる。演説がはじまつた。のびあがつてみる、見えない。耳をそばだてる。きこえない。ドド、、人波がおしたてる。波にのつて前へ、おされる度にその力を幾分利用して、前へ、いつの間にかみんな散々になつてるが隣の人とは堅く腕をくんだままだ。おまはりに前に出るなととめられる。時々聞える。人に蒸れてふらふらになる。人につかまつておしたほされる危險から逃れる。十二時。――第十一回メーデーの旗につづいて、青バス現業員組合が先登をきる。兩腕をくみ合はせて、大きな聲で勞働歌を歌ひながら、上野をめがけてのり出す沿道は見る人で一ぱいだ。感激を以て見る人。冷笑を以て見る人。ただ何の氣持もなく、見送る人。「有難いね、いやに見送り人がいるよ」「ブルジョアの馬鹿息子がみろよのんべんしやらりと見てらあ」「メーデーを何だと思つてやがんだい」實に元氣である。私はいつも元氣で元氣だなあと自分で思つてゐるが、青バスの人達も私に輪をかけた樣に元氣である。同じ樣な格好をして腕を組んで歌を歌ひながら、行列を作つて歩いていると、沿道に立つてゐる人達からくるかんじが普斷自分が、道を歩いてゐる時にすれちがふ時の氣持と全々違ふ、正直に云へばメーデーに參加した氣持の中にかすの樣に殘つていたしつくりしないうら恥かしさ。あいつは違ふ奴だぞ、腕をくんでる人達が、見てる人達がさう思はないかとくだらない氣くばり、どこか四國の人と一筋になり切れない心のいらだちが、しつかと分けへだてなくにぎつてくれる腕、ほがらかな氣持、元氣、かざ

り氣のないほんとの言葉、ほんとの親切、お腹の底から出てくる歌にけおとされて、いつか安心した純粋なものになつてるのを見出した時の嬉しさ。だまつて地面を見つめてみた。足。ほこりにまみれた足。足。いくつ續いてゐるだらう。百、二百、五百、八百、千、二萬、二萬五千、……アスファルトを蹴る足音、ヅヅヅと鈍重な・音をたてて、だが何といふ力強さだ。(小池)

ほんとの仲間

メーデーは見物するものではない。そうだ。遊び半分に熱狂するものではないのだ。だから私達もこの行列の中に飛びこむ事にした青バスの元氣な連中の中へ八時半規定の場所に集つた私達を、一面識もない私達を手をさしのべて迎へてくれた彼女達、私はうれしかつた。これが私達のほんとの友達なんだ。私は急に強くなつた様な氣がした。私と腕を組んだ元氣な人が實に嬉しそうに自分のまはりを見廻はしながら叫んだ。

「こゝにゐる人達みんなが、自分と同じ氣持でこゝへ集つて來たんだと思ふとうれしいわ」全くだいくらメーデー撲滅のビラをはらうと、そんなものでぶちこはされてしまふ様なものなら滅びてしまへ。體中の血は湧きたつた。腕を組んで芝公園を出るともう道には人垣が出來てゐる。私も入りたいなと云ふ顔や、何が面白いのかと云ふ顔や輕蔑した顔や、それぐ威壓された様に立ちつくしてゐる元氣な友達が云つた。「勿體ないなこんなに見送人があつて。こんなに送られるのは始めてだ。」

歩き出すと同時にメーデー歌を歌はずにはいられなかつた。ありつたけの聲を惜しまず出して叫びたかつた。途中で會ふ知つた顔の人はみんな手を振つてくれた。私達も心から手を振つた。上野へ近づくに従つて増々高らかに歌つた土堤に並んだ人達は萬歳を連發した。澤山の見物人の中に白い服の・朝鮮婦人がこれもまけずに手を振つてくれた。私達の友達は世界中にゐるのだ。二里の道を歌つたり走つたり、そして上野公園の廣場についた時、左程の疲れも覺えなかつた。唯群衆の力強さを今更の様に思つた。この力がこのまゝ街頭に流れ出したら、どんな事でも出來るに違ひない。私達は此の人達と腕を組んで歩いてゐる方が外のどんな事よりも、如何に心が輕くたのしい事であるかをはつきりと知つた。(熱田)

臨時紡績女工

とゝかくどうにかして行列に入りたい。入口が難關だと云ふので未成年の私は年をきかれてまごついては大變と『二十二。酉年。明治四十二年生。』を暗誦したがその必要もなくて難關も難なく通過。そこで腕をくんでゐた日本紡績の女工さん達と顔を見合せて、よかつたわねえ。「日本の勞働婦人もめざめてきたものでございますねえ二三年前まいりましたときは、婦人參加なんてほんとに少くなうございましたものねえ。」と女工さんの一人が芝公園内の廣場に集つて元氣のいゝ女の人達をみて私に述懐する。はげしいゼスチュアの演説がつゞく間に、私の持つてきたパンと、女工さん達が買つてきた一個金八錢也の組合同盟のおべんとう(梅干の入つた大きなおにぎり二つ)をみんなでむしやく。

途中兩側は人の垣。「いよおつ。御殿女中」派手な女事務員をみつけて、歌の合間に野次をとばす女工さん威勢がいゝ。

上野へ!へ! 上野上野の廣場へ入つたのが三時前。何かあつたらもらはうと思つて、バスの車掌さんに化けてゐるみんなの傍へとんで行くと、向ふから「おべんとうのこつてない!」(川瀬)

婦人彙報

▼私服にピストルを持たせる

最近警視廳では兇器使用規定を適用して、一警察に二十挺づゝ用意してあるモーゼル回轉式拳銃を私服巡査に携帶させ、正當防衛の程度で實彈を用ひてよいことにした。これは生活の逼迫と自覺とが、急激に鬪爭的な勞働者の多くを生み、警官の殉職が頻出した結果「事態に鑑み、職務の完全なるを期する」爲であるといふが、支配階級の走狗は遂に大つぴらに斬り捨て御免の免許を得たわけだ。

▼雲母の工場は職業病

工場の衞生設備に關しては各工場共に不完全なものが多く、警視廳工場課ではその對策を研究中であるが、最近東京市內外のマイカナイト(雲母)製造工場に特殊の職業性濕疹が發生し、八ケ工場百八十六名の職工中二十九名、既往症十四名が發見された。この濕疹は手先、手の甲前膊部等に發生、痒痛甚だしく、男工よりも女工がかゝりやすい。就業後一ケ月乃至六ケ月の間には大抵冒され、罹病率は十三パーセントに上つてゐるので、工場課では豫防法、手當法について工場に注意を發した。

▼三割減給の鐘紡の爭議

從業員三萬人に對し、三割の減給で不意打ちを喰はした日本一を誇る鐘ヶ淵紡績の爭議は各地の工場一齊に起つて會社に對抗したが會社の腰が強く會社は第一次第二次の解雇者を續々と發表して、容易に解決の模樣がなかつたが例によつて組合の指導者の分裂から殆んど慘敗に終り、最後まで最も勇敢に戰つた兵庫工場も調停者一任で一同就業する事になつた。

▼磐城炭坑突然休業す

從業員一千名を擁する磐城炭坑株式會社經營の茨城縣磯原町、重ノ內、雁ノ倉の炭坑は突然寢耳に水の休坑申渡しをした。同會社は經營難のため前に松岡町千代田、關口の兩炭坑をしめて專ら力を入れてゐたが、最近の不況で持ち堪えられず大日本大倉との合併問題も起つてゐたが、遂に重役の腹にはかへられぬとばかり、休坑を宣言した。同時に會社側では內四百名は松原町の筒井唯一氏が引受け殘りは他へ周旋すると稱してゐるが、この不況に前ぶれもなく一千名の從業員とその家族とを飢餓に瀕しさせて恬然たる資本家の惡辣振りは今更ら言葉がない。

▼議會で酒を禁ずるの議

といつても禁酒法案でも議するのかと思つたら大間違ひ、國民の代表議員と溷稱する議員連の、見兼ねる彌次や亂鬪の醜惡振りを國民の前へ合理づけるために、「酒が惡いのだ」といふ事になつて、議會で酒を呑むのを禁じやうかといふ話が持ち上つたのだ。自分達の醜惡さ加減を酒の故にしてすまし込んでゐるとは代議士樣なんて全くいゝ氣なものだ。

▼淺野セメント賃金引下げ

セメント王國を誇つた淺野セメント會社大阪工場では、從來の十時間制を晝夜八時間三交替制に短縮し、同時に賃金二割五分の激減を行ふ事になつた。これはやがて全國各地に散在する淺野セメントの各工場に適用されるものである同工場の職工平均日給は一圓九十錢であるから、約五十錢の減收になるが、會社側では時間外勤務等に步增しを與へるから實際の減收は一割前後だと辯明してゐる。

▼警官の退職月百人

最近警視廳の調査によると、管下一萬二千人の警察官のうち、一ケ月百餘名の退職者がある。之は警官の勞働條件が甚だよくないために健康を害して退職するものと、不都合の行爲で處分されるものとが最も多く、免職とまでゆかなくても、減俸、罰俸、轉勤等の處分を受けるものが月に六十人もあるといふ有樣だ。近來警察官の醜聞は餘りにしば〳〵聞くところであるが、一方柔劍道などを練習せしめられるための外傷は非常に多く、肺結核眞症三名、同容疑者三十名發見された。

▼東京市電再び總罷業

賞與一割減に對する要求書を提出して突つ返へされた東京市電の從業員は着々陣容を整へて二十日整然總罷業を敢行したが、市電當局では早くより事務員に運轉を習得させ前運轉手を調べて非常時出動の言葉質をとるなど用意怠りなく、對策を立てゝゐたが、スキヤップ臨時雇ひと青年團では成績が上らず、第一日は事故續出、乘車は命がけといふ事になつた。が當局はボーイスカート青年團などの罷業破りと非常時賃金で押し通して、一週間對抗した。その間に交渉は不調に終り先づ從業員から誠意を見せろと云はれて指導者の弱腰から慘敗のまゝ就業する事になり表面上爭議は解決した。

▼五十五萬人の離農者

內務省社會局最近の調査に依る

と、昭和三年中の全國道府縣外への出稼人は九十九萬五千八百二十四人に達し、五年前大正十四年の出稼總數七十八萬五千三百七十六人に比較して十二萬四百四十八人の激增となつてゐる。これ等出稼人を職業別に見ると農業が最も多く、五十五萬八千五百七十七人といふ多數を占め近來農村生活が何如に窮迫してゐるかを如實に語るものである。次は漁業九萬六千九百二十六人、商工業其の他二十萬三百十五人の割合である。これ等の出稼人の落付き先を調べて見ると、工場勞働者になつたもの三十三萬七千餘人、鑛山勞働者三萬七千餘人、土工建築の手傳ひ五萬一千餘人、商業十一萬餘人、新開墾地に働くもの三萬九千餘人、女中小使ひ等屋內使用人十萬七千餘人といふ數字をしめしてゐる。

▼岩石から白金の分析に成功

福島縣石川郡私立石川中學校長森嘉種、同校化學敎諭菅谷熊一郎の兩氏は、岩石の中から白金を摘出する方法を研究してゐたが、今度見事に成功した。森氏の發表によれば、同地方に蔓延錯出せる造山岩石の中に白金が、ニツケルとクロミニユーム鐵との化合性となつてゐるので、これを冶金學の見地から一種特別の分析法を用ひた結果、岩石一萬分ノ一・三の白金を得るを確めたといふので、この新しい摘出法は學界に大きなショックを與へてゐる。なほ兩氏は同縣伊達郡睦合村の山や畑から、昨秋メノウの層を發見した。

▼南京財政次長の息子浚はる

上海に於ける支那人富豪の息子が人浚ひにかゝる事はしばしばだつたが、最近現南京財政次長の息張恒良、張華良の兩氏が敎鞭をとつてゐる大學へ自動車で通勤の途中をようして浚はれた事件がある。その朝二人の自動車の前方から、三脚測量機、白、赤の旗を立てて測量をしてゐる人々があるので、そばを徐行させて通らうとする所を忽ち捕へられていづれへか連れ去られた。巧妙なやり方がセンセーションを起してゐる。

▼カルカッタの示威運動衝突

印度民族運動の激化と共に、インド國民會議長ヤワハラル・ネール氏の投獄に端を發したカルカッタの示威運動は漸次形勢險惡となり、鎭壓に向つた軍隊と群衆との間に衝突が起り、白人將校七名、土民兵十名の負傷者を出した。文電車燒打が行はれたり、投石、武器の奪ひ合ひなど暴動の火蓋が切られ、同時にネール氏投獄の抗議のためカルカッタ市に總罷業を斷行してゐる。

▼マヤコフスキーの自殺

ソビエット未來派の父と云はれる革命詩人として有名なるウラヂミル・マヤコフスキー氏は「予は戀のドラマを體驗し、その桎梏から逃れ出る術なく遂に之れと吾が胸を打貫くに決せり」との遺書を殘してピストル自殺を遂げた。氏は當年三十六歲一九〇八年露國社會民主勞働黨モスコー支部に加盟、帝政政府の官憲に逮捕さるゝ事二回ロシヤ革命後革命を祝福した特色のある多くの詩作を發表し、代表作としては、「戰爭と平和」「革命」「我等の行進曲」「神祕喜劇ブッフ」「インターナショナルの詩」などの外、宣傳用の劇曲にも筆を染めてメイエルホリド座で上演された事もある。マヤコフスキーの自殺が革命に對する失望からでなく失戀による事は資本主義支配階級のためにお氣の毒だと皮肉つた人もある。

▼ハルビンのメーデー暴動

ハルビンに於けるメーデーの行列は支那官憲によつて嚴重に禁止されたが、午後雨が上ると同時に反帝國主義同盟の一團、支那、朝鮮人が三々五々集まつてメーデーを敢行仕様として、官憲と小ぜり合ひを演じ、日本領事館を襲つて投石し三十餘名が逮捕された。

▼靜かな東京のメーデー

東京第十一回のメーデーは例年の通り進行されたが前日から行はれた當局の豫備檢束、協議會系の組合に對する暴壓などで骨ぬきにされ、平穩に終つたが、上野公園で解散後交通勞働組合首腦部の赤城氏が先頭に立つて激烈な煽動的論說を爲し、一度び檢束されたのを奪ひ返すや群集は勢をかりて廣小路めがけて街頭デモを行はんとして騎馬巡査に阻止され五名が檢擧された。この日の檢束者百餘名

▼ロシヤはお祭りメーデー

勞働者の國ロシヤでは、數十萬人のソビエット市民はメーデーに參加するに早朝より赤い廣場に集合、共產黨政府の首腦部の檢閲があつて後音樂隊を先頭に、[illegible]ゝばかりは非常警戒も、檢束もない賑やかなお祭りメーデーが開始された。各新聞紙は一齊に「世界の資本主義國家が失業問題に惱んでゐる時に當つて我がソビエット・ロシヤは國家產業化の理想に向つて着々堅實なる歩みを辿つてゐる」と共產主義謳歌の記事を揭げた。

編輯後記

君影草よわが代りにゆけと、會津の古川陽子氏から優しい慰めを贈られた。草の花の風情は鈴蘭に似て香は淡くつつましい。水盤にうかべたら生々とした。

またある朗らかな日、あんまりなごめる日の故か、心の硝子玉がパチンとはぢけさうで凝としてゐられなくなつた。忙しい中をみんなを急立て四時ごろから、武藏野田圃の青い風の中を電車にゆられて粕壁まで藤を見にいつた。なんで藤に思ひがとんだのか自分でもわからないが、冬枯の此邊に白鷺が居たのを思出して、も一度見たくなつたのかも知れない。河を見長い木橋を見、筑波は夕霞で見えず、藤の花の上に細い月を見た。人はゐず、藤の香は漂ひ流れ、長い〳〵紫の花房が織りだす影の綾——色の彩……

さて、私よ、そんな甘い詩に醉つてゐてはいけない。忘れてならない通告がある。次號は早くも三週年紀念號だ。「女人藝術」は此處まで來た感謝と、進むべき希望と任務に火のやうに燃てゐる。これは愛讀者、支持者、女人聯盟員諸氏と共に、まだ未知の、全女性諸氏も、ともに〳〵荷なはれるべき希望であり、努力であり、負擔でなければならないと思ふ。私も期待する、みなさんも來月の紀念號を御期待下さい。(時雨)

ビールの栓を拔いたやうにパンとすが〳〵しい五月の空、誰れしも思はず外を濶步したくなる時だ。一つぱいの力を出してグン〳〵進んで行き度い。どんなちつぽけな片田舍にも「女人藝術」の愛讀者を見出すことを考へると、云ひ知れない力強さを感じる。たれもかれも皆んな握手を求めてくれるといゝな——五月一日のメーデーには私は足が弱いので行けなかつた。素晴しい行進振りを聞いたゞけで或る感激を覺える。(美智子)

鐘紡と市電の大爭議、つゞいて擧行された第十一回メーデー、それらの記事を滿載して今編輯室からおくり出されやうとしてゐる本誌を正しい批判と理解力をもつて愛していたゞきたい。來月號は三周年紀念特輯號である。今から一層の期待をもつて待つてゐて下さつていゝと思ふ。(美子)

市電のストライキが一週間つゞいた。横平な顔をしてのさばつてゐるスキヤブや靑年團の連中を見ると、どうしても電車なんか乗る氣になれなかつた。小兒病的なんてからかはれてもやつぱり乗るのがいやだつた。メーデーの前日市電の車掌さんに明日參加するの?ときいたら皆休んぢあいますよと實に元氣だつた。社の窓はほがらかな新綠でつゝまれた。私達も元氣を出して仕事をしよう。(優子)

綠が青葉がムン〳〵といのちを發散させる夏が來るぞ、いゝな。校正に疲れて、ウーンとのびあがり大きく息をしながら外を見る目に、長延寺の谷を越して青葉がくれに姿を見せてる灰色の、牛込電話局のコンクリートの壁の背中がなつかしい。春は櫻の花のうす色の中に浮き、夏は綠の葉がくれに……でナカ〳〵の眺めだ。この編輯室にとびこんで足掛三年、すごいなあ「女人藝術」もこの次の號は三週年紀念號だ一向自分自身の進展を感じないけど、それ丈年をとつたんだから、しつかりしなくちややなあと思ふ事ばかりだ。一つ氣をつけ、メーデーに腕を組んで步いた青バスの人達の朗かさ。元氣で暮したいなあ、いつも(みどり)

女人藝術も大きくなつたものだ。來月は三週年紀念號の目覺ましい發展ぶりをお目にかけられるところまで參りました。私はいつになく過去をふりかへつて、すでに一萬幾千枚かの原稿をかぞへた事を驚きを持つて思ひ出してゐます。隨分色んな原稿でした。大きい原稿紙や小さい原稿紙や、尖銳な文章や、美しい言葉や、そしてその間には自ら女人藝術の變遷と發展とを物語るものがあります。爽やかな青葉の六月號を前にして、柄にもなくセンチになり乍ら、今後の女人藝術が飽く迄も無產大衆のために正しく、活躍する、よい仲間である事を誓ひませう(素)

昭和五年五月廿五日印刷
昭和五年六月一日發行(毎月一回一日發行)

送料一部壹錢五厘

定價	
1部	……40錢
6部	……2.40錢
12部	……4.80錢

□誌代の拂込みは成可く振替利用を乞ふ
□郵便切手代用は一割增の事。

發行印刷者——長谷川ヤス
編輯者——素川絹子
印刷所——秀英舍
大賣捌——東京堂　北隆館　東海堂　大東館

發行所　東京市牛込區左内町三十一番地　女人藝術社
電話牛込(24)一七八九
振替東京七五八二五